

---

# Loving home

瀬能こゆき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

L o v i n g h o m e

### 【Nコード】

N 1 6 8 3 S

### 【作者名】

瀬能こゆき

### 【あらすじ】

四年前、母の再婚で和音<sup>かずね</sup>に新しい父と兄ができた。その一年後には弟・希望<sup>のぞむ</sup>も生まれた。だが、そのわずか二年後、母は病気で死んでしまう。

それから半年が経ち、和音たち家族の生活は幼い希望を中心に慌ただしく過ぎていく。

主人公・和音の、愛と青春の物語(?)です。 「l o v i n g h o m e」温かい家庭」

## プロローグ（前書き）

エピソードごとの短編連作のような形になっていますが、全体の流れは続いています。なかなか進展のない、もどかしい感じになっていますが、お付き合い頂けると幸いです。

## プロローグ

四年前　　わたしが中学二年生になった春、母の再婚で新しい家族ができた。

新しいおとうさんと二歳年上の新しいお兄さん、そして新しい家が親が再婚することに複雑な気持ちになる人は多いと思うけれど、わたしは純粹に喜んだ。

本当の父親が死んでから十一年の間、ずっと母と二人暮らしたことから、人が増えて賑やかになったその生活は楽しかった。

新しい父も兄もいい人たちだったし、何より、これまで見たことのないような母の明るい笑顔が嬉しかった。

そしてその一年後、弟ができた。

父も母も兄もわたしも　みんな幸せだった。

でもその幸せは長くは続かない。

母の体に癌が見つかった。発見された時はもうリンパにまで転移していた。

それでも、と奇跡を信じ治療に臨んだが、母はたった一か月の闘病の末、帰らぬ人となってしまった。

弟を産んで二年半、クリスマスの夜のことだった。

それからまた半年の時が過ぎた　　。

「かーずー」

朝食後に食器を流していると、後ろからひどく間延びした義兄あにの  
声が出た。どうやら、今起きてきたばかりのようだ。癖のある茶色  
の柔らかい髪が、ぴんこぴんことあちこち跳ねているが、本人は一  
向に気にする様子もなく大あくびをしている。

あーあー。せつかくの男前が台無しだ……。

「おはよう、仁」

「おはよー。あのさーカズ。昨日言い忘れたんだけど、今日どうし  
ても抜けられない集まりがあつて……希望のぞむの迎え、悪いけど行って  
くれっかなあ」

まだ眠そうに目をこすりながら仁が言う。たぶん、これを言うた  
めに早く起きてきたのだろう。

「いいけど、別に」

「サンキュー。今度カズん時替わるからね」

「あと、ヒロタのシュークリームも」

「げ。おまえ、太るぞお」

仁は苦笑いを浮かべながら、「のんー。今日は保育園カズが迎え  
に行くよー」と玄関先へ向かった。わたしも手を拭いて玄関へ顔を  
出した。

靴も履いてあとは出て行くだけのおとうさんが、希望に靴を履か  
せてやっているところだった。

「かじゆがおむかえ？」

希望が無邪氣にわたしを見上げる。くりくりとした大きな目がかわい。わたしはニツコリと笑って頷いた。

「和音<sup>かずね</sup>。大丈夫なのか？」

おとうさんが氣遣わしげにわたしに目を向けた。

「お迎え？ うん大丈夫。別に何の用事もないし。5時でいいんだよね」

「うん。助かるよ。 仁、今日は帰り遅くなるのか？」

「いや。そんなに遅くはならないよ。あ、でも飯は食ってくるからいいや」

飯は、の辺りから仁の目はわたしに向けられている。そうか。夕食の当番も今日はわたしだ。

「とうさんも今日は職員会議の日だから、ちょっと遅くなるよ。和音、夜ごはんは希望と二人で先食べといてくれ」

おとうさんが申し訳なさそうに言う。わたしは「うん」とだけ頷いた。

「じゃ、行ってくるよ」

「いつてきまーしゅ！」

「いつてらっしゅい」

手を繋いで出て行く父子を見送って、わたしは「さて」と踵を返した。

わたしもゆつくりしてはいられない。学校に行く準備をしなければ。

「あれ、仁。今日はまだいいの？」

リビングのソファーに座りこみながら、仁は「んー」と大きく背伸びをした。

「今日俺午後だけー」

「ふうん。いいなあ、大学生は」

羨ましい限りだ。

「大学生もいろいろ大変なんだぜ」

「へー、そう」

わたしは適当に聞き流す。洗い物の続きをしようと流しへ向かうと「俺がやつとくよ」と仁が顔をこちらに向けた。

「いいよ。あと少しだから」

「いいって。どうせ俺も汚すし。カズは自分の準備をしておいで」

そう言って笑う仁の顔は優しかった。

わたしは少しだけ迷った末、「じゃあお願いね」とその場を離れて自室へと向かった。

お母さんがなくなつて半年。それより前、お母さんが病気で入院した時から、わたしたちの生活はガラリと変わってしまった。

希望が生まれてからは専業主婦だったお母さんの不在は、かなりの混乱を招いた。

なにより一番困ったのは、まだ小さな希望のことだった。

誰もいなくなる昼間は、希望は保育所に預けることになった。で

も、中学教師をしているおとうさんの帰宅時間は日によってまちまちだ。そのため、時間に融通のきく学生のわたしや仁が交代で希望のお迎えをすることにした。

仁は希望の迎えの為にバイトを減らし、友達との付き合いも減らした。時間のある時は家にいて希望の相手をしていることが多かった。

そしてわたしは、中学から続けていた吹奏楽の部活をやめた。もうじきどうせ引退するのだし、そのことに未練はなかった。そして放課後はなるべく寄り道をせず家に帰った。

おとうさんは、どんなに疲れていても夜は希望と一緒に風呂に入り、一緒の布団で寝る。朝は車で希望を保育園まで送り届け、そのまま職場へと行く。

わたしたちの生活は、完全に小さな希望を中心に回っていた。

みんな一生懸命だった。

希望が寂しくないように。

希望に悲しい思いをさせないように。

希望の笑顔を守るためにみんな必死なのだ。

ただそれだけの為にみんな頑張っている。そしてそれがわたしたちの絆を強めているのかもしれない。

でも、わたしは……。



放課後、ホームルームが終わるなり後ろの席の友達が「カズもカラオケ行こうよ」と声かけてきた。

「あー、ごめん。無理だワ。弟の迎え」

「そつかあ。カズ、大変ね。んじゃまた今度ね」  
「うん」

バイバイと手を振って友達が離れて行く。「じゃあ行こうかー！」と4、5人の集団で出て行くのを、わたしはため息をついて見送った。

「大変ね、か……」

わたしの境遇を知っている友達はみんなそう言う。放課後の誘いを断る度、休日の集まりを断る度に「大変ね、また今度ね」と気の毒そうな顔をする。

誘ってもらってもどうせ断ることが多いのだから、最初から誘ってくれなくてもいいのに、とも思うのだけど、友達は友達で気を使っているのだろう。素直に有難いと思わないといけない けどね。

断る度に、感じる必要のない寂しさやら申し訳なさを感じて、ちよつと気分が落ち込んでしまうのだ。

\*

\*

\*

わたしは学校を出て、希望の保育園へと向かった。

その保育園は、ちょうどわたしの高校から家までの中間ほどにある。学校帰りに直接行くのが一番楽なのだが、それだと時間が少し早い。なので、そういう時は保育園の近くの本屋でちょっとだけ時間を潰すことにしていた。

「あれ、春山さん？」

雑誌を立ち読みしていると、後ろから小さく声をかけられた。

「あー！」

同じクラスの木村くんだ。木村琢磨という名前から、「キムタク」なんて呼ばれている。実際、愛称負けしない外見をしていて、学校では結構な人気者だ。わたしはあまり喋ったことがないけれど、よく笑う人だな、という印象を持っていた。

「春山さんちつてこの辺りだったっけ？」

「ううん、違う。弟の通っている保育園がね、この辺」

「弟の保育園？ ずいぶん年の離れた弟だね」

これも人からはよく言われることだ。いちいち事情を説明するよ  
うなことでもない、わたしは「まあね」とだけ答えた。

木村くんは「そっかあ」と言つて、それから何を言つてもなくただ隣に立っている。

なんだろう？ いろいろ聞かれるのも鬱陶しいけど、黙ってそこにいられるのも居心地が悪い……。

わたしの落ち着かない素振りに気付いたのか、木村くんが「あ、ごめん」と頭をかいた。

「ついろいろ考えてて」

「いろいろ？」

「いや。この後きつとその弟さん迎えに行くんだろっな、大変そうだな、とかいろいろ」

また「大変そう」だ。まあ、でも木村くんはうちの事情を知っているというわけでもなさそうだし、他意はないのだろう。

わたしは木村くんに笑って見せた。

「そんなに大変でもないよ。学校帰りのついでだし。木村くんはこの辺り？」

「うん。あつちのマンション。この本屋はよく来るんだ」

「そうなんだ。わたしも弟の迎えがある日はよく来るの。専ら立ち読みばかりだけどね」

読んでいた雑誌を掲げてみせると、木村くんは肩を揺らした。

「いつしよいつしよ。オレもそう」

嫌みのない笑顔が気持ちいい。なんとなくもっとお喋りをしたい気分だったが、そうもいかなかった。

「ごめん、そろそろ行かないと」

わたしは時計を見て雑誌を置いた。

「また明日学校でね」

「うん、じゃ」

わたしは木村くんに手を振って本屋を出た。ゆっくり自転車をこいで行けば、ちょうど五時頃には保育園に着く。

「かじゅー！」

希望はわたしの姿を見るなり、嬉しそうにとび付いて来た。

「おかえり！ のん」

「たらいまー！」

「楽しかった？ ほら、靴履いておいで」  
「うん！」

希望は靴を一生懸命自分で履こうとしている。わたしはその様子をしゃがんで見守った。履かせてやるのが早いけど、希望は自分でやりたがった。

「あの、春山さん」

「はい？」

眼鏡をかけた中年の先生 確か富永先生といった に声をかけられ、わたしは立ち上がる。いつも穏やかに笑っている先生の顔は珍しく曇っていた。

「実は今日、のんくんね」

富永先生の話はこうだった。

お昼寝の後、部屋遊びをしていた希望が、たまたま先生の目が離

れた隙に、五歳の「トモくん」という男の子を噛んで怪我をさせたという。

その事情をトモくんに聞いたところ、希望がいきなり噛んできた  
としか言わない。当然、まだ三歳にもならない希望には理由など話  
せない。ただ泣きじゃくるだけだったそうだ。

結局、どうしてそういうことが起こったのかわからないという。

「のんくん、今まで噛み癖もなかったし、私たちもびつくりしてる  
んだけど……」

わたしもびつくりだ。先生の言う通り、希望に噛み癖はない。喧  
嘩はよくあることで、叩いたりひっぱたりしたたのの話はよく聞く。  
でも怪我させるほど噛むとは初めてのことだ。

何があつたのだらう、とつい希望を見るが、希望は今ほご機嫌な  
顔で靴を懸命に履いているだけだ。

「一応のんくんに謝ってもらって、トモくんとも仲直りさせたのだ  
けど」

「あ、あの、そのトモくんの怪我の方は……？」

「怪我というか、ちょっとうつ血して歯形が残っちゃったの。トモ  
くん シマダトモキくんっていうのだけど、シマダさんのお迎え  
は遅くてね、顔を合わせることはないと思うのだけど、ちょっと  
シマダさん、その……ちょっと気の強いところがありで」

富永先生は懸命に言葉を選ぶ。

「怪我は私たち保育士の責任なので、こちらからシマダさんの方に  
話をしますが、もしかすると、直接春山さんの方にも苦情がいく  
かもしれません。申し訳ないけれど……」

「わかりました」

わたしは内心ため息をつきつつ頷いた。どうやらシマダさんは、言っちゃ悪いけど、ご面倒な保護者様なのだろうと察しが付く。

「父に話しておきます。いろいろご迷惑かけてすみませんでした」  
「いいえ、こちらこそ本当にごめんなさい。　あら、のんくん。上手に履けてるね」

先生はしゃがみ込んで希望と視線を合わせた。希望はちょうど靴を履いてしまったところだった。

「のんくん、今日いっぱいどろんこしたもんねえ。楽しかったねー」

「うん、たのちかった!」

「また明日もやろうね!」

「うん!」

希望は満面の笑顔で頷いて立ち上がると、「てんてー、バイバイ」と手を振った。

希望を自転車の前座席に座らせる。こうして希望の迎えをする時は、母が使っていた子乗せ用の自転車を使用している。

最初はこれに乗って学校行くのがたまらなく恥ずかしかったりもしたけれど、今は全然なんとも思わなくなった。だって、必要なのだから。

「ねえ、希望。どうしてお友達噛んじゃったの?」

シートベルトをつけながら聞くと、それまでニコニコしていた希望の顔がにわかに強張った。

そう。希望にはちゃんとわかっている。人を噛む事がダメな事だということが。

だけど、それを我慢できない何か希望にあったのだろうか。聞いても応えはないと思うけど、聞かずにはいらなかった。

「トモくんと何かあったの？」  
「……」

希望の顔が泣きそうに歪む。くりくりお目目に涙が浮かんできて、わたしは慌ててしまった。

「ごめんごめん！ いいよいいよ、家に帰ってからゆっくり話そうね あ、そうだ。お買いものして帰ろう。のん、今日ご飯何が食べたい？」

「ちょこれーと」

希望の顔に笑顔が戻った。わたしはホッとして自転車をこぎ出す。

「だめ！ チョコレートはご飯じゃないですよ」

「けーき！」

「それもだめー」

そんな冗談のやり取りをしながら、わたしはぼんやりと思う。

あと一週間で三歳になる希望。

まだ生まれてたった三年だ。

だけど、わたしたちが思うより、きっと希望はいろんなことがわかっていく。ただそれを言葉にできないだけで。

もどかしいだろうな、希望。わかってもらえなくて悲しいだろうな。

そう思うと、この小さな弟をたまらなく抱きしめたくなった。



結局、その日の晩御飯は、肉じゃがとお味噌汁、それと冷ややっこにした。和食好きの我が家の定番メニューだ。

子どもと一緒に食事は、楽しくもあり大変でもある。どちらかといえは大変さの方が大きいかな。

「ほら、おかずばっかりじゃなくてご飯も食べて」

「ほらほら、こぼしちゃうよ!」

「よく噛んでね」

……我ながら口うるさい。

でも、言われてる当人は意外にケロッとしたもので、おいしそうにご飯を頬張っていた。そんな顔を見ると、ちよつとぐらい……いや、かなりのお行儀の悪さだけど、まあいいかと許したくなる。何より、まだ三歳（ちよつと前）だし。食事は楽しくおいしくいただくことが一番大事だと、お母さんも常々言っていたものだ。

そんなこんなで二人きりの夕食を終え、わたしと希望はリビングで遊びつつテレビを見ていた。いろいろな動物の出てくる番組で、希望はこれが好きでよく見ている。

時計をふと見上げると、七時半を過ぎた頃だった。おとうさんはまだ帰ってこない。

「かじゅ! ほら、おんまたん! みてみて!」

希望がテレビを指差して、興奮気味にわたしに教えてくれる。「おんまたん」はお馬さんのことのような。

わたしは「かわいいねえ」と返しながら、もう一度時計を見上げた。

どうしよう。先にお風呂に入れておこうかな。

「のぞむー、カズと一緒に風呂に入る？」

「やー！」

う、取り付く島もない……。

「でももうねんねの時間になるよ？ おとうさん遅いつて言っただし、先に入ろうよ。カズ、たまにはのんくんと一緒にお風呂入りたいなあ」

「やだ！ おとーさんと！」

ブン、と顔を背けられてしまった……やれやれだ。

わたしはお風呂を諦めて、その間に取り込んだ洗濯物をたたむ事にした。

手を動かしながら、わたしは何気なくリビング横の和室に目を向けた。ちょうど正面に黒に金色の装飾の施された立派な仏壇が見える。リビングを見渡せるところに置いてあるそれは、母の死という現実をまざまざと知らしめるものだった。

わたしは知らずため息をついて、仏壇から視線を戻した。

「あれ」

さっきまで車のおもちゃを手に、きゃっきゃつとはしゃぎながらテレビを見ていた希望が、ごろんと横になっている。

「のん……？」

寝てる……。

わたしはそつと希望を抱きかかえて、ソファアの上に寝せた。薄いマットを敷いただけの床の上だと、さすがに可哀想だ。

希望の体にブランケットをかけると、希望の転落防止のためにソファアに寄りかかるようにして座り、わたしは再び洗濯物畳みを続ける。

その時、玄関の方からガチャリ、と鍵の音が。

「ただいまー」

おとうさんだ。

おとうさんはもう一度「ただいま」と言いながらリビングに姿を見せると、寝ている希望を見て苦笑した。

「寝ちゃったのか。思ったより遅くなったもんな。仁は……まだのようだな」

ネクタイをゆるめながらため息をつくおとうさん。当たり前だろうけど、疲れてる様子だ。

わたしは寝ている希望にうるさくないよう、声を小さくして言った。

「ごめん、お風呂おとうさんとししか入らないって言って、入れてないの」

「そうか。どうしようかな……起こすのも可哀想だけど」

「泥んこ遊びしたんだって」

「じゃあ、やっぱり入れないとだめか」

おとうさんはまた苦笑いして、希望の頭をそつと撫でた。

おとうさんは笑うと目尻が垂れ下がり、そこに深いしわが何本もできる。普段は実年齢より若く見られるらしいが、その顔のしわを見ると、四十七歳という歳ならではの魅力がある。とわたしは思う。

「じゃ、すぐ準備してくるから、もうちょっと希望見てて」

「あ！ 待って、おとうさん」

わたしは慌てて呼びとめた。怪訝そうに振り返ったおとうさんに、わたしは保育園でのことを先生から聞いた通りに話した。

「そうか。わかった」

話を聞き終わったおとうさんは、ただそれだけ言うと、一度短く嘆息して電話口に向かった。

職業柄だろうか、こういった事への対応はおとうさんは本当に早い。後回しにすることがほとんどない。

「もしもし？ お忙しい時間に失礼いたします……」

もちろん、おとうさんの電話の相手はシマダトモキくんの家の人だろう。

「申し訳ございません はい いえ、誠に申し訳ございません  
はい……」

当然向こうの声はわたしには聞こえないが、その後もおとうさんは何度も「申し訳ございません」を繰り返した。

もしかすると、いろいろ文句みたいなこと言われているのかもしれない。

わたしはおとうさんのその声を聞きながら、なんだかイライラしてきた。

怪我させたことは悪いと思う。謝ることは当たり前だろう。だけど、子ども同士のことだ。とくに重症を負わせたわけでもあるまいし、快く許し合うのが筋ではないのだろうか。

しかも、だ。その原因もわからないのに、怪我させた方だけが一方的に責められるのはどうなんだろう。

……でも、それをこちらが言うわけにはいかないだろう、ということはわたしにもわかる。

それにしても、おとうさんもよく辛抱強く謝り続けられるものだ。大人だから、かな。親だから、かな。

「のんだけが悪いんじゃないかもしれないのにね……」

わたしが眠っている希望にそつと呟いた時、ガチャ、と玄関のドアが開く音がした。仁が帰ってきたようだ。

「たっただいまー……あ」

声高らかにリビングに入ってきた仁は、電話中のお父さんに気付くと、ぱつと口を押さえてこちらにやってきた。

「ただいま。ありゃ、のん、こんなところで寝てんの？」  
プニプニと希望の頬をつつく仁の指を払って、わたしは顔を顰めた。

「仁、酒臭い」

「え、そう？ そんなに飲んでないんだけどな。早々と抜けてきたしね」

確かに思ったよりも早い帰りだ。

「別にゆっくりしてきても良かったのに」

「いいんだよ。話が終わればあとは馬鹿騒ぎやるだけだし。オレ、家の方が落ち着くしな」

冗談めかして言うその言葉が仁の本音なのかどうかは、わたしにはわからない。

「で、何、あれ？ さっきから謝りっぱなしみたいけど」  
仁がクイツとおとうさんを指差す。わたしは事情を話した。

「はあ？ ちょっと歯形が付いたぐらいで？ そんなん保育園とかじゃよくあることなんじゃねえの？」

仁はわたしと同じようにソファーに寄りかかりながら、呆れたように言った。

「それがさ、なんか相手の親がちょっと面倒な人みたいで」

「へえ。ホントにいるんだな、そんな親」

「あ、終わったみたいよ」

失礼します、というおとうさんの声が聞こえた。

「やれやれだ……」

ふつつと息をつきながら、おとうさんが戻ってくる。

「お、仁、おかえり」

「ただいま。相手、何だった？」

「ま、えらくお怒りのご様子だったな。『お宅はどういう躰をなさっているんですか？　ウチの息子は二歳の頃でも人を噛んだりしたことなんでございませんでした』うんたらかんたら、と」

おとうさんは別に怒った様子もなく、ただ呆れたように笑っている。わたしと仁は同時にため息をついた。

「なんだよ、そりゃ」

「あー、こつも言われたな。『お迎えに親御さんが来ないようなご家庭のようですから、お子様も乱暴にお育ちなのね』」

「おいおい！」

仁の声に怒りが帯びる。わたしも同じようにムツとした。

「当然、言い返したよな？」

「なんで？」

おとうさんだけがケロリとした顔をしている。それが仁の苛立ちを余計に煽ったようだ。

「なんでって。そんな言われ方して黙ってられんの？」

「まあ、仁。和音も」

おとうさんは窘めるように笑って、私たちの前に胡坐をかいて座った。

「こんなこと、怒った方が負けだよ」

静かに、穏やかな顔でおとうさんが言った。

「世の中にはいろんな人がいる。いろんな親がいる。考え方も違う、

感じ方も違う、価値観も違う……人はみんなそれぞれ違う。それに折り合いをつけることで初めて人は他人とうまく付き合っている。でも、どうしてもそれがうまくいかない人もいるんだよ。自分の考え方、価値観だけがすべてだと思っている人がね。残念だが、大人の中にも大勢いる。人の親となった人の中にもね」

おとうさんはフウッと息をついた。

「そういう人たちに、こちらの言い分を言ったところで、全て跳ね返されるだけだ。言ったことの倍になってね。傷付かなくていいこととでまた傷付くことになる」

「だからって」

それまでじつと話を聞いていた仁が、不服そうに口を挟んだ。

「こつちが余計傷つくからって、事情もよく知らない奴に、希望が悪者みたく言われてんのを黙って聞き流すのかよ。親だったら、もうちょっと庇ったりするのが普通じゃねえの」

「親だからだよ」

おとうさんがやや口調を強めた。

「親だから、黙って聞いてられるんだよ。父さんは知ってるから。希望が乱暴者じゃないこと。おまえたちだって知ってるはずだ。きつと保育園の先生方も知ってる。お友達だって知っているだろう。それでいいんだよ。それを知らない人に何を言われたところで、それが真実でないことがわかってるのに何を怒ることがある？ 何も知らない人に口だけで希望をわかってもらおうとするのは無理だ。時間の無駄」

きつぱりとそう言い捨てた。

「だったら言いたいこと言わせて謝って、早々に引き下がってもらった方がいい。下手に言い返して触れられたくもない家の事情に口



出しされるくらいなら、父さんはいくらだって頭を下げるさ」

今度は仁ももう何も言い返さなかった。

わたしはただ黙っておとうさんの顔を見つめた。

おとうさんだって「親が迎えに来ないような」なんて言われ方をされて、悔しくなかった訳がない。それでも顔色一つ変えず、声を荒げることもせず、一言も言い返すこともなく黙って謝り続けたおとうさん。

大人だったら当たり前のことなのだろうか。

それはわたしにはわからないけれど、ただこの人をすごい、と思った。

その時。

希望がまるで火が付いたように突然激しく泣き出した。

急に叫ぶように泣き出した希望を、わたしがすぐに抱きあげた。でも、泣きじゃくりながら手足をバタバタさせる希望は、簡単にはきちんと抱かせてくれない。

「いつ！」

胸を思いっきり蹴られた。体いっぱいでも暴れる子どもの力はかなり強い。蹴られた胸はものすごく痛かった。

「どうした、のぞむー」

見かねたおとうさんが、希望の体を軽々とわたしの腕から抱きあげた。立ち上がってゆっくりと背中を叩きながら体を揺らす。

「怖い夢でもみたのかあ、ん？」

優しく語りかけるおとうさん。その声と心地良い揺れに落ち着いて来たのか、希望は暴れるのをやめ、泣き声も次第に収まっていった。

ああ、良かった……。

子どもの泣き声というのは、どういう理由であっても、聞いているだけで焦燥感が湧いてくる。どうにかしなければ！ という気持ちばかりが先走ってしまうのだ。なので、おとうさんの抱っこで希望が泣きやんでくれたことに、わたしは心底ホッとした。

息をついたところ、ちょうど仁と目があって、なんとなく笑顔を交わす。

「うー……ひつく」

希望は目もすっかり覚めてきたらしい。しゃくりあげながらも、目をパチパチしながらわたしたちの顔を見返している。

きつと希望なりに、今がどういう状況かを考えているのだろう。

「ホラ。涙と鼻水、拭いとけよ」

仁が苦笑しながらティッシュを渡す。希望はそれを受け取って、自分でちょんちょんと涙を拭う。おとうさんがそれを手伝って、鼻をチーンとかませた。

「ごめんなあ。お父さんたちの声がうるさかったか」

希望が完全に落ち着いたのを見計らって、おとうさんは希望を下におろした。そのとたん、何を思ったのか、希望はそのままパタパタと駆け出し、和室の方へ向かった。

「希望？」

急にどうしたんだろう？

希望の思いがけない行動に、私たち三人は思わず顔を見合わせた。希望は、おかあさんの仏壇の前で立ち止まった。

和室の電気は付いていない。仏壇のある辺りはリビングの灯りで辛うじて薄明るいくらいだ。わたしは和室の電気を付けに、希望の後を追った。

「おかーたん」

おかあさん？

首を傾げつつ電気を付けると、希望がこちらを振り返った。そして、仏壇に置いてあるお母さんの写真を指差して「のんのおかーたん！」と言う。

希望には毎日、朝と寝る前そして食事の前には、仏壇に手を合わせるようにさせている。その度に希望もお母さんの写真を見て「おかーたん」と喜ぶ。なので、べつに今も希望が写真を見て「おかーたん」と言ったところで変でも何でもないのだけど。でも、なんかいつもと違う感じがした。

「のんのおかーたん！」

ああ、そうか。

わたしは違和感の原因に気付いた。

希望の顔に、笑顔がないのだ。

お母さんの写真を見る時、いつでも希望は嬉しそうだった。ニコニコ笑ってお母さんを見ていた。なのに、今の希望の表情は、顔を変にしかめて、どこか困っているような感じだった。

「うん、のんのお母さんだね」

わたしは希望の隣に座って、一緒に写真を見た。子どものように大口を開けて笑うお母さんの写真。それは、最後の夏に家族で海に行った時の写真だ。本人は恥ずかしいと言ってた写真だけど、みんなはこの写真を「お母さんらしくていいね」と気に入っていた。

「どうしたの、のん？ お母さんの夢でも見たの？」

軽く頭を撫でながら聞くと、希望はちょっとだけ首を傾けて、真

っ直ぐにわたしを見返してきた。

「のん、おかーたん、いないの？」

「……え？」

ドクン、と心臓がなった。

お母さんがいなくなつてすぐの頃「おかーたん！　いない、どこー？」と家中を捜しまわつて泣いていた希望。でも時間が経つと、まったくそういうことを口にしなくなっていた。お母さんがいない生活が普通になつてしまつてからは。

だから、この不意打ちの希望の言葉は　ショックだ。

すぐに答えられなかった。思わず後ろを振り返つてしまう。いつの間にか、おとうさんと仁も和室にいた。でも、今の希望の言葉に、二人ともがやはり固まつていた。

「のん、おかーたん、いないの？」

言葉を聞きとつてもらえなかったと思つたのか、希望がちよつと怒つたようにもう一度言つた。

「希望……お母さんは……」

「ちゃんというぞ」

言葉に詰まるわたしのすぐ後ろから、力強い仁の声がした。

「希望。おまえのお母さん、ちゃんというぞ？」

仁はわたしの隣にしゃがみ、希望を正面から見据えて、その小さ

な手を握った。

「希望のお母さん、ちゃんといるんだぞ。ここに」

空いた方の手で、仁は希望の胸をチョンと突いた。

「ここ？」

希望が突かれた自分の胸を見下ろし、不思議そうに首を傾げる。

「そう。ここに」

仁はにっこりと希望に笑いかけた。

「お母さん、お父さんとかジンとかカズのように、目の前にいてお話ししたりはできないけど、ずっと希望のここにいるんだよ。ずっと希望と一緒にいる。「いない」なんて言ったら、お母さん、寂しいと思うぞ？」

「おかーたん、たびち？」

「そう、寂しい。わかるな？」

「うん」

こくり、と希望が頷いた。そしてお母さんの写真を見て、もう一度小首を傾げた。

「のん、おかーたん、いるの？」

「そう、ちゃんといる、な？」

「うん！ いる！」

希望に明るい笑顔が戻った。

「希望」

おとうさんがポンポンと希望の頭を後ろから軽く叩いた。

「仁の言つとおりだぞ。おかあさんはいつでも希望のところにいるからな。お父さんや仁や和音のところにも」

そのおとうさんの言葉に、希望は大きな目をもっと丸くして、そして、すごく嬉しそうに笑った。

「みんないつちよー！」

明るい無邪気な笑顔。

見る者をみんな幸せにしまふような、愛らしい笑顔。

でも、わたしにはこの笑顔は痛かった。

ただ痛くて、それ以上希望の顔を見ていられず、わたしは一人俯いた。

ねえ、お母さん。

昔、よく二人でこうして向かい合って話をしたよね。

どんなこと話してたっけ？　すぐに忘れてしまう様なつまらない話ばかりだったけど、わたしたち、よく笑ってたよね。

もう一度、あんな風に笑い合いたいな。もっといっぱいお喋りしたいな。

「　なんてね」

わたしは小さく苦笑した。

今はもう真夜中。時計の針は間もなく二時を指そうとしている頃だ。

希望のことがあったからだろうか、わたしはなかなか寝付くことができなかった。

目の前にあるのは物言わぬ写真。きらびやかな装飾をされた、仏壇と呼ばれるもの。仏様がいてお位牌があつて。ここどこにお母さんがいるのか、わたしはまだよくわからない。よくわからないけれど、こうしてここに向かい合って、わたしはお母さんに語りかける。

だけど、わたしの声がお母さんに聞こえているのかどうか、それすらもわからない。

だって、わたしにはお母さんの声はもう聞こえないから。



「何か言つてよ……」

わたしは思わず呟いた。

仁もおとうさんも、希望に「おかあさんはいる」と言つたけれど、わたしは希望みたいにそれを素直には受け止められない。

だって、目の前にいないから。心にあるのはただ思い出ばかり。いつたいお母さんがどこにいると言うんだろ。お母さんは死んだ。もうどこにもいない。

希望。あなたのお母さんはもうどこにもいないんだよ。わたしたちのお母さんは、もうどこにもいない。

そんな風に思つた私は意地悪なのだろうか。だけど、わたしにとっては、それが唯一の現実だ。わたしのお母さんは死んでしまった。

「……っ」

わたしは思わず唇を噛み締めた。もう大丈夫だと思つていたのに、じわりと涙が浮かんできた。零れないようにとギュッと唇を噛んでも、涙はやっぱり流れてきてしまった。

「う……」

わたしは両手で顔を覆う。せめて声は上げないように、お腹に力を込めた。

きつと、おとうさんも仁も気付いてもいない。みんな希望のことばかりで一生懸命だから。

希望が寂しくないように、希望に悲しい思いをさせないように、希望の笑顔を守るために一生懸命。

まだ二歳という歳で、母親と死に別れてしまった可哀想な希望を守るが一番で。

だから、きつとおとうさんも仁も気が付いていないのだ。

わたしだって寂しくて辛くて、今にも押し潰されそうなことに。

馬鹿げている、と思う。

わたしは、希望に嫉妬している。希望ばかりがお母さんを失った現実から守られていることに、わたしは嫉妬しているのだ。

わたしだって 守りたいのに。

そう思うと、余計に涙が溢れてきた。

悲しくて、情けなかった。希望に嫉妬している自分が嫌で嫌で仕方がない。

涙が止まらなくて、わたしは膝を抱えてそこに顔をうずめた。気持ちしが鎮まるのをこのまま待つつもりだった。

すると突然、ポン、と頭に何かが触れた。

「っ！」

あまりにびっくりして、泣いていることも忘れて、わたしは勢いよく顔を上げた。

「じ、仁……？」

顔を上げた先には、複雑そうにわたしを見下ろしている仁がいた。

「なんだよ……」

仁はどこか辛そうに眉を顰めてその場にしゃがむと、ポンポンとわたしの頭を軽く叩いた。

「こんな夜中に、一人で泣いてんなよ」

仁の言葉に、わたしは慌てて顔を拭った。

「な、泣いてなんか……」

「別にいいんだよ、泣くのは。ただ、こうやって一人で泣くなつて」  
仁は優しくそう言って、そつとわたしの頭を抱き寄せてくれた。

驚いた。仁からこんなふうにされたことは今までなかったから。

でも、ゆっくりと伝わってくる仁の体温は温かくて、それがわたしをホツとさせてくれた。それなのに、一度止まっただけの涙はまた流れてきて、仁の服に染みを作っていく。

「ごめんな、カズ」

仁が静かに言った。

「きつとカズには無理をさせてるんだな……さっきの希望のことも……カズにまで気が回らなくてごめん」

仁はゆっくりと頭を撫でてくれる。まるで、小さな子どもにするように何度も優しく。

「でも、カズ。こうやって夜中にひとりで泣くのは止めよう。俺も父さんもわかっているつもりだよ、お母さんを失ったカズの辛さとか悲しさとか」

わたしは思わず顔を上げた。仁の真っ直ぐな視線とぶつかる。仁が目を細めた。

「カズにとってお母さんは、希望を除いてたった一人の血の繋がった人だったんだから。その人を失った辛さはきつと俺たちより……。でもそれは俺たちにはどうにもできないんだ。カズが自分で乗り越えていくしかないと思う。でもな」

仁がふわりと微笑んだ。

「それを支えてやることは出来るんだ。俺たちは決めてるから。希望だけじゃなく、和音のこともちゃんと守るって」

「え……？」

「だから、母さんのことで一人で泣くのは止める。父さんだって俺だっているんだ。少しは甘えてくれ」

力不足かもしれないけど、と苦笑する仁。わたしの口から、吐息のような嗚咽が漏れた。

仁の言葉が嬉しかったのか安心したのか、自分でもよくわからなけれど、泣くのを我慢することが出来なかった。

わたしはもう一度仁の肩に顔をうずめて、少しでも声を上げて泣いた。仁はさつきと変わらず頭を撫でてくれて、それがひどく心地よかった。

わたしは何を一人でいじけていたのだろう。

わたしの苦しさなど、だれも気付いてくれていないと思っていた。希望ばかりが守られていると思っていた。

でも、それは単なるわたしの被害妄想に過ぎなかったんだ。

わたしはこんなにも守られて支えられている　　仁から伝わる温かさを感じながら、本当に素直にそう思えた。

しばらくそうして泣いていると、いきなりその場に、グスグスッ

と鼻をすする音が聞こえた。

わたしと仁は同時にビクツとして、音の方を振り返った。  
ちよつとだけギョツとした。部屋の入口に寄りかかるように、おとうさんがひっそりと立っているではないか。

「父さん」

仁が露骨に顔を顰める。気恥しかったのだろうと思う。でもそれはわたしも同じで、慌てて涙を拭いて、まだひくひくする息を懸命に整えようとした。

「いつからそこにいるんだよ」

「さてね？ トイレに起きたら灯りが付いてたから来てみたんだよ」

おとうさんは笑って、こちらに近付いてきた。

「なあ、しのぶ」

おとうさんが仏壇にむかって小さく呼び掛ける。「しのぶ」はお母さんの名前だ。

「俺たちはいいい子どもたちを持ったな」

そう言っ、わたしと仁の頭を順番にクシクシユッと撫で上げた。

仁は「やめろ」と言いながらも苦笑して、わたしもそれが可笑しくて笑った。

この人たちと家族でいられて、本当に良かったと思った。



今日は特別な日曜日。

わたしは駅前の小さなケーキ屋さんに向かった。予約していたものを受け取るために。五号サイズの、イチゴたっぷりのホールケーキだ。その場で、頼んでいた文字入れのプレートを確認する。

happy birthday のぞむ

チョコレートで書かれた可愛い文字に、つい笑みが浮かんだ。わたしはケーキを受け取ると、妙にウキウキした気分で帰路にいった。

家には仁が待機していて、着々と準備を進めていた。ダイニングの天井には、きらびやかなモールが飾られていて、テーブルの上には、それぞれの席にパーティー用の三角帽子が置かれている。

「あ……」

わたしはぐつと胸が詰まった。

現在は使われることのなくなった席にも、ちゃんとそれが置いて準備してあったから。

「パーティーは全員参加がウチの規則だからな」

わたしの視線に気付いた仁が、悪戯っぽく笑った。

「うん」

わたしはまたうつかり涙が出そうになるのを堪えて、コンロの前に立つ仁の手元を覗き込んだ。

「あ、唐揚げ？」

「そ。のん、好きだろ？」

「そうだね。他は？」

「寿司とった。とうさんのご命令」

「まあ、贅沢」

仁と顔を合わせて笑って、わたしは一度自分の部屋に戻った。

希望はどんな顔をするだろう？ 部屋の装飾。仁の作った唐揚げ。

おとうさんが頼んだ贅沢なお寿司。わたしが買ってきたイチゴのケーキ。

その顔を想像するだけで、顔がつい綻んでしまう。

わたしは自分で用意した小さなプレゼントの箱を取り出して、そっと両手に包み込んだ。

この中に入っているのは、小さなキーホルダー。ビーズで小物を作るのが得意だったお母さんの手造りのものだ。スワロフスキービーズを使って作った恐竜の形のキーホルダーで、わたしがもうずいぶん幼い頃に作ってもらったものだった。

本当は単純におもちゃなんかが一番喜ぶのだろうけど、わたしはこれを希望にあげたかったのだ。お母さんからの祝いという意味も込めて。



ねえ、お母さん。

わたしは心の中で、お母さんに向かって語りかけた。  
わたしはもう知っている。おかあさんはここにいる。わたしが忘れない限りはずっと一緒にいるのだということを。それは生きている人間の勝手な思い込みなのかもしれない。でもそれでもいい。  
だから、わたしは心の中で語りかける。

お母さん。

わたしをこの家に連れてきてくれてありがとう。  
わたしに家族を残してくれてありがとう。  
希望を残してくれてありがとう。

「カズー！ もうすぐのんと父さん帰ってくるってよ」  
階下から仁の声がした。

「はい！」

わたしは大きな声で返事をして立ち上がった。

大好きな家族と過ごす、楽しい時間が始まる。

（第1話 完）

## 6（後書き）

第1話 終了です！  
ありがとうございます。  
お話は2話へ続きます。

わたしには三歳になったばかりの弟がいる。

希望<sup>のそむ</sup>という名の弟はとても……元気だ。

保育園の先生からは、男の子の中ではおとなしい方ですよ、なんて言われているけど、三歳児の「おとなしい」なんて、実際そんなに「おとなしい」ものじゃない。当たり前かもしれないけれど。

「こらっ、のん！ カズのノートに落書きしたでしょ！！」

わたしはノートを片手に声を張り上げた。ブロックを組み立てていた希望がきょとんとした顔で見上げる。わたしはそんな希望の目の前に問題のノート突き付けた。

「ほらあ、ここ。ぐしゃぐしゃって描いたの、のんでしょ？」

希望が、その大きな目をパチパチとさせて首を傾げた。

「ぐちゃぐちゃ、ないよー。くーまだよ」

くーま……つまり車ってことが じゃなくて。

「あのねえ、のんくん。このノート、カズのお勉強のノートなの。

落書きしちゃダメって、何回も言ったでしょ？」

「うん」

希望はコクリと頷く。さすがに「しまったな」な表情をしている。ちゃんとわかってるんだ。でも、これで同じ注意をするのは何回目だろう。

わたしは短く息をついて、希望の頭を撫でた。

「あのね、希望。カズ、このノートとっても大事なの。希望のお絵

描きのノートはちゃんとあるでしょ。絶対にカズのに描いちゃだめ。いい？」

「かじゅ、ごめんなたい」

希望はぺこりと頭を下げた。かと思っただけで顔を上げニコニコしている。概ね「ホラ、ぼくちゃんと謝れたでしょ、すごい？」とでもいうところだろうか。こんな顔されちゃ、もうそれ以上は何も言えない。子どもの笑顔は時にすごい防御力と攻撃力を発揮するものだ。

わたしは諦めて希望から離れ、リビング中央の座卓に戻って、その問題のノートをもう一度広げ、ため息をつく。

数学のノート、わたしが書いた数式のすぐ横に、丸やら線やらが大胆に描いてある。希望が描いた「くーま」だ。

そもそも、なぜわたしがこんな場所で勉強をしているかというと、明日から前期の中間テストなのである。本当なら自室に籠って最後のあがきに集中したいところだけど、それが出来なかった。

日曜日なのに、おとうさんも義兄の仁も不在だ。

中学校の先生をしているおとうさんは、試験問題の作成が遅れるとかで図書館へ出かけてしまった。中学校も試験の時期なのだから、どうやらおとうさんも明日までに仕上げなきゃいけないらしい。試験の時期は、生徒だけじゃなく先生の方も大変そうだ。ちなみにおとうさんの担当教科は国語である。

仁は、土日の昼間はカフェでアルバイトをしている。モーニングの時間から入って、夕方五時までのフルタイムだ。

ということ、日中はわたしが一人で希望を見ていなければならなかった。

午前中は近所の公園に行って、思いっきり走り回らせてきた。そ

うした方が、午後は疲れてよくお昼寝してくれるかな、という計算で。昼食の時間に家に戻って来て食事を取り、さあ、午後はじっくり勉強でも、と思ったんだけど……。

参考書を広げるわたしの傍らで、希望は元気にブロックを出したりミニカーを出したりして遊びまわっている。まったくお昼寝をする気配がない。わたしの目論見は見事に外れてしまったわけだ。それでも一人でご機嫌に遊んでいるのだから、わたしもそんなに気にはならなかった。時々絡んでは来るけど、邪魔に思うほどでもない。だが、わたしがちょっとトイレに立って、そのついでにコーヒを淹れに行った隙のことだった。広げっぱなしだったノートに落書きがされていたのは。

まったく、油断ならない……。

わたしは気を取り直して、再び参考書に向かう。シャープペンでされた落書きは消せなくもないけど、もうそのままでもいいや。それよりも、先に進めよう。とそこへ、希望のちよつと情けないような声が。

「かじゅー……のん、ちつちでたー……」

「ええっ?!」

希望の言葉に、わたしはガツクリと肩を落とした。

おむつが取れたばかりの希望は、時々まだおもらしをする。それは仕方のないことだ。叱る訳にもいかず、わたしは大きなため息について希望の世話に向かった。

とりあえず、今は勉強どころではなさそうだ……。

\*

\*

\*

「　　かわいいねえ」

中休み、美香という名の友達が、例のノートを眺めながらクスクスと笑う。わたしはそれに苦笑いを返した。

「まあ、かわいいけどねえ。困ることが多い」

「だろうね。でも面白そう」

美香がさらに笑う。以前聞いたことだが、一人っ子の美香にとって、小さな子どものいる生活というのは「憧れ」なんだそうだ。傍からは確かに楽しくて面白い生活に見えるものかもしれない。実際は　　まあ、わざわざ人の憧れを壊すようなことは言わないでおう。

「何、それ」

突然、美香の後ろからにゅっと手が伸びてきて、わたしのノートをひょいと掴みあげた。

「木村くん！」

美香が驚いたように顔を上げる。ノートを取ったのは、キムタクいや、木村琢磨くんだ。

「何、このゲージツ的な落書き。春山さん描いたの？」

「まさか。弟の作品です」

ため息交じりに言うと、木村くんはその端正な顔に笑顔を浮かべた。

木村くんとはちょっとしたことをきっかけに、よく話すようになった。わたしに弟がいることも知っている訳で、聞くまでもなくそのノートの落書きが希望によるものだとわかっていたのだろう。

「これ車？　かな」

「へえ？　よく分かったね」

「え、当たり前？　オレすごいな！」

なんだ、当てずっぽうなのか。

木村くんは笑って「ハイ」とわたしにノートを返すと、そのまま「じゃあね」と離れて行ってしまった。

そんな木村くんを見送っていると、美香がずっと身を近づけてきた。

「ねえ。最近カズと木村くん、仲良くない？」

「は？」

「木村くん、よくカズに話しかけてくるじゃない？」

わたしは首を傾げた。よく分からないけれど、そんな感じに見えるのかな？

「木村くんてさ、自分からはあまり女子とは関わらないタイプじゃない。変に騒がれるのが嫌って話で。でも、カズにはわりと普通に話しかけてくるもん」

わたしは美香の言葉に感心した。よくもまあ、見ているものだ。

木村くんが「自分から女子とは関わらないタイプ」だとかいうこと、わたしはちっとも気付かなかったけど。

「カズ、気をつけた方がいいんじゃない？」

「何を？」

「本気で木村くんを好きな子も多いみたいだし。嫉妬とかさ」

「げ。それはやだな。身に覚えのないことで嫉妬されんのはご勘弁

だわ」

「身に覚えのない、ねえ。じゃあさ、カズ。もし、木村さんに「付き合って」とか言われたらどうする？」

美香が興味深々という目を向けてくる。わたしは苦笑するしかなかった。

「何それ、急に」

「もしもの話。だってさー」

美香が少しだけ口を尖らせる。

「カズからちつともそんな話聞かないんだもん。何、男に興味ない？」

なんかそれは極端な解釈のされ方じゃないだろうか。

「別にそういう訳じゃないけど。機会がないだけで」

わたしは肩をすくめた。わたしだって、普通に「彼氏」というものが欲しいなあという気持ちはある。でも、付き合いたいな、と思うような人との出会いが今のところないのだ。それより前に、お母さんが倒れてからはそれどころじゃない、というのが正直な話だけだ。でも、それは人には言わない。

美香はなんとなく不満そうに「ふうん」と言っ、もう一度意味ありげな視線をわたしに向けてきた。

「カズと木村くん、お似合いだと思うよ？ 好きになってみたら？」

「好きに ってねえ……」

人を好きになるのって、そんなものじゃないと思うのだけど。

わたしは返事代わりに盛大なため息をついて、ノートに目を戻した。

雑談もそろそろ切り上げないと。次の数学のテストの時間まで、



あと五分になろうとしていた。

試験中は午前授業　早く家に帰れるということは、それだけ一人の時間が持てるということだ。わたしは友達との会話もほどほどに、さつさと教室を出た。希望が保育園から帰ってくるのは5時過ぎだ。家に着くのが一時ぐらいだとして、たつぷり四時間は一人でいられる！

これはかなり貴重な時間だ。

「待って、春山さん！」

そう声をかけられたのは、駐輪場から自転車を出して、ペダルに足を乗せた瞬間のことだった。

声をかけてきたのは木村くん。彼は慌てた様子で自分の自転車を出してきてわたしの隣に並んだ。

「どうかしたの？」

「あ、いや。一緒に帰ろうと思って　ほら、途中まで道同じだし」

木村くんの家は、希望の通っている保育園の近くのマンションらしい。それはわたしの帰り道の途中にある。一緒に帰るのを断る理由もなく、わたしが「いいよ」と頷くと、木村くんはホッとしたように笑った。

この日の試験の出来具合などを話しながら、二人でのんびりと自転車を進める。

木村くんは、わたしの中ではかなり話しやすいの方の人だ。会話もスムーズに進む。

「そういえばさ」

木村くんが少し気遣うようにわたしに顔を向けた。

「春山さんところは弟くんいるから大変なんじゃ？ 勉強もだけど、保育園のお迎え。試験中はどうするの？」

木村くんは、わたしの家庭の事情の細かいところは知らないまでも、時々わたしが弟の保育園のお迎えをやっているということを知っている。

「それは大丈夫。じ……兄が行ってくれるって」

木村くんは目を丸くした。

「お兄さんいるの？」

そっか。木村くんは知らないんだ。って、それもそうだ。一人ひとりのクラスメイトの詳しい家族構成など、いちいち知っちゃいないだろう。

「うん。二つ上の大学生」

「へえ。そっか。じゃあ、お迎えのことは大丈夫なんだね」

木村くんはそう言って微笑んで、それ以上はウチについてのことにはもう何も触れなかった。

そのことにわたしは少なからずホッとした。もしかすると、木村くんはわたしに気を使っているのかもしれないと思ったけど、木村くんの涼しい表情からはそこまではわからない。

それからまた明日のテストことなど当たり障りのない話をしていくうちに、木村くんのマンションへの分かれ道に着いた。

「それじゃ、また明日ね」

「あ。ねえ、春山さん」

わたしが手を振ってそのまま行こうとすると、木村くんがそれを呼び止めた。わたしは慌ててブレーキをかける。

「ごめん。あのさ……」

木村くんが言いにくそうに話を切り出した。

「その……テストが全部終わったらのことだけど、どっか遊びに行かない？」

「え？」

「休みの日に遊びに　二人で」

その思いがけない言葉に、わたしは一瞬ぼかんとしてしまった。

「え？」

ついもう一度首を傾げると、木村くんは頭をかきながら少し照れたように苦笑した。

「突然ごめん。今度の休みにでも、二人でどっか遊びに行けたらなと思って。　ダメ、かな？」

それは、つまり……デート？　　って意味なのだろうか？

そう思いついた途端、わたしは急に胸がドキドキしてきてしまった。

「えと……ダメ、じゃないけど……」

あまりに突然過ぎてどう答えればいいのやら……とその時、頭の中に希望の顔が浮かんた。土曜日は久し振りにみんなで動物園に行く計画だ。そのために仁もバイトの休みをもらったって言ってた。

「ど、土曜日は無理。家族で出かける約束が」

「じゃ、日曜日？」

「日曜日は……」

何も用事はない。強いて言うなら希望とゆっくり遊んで過ごそうかと思つてたところだ。

どうしよう……こういうのって、簡単に誘いに乗つてもいいのだろうか？ でも、何も正式に「付き合つて」とかつて言われてる訳でもないし。遊びに行こうって言われてるだけで。断るのもかえって意識し過ぎのような気も……。

「無理、かな？」

「だ、大丈夫！」

直前までうだうだ考えていたのに、つい反射的にそう答えてしまった。だってあまりにも木村くんの声が不安そうだったから。

「ほんと？」

木村くんがパアッと笑顔になる。木村くんはもともとよく笑う人のようだけど、こんな笑顔見るのは初めてかもしれない。

わたしは一瞬そんな木村くんの顔に見惚れてしまった。

木村くんがかっこいいのは分かっていたつもりだけど、違う……

木村くんは「かっこいい」というよりも「かわいい」だ。

「じゃあさ、今度オレからまた改めて連絡するから、良かったら、メアド教えて？」

そうして互いのアドレスを交換した後、わたしは木村くんと別れて家に帰った。

\*

\*

\*

その日の夜のこと。

夕食後、居間のソファに座ってテレビを見ている時に、わたしの携帯がメールの着信を告げた。

木村くんからだ。

そのメールの内容は、

『ごめん、別に用事はないんだけど。明日もテスト頑張ってね』

とだけ。絵文字も何もないたってシンプルなもの。というか、「テスト頑張ってね」って、自分もだろう！と突っ込みを入れたくなるような文面に、わたしは思わず吹き出しそうになってしまった。普通は「頑張ろうね」じゃないのだろうか。

「何、にやけてんの」

隣にドサツと腰を下ろした仁が、面白そうにわたしを見やる。わたしが咄嗟に携帯を後ろ手に隠すと、仁はニヤリと笑った。

「あ、慌ててる。なに、オトコからのメール？」

「！」

「あれ、当たり？」

確かに男からのメールだけど。でも仁の言った「オトコ」のニュアンスはそれとは違う意味に聞こえた。

「そつかあ。カズにもとうとうオトコができたか」

やっぱりそう来た。わたしはハアとため息をついた。

「違います。男は男でもただの友達からです」

「あら。それは残念」

仁はわざとらしく肩をすくめた。

「でも、そのメールは友達からだったとして。カズ、今彼氏いないの？」

今、希望とおとうさんは2人で一緒にお風呂に入っている。じゃないと、仁だってこんな話はしてこないだろう。

「いない　　ってか、そんなことどうでもいいでしょ」

「んー。まあいいんだけど。でも、カズからそういう話全く聞かないなーと思って」

あれ？　なんか誰かからも同じこと言われたような。でもその前に、仮にわたしに付き合ってる人がいたとして、それをわざわざ仁に言うかって話だけど。

「でも何年か前いたな。確か俺と同じ年のヤツと付き合ってたよな、カズ」

確かにそういうこともあった。中学三年生の頃、わたしは二歳年上の人と付き合ってた。と言っても、休日に一緒に遊びに行ったり、学校帰りに待ち合わせて公園ですっとお喋りをしてたぐらいだ。恋人らしいことをしたといえ、手を繋いだだけ。幼い付き合いだったと思う。なんで別れたのか……たぶん自然消滅ってやつだったのだろう。

そんな本人すらも忘れかけていたことを、仁はよく覚えているものだ。変に感心してしまう。

「人のことよりも、自分はどんなのよ？」

こっちのことばかり言われるのはしゃくなので、そう切り返してみた。仁は「俺？」と目を丸くする。

「俺は　まあ、ぼちぼちな」

「あ、ずるい答え」

仁はニヤツと意地の悪い笑みを見せた。

「何、気になる？　俺の恋愛事情」

何か憎たらしい。わたしはフンッとそっぽを向いた。

「べつつにいい。仁はモテるみたいだし、どうせカノジョには困ってなんていないんでしょー」

「さーてね。どうだろー」

フンと笑って仁はテレビに視線を向けた。もうそれ以上は言うつもりはないらしい。

まったく。仁はいつもそうだ。この手の話題に限らず、仁は人のことにはいろいろ口出しするくせに、自分のことになると途端に口が重くなる。おかげで、仁と家族になって四年が経つが、掴みどころがないという点については未だ印象が変わらない。

そこへ、室内にピーツというブザーの音が響いた。お風呂場からのお知らせブザーだ。

「さて、と。おぼっちゃんが出てくるな」

仁の言葉が終わらないうちに、パタパタと足音が聞こえてくる。



ガチャリと居間のドアが開いた。

「たらいまー！」

バスタオルを頭からかぶった希望が、元気に声を上げて寄ってきた。

「おう。よくあつたまつてきたか？」

「うんっ！」

希望はその辺りにあつたミニカーを掴んで、体を拭いてくれる仁の頭の上を「ブーッ」と言いながら走らせた。

「うお！ やめろつて。髪がからまるだろ！」

「ブッブー！」

仁の抗議など、希望はまるで無視である。さらにもう一個掴んで今度は両手で走らせ始めた。もちろん希望はわざとやってるのだ。

「あーもつっ！ やめろつて言ってるだろー！」

仁がいよいよ反撃に出る。

両手で希望のわきの下をガバツと掴むようにしてくすぐり始めた。

「きゃーっ！」

希望はこのくすぐり攻撃にめっぽう弱い。ゲラゲラと笑い転げた。「まだまだだぞー！ こちょこちょこちょー！」

「やーだー！」

仁は笑い転がる希望に覆いかかるようにして体中をくすぐりだした。希望はもう半分叫ぶように笑い声を上げながら体をよじらせて

いる　まだスッポンポンのままで。

まったく、仁もじゃれるならせめてパンツぐらい履かせてからにすればいいのに。と思いつつも、二人の笑い声につられて、わたしも楽しい気分になってきた。

「えらく賑やかだな」

おとうさんが髪の毛を拭きながら部屋に入って来て、じゃれ合う仁と希望を呆れたように見下ろした。

「おふざけもほどにしとけよ　和音」

「ん？」

「早く風呂入って勉強しなさい。ここでいい成績とつとかなないと後でが大変だぞ」

おっと！　そうだった。

わたしは「ハイ」と返事をして立ち上がった。

仁と希望のじゃれ合いはまだ続いていた。

「かじゅ！ つぎこつちー！」

希望がわたしの手を取ってぐいぐいと引っ張っていく。

「ぞーたん！ しゅっこいねえ！」

希望は手すりに掴まって、すぐ前にいるゾウをキラキラした目で見上げた。

「おっきーい！」

「うん、おっきいねー！」

とそこへ、少し遅れておとうさんと仁もにこやかにやってきた。

「のん。ほら、あれ。ゾウさんのウンチだぞ」

仁が指さす方のモノを見て、希望が「うわあっ！ でつかあい！ のんのよりでつかいねえ！」と目を丸くして声を上げる。その声は周囲にいた見知らぬ人たちの笑いをも誘った。

昨日で試験はすべて終わった。

試験の出来は……今はあまり考えたくない。とりあえず、終わったことの安堵感でいっぱいといったところだ。

そして、土曜日の今日、前からの約束通り、こうして家族で動物園にやってきた。

中に入ってもう一時間ほどが経つが、ずっと希望のテンションは上がりっぱなしだ。目の前にいる動物たちを見て、「うわあー！」だとか「おお！」だとか、いちいち歓声をあげて大喜びしている。

「ねーねー、あれあかちゃん？」

希望が大きなゾウの隣にいる、一回り体の小さなゾウを指差してわたしを見上げた。

「うーん。あかちゃんかは分からないけど、まだ子どもかなあ」

「ふうん。じゃあ、おとなりはおかーたん？」

希望は首を傾げる。たぶん、ドキッとしたのはわたしとおとうさんと仁だけ。言った希望本人はただ思ったことを口にしたただけだろう、キョトンとした顔をしている。

「うん、そうだね。お母さんゾウかもしれないな」

おとうさんがサラリと答え、わたしは密かにホッと息をつく。

お母さんが死んでもう半年が経つというのに、未だにわたしたちは希望の口から出る「おかーたん（お母さん）」という言葉に過敏になってしまう。

「いいねー、おかーたん」

希望がニコニコして言った。それにも深い意味はないのだと思う。でもやはり、チクリとした胸の痛みを覚えずにはいられなかった。

動物園は広い。希望が満足するようにゆっくり見て回っていると、まだ半分も回らないうちにお昼になった。

屋外の飲食エリアに運良く空いた席を見つけ、そこで食事をする  
ことにする。お弁当などは持ってきていない。早起きして作る元氣  
はわたしももちろん、仁もおとうさんもなかったわけで。

売店で適当に焼きそばやらうどんやらポテトやらを買って、みん  
なで適当に食べる。希望は外で食べる雰囲気を楽しめるのか、もう大  
はしゃぎだ。

「あつ、はとぼっぼ！」

テーブルの周りをうろつろとしている鳩が人の食べこぼしをつつ  
いているのを見て、希望はこれまた大喜び。

いいなあ、と思う。子どもって何事も「楽しい事」として受け止  
めることができる。わたしは鳩を見ても珍しくもなんともないし「  
あっち行って」としか思わない。もちろん、希望の前ではそういう  
ことは口にはしないけど。

次どこから見て回ろうか、とテーブルに園内マップを広げた時、  
おとうさんが突然思い出したように手を打った。

「そつえば、お土産屋って帰りだと混むんだよな　よし、希望、  
今のうちに父さんとお土産見に行くか？」

お土産売り場の一つはこの飲食エリアから見える位置にあった。  
確かに、買うのなら今のうちに見ておくのが賢いかもしれない。

「うんっ！」

希望の目が輝く。おとうさんはわたしたちに「次どう回るか決め  
ていて」と言い残して、希望を連れてお土産売り場へ向かった。

「決めとけてもなあ。まあ、ここから一番近いところから　こ  
う周りでいいよな。あ、ここの鳥エリアはとばすか？　全部回れな  
くなりそうだし」

仁がマップを指しながら言う。たしかに、全部をじっくり見て回  
るのは無理かもしれない。

「いいと思うよ、それで」

わたしが頷くと、少しだけ気遣わしげに仁が首を傾げた。

「カズ、大丈夫か？」

「ん？」

「なんか疲れた顔してるけど？」

ああ、確かにそうかもしれない。この連日、試験勉強で寝不  
足の日が続いていたのだ。実は今日もまだ体はだるかったり。

「でもちゃんと楽しいよ。仁は？」

ちよつと言いつきがましく言うのと、仁はにっこりと笑った。

「俺もちゃんと楽しんでるよ。天気もいいし、そんなに暑くもない  
し。家族サービスには持つて来いの日だな」

「そうだね。のんも楽しそうで良かった」

何よりもそれが一番だ。仁もきつと同じようにを思っているのだ  
ろう、笑って大きく頷いた。

「動物園なんて久しぶり。俺、中学ン時友達と来て以来だぜ」  
「え？　だって去年の春休み　」

言いかけて思い出した。その時は元気だったお母さんとおとうさんとわたしと希望の4人で来たんだった。希望はまだベビーカーで、後半はほとんど眠っていて、おとうさんもお母さんも苦笑いしていた。

思えば、その頃の仁は、そんなに家族と一緒に行動する方ではなかった。それはこのぐらいの年の男の人なら当然なのかもしれない。仁がこうして家族との時間を優先させるようになったのは、おかあさんの癌が見つかって、入院してからだ。

「たまには動物園つても楽しいもの　だ、な……」

仁の言葉の語尾が不自然にしばんでいく。

「仁？」

急にどうしたんだろう？　仁の視線が縫い止められたかのように動かなくなっている。

その視線を辿って行きついた先に、一人の女の人がいた。髪を高い位置でシニヨンにまとめた、背の高い目立つタイプの綺麗な人だ。その人は楽しそうに歩く人波の中で、一人立ち止ってこちらを仁をまっすぐに見つめている。思わずもう一度仁の顔を見ると、さっきまでの笑顔が消えて、怖いぐらいの無表情になっている。その目はやっぱりその女の人に向けられていた。

「仁くん」

「よお」

近くまで来て声をかけてきた女の人に、仁は無愛想に答えた。二人の間にピリピリとした空気が漂っているのは、たぶん気のせいではないだろう。

どうしよう。間違いなく、わたしはこの場にいない方がいいような気がする。

「あの、わたし……」

「いいよ、カズ」

腰を浮かせたわたしに、仁が鋭く言った。ビクリとして仁を振り返る。仁の目は変わらず女の人に向けられていて、そのまま一度わたしに向かって言った。

「カズはここにいていいから」

「でも」

「いいから」

仁の強い語気に押されて、わたしは再び腰を下ろした。強い視線を感じ顔を上げると、女の人が睨みつけるようにわたしを見ていた。

「仁くん、この人誰？」

女の人の声はどこまでも硬い。もちろん「この人」とはわたしのことだ。この二人の関係は……やっぱり考えるまでもないだろう。

「誰だっていいだろう。小枝子には関係ない」

仁が素っ気なく言う。わたしは咄嗟に仁を振り返った。なぜ、そこで「妹」とすぐに言わない？ 嫌な予感がした。面倒な事になりそう。

「関係ないじゃないじゃない」

「小枝子」さんがかすかに声を荒げた。さすがに、場所が場所だけにそこまであからさまではないが、明らかに痴話喧嘩ってやつだ。



隣のテーブル席が空席なのがちょっと救いだ。こんなことで注目を浴びたくはない。

「最近全然連絡してこないと思ったら……こんな女の子と付き合ってたわけ？」

「　　だとしたら？」

仁の言葉に、わたしは目を丸くした。何を考えているの、仁は。

「わたし、妹ですよ！」

我慢できず、わたしは少しだけ強い調子で言葉を挟んだ。小枝子さんは大きく目を見開き、一度ゆっくりと瞬きをした。

「妹？」

わたしは深く頷いた。

「妹……」

小枝子さんはもう一度そう呟くと、確認するかのように仁を見る。仁は相変わらずの無表情だった。

「そうなの？　仁くん」

「そう　　だけど、違う」

「え？」

わたしの声と小枝子さんの声が重なった。

「妹だけど、血はつながってないし、付き合うことも結婚することもできる」

「はあっ？」

わたしは思わず立ちあがった。小枝子さんのことなど一瞬忘れてしまった。仁は前と全く表情を変えず、チラリとわたしの方を見て、また小枝子さんに視線を戻した。わたしもつられて小枝子さんを見る。小枝子さんは戸惑ったような顔をしていた。

「俺のことより、自分はどうなんだよ。こんなところに誰と来てる？」

仁のその言葉に、小枝子さんがぎくりと顔を強張らせたのがわたしにも分かった。

「わ、私は……」

「キタザワってやつ？ 高校の時の同級生とかって」

「な、なんで」

「知ってるかって？ 何、やっぱり俺に知られたらまずいわけ？」

「ち、違う！ キタザワくんは……」

「いいよ、もう。それより、あれそのキタザワくんじゃないのか？ 搜してるみたいだけど？」

仁が顎で示した方を小枝子さんが振り返る。たしかに、一人の男の人がキョロキョロと辺りを見回して、人を搜している様子だった。

「あ……」

小枝子さんが小さく声を上げる。どうやら「キタザワ」って人に間違いないようだ。

「早く行ってやれよ。俺たちももう行くから 和音、行くぞ」  
「え！」

急にグイツと手首を掴まれ、前につんのめりそうになった。仁はそれを気に留めることなく、そのままわたしの手を引っ張って歩き出した。後ろを振り返ると、途方に暮れたように立ち尽す小枝子さんと目が合ったが、わたしにはどうすればいいのかわからない。仁に手を引かれるままにその場を去るしかなかった。

おとうさんたちがいるだろう土産物売り場の手前で、仁はようやくわたしの腕を離れた。掴まれていたわたしの手首は少し赤くなっていた。別に痛くはなかったが、その手首を見ているうちになんとか無性に腹が立ってきた。

なんなの、一体!?

わたしは仁の背中を力を込めてバシッと叩いた。

「いつてっ！ 何だよ、カズ」

「何だよ、じゃないよっ！ 何よ、さっきのは！」

「別に……何でもないよ。ちょっとゴタゴタしてるだけ」

軽く肩をすくめる仁。イラッとした。

「何でもない？ 何よ、付き合うことも結婚もできるって。あの人に対する当てつけ？ ふざけないでよ」

「ふざけたつもりはないけど」

「ふざけてるじゃない！ あの人にもわたしにも失礼よ」

あまりに腹が立って、つい声が大きくなってしまった。通りすがりの人が好奇の目を向けるのがわかった。

だめだ、これこそ痴話喧嘩のように見られてしまう。

わたしは気持ちを落ち着けるように小さく咳払いをすると、もう一度仁を睨みつけた。

「二人に何があつたか知ったことじゃないけど、勝手に人を利用したりしないでよね」

そして、一言付け加える。

「仁って最低」

フンッと顔を背けて、わたしは一人で店へと向かった。  
どうしようもなく苛ついていた。

その後の動物園は、やっぱりあまり楽しむことはできなかった。  
わたしと仁はまったく口をきかなかった。

希望の前ではさすがにそんなそぶりは見せないようにしたもの、  
こういうことは隠せるものではない。おとうさんからは「兄妹げん  
かもいいかげんにしろよ」とボソリと言われ、希望も何かを感じて  
いたようで「じんー、かじゅー」と、わざわざわたしと仁と一緒に  
呼び寄せたりしていた。

情けない、と思う。こんな小さな子にまで気を使わせてるなんて  
でも、どうしても仁とは口をきく気になれなかった。

わたしたちが動物園を出て駐車場に戻ってきたのは、ほぼ閉園時  
間だった。希望の腕には、お土産物屋さんで買ったトラのぬいぐる  
みが大事そうに抱えられている。車に乗り込む希望の表情はとても  
満足げだった。

「仁、運転替われ」

「いいよ」

後部座席で希望をチャイルドシートに乗せていたわたしの背後で、  
そんなやり取りがされている。どうやら帰りは仁の運転のようだ。

「和音」

希望の世話を終え、その隣に腰を落ち着けてドアを閉めようとす

ると、おとうさんが顔をのぞかせてクイツと親指を外に向けた。

「和音、前行け」

「え？」

「和音が助手席」

「えー？」

「なあ、希望？ たまにはお父さんとお隣がいいよなあ？」

「うんっ」

……。

わたしは渋々助手席の方へと回った。おとうさんが何故突然わたしを助手席に座らせたのか。考えるまでもない、仁と仲直りしろとの無言の圧力だ。普段は優しいおとうさんだが、こういう時はちょっと逆らい難い雰囲気がある。

車が出発してから、興奮気味に動物の話をする希望の声が車内に響く。

「とらたん、かつこよかったねえ」「おたるたん、ぴょーんつて、しゅごかったねえ！」「ごりらたんがね……」「ぞーたん……」「……」

そのうちその口数は減って行き、やがてすぐに聞こえなくなった。

「希望、寝たよ」

笑いを含んだおとうさんの声に後ろを覗くと、チャイルドシートの上で、気持ち良さそうに眠っている希望が見えた。腕にはまだしっかりとトラのぬいぐるみを抱き締めている。よっぱど気に入ったのだろう。

希望が眠ってしまったとたん、車内がシーンと静まり返ったよう

に感じた。わたしはラジオを付けようと手を伸ばしたが、仁の方が一瞬早くそれを付けた。

賑やかな洋楽が流れ出す。その騒がしさにひどく安心した。

「お前たちさ」

後ろからおとうさんが声をかけてきた。

「何があつたか知らないけど、今日みたいな日に喧嘩はやめろ」

音楽にも車の走行音にも負けないほどの大きなため息をついて、おとうさんが言った。

「家に着くまでにどうにかしろよ、鬱陶しいから。とうさん、寝るからな」

それきりおとうさんは口を噤んだ。言葉通り、眠りに入つたのかもしれない。

鬱陶しいと言われても、とわたしは内心舌打ちをした。

だってわたしは悪くない。仲直りするも何も、わたしからは何もするべきことはないはずだ。

と、そう思うのだけど。

そのままラジオの音楽だけが車内に流れ続ける。それに集中しようと耳を傾けてはみるものの、やはり隣の仁を気にせずにはいられず、気まずさを感じた。

早く家に着けばいいのに。おとうさんの鬱陶しさなんて知つたことじゃない。とりあえず車を降りて、早く仁の隣から離れたいと思つた。

だが、道路は渋滞していた。無理もないかもしれない。今日は絶好の行楽日だったのだ。

また車の流れが止まる。赤い光がずっと前から続いているのを見て、ついため息が口をついて出た。

家まであと一時間はかかるだろうか……。

「ごめん」

不意に耳に届いたその弦きは、あまりに小さかった。だけど、不思議と流れている曲にかき消されることなく、はつきりと聞こえた。わたしは仁を振り向く。仁は前がまだ動かないのを確認すると、わたしの方へ顔を向けて、ぺこりと頭を下げた。

「ごめん、あれは俺が悪かった」

わたしはふと、これまでも仁と喧嘩した時、先に謝るのは必ず仁の方だったことを思い出した。たとえわたしの方が悪い場合でも、わたしが謝るタイミングを掴めないでいるうちに、仁の方から先に謝ってくれて仲直りのきっかけを作ってくれたのだ。

そんなことを思い出してしまったら、さっきまであんなに感じていた苛立ちは、もうどこかへ消えて行ってしまった。

わたしは単純なのだろうか？

なんだか気が抜けてしまって、わたしは長い時間息をもらした。

「いいよ、もう。……でも、聞いてもいい？」

「何？」

「あの人　小枝子さん？　あの人、仁の彼女なんですよ？」

仁はチラリとバックミラーを覗いた。

「父さん、本当に寝たな」

仁は小さく苦笑すると、はあっと一つ息を吐いた。

「彼女　だった、というのが正しいかもな」



「え？」

「最近連絡取ってなかったから。向こうは向こうで新しい付き合いがあるみたいだし、俺もそれ聞いてもそのままにしてた」

……なんか複雑そうだ。

「でも、あの人まだ仁のこと好きみたいだった……ね」

そう言くと、仁がわたしの方を向いて、意外そうに首を傾げた。

「そう見えた？」

「見えた。けど？」

だって、小枝子さんは最初、明らかに仁と一緒にいたわたしに嫉妬していた。あれは仁の事が好きだからではないのだろうか。

「そうか、カズにはそう見えたのか」

仁が苦笑する。わたしにはその苦笑の理由が分からない。でも仁はそれ以上小枝子さんの話をするつもりはないらしく、それきり口を噤んでしまった。

車がゆっくりと流れ出した。

「カズ ごめんな」

車を発進させると同時に、仁がもう一度そう言った。

何に対しての「ごめん」なのかいまいち分からないまま、わたしはとりあえず「うん」とだけ返事をした。

何かモヤモヤとしたものが心の中に残った。

日曜日。

この日は正午に木村さんと待ち合わせをした。これから一緒に映画を観る予定だ。

「なんか、学校以外で会うのって、妙に緊張するね」

顔を合わせるなり、木村くんはそう言って照れたように笑った。たしかに、お互い私服姿で、しかも二人だけで会うなんて、どこかくすぐつたいような気がする。

「わたし、もうちょっとお洒落してくれば良かったな」

照れ隠しのつもりで冗談めかして言うと、木村くんは大慌てで首を振った。

「いやいや、全然！　じゅうぶん可愛いって！」

そう言ってからハツとしたように手で口を押さえた。

「なんかオレ、すごいナンパな男みたいだな……」

ポツリとそう呟いて頭を掻くその様子が可笑しくて、わたしは思わず吹き出してしまった。おかげで、照れとか緊張はどこかに飛んで行ってくれたようだ。

木村くんもすぐにいつもと変わらない調子に戻って、わたしたちは映画館へと向かった。

木村くんが選んでくれた映画は、今週公開されたばかりの話題のサスペンスアクション映画だ。

彼がこれに決めたと教えてくれたのは金曜日のことで、わたしはそれがラブストーリーじゃないことに胸をおなでおろしたものだ。付き合っている訳でもないのに、いきなり二人でラブストーリーというのは、ちょっといたたまれないような気がしたから。たぶん、木村くんもそれを考えて決めてくれたのだろう。

その映画は本編だけで軽く二時間を越す長編だった。

上映が終わり、映画館から外に出たわたしは、強張った体を思わずうーんと伸ばした。

「ちょっと長かったね」

木村くんの苦笑いに「でもすごく面白かった」と答えると、彼はホッとしたように表情を緩めた。

「よかった。春山さんがアクションものとか嫌いだったらどうしようとか思ってたんだけど」

その言葉に今度はわたしが苦笑した。

「だったら観る前に嫌いって言うよ。嫌いなものに無理して付き合うほど、お人好しじゃないもん、わたし」

木村くんは二、三度瞬きをした後、ふわりと笑った。

「そうなんだ　よかった」

「ん？」

「うっん、なんでもない　それより、これからどうする？」

困ったように鼻の頭をカリカリと掻く木村くん。

「映画の後のこと、オレ何も考えてなくてさ。どっかに入ってなんか飲む？」

「んー。どこかに入るより、わたしちょっと歩きたいかも。ずっと座りっぱなしだったし」

木村くんもわたしの言葉に「じゃあ、そうしよう」と同意してくれた。

わたしたちは映画館の近くの公園までのんびりと歩いて行くことにした。区立の大きな公園で、様々なイベントが盛んに行われるところだ。今日は何もイベントはないようだが、そこかしこでストーリーのミュージシャンたちが演奏しており、それぞれに人だかりができていて大賑わいだった。かと思えば、スケボーで見事な技を披露している集団がいたり、焼きそばやたこ焼きなどの露店があちこちに出ていたり。休日の公園はさながら祭りのような雰囲気だ。

公園をさらに奥に進むと、今度は家族連れが多く遊んでいる芝生の広場があった。この辺りは比較的静かだ。

わたしたちは空いている場所を見つけて、そこに座って休憩することにした。

「なんかのどかだね」

木村くんが小さく笑う。わたしたちの視線の先では、三人の家族連れが遊んでいた。小さな女の子がいて、お父さんと思しき人が吹

いたシャボン玉を、きゃーきゃー言いながら追いかけて回していた。  
お母さんらしい女の人はにこやかにそんな二人を見守っていて、その人のお腹はぽっこりと大きかった。

「幸せそう」

つい口から言葉が漏れた。見ているだけで微笑みが浮かんでくる。

「あのコ、弟と同じぐらいかな」

「弟くん、三歳だっけ」

「そう。ちょうどあのくらいだよ」

わたしたちは再びシャボン玉と戯れる女の子に目を向けた。木村くんは「可愛い頃だね」と目を細めて、「そういえば」と思い出したように言った。

「春山さん、昨日は家族で出かけたんだっけ？」

「うん。動物園に行ってきた」

「大学生のお兄さんも？」

「うん」

わたしが頷くと、木村くんは感心したような声を上げた。

「いいお兄さんだなあ」

「うーん、そうかな。でも希望がみんなで行きたがるから、半分は渋々かも」

「のぞむ？」

木村くんが首を傾げる。わたしは慌てて補足した。

「あ、弟の名前。“希望”って書いて“のぞむ”っていうんだ」  
「へえ、キレイな名前。ご両親が付けたの？」  
「うん」

\*

\*

\*

『希望』

この名前をわたしが知らされたのは、希望が生まれる一月も前のことだった。

お母さんは妊娠中は赤ちゃんの性別を聞かなかった。生まれるその日までのお楽しみだと言って。それでも名前はもう生まれる前から決めていたのだ。

『女の子なら“のぞみ”、男の子なら“のぞむ”にするのよ。お父さんと二人で決めたの』

そう言っ、わたしと仁を前にしてお母さんはちよつと照れたように笑った。

『これにはね、お母さんたちが心から望んで授かった命だから、という意味と、もう一つ意味があるのよ』

お母さんは目を閉じて、慈しむように丸い大きなお腹を優しく撫でた。

『私たち家族は　こういう言い方は好きではないけど、言ってしまえば再婚家族でしょう？　気持ちでは本当の家族以上に繋がりが合っているつもりでも、やっぱりどこか違うのかもしれない。でもだから、生まれてくるこの子はね、私たちを今よりももっと本物

の家族にしてくれる“希望の子”なのよ』

\*

\*

\*

「春山さん？」

木村くんの声に、わたしはハッと我に返った。

「あ……」

人と話している時に急に考え込んだりして、わたしって失礼なことを。でも木村くんはそれに気を悪くした様子はなく、逆に気遣うような顔を見せた。

「もしかして……お母さんのこと思い出した？」

少しだけ遠慮がちに木村くんがそう口にした。

「ごめん、オレが聞いたからだよね」

「そんな。木村くんが謝ることなんて。急に黙ったりして、むしろ謝るのはわたしの方。ごめんね」

木村くんは「気にしないで」と首を振った。

さっきまでシャボン玉をしていた親子は、今度はボールを転がして遊び始めていた。

おとうさんがゆっくりと転がしたボールを女の子がえいっと捕まえる。それを投げるようにしてお父さんの方へ転がす。

「じょうずねー」「うまいうまい！」と褒める声に、女の子が飛び上がって喜んでいる。

かわいい。

どうしてもその女の子と希望が重なって見えて、わたしの顔にはまたいつのまにか笑みが浮かんでいた。

「子どもが好きなんだね」

その声に隣を向くと、微笑んでいる木村くと目が合った。

「春山さん、すごく優しい顔してる」

そう言って木村くんはまた親子に目を向けた。そう言う木村くんの方こそ、すごく優しい目をしている。

そうか。木村くんも子どもが好きなかもしれない。

「つい弟と重ねて見ちゃって。わたしもあやってよく弟と遊ぶから」

「へえ、そうなんだ。なんか楽しそうかも」

「うん。結構楽しいものだよ、子どもと遊ぶのって。そうだ、今度木村くんも希望と一緒に遊ぼうよ？」



そう言ってしまった後、わたしはハッとした。  
なんか、これって。

わたしの方から木村くんを誘っているみたいじゃない？ しかも、  
希望をだしにして。

「あー ごめん。今の冗談だから。気にしないでね」

さり気なさを装って、わたしは笑って誤魔化した。内心はかなり  
焦っていたけれど、決してそれを悟られないように、あくまでもさ  
り気なく、普通に話す。

「なんか、木村くんも子ども好きそうだから、ちょっと試してみ  
ただけ」

「なあんだ」

ほんの少しの間を置いて、木村くんが笑った。

「冗談か」

「そうそう、冗談冗談。エヘヘ」

「そっか、冗談ね。ハハハ」

二人でわざとらしく笑い声を立てる。

顔を見合わせて、どちらからともなくプツと吹き出した。それか  
らしばらくの間、わたしたちは本気で笑い合った。

ひとしきり笑った後、木村くんは「あーあ」ところんと芝生に横  
になった。

「なーんかさあ」

木村くんがまだ笑いを収めきれないまま口を開いた。

「オレ、春山さんのイメージ間違ってたなー」

「え？」

「大人しくてクールで、そんなもってどこか儚げで。外で騒ぐよりも室内で静かに読書をしているような　なんていうか、薄倅の美少女って感じ」

「？　何、それ？」

「オレが持ってた勝手な春山さんのイメージ」

横になったままで、悪戯っぽい目をわたしに向ける木村くん。わたしは「はあ？」と思わず間抜けな声を出してしまった。

「儚げで薄倅の美少女？　うわぁ、なんか……」

あまりにも事実と違い過ぎるそのイメージに、ただ呆れる。そもそも「美少女」って何？

「なんか、すごいね」

としか言葉が出ない。

「だね」

木村くんが苦笑した。でも、すぐにその笑顔を引き締めて、木村くんは真顔になって空に目を向けた。

「正直言つと、三年になつてすぐの頃、友達から春山さんのこと聞いてさ」

「わたしのこと？」

「そう。『あのコ、ちょっと前にお母さん亡くしたんだって』って「ああ、そういうこと」

わたしはため息交じりに笑った。

学年が変わって間もない頃、それまで口もきいたこともないような人たちからも、やけに同情的な目を向けられていたのを思い出す。それは決して悪意のある眼差しではなく、どちらかと言えば優しさからのものだと思われていたけれど、わたしはそれが嫌で仕方がなかった。どうにも居心地が悪かったから。

「それ聞いて、わたしのこと可哀想だと思ったの？」

ちよつと意地悪な気持ちになって木村くんにそう聞くと、木村くんは「うん」と素直に頷いた。

「そう思ったよ。そう思って、それからずっと気になってた、春山さんのこと」

「え？」

「気が付いたら、いつも春山さんを目で追ってた。いつも見てたんだけど、最初から同情的な目で見てたからかな、持ったイメージが

「

「薄倖の？」

わたしが思わず後続けると、木村くんは苦笑いした。

「そうそう。最近話すようになって、ちよつと違ったかなあって思いはじめてたんだけど、今日はつきり違うんだなってわかった」

「イメージが崩れてがっかりした？」

「いや」

木村くんがゆっくりと体を起こした。上体ごとこつちを向いて、真っ直ぐにわたしの目を見て笑った。

「がっかりどころか、これまでより良くなった」

「そう？」

「うん。春山さんはオレが思っていたよりも、明るくて元気でサバサバしてて。言いたいこともはっきり言うし、なんて言うか 思ってたよりずっと強い」

木村くんは続ける。

「言い方悪いかもしれないけど、不幸を盾にしないというか。お母さんが亡くなったことを言い訳にしないで、今を一生懸命に頑張ってる気がする。そういうところが」

木村くんが不意に言葉を途切らせた。一度きゅっと口を結んで、その後小さく笑って続けた。

「そういうところが、すごくいいと思う」

不思議だ。

ここまでストレートに褒められているのに、ちっとも照れ臭さなんか感じない。

「ありがとう」

木村くんの優しい笑顔のせいかもしれない、すごく素直に嬉しいと思えた。

「あのさ、春山さん」

「ん？」

「さっき、映画館を出た時に、春山さんこう言ったら、『嫌いなものに無理して付き合うほど、自分はお人好しじゃない』って」

確かにそんな話をしたかもしれない。わたしが頷くと、木村くんは少しだけ首を傾げて見せた。

「だったら、オレこう考えてもいいかな。こうして今日オレに付き合ってくれたってことは、春山さんはオレのことを嫌いではないって」

改めて言われるとなんだか変な感じだけど、多分、それは間違いない。

一緒に遊びに行こうといわれた時も、全く嫌な気はしなかったし、むしろドキドキしたくらいだ。わたしは決して木村くんのことは嫌いではない。

わたしが頷くと、木村くんはどこかホツとしたように笑った。

「よかった。じゃあ、もう一つだけ……聞いて欲しいことがあるんだ」

木村くんはひとつ大きく深呼吸をしてから、こう言った。

「もし……春山さんに今特別に好きな人がいないんだったら、よければ、オレと付き合って　もらえませんか？」

「え？」

わたしは咄嗟に耳を疑った。

木村くん、今なんて言った？

「春山さん、もしよかったら、オレと付き合って下さい」

木村くんがもう一度そう繰り返した。

それまでの柔らかな笑顔は消えて、やや緊張した面持ちで、それでも真っ直ぐにわたしの顔を見て。

わたしは思わずぐくりと唾を飲み込んだ。

どうしよう。木村くんが言うこの「付き合って」が、今日みたい  
に一日だけのことを言っているのじゃないってことはさすがにわたしにもわかる。

どうしよう。どうする？

でも、どうして……。

「どうしてわたしなの？」

わたしは頭に浮かんだ疑問をそのまま口にしていた。木村くんが驚いたように目を見開く。わたしは続けた。

「だって木村くんもてるもの。別にわたしじゃなくても、もっと可愛  
い人とか性格いい人とか、たくさんいるでしょう？」

「いないよ」

間髪をいれず木村くんが答える。

「オレが付き合いたくなって思ったの、春山さんしかいない」

「どうして？」

「どうしてって……どうしてだろうね」

木村くんが苦笑する。

「強いて理由を挙げるなら 守りたいと思うんだ、春山さんを見てると」

「守る？」

「うん。なんか自分でもよく分からないけど、春山さんを見てるう

ちに、そういう風に思っている自分がいるのに気付いた。だから付き合いたいって思った。そしたら近くで守っていられる気がしたから。……それに、希望くんとも一緒に遊びたいしね」

それだけを言うと、木村くんは「やっぱすっげえ照れるな」と頭を掻きながら立ち上がった。

「ホント、突然でごめん。返事はいつでもいいから　ハイ」

木村くんがわたしに向って、笑顔で手を差し伸べた。わたしが立ち上がるために手を貸してくれるのだらう。

少しだけ躊躇った末、わたしはそつとその手を掴んだ。

木村くんの手は、とても温かった。

わたしが木村くんに返事をしたのは、それから五日後のこと。こうして、わたしと木村くんの交際は始まった。

（第2話　完）

## 6（後書き）

第二話終了です！      ありがとうございます。第三話へ続きます。



明日から学校は夏休みに入る。

と言っても、高校三年の夏休み。そうそう浮かれてもいけない。そもそも、七月いっぱい毎日のように強化補講があるので、元より解放感はあまり感じられないのだ。今日もしかり六限目まで授業だったし。

ホームルームが終わり、みんなが教室を出ていく中、わたしは席も立たず、ふうと深いため息をついた。

なんだか、気が重かった。

これから猛暑の中、自転車をこいで家に帰るのかと思うと、うんざりしてしまう。しかも、今日は三歳の弟・希望<sup>のそむ</sup>を保育園に迎えに寄らなきゃいけない。

でも、だるい……このだるさはなんだろう。

「春山さん？ 帰ろうよ？」

ポンと肩に手を置かれ、顔を上げると不思議そうな顔をした木村くんが立っていた。

彼、木村琢磨くんと付き合い始めてほぼ一カ月。特に用事がない時はほとんど一緒に下校していた。なので、とくに公言した訳ではないが、周囲にももうわたしたちの交際は知れ渡っているようだ。クラスどころか学年を超えて人気のある木村くんなので、あちこちで一部の女子からの視線を冷たく感じたりすることもあったが、それにももう慣れてきた。

「うん、帰ろうか」と木村くんに伝えて、わたしは勢いよく立ち上がった。

と、その瞬間目の前がふわっと暗くなって、一歩前によろけてしまっ

「つと！ 大丈夫？」

木村くんが私の腕を掴んで顔を覗き込んできた。

「ごめ……大丈夫」

「顔色が悪い。もしかして具合悪いんじゃないの？」

心配そうというよりも、ちょっと怒ったような感じの木村くんに、わたしは思わず苦笑してしまった。

「ただの立ちくらみ。平気」

「そうは見えないって。ちよつとごめん」

木村くんがわたしの額に手を伸ばしてきた。突然のことにびっくりして咄嗟に身構えてしまう。でも、触れた木村くんの手は予想外に冷たくて心地が良く、すぐにほうつと力が抜けてしまった。

「手、ひんやり……なんで？」

「オレの席、エアコンが当たりすぎるから　　って、そんなことよ  
り」

木村くんは眉根を寄せた。

「たぶん、熱あるよ」

「え、うそ？」

「ホント。熱いもん。オレの手が冷たいんじゃないで、春山さんの方が熱いんだよ」

言われて、自らの額に手を当ててみる。でも、とくに熱いとは感じない。熱、あるかな？

「エアコンで冷えたのかな……帰り、自転車乗れる？ オレの後ろに乗つけて送ろうか？」

「ううん、大丈夫。そこまでひどくないし。それに今日はのんの迎えに寄らないといけないから」

木村くんを安心させるように笑って、わたしは先に歩き始めた。本当に、そこまで心配させるほどでもないと思ったのだ。

まだ、この時は。

外は半端なく暑かった。

朝の予報では今日の最高気温は三十四度だと言っていた。今は午後四時過ぎ。今日のピークは越したのかもしれないが、それでもまだ十分それぐらいの気温はあるだろう。

息をするのも苦しいぐらいだ。

でも、この息苦しさは暑さのせいばかりではないかもしれない……。

自転車を走らせて五分も経たないうちに、さすがにわたしもちょっとした危機感を感じ始めていた。

こんなに暑いのに、背中がぞくぞくするのは何故か……。

「春山さん、ちょっと止まって」

木村くんの硬い声にわたしは自転車を止めた。そこは大きな建物の影になっている場所だった。

「やっぱ、おかしい。本当に大丈夫？」  
「うん……」

フウ、と息をついて汗を拭う。わたしはそんなに汗かきな方ではないが、今のこの汗のかき方はやっぱりいつもと違う。やっぱり木村くんの言う通り、熱があるのかもしれない。

「心配だな。やっぱりオレが乗せてってあげるよ。自転車は後で取り来ればいいし」

「え……いいよ！」

自分の自転車を降りてスタンドを立てようとする木村くんを、わたしは慌てて止めた。

「本当に大丈夫だから！ 希望の迎えもあるし」

「だから心配なんだって。お迎え、お兄さんかお父さんに代わってもらえないの？」

わたしはその二人の今日の予定を思い浮かべる。

今日は水曜日。二歳年上で大学生の仁はアルバイトがある日だ。まだその時間ではないかもしれないが、こんなに急に休ませるのは気が引ける。中学校教師のおとうさんは、当然まだ学校で仕事している時間だ。

どちらにしても、無理を言えば代わってくれるのかもしれないが、そこまでしてもらうほど、今の自分の体調が悪いとも思えなかった。希望を引きとって家に帰るぐらいはなんとかかなりそうだ。

「自分で行ける。もともと帰り道だし。今日はもう直接行くから」

希望のお迎えは、普段は五時頃に行くように保育園に申し込んで

ある。時間が早過ぎる時はいつもなら適当に時間を潰して行くのだが、今日はそれは無理そうだ。半時間近く早く迎えに行くことになるが、そんなに不都合はないだろう。

それでも、木村くんはまだ表情を緩めない。しばらく無言でわたしの顔を見つめた後、はあと諦めたようにため息をついた。

「わかった。じゃあ、オレも一緒に希望くんのお迎えに付いて行くよ。家まで送ってあげるから」

「え」

「はい、決まり。じゃあ、安全運転で行こう。家まで頑張って！」

木村くんは励ますようにわたしの肩をポンと叩くと、自分の自転車に跨り直した。

どうやらわたしは、言い返すタイミングを失ってしまったようだ。

\*

\*

\*

玄関のドアを開けると、待ちかねていたかのように希望が「たらいまー！」と中へと飛び込んでいった。靴を乱暴に脱ぎ捨てて家に入り込んだのを見て、わたしはホッと息をついた。とりあえず、責任は果たせた……。

「大丈夫？」

ドアを支えながら、木村くんが心配そうに顔を曇らせる。

保育園で希望を引きとった後、希望を乗せた自転車を運転して帰って来たのは、実は木村くんだった。

わたしの様子を見て「そんな状態で子どもを乗せて走るのは危ないから」と、自転車を代わってくれたのだ。

正直、ものすごく有難かった。一人で自転車をこいでいても、最後の辺りはかなりもうフラフラだったのだから。

「本当にありがとう。送ってもらえて助かった」

「うん、それはいいんだけど」

木村くんはまだ表情を和らげない。

「まだ家の人帰って来ないんだろ？ 一人で大丈夫？」

「ん、平気。今日はおとうさん、六時ぐらいには帰ってくるって言ったから」

木村くんは「六時か……」と胸ポケットに入れていた時計を取り

出して見ると、小さく息をついた。

「あと一時間ちよつとあるね。それまで希望くんは  
「かじゅー、えあこん、つけたよー！」

玄関先まで駆けてきた希望が、木村くんの言葉を遮った。

「あ……ありがとう、のん」

「うん！ はやくはいつてー。たくまくんもー！」  
「えっ！？」

わたしと木村くんは同時に声を上げた。希望はそんなわたしたちに構わず、裸足のまま三和土<sup>タタキ</sup>まで下りてくると、木村くんの手を取って家の中に招き入れようとする。

「え……ちよつと待つて！」

戸惑う木村くん。それでも「早くあがつてー」と希望は木村くんをぐいぐいと引っ張る。どうあつても希望は木村くんを帰すつもりはないらしい。

「ちよ……どうしょ、春山さん」

弱り切った様子の木村くん。私は苦笑した。

「ごめんね。良かったらあがつて。少しのんの相手してもらえると助かる」

それは正直な思いだ。

少しだけ木村くんに甘えてみることにしよう。

希望と木村くんは、今日が初対面だ。

でも、もともと希望は人見知りしない性質で、そしてそれは木村くんも同じらしく、二人が打ち解けるのは本当に早かった。

保育園の自転車置き場で顔を合わせた時、最初の方こそキョトンとしていた希望だが、木村くんが名乗るとすぐにニツコリ笑って「たくまくん」と呼び始めた。希望にとっては、人の名前は名字で呼ぶよりも、下の名前で呼ぶ方が自然なのだ。

そして、自転車も木村くんに乗ってもらったものだから、希望はすっかり木村くんに懐いてしまったようだった。

木村くんが家にながってくれたことがよほど嬉しかったのか、希望はいつもよりもはしゃいでいる。ミニカーを持ってきたり、積み木を出したりブロックを出したり。遊びがすぐに変わって落ち着かない。それでも木村くんは面倒くさがる様子も見せず、上手く希望の相手をしてくれている。

その様子を、わたしはソファーに横になって見守っていた。

家に入っすぐ、木村くんはわたしの体調を気にして「部屋で休めば」と言ってくれたけど、さすがにそれはできなかった。着替えだけさせてもらうと、わたしは居間のソファーで休ませてもらうことにした。

熱、どれぐらいあるだろう……。

体温計はあるが、測ってもし高熱だった場合、それを見ただけで余計具合悪くなりそうな気がして、測るのは止めておいた。木村くんは気にしたけど「体温計が見つからない」と言って誤魔化している。



「たくまくん、みてみてー！ のん、しゅごいでしょ！」  
「おお！ のんくん、やるじゃん！」

身長と同じぐらいまで高く積んだ積み木を誇らしげに見せる希望に、大袈裟に感心する素振りで答える木村くん。

やっぱり子ども好きなんだろうなあ……なんて思いながら、わたしは目を閉じた。

熱のせいなのだろうか、眠い訳ではないのに、意識がすーっと吸い込まれていく感じがする。

こんなふうに出したのは久しぶりだ。もう一年以上は熱なんて出していないと思う。ナントカは風邪ひかない、っていうのの象徴みたいなものだったのだけど……。

「かじゅー、だいじょーぶー？」

不意に間近で聞こえた声に、わたしはハッと目を開けた。

希望が目をまん丸にして、心配そうに顔を覗き込んでいる。

「あたま、イタイイタイのー？」

希望は小さく首を傾げると、小さな手をそつとわたしの額に乗せて「イタイのイタイの、とんでけー！」と真剣な顔で唱え始めた。

二、三回それを繰り返して、また心配そうに首を傾げる。

「どお？ かじゅ、イタイの、とんでった？」

「……ん。とんでった。ありがと、のぞむ」

手を伸ばして希望の頭を撫でてやると、希望が誇らしげな顔でニコリと笑う。

小さな弟が見せてくれた小さな優しさ。たったこれだけのことで、

不覚にも目頭が熱くなってしまった。だめだ、気持ちまで弱くなっているらしい。

ふと視線を上に向けると、そんなわたしたちのやり取りを少し離れたところから見ている木村くんが見えた。わたしと目が合うと、優しく微笑んでくれた。

こんな時なのに、思わずその笑顔にドキツとしてしまう。

今更ながら、木村くんってホント整った顔をしている……モテるはずだ。でも、わたしの彼氏なんだよね……今日は本当に木村くんがいてくれて良かった。木村くんって、こんなに頼りになるんだ。わたし、今まで気付いてなかったな……。

とか、ずいぶん失礼な事をぼんやり考えていると、玄関の方でガチャリと音がした。次いで「ただいまー」と声。

「あつ。おとーたん！」

希望がパツと顔を輝かせて玄関の方へ駆けて行った。

わたしはむくりと体を起こした。時計を見るとまだ六時前だった。考えていたよりも早い帰宅に、わたしは思わず安堵の息をついた。

「早く帰ってきてくれて良かったね」

木村くんが笑った。その笑顔がちょっと緊張しているようにみえるのは気のせいではないと思う。

「おとーたん、おかえりー！」

「ただいま、希望。もしかして、お客さんいるのかな？」

「うん！ たくまくん！」

「たくまくん？」

二人のやり取りが近付いてくる。  
希望が開けっぱなしだったリビングの入口に、希望に手を引かれておとうさんが姿を見せた。

「ただいま。 お！」

木村くんの姿を見て、おとうさんが一瞬足を止めて目を丸くした。

「あー、どうも。いらっしやい」

ちょっとだけおとうさんの声も硬い。木村くんがぺこりと頭を下げた。

「お邪魔してます。 木村と言います」

「おとうさん、あのね」

わたしは立ち上がって事情を説明しようとしたが。

「あのねー、かじゅがねー、あたまイタイタイなのー」  
希望がそれを言うのが早かった。

「頭が痛い？」

おとうさんが眉を上げてわたしに近付いてきた。

「どうした、熱あるのか？」

「ん、たぶん……測ってないけど」  
「どれ」

おとうさんはわたしの額に手を当てると、すぐに顔を陰しくした。

「けっこうありそうだな。すぐに部屋に行って休みなさい」  
「うん、そうする……あ、でもその前に木村くん」

おとうさんが改めて木村くんを目を向けた。木村くんが緊張した面持ちでまた小さく頭を下げる。

「木村くんが希望を乗せて帰って来てくれたの。危ないからって心配してくれて」

「そうか……。ありがとう、木村くん」

「いえ、とんでもないです。あの、それより、すみません。留守中に上がり込んでしまつて……」

「いや、なんの。希望を見てくれたんだろ。助かったよ。こちらこそ悪かったね」

「たくまくん、のんのおともだち」

希望がぴよんと木村くんの足に跳び付いた。その希望の行動で、なんとなく緊張していた雰囲気緩和が和らいだ。

「そっか。よかったな、新しいお友達ができて」

おとうさんが希望の頭をくしゃくしゃと撫で上げた。

「うんっ！」

満面の笑顔で頷く希望。わたしと木村くんは目を合わせて小さく笑顔を交わした。

\*

\*

\*

わたしの目の前に、二人の人物が立っていた。

『あーあ。仕方ないねえ』

そう言っただけ息をつく女の人と、彼女を涙目で見上げるまだ5、6歳の女の子。

『だから言っただけでしょ。アメ食べながら走っちゃだめよって。諦めなさい』

女の人の言葉に女の子はぐつと唇を噛んだ。落とした視線の先には、つい今しがた口の中からこぼれ落ちた飴玉。まだ口に入れて少ししか経っていないそれは、ほとんど元の丸い形のまま、土の地面の上に転がっていた。

ああ、これは……。

懐かしさに胸が潰れそうになる。

この女の子は、幼い日のわたしだ。

そして、女の人は お母さん。

『ワタシのアメ……』

『残念だけど、諦めなさい。ホラ、もう行くよ』

そうか。これは、夢だ。

わかっている。これは、夢。

わたしはもうこんな小さな女の子ではないし、お母さんはもういない。

だから、これは夢なんだ。

『イチゴのアメ、もう1コちょうだい!』

『ダメよ。アメは一日に一つという約束でしょ。落としたのは自分の不注意だもの。アリさんにおすそ分けしたんだと思って諦めなさい』

『やだっ! もう1コ!』

『だーめ! がまんがまん!』

お母さんは、駄々をこねるわたしに苦笑いを残して、さっさと先へ歩き始めた。

『おかーさん! やだよー、まってよう!』

半泣きになりながら、慌てて追いかけるわたし。幼い日の自分。

そうだった。わたしはイチゴの味の飴が大好きだった。虫歯になるから飴玉は一日一つだけ、とお母さんと約束していたから、イチゴ味の飴だけは噛みたいのを我慢して、最後までゆっくりと舐めてそのとろけるような甘さを楽しんでいたっけ。

懐かしい……。

わたしは母を追いつける小さな自分を、どこか酸っぱいような気持ちで見送る。

遠ざかっていく二人の背中。

ふと。

置いて行かれる    そんな気がした。

置いて行かれる。わたしだけが、取り残されてしまう、ここに、一人。

それは不安でもあり、恐怖でもあり。そして何より、深い喪失感だ。

追いかけていけば、と思った。早く、早く追いつけなければ。

二人の背中はずいぶん遠ざかっていく。わたしは懸命にその後を

追う。

待つて。置いていかないで。

小さくなつていく後ろ姿。二人が笑顔を交わしているのが見えた。

いやだ、待つて。わたしも今そこに行くから！ だから、お願い。

でも、走つても走つても、二人には追い付くことができない。それどころか、その差はどんどん開いていくだけだ。

お母さんっ！

わたしは声を張り上げた。

お願い、こっちを向いて！ わたしを置いていかないで！

わたしを、一人にしないで。

でも、その声は届かない。

二人の姿が翳んでいく。そして、まるで霧に溶け込むかのように、静かに見えなくなつていった。

わたしは走るのを止め、二人の消えた先を見つめた。

でも、そこにはもう、ただ白い霧のような靄が立ち込めているだけだった。

誰もいない。誰もわたしの声に応えてはくれない。

そう。ここにいるのは、わたし一人、一人つきり。

悲しくて、寂しくて、涙が溢れてきた。

その時。

『カズ』

どこからともなく、声が聞こえた。  
それは確かにわたしの呼び名。

誰かが私を呼んでいる？ 誰かここにいるの？

「和音」

今度ははつきりと聞こえたその声に、胸にじんわりと安堵が広がる。

そうか……わたしは一人じゃないんだっけ。  
ふわり、と浮いていく感覚がした。

「和音」

呼び掛ける声に、わたしは頷く。

うん、聞こえてるよ。待って、今……。

\*

\*

\*



目を開けると、まず飛び込んできたのは見慣れた自分の部屋の天井。

「あ……目え覚めた？」

その声の方へ視線を動かすと、微かに表情を曇らせた仁と目が合った。

「大丈夫か？」

わたしは頷いて、ゆっくりと瞬きを繰り返した。  
夢……じゃない。もうさっきの一人ぼっちの夢じゃないのだと、改めてホッとして息をついた。

「なんかすごいなされてたぞ。泣いてるし」

言われて顔に手をやると、確かに濡れた感触が。

「うなされて泣くほど辛い夢見てた？」

「ん……変な夢だったけど　なんてことない」

わたしはよいしょ、と体を起こした。

「うわぁ。汗びっしょりだ」

「熱が下がってきてるんだよ。変な夢もそのせいだろ。また冷えな

「うちに着替えろよ」

「うん」

と答えて、ハタと気付いた。

「あれ？ 仁、大学は？」

慌てて時間を確認する。十一時半　お昼前だ。

朝、まだ熱のせいで朦朧としている時、出勤前のおとうさんが様子を見に来てくれて、今日の補講を欠席する確認をした。おとうさんはスポーツドリンクの入ったボトルとタオルを数本サイドテーブルの上に置き、新しいアイスノンに取り替えると「しっかり休めよ」と言い残して出て行った。それはなんとなく憶えている。

その後、わたしは今起きるまでずっと眠っていたようだけど……。

「あー、大丈夫大丈夫」

ヒラヒラと片手を振って仁は笑った。

「それより、昼飯食べられそうか？ ご飯がだめそうならアイスとかは？」

「あ……アイスなら食べられそう」

「オッケ。なんか持って来てやるよ。その間に着替えてな」

仁は軽くそう言っただけで部屋を出て行った。

もしかして仁、わざわざ大学を休んでくれたんだろうか。そう思うと、申し訳ない気がする。でも、それ以上にホッとして嬉しく感じるのは、熱のせいで弱っているからかもしれない。

わたしはベッドから降りて新しいパジャマに着替える。それだけのことがひどく億劫に感じられた。どうやらまだ熱は下がり切っていないみたいだ。

昨日、木村くんが帰った後、わたしの熱は急激に上がってしまい、観念して体温計で測った時には三十九度近くもあった。

「あ」

肝心な事を思い出した。

木村くん、昨日あれだけお世話になったのに、お礼言っていない。きつと心配しているに違いない。

わたしは机の上に置いてある携帯電話をとった。電源を入れる。さつそくブツブツと震え、メールの受信があることを告げた。全部で四件。友達の美香から欠席を心配するメールが一件と、メルマガが一件。そして残りの二件が木村くんからだった。

木村くんからの一つ目は昨夜九時。「様子はいかがですか。ゆっくり休んで早く治してね」と。そしてもう一つは今日の十一時。つまりついさっきだ。

『その後どうですか？ 迷惑じゃなければお見舞いに行きたいんだけど……』

え。

わたしは思わず何度もその文字を読み返した。

お見舞いに行きたい？ ここに来るの？

「ちょっとそれは……」

ベッドに腰掛けながら、わたしは声に出して呟いた。

こんなへたつとしたパジャマを着て、髪はボサボサな上に熱でボケつとしたような顔、とてもじゃないけど、木村くんに見られたいはない。

「どうしよう。とりあえず……」

心配しなくても大丈夫、とやんわりと断りの返信を打とうとした時、トントンとノックの音がした。

「カズ、入るぞ？」

「ど、どうぞ！」

ガチャリ、とドアが開いて、仁が入ってきた。  
慌てて携帯を閉じる。仁はチラリとそれを見て笑った。

「メール？ 木村くん？」

「そ、そう」

「木村くん、なんて？」

「大丈夫かって……その……お見舞いに来たって」

「へえ。 あ、これ」

仁は思い出したように手にしたものを私に差し出した。

「ほい、アイス。 来てもらえば？」

わたしは受け取ったカップのバニラアイスを、危うく落としそうになった。

「や、やだよ！ こんなみつともないところ、見られたくないもん」  
カップの蓋を開けると、仁がそれを受け取り、代わりに「はい」とスプーンを渡してくれた。

「みつともないか？ 病気の時って誰でもそんなもんだろ」

デスクチェアを引き出してきて腰を下ろしながら、仁が肩をすくめた。

「いいじゃん。来てもらえよ。俺も木村くんに会ってみたいし」  
今度はスプーンを落としそうになった。

「なんで仁が」

「昨日、父さんがえらく木村くんを褒めててさ。礼儀正しいいいコだって。のんの奴もすっかりお友達なんだって？」

仁は大袈裟にため息をついた。

「なんかさ、俺だけが知らないってのも癪じゃん」

「何を子どもみたいなこと……」

「それにさ、えらく「イケメン」なんだってな？」

思わず、口に入れたばかりのバニラの塊をぐくんと呑み込んでしまった。

「だっ誰が言ったの？」

「父さん。『ありやあかなりのもんだな。和音は面食いだっただんだあ』とか言ってたぜ」

「なっ……」

「そんなふうに言われると、興味も出てくるってもんよ。兄としては」

「単なる野次馬根性でしょ」

「あ、ばれた？」

「……」

わたしはため息をついてバニラアイスを口に運ぶ。その冷たさと甘さに癒されるような気がした。

アイスを食べ終わり、わたしは再び横になった。

「暑かったり寒すぎたりしたら呼べよ。これ以上ひどくなったら困るからな」

そう言っ、仁は優しく笑った。

「心配してるのは木村くんだけじゃないぞ。父さんものんも、俺も心配してるんだからな」

「うん……わかってる」

「よし。じゃあ、ゆっくり休めよ」

仁がそう言っ、ベッドから離れて行く。

その後ろ姿を見た途端、唐突に言い様のない寂しさのようなものが襲ってきた。

さっき見ていたあの夢と同じような、取り残される感覚。喪失感。

「待って」

気が付けば、わたしは仁をそう呼び止めていた。ドアノブに手をかけていた仁が怪訝そうに振り返った。

「どうした？」

わたしの声に応えてくれた、そんな当たり前のことに、なぜだかひどく安心した。そうだ、あの夢とは違う。わたしは今一人じゃない。

「あの……ごめん、眠るまで、ここにいてもらえないかな……」

仁は目を丸くしてわたしを見返して、次いでふわりと柔らかく微笑んだ。

「いいよ」

仁が戻ってきて、再びデスクチェアを出して腰を下ろした。

「しばらくここにいるから。安心して眠れ」

その穏やかな声と眼差しに、わたしはホッと目を閉じた。  
優しい安堵感に満たされて、わたしはそのまま眠りに落ちた。

\*

\*

\*

わたしが次にしっかりと目を覚ましたのは、夕方の六時を回った頃だった。

「うわ……」

またかなりの汗をかいている。でもその分熱もかなり下がったみたいで、頭もずいぶん軽くなったような気がした。

着替えようと思ってベッドを下りた時に、わたしはあることに気付いた。

入口のドアが微かに開いている。よく見ると、下の方にちゃんとストッパーを噛ませてあった。

わざと？ でも何でだろう。

「え」

ドアを開けて廊下を覗いたわたしは、そこにあった光景に言葉を失った。

入口のすぐ横の壁に、仁が背をもたれて足を投げ出して座っていた。項垂れているように見えるのは眠っているからだろう。そして仁の足の上には、希望が頭を乗せるようにして眠っていた。

そんな二人の傍らで、扇風機が静かながらもヴィーンと音を立てて、生ぬるい風を送っている。辺りには希望のおもちゃがあちこちに散らばっていて、仁の手元には文庫本が落ちていた。

なにこれ……？



わたしは思わずそんな二人の元にしゃがみ込んだ。

「ん……」

気配を感じたのか、仁がうつすらと目を開けた。

「あー……カズ」

目をごしごしとこすりながらボソボソと言う。

「いつの間にか寝てたよ……具合は？」

「大丈夫　　っていうか、何してんの、ここで」

まだ目を覚まさない希望を氣遣って、小声で話す。

この二階の廊下は、風通しはいいものの、冷房の効いた室内とは違って、かなり蒸し暑い。扇風機を回しているが、仁も希望も汗を浮かべている。こんなところで眠っている意味が分からない。

仁は苦笑した。

「保育園から帰ってきてすぐ、希望がカズの近くに行きたいって言うからさ。部屋の中で遊ぶっていうのをなんとか宥めて、廊下<sup>こゝ</sup>で手を打ってもらった」

だから、こんなにおもちゃが散らかっているのか。

「今までカズがこんな風に寝込んだことないから、心配なんだよ、希望も」

「そっか……」

額に汗を浮かべて仁の足の上で寝ている希望を、なんとも言えな

気持ちで見つめた。

もしかすると、と思う。

七か月前に亡くなったお母さん。そのお母さんが病院に入院していた時のこと、希望は今よりもまだ小さくて憶えているのかはわからないけれど、もしかするとその時の不安や心細さというものを、今回思い出させてしまったのかもしれない。

こんなにまだ小さいのに　ごめんね、希望。

「仁も……ごめん」

「ばーか。こういう時は『ごめん』じゃなくて『ありがとう』って言うんだよ」

「　ありがとう」

「はい、どういたしまして」

仁はわたしの顔を見てニッコリと笑うと、自分の足を動かそうとして「あちゃー」と声を上げた。

「やべ……足痺れてきた。おーい、のん、起きろよ」

仁はちょっとだけ足を動かして、軽く希望の頬をつんつんとつついた。

「うー……ん」

あまり眠りが深くなかったのか、希望は意外にもすぐに目を開けた。が、さすがに直後は機嫌が悪い。

「まあだねむーい……あちゅい……」

ぐずりながら、ムクリと体を起こす。半分泣きそうになりながら

目をこするが、そこでわたしに気が付くと大きく目を瞬かせて、次の瞬間ぱあっと笑顔になった。

「かじゅっ！」

「おはよ、のん」

「かじゅ！ イタイイタイ、なおった？」

大袈裟に見えるぐらいに心配そうに顔をしかめる希望。思わずぎゅっと抱きしめたくなる。間には仁の足があってそれはできなかったけれど。かわりにとびきりの笑顔を返しておこう。

「うん。治ったよ」

「やったー！」

希望は文字通りピョンと跳びあがって喜んだ。

「のん、おとーたんに、かじゅがげんきになったってゆってくるー！」

そう言つと、いそいそと階段へと向かった。希望はまだ手すりにつかまりながらゆっくりとししか階段を下ることができない。そんなに焦って下りたら、とハラハラした。

「のぞむ、ゆつくりな！ 気を付けろよ！」

「はあい！」

仁に大きな声で返事をして、希望は階段を下りて行つた。トン、トン、という足音がゆっくり確実に下って行くのを聞き届けて、わたしと仁は示し合わせたようにホッと息をついた。

「ああ、重かった……うわ、見て。のんの汗」

仁が希望の頭が乗っていた方の足を動かしながら、着ているハーフパンツの腿のあたりをつまみ上げた。たしかに、そこだけ丸く濡れているのが分かる。

「だって、ここ暑いもん。二人ともよく寝れたもんだね」  
「だよな」

まるで他人事のような仁。

「それより、具合は？ 本当に治ったのか？」  
「うん。すごく楽になってる。熱も下がったと思うんだけど」  
「そっか。なら良かった」

仁はそう言って立ち上がった。

「大丈夫そうだったら、晩飯は下で一緒に食おうぜ。後で下りてこいよ」  
「うん」

仁は散らばったおもちゃを片付け始める。部屋に戻ろうとしたわたしは、あることを思い出してもう一度そんな仁を振り返った。

「そっいえば、ドア開けてたの、なんで？」  
「あー」

仁は片付ける手を休めないまま答えた。

「カズ、寝てる時けっこううなされてたから。何かあった時すぐに

わかるようにな。あと、ちょっと部屋の冷氣も分けてもらおう  
と思うて」

ニヤツと笑って、ようやく仁はこっちを見た。

「まあ、でも良かったよ、ホント。ひどくならなくて」

仁の気遣いが嬉しくて、どこか温かな気持ちになった。

「ありがとう」と言おうとしたが、「あ、そうだ」と仁が口を挟む  
のが早かった。

「言っの忘れるところだった」

「何を？」

「木村くん、お見舞いに来たぞ」

は？

思わず固まってしまった。

そういえば、お断りのメール、送り損ねてたんだっけ……。

「五時前だったかな。今日の分の補講のプリントと、お見舞いの花  
持ってきてくれた」

仁は再び片付けを続けながら続ける。

「カズ寝てたし、さすがに部屋に通すのは止めたけどな。家に上が  
ってもらって冷たい飲み物でも、と思ったけど遠慮してたから、ど  
うせ希望の迎えに行く時間も近かったし、俺と一緒に家を出た」

「え 一緒に……？」

「そ。保育園まで。そこまで帰り道一緒だって言うから。いろいろ  
話しながらそこまで一緒に行ったんだよ」

……。

返す言葉も見つからない。

そんなわたしを見て、仁がどこか面白がっているような笑みを見せた。

「ほんと、いいオトコだな、木村くん。カズ、見る目あるじゃん」  
「……どうも」

なんか、また熱が上がってきたみたいだ……。  
わたしはフラフラと自分の部屋へ体を向けた。

「あ、プリントと花、机の上に置いてるから」

それに片手を上げて応えて、わたしはドアを閉めた。  
仁の言った通り、机の上には鮮やかな色をした花が一輪、小さな花瓶に活けられていた。

手のひらほどの大きさの小ぶりの向日葵　それが木村くんの笑顔と重なる。

その明るい黄色は、木村くんのイメージそのもののように思えた。

たった一日寝込んだだけなのに、家族で囲む食卓はなんだか懐かしく感じた。

この日食事当番だったおとうさんが作った夕食は、とろろ、納豆、オクラ入りの冷やしうどん、それからエビと野菜の天ぷら。

さすがにわたしは油モノを食べる気分じゃないので天ぷらは遠慮したけれど、たぶん、おとうさんがメニューを冷やしうどんにしたのは、体調の悪いわたしでも食べやすいからだろう。

「うどん、おいちーね！ かじゅもおいちい？」

「おいしいよ」

「のんもおいちー！ かじゅ、うどん、しゅき？」

「うん、好きよ」

希望のおしゃべりがいつもより多い気がするの、やっぱりわたしがこの場にいることが嬉しいからだろうか。

それは、たぶん自惚れではないと思う。時々おとうさんや仁が夕食時にいないことはあっても、わたしはほとんど今まで、希望と夕食を一緒にとらなかったことはないのだから。

「あのねー、のん、ぷーるでねー」

希望はまだ言葉をはっきりと発音できないこともあって、実のところ話の半分以上は理解不能だったりするけれど、この希望のおしゃべりは、今のわたしにはいつもよりも楽しく感じられた。

ひとしきり希望の話が終わったところで、「そういえば」とおとうさんが話を切り出した。

「木村くん、だったか。彼、今日もお見舞いに来てくれたって？」  
いきなり出てきたその名前に、わたしは思わずうっと喉を詰まらせそうになった。

「そうそう」

仁が代わりに頷いた。

「いい男だよな。木村くん」

「ああ。彼はしっかりしているな。浮ついたところがない」  
「たくまくん、のんもともだちー！」

木村くんは、どうやら我が家の男子どもにはすこぶる評判が良いようだ。これは喜んでいいことなんだろうけれど……複雑。

「そうだなあ。昨日は希望も世話になったんだから、今度ちゃんとお礼しなきゃいかんな」

それはわたしも思っていたところだ。でも、

「それは別にいいんじゃないの？」

と仁が異を唱えた。

「木村くんにしてみれば、病気の彼女を助けるってのは、当たり前  
の事だろうし。お礼なんて『ありがとう』で充分だろ。やりすぎる  
とかえって気を使わせちゃうぜ」

「そうか？」

おとうさんが首を傾げる。仁は器に残っていたうどんをズルズル  
っと口にとると、静かに箸を置いた。

「ごちそうさま。 お礼なら、言葉で十分、と俺は思っけどね。  
ああ、なんなら」



そこで仁はわたしを見ると、ニヤリと笑った。

「カズが『大好きよ』の一言付け加えると、もう文句なしだろうな」  
「ぐっ！」

思いつきりうどんを吸いこんでしまった。慌ててお茶を手にとつて詰まった麺を流し込む。

「おいおい、大丈夫か」

おとうさんが苦笑いをしている。

「だ、だいじょぶ……じゃないっ」

全く仁は！ 希望もいる前でなんてことを言い出すんだろう。だけど、希望は仁の言葉も本当に素直に受け止めただけのようで。

「たくまくん、のんもしゅき！ のんもたくまくんにしゅきってゆうー！」

なんだかとても嬉しそうだ。

「だよなー、のんもたくまくん好きだもんなー」

「うん！」

「今度会った時に『ありがとう』って言えよ」

「うんっ！ しゅきってゆうーの！」

……ホント、子どもって素直で無邪気で羨ましい。

からかいの対象になるのはごめんだけど、みんながこうやって笑っているのを見るのは楽しかった。

こんな当たり前のことに気付かせてくれるなら、たまに寝込むのも悪くはないかもしれない。

\*

\*

\*

結局、その日の夜にまた少し熱がぶり返したわたしは、翌日の補講も休み、次に学校に行ったのは週明けの月曜日だった。

木村くんとはメールで何度かやり取りはしたけど、顔を合わせるのはあの日希望を送り届けてくれた日以来だった。

改めてお礼を言ったわたしに、木村くんはただ照れくさそうに笑っていた。

補講が終わり、わたしたちはいつものように下校を共にする。

そして、いつも別れる場所に着き、手を振って「バイバイ」と言おうとしたその時だった。

「仁さんのことだけど」

木村くんの口から突然出てきたその名前。わたしはただ戸惑う。

「仁？」

「そう、仁さん」

木村くんがまっすぐわたしを見た。

「この間聞いたんだけど、仁さんと春山さん、本当の兄妹じゃないんだね」

それは時が止まったかのように思えた瞬間だった。

仁とわたしは本当の兄妹ではない　それは当たり前の事実。隠すようなことでもない。でも、他人からそれを言われると、どうしてこんなに衝撃を感じるのだろうか？

「オレ……」

何かを言いかける木村くん。でもすぐに口を噤んで、取り繕う様な笑顔を浮かべた。

「ごめん。オレ、すごく無神経な事言った」

「う、ううん……」

笑い飛ばそうとしたけれど、どうしようもなく顔が引きつってしまふ。それは自分でも思いがけない動揺だった。

「春山さん　　今度から『和音』って名前で呼んでもいい？」

木村くんのその言葉にわたしは頷いたけれど、頭の中はまだ小さな混乱を起こしていた。

\*

\*

\*

『本当の兄妹じゃないんだね』

木村くんと別れた後、その言葉の意味を考える。  
仁とは本当の兄妹じゃない。

おとうさんとも本当の親子じゃない。  
わたしと血の繋がっているのは希望、ただ一人だけ。

木村くんが悪意があつてその言葉を口にしたのではないと分かっている。

だけど、血の繋がりがなかったら「本当」のものではないの？  
血の繋がりがなかったら「嘘」なの？

だとしたら、わたしは永遠に仁の妹にはなれないし、おとうさんの子どもにはなれない。

わたしたちは永遠に嘘の家族のまま　　。

「……ばつかじゃないの！」

わたしは思いっきり叫んだ。通りがかった人が振り返ったような  
気もしたけど、構わなかった。

「ばつかじゃないの！」

もう一度声を上げた。

浮かんだ愚かな思いを振り切るように。

他人がどう言おうと、わたしたちは「家族」だ。本当だとか嘘だ  
とか、そんなのはどうでもいい。

一緒に笑って、時には怒って喧嘩して。同じ空気を吸って同じ時  
を共有している。

血の繋がりは関係ない。わたしはおとうさんの子どもで、仁の妹  
で、希望の姉だ。

そうだよね、お母さん。

わたしたちは「家族」だ。

その言葉を噛み締めながら、わたしは自転車を走らせた。

生温く湿った風が激しく、それでも優しくわたしの体を撫で、通  
り過ぎて行く。

まるで励まされているかのように感じられて、わたしの顔にはい  
つしか笑みが浮かんでいた。

（第3話 完）

## 6 (後書き)

第三話終了です お付き合い下さりありがとうございました！  
第四話へ続きます。

高校生活最後の夏休みも、残すところあと数日。

この日、わたしたちは家族そろって近所の神社の夏祭りに行くことになった。

この祭りには、わたしがこの地に越してきてからは毎年欠かさず行っている。その神社は結構名の知れた神社で、遠方からも人がやってくるような、かなり規模の大きな祭りだ。

去年はこの祭りにはおとうさんとお母さんとわたしと希望の四人で行った。兄の仁は他の誰かで行ったのかそれともそもそも行っていないのか、わたしは知らない。

でも今年は仁も一緒だ。今年はおとうさんと仁とわたしと希望の四人で祭りに行く。

「なんだ、和音。結局浴衣じゃないのかあ」

支度を終えて居間へ顔を出したわたしの姿を見るなり、おとうさんが言った。大袈裟に残念そうな顔をして。

「浴衣は暑いし動きにくいから、これでいいの」

わたしが着ているのは白を基調としたエスニック風のワンピースだ。この恰好は楽しし涼しい。

「父さん、無理言っちゃ可哀想だぜ。カズは一人じゃ浴衣着れないんだよ」

仁がハアとため息をついた。

なんか妙に引つかかる言い方…… 本当の事だけど。

「いいじゃない、別に。そんなに浴衣がいいなら、ご自分たちでどうぞ」

仁もおとうさんも普通にＴシャツにズボンという格好だ。

「アホ。男ばっか浴衣着てて何が楽しいんだっつーの」

「そうそう。男の浴衣は女性の浴衣姿を引き立てるためのものだからな」

おとうさんまで仁に同意する。まったく、変な所で気の合う親子だこと。

「ねー！ もういいーよおー！」

すでに準備万端な希望が、どうでも良いようなことで言い合っているわたしたちに焦れたようだ。

希望は紺の甚平を着て、完璧な祭りスタイル。前髪をディップで固めて立てているのは、きっと仁がやったのだろっ。わたしが支度している間、よほど暇だったらしい。でも、その生意気な髪型と幼い無邪気な顔が不釣り合いで、逆にとても可愛らしかった。まるで雑誌の子どもモデルみたいだ。

わたしは自分の携帯電話を取り出して、希望のその姿を撮影した。ちよっとポーズなんか取らせてみたりして。

……わたしってかなりの姉バカかもしれない……。

\*

\*

\*

神社へは徒歩で向かう。大人の足で10分ほど、希望に合わせるとその倍近い時間はかかる。

午後四時。まだまだ日差しは強く、その日差しに負けない強さで蝉の鳴き声も降ってくる。その中を家族でのんびりと歩く　なぜだろう、この時間がとても大切に愛しいもののように思えた。

神社の祭りと言っても、その街全体がもうお祭りムードだ。神社が近づくにつれ、通りには露店が立ち並び始め、人出も賑わってきた。

「わたあめー！　のん、たべるー！」

「あとでなー。先にお参りに行こう」

店の前を通る度、希望があれこれ「食べたい」と要求するのを三人で宥めながら、なんとか神社の鳥居の前に着いた。そこから先はまた一層人が多い。

「希望、ここからはおんぶだ。ほれ」

「はい！」

希望がしゃがんだおとうさんの背に飛び付く。

「仁、和音。万一はぐれたらケータイに連絡すること」「了解」

一応そう確認しあって、鳥居をくぐった。

この拝殿までの参道が、一番人混みがきつい通りだ。ぎゅうぎゅうと押されるように前に進む。

「すごいな」



隣を歩く仁がため息をついて苦笑する。

「ほんと　わっ！」

後ろからどんと強く押されて、わたしはとっさに手に触れたものにぎゅっと掴まった。

「大丈夫か？」

「あ、ごめん」

わたしが掴んだのは仁の腕だったようだ。　良かった、他の人じゃなくて。

体勢を整えて手を離そうとすると、仁が笑った。

「いいよ、そのまま掴まっとけ」

「あ……うん。ありがとう」

たしかに、このままの方がはぐれる心配はさなそうだ。

そんなこんなで、なんとか皆はぐれることなく、拝殿に辿り着いた。

お参りを済ませると、わたしたちは参道から逸れた方の通りへと抜けた。こちら側にも店は出ているのだが、参道ほどの人混みではない。比較的ゆとりもあって希望ぐらい小さい子どもでも、自分で歩く余裕があった。

「さて。希望、なんか食うか？」

「わたあめー！」

さつきからそればかりだ。希望はどうしてもわたあめが食べたらしい。

ちようと近くにわたあめの店が出ている。けっこう人も並んでいるが、どこも同じような感じだ。おとうさんと希望は手を繋いで、その店の列へと向かった。

わたしと仁は、人の少ない反対側の道の端に寄って、二人が戻ってくるのを待つことにする。希望の前には七人並んでいて、もう少し時間かかりそうだ。

「俺も何か食おうかなー。カズは？」

「わたし、イカ焼きが食べたい」

「え。いきなりそれ？」

仁がなんだか変な顔で首を傾げた。

「イカ焼き……美味しいよな。でも、カズ。女の子は最初は「かき氷」とか「りんご飴」とか、もったかわいらしいもの言うものでは？」

「それは偏見だと思いまーす。仁が今まで付き合ってきた彼女さんたちが、たまたまそういうタイプだっただけなんじゃないの？」  
「うーん、そうかな」

仁が苦笑する。

わたしはふと思い出した。仁の彼女と言えば……。

「ねえ、仁」

「ん？」

「あれから小枝子さんとどうなった？」

小枝子さん 前に家族で動物園に行った時、偶然会った仁の彼女。背が高くてほっそりとしたキレイな人だった。

その人のことを思い出し、つい口にしてしまった。

仁が驚いたように目を丸くしたのも無理はない。随分いきなりな質問だと自分でも思う。ちょっとだけマズかったかなと思ったけど、意外にも仁はすぐに普通に答えを返してきた。

「どうなるも何も。別にどうもなつてないよ」

それはそのまま別れたということなのか、まだ付き合いは続いているのか　どちらともとれる答えだ。

「……ふうん」

ちょっとだけ気になったけど、なんだか深く訊くのもどうかと思つて、とりあえず頷いておいた。

「俺のことより。カズは今日良かったのか？」  
「え？」

仁はわたしを見下ろして小さく笑った。

「木村くんと一緒に来たかったんじゃないの？」  
「あー、ん……」

わたしは適当に言葉を濁した。

そのまま誤魔化すようにわたあめの列に目を向けたものの、頭の中では、数日前に会った時の、木村くんとやり取りが思い出されていた。

\*

\*

\*

図書館からの帰り。

立ち寄ったファーストフード店の店内は、冷房が効き過ぎていて、涼しいを通り越して寒いぐらいだった。

「今度の祭り、一緒に行かない？」

「あー、ごめん。祭りは家族みんなで行くって、希望と約束してるんだ」

わたしはホットコーヒーを口に運ぶ。真夏にホットを飲むのもわたしにしては珍しい。

「あーそつかあ……じゃ、仕方ないね」

微笑む木村くんの顔に、微かに浮かぶ落胆の色。ごくんと飲み込んだ熱いコーヒーと入れ違うように、罪悪感のようなものが込み上げてきた。

「なんか……ごめんね」

「え、なんで？ 別に謝ることじゃないよ」

「だって、いつもだもん」

「いつも？」

「うん。いつも、木村くんがどっか行くって誘ってくれても、わたし断ること多いでしょ？」

「んー。いつもってことはないよ。今日もこうして会ってるわけだしさ」

木村くんは自分のグラスを持ち上げた。ストローを手に取り、ゆっくりとかき回す。グラスの中の氷がカランと涼しげな音を立てた。

「それに、会える日が少ない分、一緒にいられる時間はすごい貴重な気がして、ものすごく嬉しいし、楽しい」

ドキン、と心臓が鳴った。こういうのを「ときめいた」というのかもしれない。

木村くんがストローを口にした。

透き通った琥珀色の液体がゆっくりと減っていくのを見ながら、コーヒーの色ってこんなにキレイだったっけ、となぜか唐突にそう思った。

「和音は？」

「……え？」

「和音は、オレと一緒にいて楽しいって思ってくれてる？」

思いがけない質問に、わたしは可笑しいぐらいに慌ててしまった。

「も、もちろんっ、楽しいよ!」

木村くんはクスクスと笑う。

「本当にそう思ってる？」

「あ、当たり前でしょ」

「なら、よかった」

木村くんが再びストローに口を付ける。わたしも少し落ち着こうと思って、コーヒーを口に運んだ。コーヒーはもうすでに温くなっ

ていた。

突然、ギャハハハ、と盛大な笑い声が店内に響き渡った。思わずそちらを振り返ると、わたしたちと同じ年ぐらいの男女四、五人の集団が、何事かで盛り上がっている。

周りのことなどまるで構いなしの騒ぎだ。だけど、彼らと似たような集団は店内のあちこちにいて、その騒動を気に留める人もあまりいないようだった。

「のんくん、楽しみにしてるだろうね」

木村くんは頼杖をついて、騒ぐ集団の方に目を向けてはいたものの、顔は優しく微笑んでいた。

「家族みんなで行く祭り、楽しみなんだろうな」

「……そう、だね」

再び後ろめたさが心をかすめた。

視線の先で、またどつと盛り上がる集団。そんなに大声で騒ぐほど何がそんなに楽しいのだろう。

「あ、そうだ！ 木村くんも一緒に行く？」

突拍子もない言葉が口をついて出た。目を丸くして木村くんがわたしを振り向く。早口で続けた。

「ほら、のんもまた木村くんに会いたがつてたしさ。木村くん、おとうさんとも仁とも会ったことあるし、大丈夫だよ！」

「まあ、それはそーなんだけどね」

木村くんは苦笑いを浮かべた。

「さすがにそれは遠慮しとく。いきなりお邪魔はできないよ」  
「そ、そっか……そうだね……」

当たり前だ。わたしっては何を言ってるんだろう。

「ほんとに、オレのことは気にしないでいいから。また今度時間ある時に会おうよ」

「うん……ごめん」

「だから、謝んなくていいってば」

「じ……」

すっかりまた謝りそうになってしまふ。わたしは誤魔化すように、すっかり冷めてしまったコーヒを一気に飲み干した。

「でも、ひとつだけお願いがあるんだけどさ」

わたしがカップを置くのを待ちかねていたかのように、木村くんが切り出した。

「お願い？」

「あ、いや……」

わたしと目が合つと、急に木村くんの落ち着きがなくなった。

「えっと……」

ハハッと笑いながらと頭の後ろを掻く。

「さすがに自分からは言いくいな」

「え？」

「名前、なんだけど」

「名前？」

「いや……」

木村くんはフウと息をついて視線を落とした。      かと思っただけ、すぐにきつぱりと顔を上げた。

「和音、さ。仁さんのこと名前で呼ぶよね」

「へっ？」

なぜここで仁の名前が。

「そうだね？ それが……？」

「いや……『お兄さん』とか言わないから……気になって」

「あー……」

そのことかと頷いて、わたしはカップに手をやった。そこで気付く。コーヒースッキリ飲んでしまったんだっけ。

「……木村くん、わたしたちが、親同士が再婚してできた家族だっ  
てこと、知ってるでしょ？」

手持無沙汰で、仕方なしに空っぽのカップを両手で包み込んで弄  
んだ。

「四年前、その時わたしは中二で、仁は高校生になったばかりだっ  
ただけだね。さすがにいきなり仲良くは出来なくて……」

突然、今日から兄です、妹です、と言われても、「はい、そうで  
すか。わかりました」というわけにはいかなかった。

「それでもわりとすぐに馴染んで普通に話せるようにはなったんだ  
けど、やっぱり『お兄さん』って呼ぶのはどっか抵抗があって。だ



から、最初のうちは『仁さん』とか『仁くん』とか呼んでたの」「へえ」と木村くんが相槌を打つ。  
「それがそのうち、喧嘩とか言い合いとかも普通にするようになって、だんだん『さん』も『くん』もつけなくなっていくたってわけ、です」

木村くんがクスツと笑った。

「そつか。そんなもんなのか」

「うん。でも、それがそんなに気になるかな？」

「ん……まあね」

木村くんは小さく笑って目を伏せた。

「羨ましくてさ。和音が自然に名前呼んでるのが」

「え……」

「馬鹿みたいだな。お兄さんに焼きもちやいても仕方ないのにね」

わたしと目を合わせないまま、木村くんはグラスを手にとって、ストローを使わずにグイツと中のコーヒーを飲んでしまった。

「さ。もうそろそろ出ようか。なんか寒くなってきた」

木村くんがやっとわたしの顔を見てくれた。その照れたような表情に、わたしは木村くんが何を言いたかったのかがやっと分かった。わたしにいつも笑顔を向けてくれる人。わたしはまだ、彼を下の名前で呼んだことがないのだ。

\*

\*

\*

カズ、と呼ぶ声と一緒に、一気に周りの喧騒が戻ってきた。

「あ……」

「どした？ 急に黙り込んで」

顔を覗き込んできた仁に、慌てて笑顔を作った。

「ううん、なんでもないよ」

「……木村くんと何かあった、とか？」

わたしは首を振って、わたあめの列に視線を戻した。希望の前にはあと三人。もう少しだ。

「何もないよ。いたって順調、だけど」  
「『だけど』？」

そう返してきた仁に、わたしは思わず笑ってしまった。

「なに？ えらく突っ込んでくるね」

「気にしてるんだよ」

仁は大きなため息をついた。

「親同士の再婚のこと、カズより前に木村くんに話したの俺だから俺とカズが血の繋がりは無い兄妹だ、ってさ。なんかそれで変なことになってたら悪いな、って思ってる」

「……呆れた」

今度はわたしがため息をついてしまった。

「そんなこと気にしてるの？ もうかなり前のことなのに」

たしか、もう一月ぐらい前のことだ。

「そのことで木村くんとどうにかなってるんだったら、もうとっくに仁に抗議してる」

「そうだよなあ」

「……そんなに気にするぐらいなら、なんで木村くんに話したりしたのよ」

仁が言わなくても、木村くんには家の事情はいつかきちんと話すつもりでいた。仁に先を越されたのはわたしにとってもかなり予想外のことだったのだ。

「カズがもう先に話してるって思ってたんだよ。それで話の流れでつい、って感じで。意識して俺が先に話そうと思ったわけじゃねーよ」

ため息交じりの仁の言葉に、わたしは大きく息をついた。

「でも、とにかく、おまえたちが順調なら良かったよ。俺も変な罪悪感から解放されるしな」

仁は冗談めかしてそう言うと、両手を上に突きあげて大きな伸びをした。

「あ、やつのんの順。うわー、でっけー。あんなん、のんー人で食えんの？」

見ると、希望が自分の頭よりも大きくなわたあめを受け取っているところだった。

\*

\*

\*

「あまーい！ おいちーねえ！」

希望はわたあめを口にするたび、その喜びを表現する。

「かじゅもおいちー？」

「おいしいおいしい！」

わたしも希望のわたあめをちぎって口に運ぶ。この甘さがなんだか懐かしくて嬉しい。

おとうさんも仁も、今ここにいない。というのも、どうせ希望がわたあめを食べてしまうまでは動けそうにないし、その間におとうさんはトイレに、仁はちよつとぶらついてくると言って離れていった。

時間が経つにつれ、人もだんだん増えてきた。辺りもだいぶん暗くなってきた、吊るされた提灯が存在を主張し始めてきた。これからますます賑わってくるのだろう。

わたしはお祭りが好きだ。

普段は人混みはどちらかというと苦手な方だけど、祭りの賑わいとなると別だ。祭りの喧騒は、日常とは遠くかけ離れているものだからかもしれない。祭りはちよつとした日常からの脱却。

お母さんも祭りが好きな人だった。

小さい時は、お母さんに手を引かれて祭りに行った。一夏に四、

五回は必ずどこかしの夏祭りに顔を出していたと思う。お母さんはいつもわたしに浴衣を着せてくれた。自分も浴衣を着て、髪を結いあげて。いつもと違うお母さんのその姿に、子どもながら憧れを抱いたものだ。

自分もいつかこんな風にキレイになれるのかな。

そう思って、お母さんと手を繋いで歩いていた。手を繋ぐほど子どもじゃなくなってからも、お祭りにはいつもお母さんと二人で行った。おとうさんとお母さんが再婚するまでは。

再婚した後は、おとうさんとも一緒に行くようになって、お母さんの隣を歩くのはわたしではなくなった。わたしは、二人の後ろ姿を見て歩いた。

今度は、仲睦まじく肩を寄せ合うその後ろ姿にわたしは憧れを抱いた。

自分もいつか、誰かとうとうやって並んで歩く日が来るのかな。

……だけど、わたしが憧れた、二人が並んで歩くその後ろ姿は、もう二度と見ることはできないのだ。

「かじゅー、ごつとーたまー！」

「あ。食べ終わった？」

「うん！」

「おいしかった？」

「うんっ！ おいしかったよー！」

につこりと笑う希望の顔は、口の周りと言わず、もう顔中がベタベタだ。わたしはウェットティッシュで希望の顔と手を拭いてやっ

た。

「よし、と。じゃ、おとうさんたちが戻ってくるまで、もうちょっとここで待ってようね」

「ハロー！」

希望は道の段差をぴょんっとジャンプしたりして遊び始めた。道の端のここは人は通らない。遊んでも誰の邪魔にもなっていないし、注意する必要もなさそうだ。

それにしても、二人とも戻ってくるのが遅い。トイレ、混んでるのかな？ 仁はどこまで行ったのだろう？

周囲を見回してみるが、さっきよりも辺りは暗くなった上に人通りも増えたこともあって、遠くの方までは見通せない。

まあ、いいか。はぐれてしまったわけではない。もうすぐ戻ってくるだろう。

そう思ってたため息を落とした時、わたしのすぐ目の前を、紺色地に大振りの朝顔の花がデザインされた浴衣を着た女の人を通った。

一瞬。

全ての音が消え、時が止まった。

お母さん！？

だが、すぐに音は戻り、時は動き出す。

その浴衣を着た人は、わたしの方をチラリとも振り返ることなく通り過ぎていった。

人波に飲み込まれていくその背中を見送って、わたしはほつと息をついた。

「……違う」

お母さんなんかじゃない。ただ、浴衣が似ていただけだ。今の人が方が背も高いし、お母さんの髪の毛はあんなに真っ茶色ではなかった。

だいたい、お母さんがここにいる訳がないじゃないか。そんな当たり前のことを心の中で繰り返した。

「カズ、のんー。お待たせー」

明るい声に、ハツとして振り返る。いつの間にか、すぐ近くに仁がいた。

「あ……おかえり」

「わりいな、遅くなって。旨そうなところ捜しててさ。どうした？ 呆けた顔して」

「ううん、なんでもない」

「そう？ あ。はい、これ。イカ焼き。って……」

仁の笑顔が、次第に強張っていく。

「カズ。希望は？」

「え？ そこに」

わたしは背後を振り返り 固まってしまった。  
そこに、希望の姿はなかった。

「のん？」

慌てて辺りを見回す。でも、名前を呼んでも希望の返事はなく、姿も見えない。



「そんな……」

「この、ばかつ!!」

その声に、ビクリと肩が震えた。

「何やってんだよつ。こんなとこで子どもから目離す馬鹿がいるかよ!!」

初めて聞く、仁の怒鳴り声。脇を通る人たちが、何事かと目を向けていくのがわかった。

恐怖が雪崩の如く押し寄せてきて、体が小刻みに震え出した。仁が怖かったわけではない。

希望、希望がそこにいない。

「どうした？」

騒ぎが聞こえたのか、おとうさんが人波をかき分けるようにして近付いてきた。

「父さん、希望が迷子だ」

「え？」

その言葉に、驚いた顔でおとうさんがわたしに目を向けた。何かを言いかけるように口を開いたが、すぐにそれを閉じて短く息を吐いた。

「わかった。すぐに捜そう。ここで言い合っても仕方がない」  
そうしてテキパキと指示を出し始めた。

「ここは一本道だから、そっちかこっちかのどちらかにしか行けないはずだ。父さんはこっち側を見ていくから、仁はそっち側を行ってくれ。ああ、こっちには本部もあったな。父さん、本部の方にも迷子の届け出してくるから。それから、和音」

おとうさんがわたしの肩にポンと手を置いた。

「お前はここにいろ。みんながみんなバラバラに動いたんじゃ、後が余計面倒になる」

そして、ニツコリと微笑んだ。

「なあに、すぐに見つかるさ。心配するな」

肩をポンポンと叩き、おとうさんは離れた。

「じゃ、仁。頼んだぞ。見つかったらお互いすぐに連絡することにしよう」

そう言い残すと、おとうさんはすぐに人の流れに混じって行った。わたしが口を挟む隙もなかった。

「……じゃ、俺も行く。これ、持ってた」

仁が手に持っていたものをわたしに差し出した。

それは仁が買ってきたイカ焼き。袋には入っていたが、底が破れてタレが零れている。

少しだけ乱暴に突き出されたせいで、その袋は大きく揺れてわたしの服に触れた。

胸元に茶色いシミが付く。仁は一瞬ハッとした顔をしたがすぐにその顔を背けた。

「……わらい」

小さく一言そう言つと、走るようにして離れて行った。  
わたしは一人立ち尽くす。  
体の震えは一向に止まらなかった。

どうして希望から目を離したりしたのだろう。

きちんと希望の相手をしていれば良かった。しっかりと手をつないで待つておくべきだった。

浮かんでくるのはただ自責の念ばかり。

これまでより一層賑わいを見せる通り。どんどん増えていく人。どこを見ても人、人、人。

その足元に小さな子供が紛れていたって、きっと誰も気付かない。希望の目線は大人の腰の辺りよりもまだ低い。希望がもしあの人波に入って行っただとしたら、右も左も分からなくてそのまま流れに攫われてしまいかもしれない。

それよりも、もし。

悪意ある誰かに連れ去られていたとしたら？

あんな小さな子ども、抱きあげるのなんて簡単だ。もし希望が声を上げて、この喧騒にすぐにかき消されてしまったかもしれない。

次々と頭をよぎる不吉な状況。

脳裏に浮かんでくる希望の泣き顔と声。

どうしよう。

わたし、なんてことしたのだろう。

体の震えは止まらず、手足の先はまるで氷に触れているかのよう  
に冷たい気がした。

どうしよう。

もし、このまま希望が見つからなかったら。  
息が止まった。心臓さえも止まったかと思った。それぐらい、胸  
が苦しくなって、わたしはギュッと胸元を掴んだ。

ダメだ。そんなこと、考えちゃダメだ。

浮かんできたその思いを必死に打ち消す。

そんな恐ろしいこと、冗談でも考えちゃいけない。

きつとすぐ見つかる。当たり前じゃないか、そんなこと。

「大丈夫、大丈夫……」

呪文のように呟く。でも、どうしようもなく唇が震えて、それは  
うまく言葉にはならなかったかもしれない。

どれほどの時間が経ったのだろう。

それは永遠とも思えるほど長い時間にも感じたし、ほんの数秒し  
か経っていないような気もした。

手に握り締めた携帯電話が震え、わたしは慌ててボタンを押した。

「も  
」

『カズ？』

わたしが言葉を発するよりも先に、急いたような仁の声が飛び込  
んできた。

『いたよ。希望、見つけた』

ノゾム、ミツケタ。

のぞむ、みつけた。

頭の中で、その言葉が何度もこだまする。

全身の力が抜けて、わたしは思わずその場にしゃがみ込んでしまった。

「カズ？ 聞いているか？」

「うん」

『じゃあ、すぐこっちに来い。父さんにももう連絡したから』

仁は簡潔にその場所を述べると、すぐに電話を切った。

仁が言ったその場所は、思ったよりもすぐ近くだった。今いる場所から、左側三軒目の店。

その店の前には大勢の客　そこは金魚すくいの店だった。

「カズ！」

人だかりの中から声がかかった。仁が手をあげて場所を知らせてくれる。

「希望は！」

「JJJ」

仁がわたしの背を軽く抱くようにして、人波の最前列に招き寄せる。

「あ………！」

仁の足元にしゃがみこんでいる小さな後ろ姿に、言い知れぬほどの安堵感が込み上げてきた。

希望だ。希望がここにいる。

良かった　無事だった。

「あつ。かじゅー！」

希望がわたしを見上げ、嬉しそうに笑った。

「かじゅも見てみてー！　きんぎょたん、いっぱいー！」

そう言いながら、青い水槽の中を指差す興奮気味の希望。

笑い返そうと思ったけど、うまく笑えなくて、頬がひきつった。

「希望、裏側から入りこんできたんだって。店の人が気付いて、お家の人が来るまでここにいようって引きとめて下さってた。迷子の連絡も入れてくれたって」

そう説明する仁にも、わたしはただ頷くことしかできなかった。

希望が無事で、笑っている。もうそれだけで胸がいっぱいだった。

良かった。本当に良かった。

不意に、視界に何かが飛び込んできた。

グレーのハンカチ。

それを手にしていたのは仁だった。仁はただ無言で、視線は希望に向けたままでそれをわたしに差し出していた。

その時になって、初めて気付いた。

わたし、泣いてる。

周りがぼやけて見えるのは、泣いていたからなんだ。

わたしは、差し出されたそのハンカチをそっと手に取った。

「ありがとう」

そう言ったつもりだったけど、それが仁の耳に届いたかどうかはわからない。

\*

\*

\*

祭りからの帰り道、はしゃぎ疲れた希望は、仁に背負われてぐっすりと眠ってしまった。

「希望、重くなったな。今何キロくらい？」

「十三キロちょっと。それでも平均より小さい方らしいぞ」

「へえ、そうなのか？ でも、チビの方が抱っこしたりする分には楽だな」

前で交わされるおとうさんと仁の会話を、わたしはどこか上の空で聞いていた。

希望が迷子になった時のショックから、わたしはまだ立ち直れずにいた。

祭りの賑わいの中にいる時はまだよかった。気持ちも自然に紛らすことができた。でも、こうやって静かなところを歩いていると、あの時感じた恐怖を思い出して気が塞いでしまう。

あの時、希望はすぐに見つかって、希望自身は自分が迷子になっていたことに気付かないくらい、全く大事には至らなかった訳だが、それは結果的に運が良かったただけだ。

もしも、捜し出すのが遅くなっていたら、きっと希望は心細さのあまり泣きだしてしまったことだろう。

それよりも、もしずっと見つからなかったら？ もしあのまま希望が何処かへ行ってしまったら。



それを思うと、どうしようもなく恐ろしくなる。  
考えたくないのに、考えてしまうのだ。  
そして、深い自己嫌悪に陥る。

『こんなところで子どもから目離す馬鹿がいるかよ!』

仁の怒鳴り声が頭から離れなかった。

仁の言うとおりだ。わたしが馬鹿だった。あんなに大勢の人が行き来する場所で、一瞬でも目を離すなんてしちゃいけなかったんだ。わたしは馬鹿だ。

「……な？」

「え」

何かを言われたような気がして、俯いていた顔を上げた。二人がわたしの方を振り向いている。

「なんだよ。聞いてなかった？」

「あ……ごめん」

「どうした、和音」

おとうさんが足を止めて、体ごとわたしを向いた。少し遅れて歩いていたらわたしを待たために止まってくれたのだと思うけど、わたしは隣に並ぶことに躊躇いを覚えた。

一メートルぐらいの距離を残し、わたしも立ち止ってしまった。

「どうした？」

おとうさんが怪訝そうにもう一度そう言った。その隣で、同じように仁が首を傾げている。

まっすぐにわたしを見つめる二人の目。

怖い。

唐突にそう思った。

それは今まで一度たりとも感じたことのない感情だった。

二人の視線が、怖い。

「カズ？」

仁の声に、ビクツと体が震えた。

責められている訳ではない。

おとうさんの声も仁の声も優しく、その眼差しもまた柔らかく優しいものでしかないのに。

なのに、わたしを見つめる二人の目が怖い。

「和音。どうした？」

どこまでもわたしを気遣うおとうさんの声。わたしは胸の前でぎゅゅと拳を握りしめた。

「……ごめんなさい」

「え？」

「希望のこと……ごめんなさい」

「あー」

今やっと思ひ当たったというように、おとうさんが声を上げた。

「そのことな」

「本当にごめんなさい。わたしが無責任だった」

もう一度ごめん、と言って、わたしは頭を下げた。顔を見られなくなかったのだ。みつともないことに、また涙が出てきてしまったから。

「希望をちゃんと見てなかったわたしが馬鹿だったの」

「ああ。ほんと、馬鹿だなあ」

呆れた様な呟きとともに、近付いてくる足音。その次の瞬間、力強い腕が肩に回された。

「おとうさん……？」

「氣にするな、とは言わない。あれは確かに和音の責任だな。大いに反省してくれ。でもな」

肩を抱く腕の力がぐっと強まった。

「和音だけの責任じゃない。あそこで二人を残して離れた父さんと仁にも責任はある。みんなの責任なんだよ。それに、あそこにいたのがもし和音じゃなくて、父さんだったとしても仁だったとしても同じことは起こったかもしれない。だから、あまり自分ばかりを責めるんじゃない」

わたしの肩をしっかりと抱いたまま、おとうさんはわたしを促し歩き出す。

「和音。反省することと自分を責めることは別だよ。なにより、何事もなかったんだから、それを素直に喜ぼう。いつまでも後悔してたって仕方ないだろう。今後二度とこういうことがないように気をつける　もうそれでいいじゃないか」

「 うん 」

涙が止まらなかった。

おとうさんの言葉はわたしを慰めるための気遣いの言葉だと分かっている。それでも、それがどれほど心を軽くしてくれることだろう。

ザッザッザッ。

辺りに響くわたしたちの足音。

「 ……怖かったの 」

ぼろり、と言葉がこぼれた。

「 あのまま希望が見つからなかったらどうしようって……そう考えたら怖くて、怖くて仕方がなかった 」

ザッザッザッ その足音を聞きながら、わたしは痞<sup>つか</sup>えていたものを吐き出すように続けた。

「 わたしの前から、また、大事な人、消えちゃうんじゃないかって怖くて 」

「 バーカ! 」

突然、おとうさんがいる方とは反対側の方から、どんつと勢いよく体当たりをされた。

「 おつと! 」

わたしと一緒におとうさんもよろめく。

「仁！ 危ないだろ」

「イヤイヤ。カズがあんまり馬鹿なこと言うもんだからさ」

体当たりをしてきた仁は、希望をよいしょと背負い直しながら、涼しい顔をしている。

「消えたりなんかするかよ。誰も」

そして、ぼつりとそう言った。

「消えねーよ。希望も、父さんも俺も。んなこといちいち考えたりなんかすんなよ、バカ」

ザッザッザッと荒い足音を立てて、仁は一人で先に行く。それまでも速いスピードで歩いていく。

ククク、と隣でおとうさんが笑った。

「まあ、口は悪いが、仁の言うとおりだな」

「うん」

わたしは顔を真っ直ぐに上げて笑った。やっと、笑うことができた。

さっき、おとうさんと仁の優しい眼差しを怖いと感じた理由がようやく分かった気がした。その

わたしは、二人の眼差しそのものが怖かった訳ではなく、それを失うことが怖かったのだ。

\*

\*

\*

疲れた。

入浴を済ませて部屋に戻ったわたしは、倒れ込むようにベッドに横になった。

ふとんの柔らかさを肌を感じた途端、張り詰めていた糸が切れたかのように気持ちいが緩んだ。

今日は本当に疲れた……明日は朝寝坊を決め込もう。

夏休みももうすぐで終わる。朝ゆつくりできるのも今のうちだし。まだ眠るつもりはなかったが、目を閉じると、すぐに心地よい睡眠が襲ってきた。

ああ、だめだ。電気消してない……でも、もういいかな……。

眠りに落ちる、まさにその瞬間。

遠慮がちなノックの音が、わたしを強制的に現実に取り戻した。

「カズ」

ドアの外から聞こえるのは仁の声。

「はい……」

仕方がない、出よう。わたしは重い体を無理やり起こして、ドアの方へと向った。

「ごめん。もう寝てた？」

「大丈夫だけど……何か用？」

「悪かった」

仁がいきなり頭を下げた。驚いて眠気が一気に吹き飛ぶ。

「な、何？」

「あの時、怒鳴ったりして、ごめん」

仁は気まずそうに頭を掻いた。

「動転して、ちょっと言い過ぎた。それから、服」

「服？」

「汚しちゃったろ」

「あ」

祭りで着ていた服の染みを思い出した。仁にイカ焼きを渡された時に付いた茶色のシミ。風呂でこすり洗いを試みたけど、完全には落ちなかった。

「ごめん。あの汚れ、取れないよな」

「……いいよ、気にしないで。あの時は……仕方ないもん」

「あれ、クリーニング代出すから　ああ、それよりも、新しいの買って返すよ」

「いってば。そんな大したものじゃないもん」

あの服は去年の夏の終わりにバーゲンで買ったものだ。全く高価な服じゃない。着た回数はまだ少なかったしそれなりに気に入ってもいたが、そこまで落ち込むほどでもなかった。クリーニング代とか、ましてや新しい服なんか返してもらったんじゃ、逆にこっちが申し訳なくなる。

「普段着にでもするから。本当に気にしないでよ」  
「でも……うん、そっか」

仁はまだバツが悪そうにしているが、どうやら引き下がってはいく  
れるようだ。

「話はそれだけ？」

「ああ」

頷いたけど、仁はまだ立ち去ろうとしない。

なんだろう。まだ何かあるのかな？      と思っていると、仁が

再び口を開いた。

「あのさ」

「ん？」

「カズ。あの時、何かあったのか？」

「あの時？」

「希望がいなくなっただって気付く前。希望のことで忘れてたけど、  
俺が戻って来た時、おまえ、様子がちょっと変だった。なんかあつ  
たんじゃないのか？」

「あ……」

そうだ、思い出した。あの時、わたしは目の前を通り過ぎた  
女の人に気を取られていたのだ。その人の浴衣が、お母さんの着て  
いたそれとそっくりだったから。

「わたし、そんなに变だった？」

「なんか泣きそうな顔してた      今も」

「え？」



意外だった。泣きそうな顔？　今も？

「何があつた？　言えよ」

ぶつきらばうだけど、どこか優しい声。なんだか本当に泣きそうになる。でも、さすがにそれは堪えた。

「何もなかったよ」

「嘘だな」

「嘘じゃないよ。本当に何でもなかったの。ただ……」

だめだ。言う必要はないと思つていたのに、口が勝手に動いた。

「前を通つた女の人が、お母さんに見えたの」

仁の揺るぎのない目に、甘えたくなつてしまった。

「顔なんか見なかったけど……ただ浴衣がそっくりで……ただそれだけで、一瞬お母さんがそこにいるように思つた」

あの一瞬の、時が止まったかのような　或いは、時が戻ったかのような感覚が甦る。

「去年までずっと一緒だったから。お祭りの時はぜつたいにお母さんがいるのが当たり前で。だから……」

だから、本当に一瞬だったけど、お母さんがいたかのような錯覚に陥つた。

「　　そっか」

仁が小さく呟いて息をついた。

「まだ……八ヶ月、だもんな」

それはお母さんがいなくなってから経った月日。

そうだ、まだ八ヶ月しか経ってない。それとももう八ヶ月も経つのか。

「……ごめんな」

「なんで仁が謝るの？」

「あんな場所に一人で置いて行っただから」

「一人じゃなかったよ。希望もいた。だから逆に面倒な事になっちゃったんだけど」

ちよつと自虐的な言葉に、我ながら苦笑が漏れた。

「上等」

ポンポンと撫でるように、仁がわたしの頭を軽く叩いた。

「苦笑いでもなんでも、そんだけ笑えれば上等。カズは強いな」

強い？

不思議な気分で首を傾げると、仁が笑った。時折見せてくれる、とびきり優しい笑顔だ。

「カズは強いよ。だけど、無理に笑おうとしなくていいからな」  
「無理なんかしないよ」

「泣きたくなったら、ほれ。にーちゃんがいつでも胸を貸してやるから」

どん、と自分の胸を叩く仁。思わず笑ってしまった。

「いい。間に合ってマス」

「つれないねえ。あー、でもそうか。木村くんがいるか」

別にそういつつもりで言ったわけではないけれど。否定するのも面倒なので笑い飛ばしておいた。

「じゃ。用はそれだけ」

仁がドアから離れる。

「おやすみ」

「うん、おやすみなさい」

「あ そうだ」

一旦自室へ戻りかけた仁が、思い出したようにこちらを振り向いた。

「お母さんのその浴衣、うちにある？」

「浴衣？ うん、あるけど？」

「来年、カズそれ着ろよ」

「え」

「それ着て、またみんなで祭り行こうぜ。それまでに浴衣ぐらい一人で着付けられるようになってけよ」

そう言うのと、仁は自分の部屋に入って行っただ。

来年、お母さんの浴衣を着て、また家族みなでお祭りへ行くそれは心が躍り出しそうなほど楽しみなことのように思えた。だけれど同時に、言いようのない不安が心に渦巻いた。

来年もみんなが一緒にいられるなんて保証はどこにもない。先がどうなるかはわからない。

わたしは　わたしたちは身をもってそれを知っている。それをあえて仁が口にしたのは、きっと彼の優しさだ。

「来年もみんな一緒にいる」と、仁はそう言ってくれたのだ。だけど、わたしは思わずにはいられなかった。来年もみんなと一緒にいられるのかな。本当に？

わたしたち家族はいつまで一緒に過ごしていけるのだろう。

\*

\*

\*

待ち合わせの時間よりも十分以上も前に着いた。

よし。大丈夫。木村くんはまだ来ていない。

待ち合わせをすると、たいていわたしが木村くんを待たせることになる。わたしが時間にルーズな訳じゃなく、木村くんがいつも時間よりも前に来ているのだ。

だけど、今日はわたしが木村くんを待つ　そう決めて家を出た。

「あれ、和音？」

なのに、思ったよりもずっと早くその声が聞こえた。わたしがここに着いてからまだ二、三分しか経ってない。待つまでもなかった。

「今日は早いね」

「そういう木村くんこそ。いつもこんなに前から来てるの？」

思わずため息をついてしまった。

「うん。和音はどうしたの？　何かあった？」

時間前にいることで「何かあった」と聞かれるのもなんだかすく心外なんだけど。木村くんのアマリの屈託のなさに、文句を言う気もなくなってしまう。

「何もないよ、たまには待つのもいいかなと思って」

わたしがそう言うと、木村くんはちょっとだけ嬉しそうに笑った。

わたしたちがデートをする場所は、最近専ら公立の図書館のことが多い。お互い受験を控えている身なので、いつもいつも遊びまわる訳にもいかないのだ。

でも、夏休み最後の日の今日は、図書館はやめて、水族館に行くことにした。

水族館に向かいがてら、わたしは先日祭りのことを木村くんに話した。もちろん、希望の迷子の話も。

「大変だったね」「のんくんにもなくて良かった」と、我が事のように木村くんは心配してくれた。

ただ、木村くんに言わなかったことがある。

希望が迷子になった時に感じた不安や恐怖、そしてお母さんのこと。わたしは木村くんには話さなかった。

木村くんは優しい。言えば、きっと余計な心配をかけてしまうから。

心配なんてかけなかった。

いつだったか、木村くんはわたしを「守りたい」と言った。嬉しい言葉だと思う。けどね、木村くん。

わたしは守ってもらうほど弱くはないんだよ。

守ってくれなくてもいい。心配なんてされたくない。

ただ隣を歩いてくれるだけでいいのだ。それだけで、わたしは幸せだと思っただから。

わたしは木村くんの優しい横顔を見上げた。

「琢磨くん」

彼が驚いたように足を止めた。

「え……？」

「行こう、琢磨くん！」

わたしは彼の手をとって歩き出した。

手を繋ぐには暑過ぎる日だったけど、その手を離したいとは思わなかった。

琢磨くん。あなたとはいつまで一緒にいられるのだろうか？

強く握り返してきた手の温もりを、わたしはいつまで感じていられるのだろうか？

夏が終わろうとしていた。

（第四話 完）

## 5（後書き）

第四話終了です。第5話に続きます！お付き合い頂けると嬉しいで  
す^^

次第に色づき始めた街路樹に秋の深まりを感じるようになった十月の終わり。

週末、おとうさんは知り合いの結婚式に呼ばれ、この日はわたしが希望をみていることになった。仁は土曜日はアルバイトがある日だ。

受験を控えた身でありながら、休日のにんびりと子どもと遊んでいる自分に焦りをおぼえない訳ではない。だけど、仕方ないことだと割り切っている自分もいる。手の届かないような名門大学を狙っている訳ではないし、勉強はその気になりさえすればいくらでも時間は作れる。夏休み過ぎからは夕食当番も保育園の迎えも減らしてもらった。当然その分、仁とおとうさんの負担が増えたわけで、そのことは申し訳ないと思う。でも、家族なのだ、こんなことは遠慮することではないと甘えさせてもらっている。

だから、出来ることぐらいはやらないと。一日希望と二人で遊んで過ごすことぐらい、なんてことはない。

わたしはこの日、希望を公園に連れ出した。

雲一つない空はどこまでも高く、少しだけひんやりとした空気は思わず深呼吸をしたくなるほど気持ちいい。

青空の下、広場を元気に走り回る希望、そしてそれを追いかけるわたし。

今日も平和だ。



夕方、おとうさんから「遅くなるから夕食はいらない」と連絡が入った。帰りが遅くなるかもしれないということは出掛ける前から言っていたことなので、何ら問題はない。急にいらないと言われても困らないように、最初から今日はカレーにしよう決めていた。わたしは手早くカレーを作り、煮込みながら七時前にはバイトから帰ってくるはずの仁を待った。仁が帰ってきたらとりあえず希望と一緒に風呂に入ってもらうつもりでいた。

だが、時間になっても仁は帰ってこない。

子どもじやあるまいし、時間通りに帰ってこないからといって怒る事でもなければ心配する事でもない。

ただちよつと困ったなと思っただけだ。

希望をお風呂に入れて欲しいのに……まあ、これは完全にこつちの都合なんだけど。

とりあえず、希望と二人で先に夕食を済ませることにした。希望の寝る時間もあるし、いつまでも待つてはいられない。

「じん、おとい（遅い）ねえ」

口の周りをカレーだらけにしながら、希望が小首をかしげる。

「そーだね、遅いねえ。もしかしたら、どっかに寄ってるのかもね」

仁だってハタチの大学生だ。そういう日もあるだろう。連絡一つないのは珍しいけど。

「おとーたんもおといねえ」

希望がまた小首をかしげる。わたしは苦笑しながら、もう何度も

言ったことを繰り返した。

「おとうさんはまだだと思っよ。だから、今日は先に寝とこうね」  
「はあい」

そう返事をした希望にはいつものような元気がない。

それも無理はないかもしれない。今日は一日、ずっとわたしと二人っきりで寂しいのだ。

結局、夕食も終え、さらに入浴を済ませ希望が寝る時間になっても、まだ仁は帰って来なかった。

夜九時過ぎ。

心配する時間ではないけれど、連絡がないのは本当に珍しい。夕食は外で済ませたのだろうか。急にバイト仲間から飲みにも誘われたのかな……。

添い寝して希望を寝かしつけながらぼんやりとそんなことを考える。

気が付けば、希望はいつの間にかスースーと規則正しい寝息を立てていた。わたしはそっと布団から抜け出した。

希望はいつもおとうさんのベッドと一緒に寝ている。が、わたしがそこで寝かしつけるのはやっぱり気が引けてしまうので、こういう日はお母さんの仏壇が祀ってある和室に布団を敷いて寝かせるようにしている。

なるべく音をたてないように忍び足で居間に戻ってテレビを付けた。別に見たい番組はなかったけど、音がないのもなんだか寂しかったから。

本当は少しぐらいは勉強もしたいのだ。だけど、希望を一人で寝

かせたまま自室に戻る訳にはいかないし、かといってここに勉強道具を持つてくる気にもなれなかった。

おとうさんでも仁でもいい。早く帰って来てくれないだろうか。

連絡、してみようかな。

携帯を手に取り、画面を開く。でも、思いとどまってすぐに閉じた。

いいや、もう。

半分ふてくされた気分でソファーに横になり、一番面白そうだった映画番組を見ることにした。

\*

\*

\*

十時過ぎになって、ようやく玄関の方から音がした。

「ただいまあ」

この声はおとうさんだ。が、なんだか声の調子がいつもと違う。

「おかえり……？」

居間に入ってきたお父さんを見るなり、わたしは目を丸くした。

酔っ払ってる！ それもかなり、だ。

赤い顔に乱れた髪。襟元もだらしなく緩んでいるし、足どりもふらついている。こんな風に酔っばったおとうさん、初めて見た。

「うー、飲み過ぎたあ」

おとうさんはスーツの上着を脱いで適当にその辺りに放ると、ソファーにどかと座りこんだ。

うわ。酒くさ……。

「悪いなあ、和音。遅くなって。久し振りの友達の集まりでついねえ……」

頭はまだしっかりしてるようだが、呂律はちよつと怪しい。

「いいよ。それよりもそんなに酔っぱらって大丈夫？　今水持つてくるから」

「あー、助かるー」

わたしがグラスに冷えた水をついで持って行くと、おとうさんは一気にそれを飲み干した。

「もつといる？」

「いや、もういい。ありがと。希望は？」

「そっちで寝てる」

和室を目で示すと、おとうさんはふつとフツと目許を緩めた。

「今日は希望はしのぶと一緒にかあ……」

しのぶ　お母さんの名前。わたしは思わずおとうさんの顔をまじまじと見つめてしまった。

久し振りに、おとうさんの口からお母さんの名前を聞いた。

「……今日の結婚式さ」

おとうさんがポツリと話し出し、グラスを置きに立ち上がりかけていたわたしは、もう一度座りなおした。

「今日の結婚式の主役、俺の大学の時の同級生なんだよ」

おとうさんが自分のことを「俺」というのも、初めて聞いたような気がする。わたしは不思議な気分で耳を傾けた。

「四十七で初婚。嫁さんは三十四歳。一回り以上下だよ。今まで待つて良かったなってみんなでからかった」

「へえ。そうなんだ。おとうさん、羨ましい？」

「いや、それはないなあ」

おとうさんは苦笑して即答した。

「それは別に羨ましくはないんだけどなあ。あー、でも、別のところで羨ましかったことがあったなあ」

「何？」

「んー。あのなあ、招待されてた中に、大学の友人同士で結婚した奴らがいてね、そいつらが夫婦で出席してたわけよ。まあ、当たり前なんだけどね」

おとうさんはハアーッと息をついて、両手で頭を抱えるようにした。

「その仲良く並んでる姿を見る度、なんで俺の隣には誰もいないんだろうって、な」

「おとうさん……」

「べつになあ、しのぶがいたところで一緒に出席してた訳じゃないんだけどさ。そういうふうに思ったわけよ。なあんか哀れだよなあ、くくっ」

肩を揺らして笑って、おとうさんは顔を上げた。酔いの回ったどこか虚ろな目でわたしを見る。

「和音……似てるよなあ」

「え？」

「しのぶに似てる。娘だもんなあ。当たり前かあ」  
「おとうさん……」

わたしはどう言葉をかけていいかわからなかった。

そして、それは突然のことだった。

「っ！？」

その瞬間は、何が起こったのかわからなかった。後頭部と背中への衝撃と、体にぐっとかかる圧力。そしてむせかえるようなお酒の臭いがわたしを襲った。

一瞬の混乱の後、わたしは状況を理解した。  
おとうさんがソファアーの上から覆いかぶさるように抱きついて来て、わたしは激しく後ろに押し倒されてしまったのだ。

「ちょ……！ お、おとうさん！」

我に返ったわたしは、慌てておとうさんの背中をバンバンと叩いた。

「おとうさん！ どけて」  
「しのぶ……」

「！！！」

……わたしは背中を叩くのをやめた。

お父さんの体は震えていた。

泣いているみたいだ　そう思ったら、胸が詰まった。おとうさんを押しのけることができなくなった。

おとうさんがお母さんを恋しがっている。

わたしがまだ「母」が恋しいのと同じように、おとうさんもまだ「妻」が恋しいのだ。そのことにわたしは今初めて気が付いた。

ぎゅっと掴むように抱きしめられた体が痛かった。これはおとうさんの心の痛みだ。

「おとうさん」そう呼ぼうとして、止めた。おとうさんが今抱きしめているのは、わたしではなく妻の「しのぶ」だ。

わたしは、今だけでもわたしを「しのぶ」だと思ってくれてもいいと、そう思った。抱きしめられるぐらいはなんでもないことだ。

それでおとうさんの痛みが少しでも和らぐのならば。

わたしはそつとおとうさんの背に手を添えた。

その時だった。

「何やってんだよっ！」

そう怒鳴る声が聞こえたかと思うと、わたしの体に乗っていた重みがふつと消えた。

どんっ、という鈍い音に、わたしは慌てて体を起こして息をのんだ。

「じ……！」

見上げた先には、仁王立ちになっている仁の背中。そして、その前にはおとうさんが尻もちをついたような姿勢で後ろに倒れかけていた。わたしはすぐに、仁がおとうさんを力づくでわたしから引き離れたのだとわかった。

「仁！」

「何やってんだよ、アンタは」

仁がゾツとするほど冷たい声でおとうさんに言葉を投げかける。

「ちょ、ちょっと待って、仁！」

わたしは咄嗟に仁のズボンを掴んだ。

「おとうさんは別に何も」

「和音は黙ってろ」

仁が低く言葉を被せた。決して怒鳴ってはいないのになぜか逆らうことができず、わたしはぐっと言葉を詰まらせた。

「父さん。アンタ、気でも触れちまったのかよ」



おとうさんはようやく体勢を整えて、片膝を抱えて座りなおした。

「いて……」

「娘にまで手を出すほど馬鹿だったのか、アンタ」

「仁！」

さすがに黙って聞いていられない。わたしは立ち上がって仁の正面に回り込んだ。

「違う、仁！ おとうさんは酔っ払ってて」

「酔っ払いなら何やってもいいってわけじゃない」

「そうだけど！ でもおとうさんは」

「和音」

静かな声がわたしを遮った。振り返るとおとうさんがゆっくりと立ち上がっていた。

「いいよ。和音。さっきのはとうさんが悪い」

「おとうさん……」

「ちよっと混乱してた……酔ってたとしてもあまりにも軽率な……すまなかった」

おとうさんが頭を下げる。わたしは慌てた。

「おとうさん、わたしは……」

平気。そう言おうとしたけど、顔を上げたおとうさんの目が、それを言わせなかった。さっきまでの虚ろな目とは違うはっきりとした意思の感じられる目は、何も言わないでくれと訴えていた。

「仁もすまなかった」

再び軽く頭を下げるおとうさんに、仁は長い息をついた。

「マジで……もう勘弁してくれよ」

「ああ」

おとうさんは足元に転がったグラスに気付くと、それを拾い上げて、まだふらついている足取りでキッチンの方へ向かう。

「少し頭冷やす。シャワー浴びてくるから」

グラスを置いて部屋を出ていくその後ろ姿が悲しくて、わたしは泣きたいような気持になってしまった。

「カズ。大丈夫か？」

仁のどこか硬い声が聞こえた。わたしはムツとして彼を振り返った。

「大丈夫って何がよ」

仁はバツが悪そうにわたしから目を逸らす。

「その 何もされなかったらうな」

その信じられない言葉に、我が耳を疑った。

「……何言ってるの？ おとうさんがわたしに何をするって言うの

よ？」

仁の聞いていることの意味は、さすがにわたしにだってわかる。わかるけど。

「どうかしてるよ、仁。さっきもあんなふうに乱暴にしくたつて。おとうさんはただお母さんのこと思い出してちょっと混乱してただけなのに」

「余計悪いだろ！」

仁の声が荒くなった。

「父さんがカズを母さんだと錯覚したなら、なおのこと始末が悪い！ おまえももつと警戒心つてのを持てよ」

これにはかなりカチンときた。

「何、それ？ まるでわたしが悪かったみたい！ それに何よ、警戒心つて。おとうさんにどう警戒心を持ってつて言うのよ」  
「おとうさんつて言ったって、結局は他人だろ」

仁がハッとしたように口を噤んだ。

でも、もう遅い。それはもうわたしの耳に届いてしまった。

『結局は他人だろ』

何かが音を立てて切れたような気がした。

パチン、という乾いた音に我に返る。右の手のひらがジンジンと痛んだ。

わたしは仁の頬を思い切りぶっていたのだ。

仁の頬がみるみる赤くなるのが分かった。仁は辛そうに顔を歪めた。でもそれは頬が痛かったからではないのかもしれない。

「……ごめん。馬鹿なこと言った」

仁の沈痛な声。だけど、その言葉はわたしの心には何も響いて来なかった。

「……ひどい」

声が震えた。これが怒りなのか悲しみなのかわからない。ただひどく心が渴いていくような気がした。

「仁にはおとうさんを責める資格なんてない。わたしを責める資格もない」

自分でも、びっくりするほど冷たい声だったと思う。仁は微かに顔を強張らせた。

「カズ」

「うるさい」

もう仁の言葉を聞く気にはなれなかった。

「ほっとしてよ。結局、仁だって他人でしょ。構わないで」

言い捨てて、仁の横を通り過ぎた。

「待て、カズ！」

仁がわたしの肩をぐいと掴む。わたしは何も言わず、身をよじらせてその手を払った。

その時、微かに仁の体から憶えのない花のような匂いがした。

香水の匂い　女性の。

一瞬で、仁の帰宅が遅かった訳を理解した。同時にじわりと嫌悪感が込み上げてくる。

振り返って何か一言言つてやろうかと思ったけど、結局振り返ることも口を開くこともせず、その場を離れた。

仁なんてもう知らない。

そう。結局は他人なのだ。

\*

\*

\*

寝苦しさのあまり目が覚めた時、まだ夜中の1時だった。

寝る前に仁と言いつ合つたせいで、変に興奮していたのかもしれない。

「……仁のバカのせいだ……」

あの時の腹立たしさを思い出し、ベッドを下りながら一人で悪態をついてみる。だけどそれで余計に気が塞いでしまった。ちよつと水でも飲んでこよう。

そういえば。

ふと重要な事を思い出した。

あの時勢いで部屋に戻つてきてしまつたけれど、和室に希望を寝かせたままだつた。よほどのことがない限り夜中は起きない希望だけど、さすがに一階に一人寝かせてるのは良くないだろう。

おとうさんは酔つてたし、仁は……仁のことは考えたくもない。わたしは急いで一階へ下りた。

一階は真つ暗　　いや、和室の方だけ常夜灯の灯りで仄かに明るい。

物音はしない。希望はぐつすり眠っているのだろう。

とりあえずキッチンへ向かい、水を飲んで落ち着いてから、希望の様子をそつと見に行った。

「！」

普段から開けっぱなしにしている和室入口の襖の手前で、わたしは足を止めた。

常夜灯だと思ってた灯りは、仏壇のろうそくの火だった。仏壇の前に座って丸めた背中をこちらに向けているのはおとうさんだ。

項垂れているおとうさんの背中には、まるで小さな子供のように弱々しくて頼りなく見えた。

わたしは言葉を失ってその後ろ姿を見つめた。

おとうさんはいつでも力強く、どんな時も笑ってわたしたちを励ましてくれた。

お母さんの病気が発見された時も、絶対に沈んだ顔は周囲には見せなかった。

お母さんが死んだ時も、涙を流したのを見たのはお母さんが息を引き取ったその時だけ。葬儀の時にはもう泣いてなかった。目は赤く腫れてはいたが、人前では絶対に泣かなかったのだ。まだお母さんの死を理解できないでいた希望を、笑顔で抱きしめてさえた。

だから、わたしはおとうさんは強い人なんだと思っていた。勝手にそう決めつけていた。

それがどうだろう。今のおとうさんの姿は。

「おとうさん……」

そつと声をかけると、体をビクツと震わせ、おとうさんが驚いたようにこちらを振り返った。

「あ、ああ、和音か……」

「おとうさん、起きてたの？」

言いながら、おとうさんのそばへ寄った。おとうさんの体からは、まだアルコールの臭いがする。

「酔いは醒めた？」

「あー、いや。まだぐるぐるしてる感じだなあ。かなり気分悪いよ」

おとうさんが苦笑する。わたしもつられて笑ってしまった。

「飲み過ぎだよ。明日が大変なんじゃないの」

厳密に言えばもう「今日」なんだけど。

「日曜日で良かったね。そんな匂いさせて学校行<sup>へい</sup>ったんじゃ顰蹙<sup>ひんしゅ</sup>だよ」

「まっただ」

手元に置いてあったペットボトルをぐいっとあおって、おとうさんは改めてわたしに目を向けた。

「和音はどうした？　こんな時間に起きてきて」

「希望のことほったらかしたままだったなって思い出して。ごめenne」

希望は布団の中でスヤスヤと眠っている。起きた気配はなさそうだ。

「大丈夫だ。父さんが一緒に休むよ。トイレにも台所にも近いからちょうどいい」



「かなり酒臭いけど、希望大丈夫かな？」

思わず言つと、おとうさんは可笑しそうに笑った。

「大丈夫だろ。反対向いて寝る」

そして、また仏壇を見上げた。長く吐いた息で、ろうそくの火がゆらりと大きく揺れた。

「……和音。さっきは本当に悪かったな」

「え？」

「一瞬、和音がしのぶに見えた　父さん、どうかしてた」

おとうさんはそつとお母さんの写真を撫でる。

その優しい指先に、胸が痛くなった。

さっきのことはもういいのに。おとうさんだってもう触れてほしくないはずだ。

だから、わたしはあえて何も答えず、ただこう言った。

「お母さんのこと、まだ好きなんだね」

おとうさんは優しい笑みを浮かべ、

「愛してるよ」

ただ一言、静かにそう答えた。

『愛してる』

その言葉は、重くわたしの心に響いた。

おとうさんは、お母さんを今でも愛している。それが痛いほどに伝わってきた。

だけど、おとうさんの愛するその人は、もうどこにもいないのだ

その悲しみはどれほどなのだろう。

わたしは今まで、そのことを考えようとしなかった。

「母」を失った「子ども」だけが悲しいわけじゃない。「妻」を失った「夫」もまた、深い悲しみの中にいるのだ。

そんな当たり前のことに、今になって気付くなんて。

今までのわたしが、ただ自分を哀れんで泣いているだけの、自分本位な子どもに過ぎなかったのだと知った。

日曜日。

案の定、おとうさんは二日酔いでかなり具合が悪そうだった。朝食も食べず、まだ布団の中でうーうー唸っている。  
お気の毒に。

わたしは今日は琢磨くんと会う約束をしていた。映画を観た後、図書館で勉強をする予定だ……。ただのだけど、今日はもうそれは諦めたほうがよさそうだ。へろへろなおとうさんに希望を任せるのも酷だろう。仁は朝からアルバイトがある日だから、もうすでに家を出ているはずだ。顔を合わせてないから知らないけど。

朝食のトーストをおいしそうに食べている希望を見ながら、わたしは密かにため息をついた。

希望の面倒をみるのが嫌な訳ではない。ただ、琢磨くんと約束をキャンセルするのが心苦しいのだ。ただでさえ学校以外で会う機会は少ないのに。誘われても断ることが多くて、その度に琢磨くんは嫌な顔一つせず「大丈夫だよ」と言ってくれるのだけど、それがまた申し訳なかったりする。

ため息も出ようってものだ。

「おはよう」

突然のその声に、コーヒークップを持つ手が止まってしまった。眠そうな顔でダイニングにのっそりと現れたのは仁だった。

「あれ」

バイトに出掛けたんじゃないの、と聞きかけて、わたしはぐつと言葉を飲み込んだ。昨日のことを思い出して一気に不愉快が甦る。

そんなわたしとは対照的に、希望が満面の笑顔で仁を迎えた。

「おはよー、じんっ！」

「おはよ、のん。……カズもおはよう」

「……おはよ」

希望の手前、声かけられた以上は無視するわけにもいかない。ぶつきらばうに答えて、誤魔化すようにカップを口に運んだ。

仁は自分の分のコーヒーを淹れながら「俺、今日バイト休みもらってるから」と、こつちが何も聞いてもないのにそう言った。

でも、なるほど。だからまだ家にいるわけだと納得して、わたしも「そう」とボソリと答えた。

あとは沈黙。ただひたすらゆっくりとコーヒーを飲む。

その間に希望が自分の朝食を平らげてしまった。

「ごつとーたまでつた！」

重い空気を振り払うかのような明るい声にホッとする。

「ちゃんと手とお口拭いてね」

「はい」

希望がイスを降りて走って行ったのを機に、わたしも席を立った。このまま仁と一緒にいる気にはなれない。さっさと自分の分と希望

の分の食器を重ねて席を離れた。

「カズ」

わたしを呼び止める仁の声にもわざと聞こえないふりをした。

「カズ。昨日のことはごめん。昨日は俺……カッとして。俺も少し酒入ってたし。だから、あれは本心じゃないから」

仁が謝ってくることは予想していたことだったけど。

「あれ、って何のことよ？」

言い訳がましい仁の言葉に苛立ちがよぎって、つい振り返って言葉返してしまった。

ぐっと言葉に詰まる仁。

『結局は他人だろ』

なんて言葉、さすがにもう一度は言いくいのだろう。

わたしだってもう聞きたくはない。だから、本当は問い詰める気などなかったのだ。だけど、一度芽生えたイライラはなかなか消えてはくれなかった。

「別に謝ってくれなくていいよ。確かにわたしは仁やおとうさんは他人だし。警戒心って大事だよ。仁はその当たり前のこと言っただけなんだよね」

スルツと嫌味が口をついて出た。仁が不快そうに眉根を寄せる。わたしはキュツと唇を噛んだ。自分の嫌味に自分で嫌気がさした。だけど、これ以上口を開けばもっと嫌な事を言ってしまうそうだ。

「……じゃあね」

とにかくこの場を離れよう。食器はシンクに置きっぱなしだけど、後で洗えばいい。

立ち去るわたしの背中を声が追い掛けてきた。

「カズ。今日俺が家にいるから。出掛けていいぞ」

まるでわたしに予定があることを知っていたような口ぶり。思わず立ち止まって振り返った。

「仁こそ約束あるんじゃないの？ 昨日も彼女と仲良くしてたみたいだし」

言った直後にハツとした。何を言ってるんだろう、わたし。

仁が微かに目を見開く。そして何かを言いかけたが、わたしはそれを聞く前に小走りでその場を離れた。

まるで妬いてるみたいな言い方をした自分に、これ以上ないくらい激しく後悔していた。

図書館を出たのは閉館時間の五時半。だけど秋の日暮れは早い。外はもう黄昏に染まっていた。

図書館の周囲は石畳の遊歩道。少しずつ色づき始めている沿道のイチヨウ並木と、グレーがかった橙色の空との淡いコントラストが美しい。そこに街灯の明かりも加わってちょっと幻想的ですらある。

「キレイだね。イチヨウ、もう少ししたら見頃かな」

「来週ぐらい　いや、もうちょっとかな」

琢磨くんがちょうど目の高さに垂れていた葉をピンと指ではじいた。

「そしたらまたここ散歩しようよ」

そしてわたしの手を取り微笑む。

わたしは琢磨くんのこの笑顔がとても好きだ。明るく笑う顔も好きだけど、琢磨くんの微笑みはとても優しい。

その優しさが自分だけに向けられているのだと感じる時、わたしの心は幸せでいっぱいになる。

「ところで、和音。ずっと気になってたんだけど」

琢磨くんの口調が少しだけ改まったものになったのは、しばらく歩いた頃だった。

「家で何かあった？」

突然そう言われて驚いてしまった。

「どうして？」

「だって、今日なんか変だったから。時々ため息ついたりボーっとしてたり」

「え、そう？」

言われて初めて自分がそんな状態だったのだと気付いた。  
琢磨くんが苦笑した。

「和音がそういう時って、たいてい家で何かあった時だね」

……ここまで完全に読まれていると「何もないよ」と否定するのも逆にわざとらしい気がする。だけど。

「何があったの？」

「……」

何をどう話せばいいのかわからない。あまり進んで話したい内容でもない。

黙り込んでしまったわたしに、琢磨くんが少しだけ寂しそうに笑った。

「ごめん。別に無理して話さなくてもいいんだけど」

たぶん、このまま黙っていても、琢磨くんはもうこれ以上は何も聞いてこないだろう。だけど、心配してくれている人に対し、それではあまりにも申し訳ないような気がして、わたしは口を開いた。



「仁と……仁とちょっと喧嘩したんだ」

「仁さんと？」

琢磨くんが首を傾げた。

「何が原因で？」

「……些細な事。腹立つ一言言われちゃって」

正直な話、昨夜のおとうさんのことや仁の言った言葉のことなどは、琢磨くんには知られなくなかった。言えばきつとまた変な心配をかけてしまうから。それは避けたかった。

「そっか」

琢磨くんは小さく笑った。たぶん琢磨くんは気付いている。わたしが話したくないと思っていることに。

ごめんなさいと心で謝って、わたしは明るく声を上げた。

「ほんとに、大したことないの。ただの兄妹ゲンカ」

「そう。だいたいけど」

わたしに合わせて琢磨くんも明るく笑ってくれた。

「ケンカするほど仲いいって言うよね」

「えー？ そんなに仲良くないけど」

「そうかな。まあ、なんにしろ、早く仲直りしなよ」

「んー、やだなあ。まだそんな気になれないもん」

これは半分は冗談、半分は本気だ。

「くらくら！」

そんなわたしを、琢磨くんは苦笑して軽く睨みつけた。

「さつさと仲直りしろって。そんなんが原因で暗い顔されてたんじや、オレも困るから」

そしてサラリと続けた。

「好きなコが沈んでたら、気になって仕方がないだろ」

わたしは思わず立ち止ってしまった。

初めてだった。

琢磨くんが「好き」という言葉を使ったのはこれが初めてだ。

琢磨くんは驚くわたしを見て、照れくさそうに笑った。

「ごめん。オレ、まだちゃんと言ってなかったよね」

琢磨くんがわたしの正面に立った。ちょうど街灯の影になってその表情は見え辛かった。だけど、どこか緊張したような空気が伝わってくる。

「オレ、和音のこと好きだ」

それはとても静かな声だった。

「今さらだけど、本当に……本当に和音が好きだから」

そして、琢磨くんは一步前に出て、わたしの両肩にそっと手を置いた。

胸がどうしようもないくらいドキドキした。

わたしは何も知らない無垢な子どもではない。この後琢磨くんが何をしようとしているかはすぐにわかった。

琢磨くんの顔が近付く。

逃げたいとも避けたいとも思わなかった。わたしは静かに目を閉じた。

その瞬間、フワリと風が舞い降りたような気がした。

唇にしっとりとした柔らかなものが触れる。優しく、そっと。

やがて、十分な温かさを残して、それはゆっくりと離れていった。目を開けると、はにかんだような表情の琢磨くんと目が合った。

心臓が爆発しそうだ。

顔を覆いたくなるほど気恥しいのに、琢磨くんから目を逸らすことが出来なかった。

琢磨くんが優しく微笑む　影になって暗いはずなのに、その笑顔はわたしにはとても眩しく感じられた。

\*

\*

\*

胸のドキドキはいつまでも治まらなかった。

琢磨くんと別れて一人になってから、もう何度深呼吸をしただろう。

琢磨くんは家まで送ると言ったけれど、家に入るまでにどうしても一人で落ち着く時間が欲しかった。だから送ってもらうのは近所の公園までにしてもらったのだけ。

だめだ。ちつとも落ち着けない！ 顔の火照りもまだ取れないような気がした。

琢磨くんとキスをした。それだけでこんなに舞い上がってしまった。っている自分が可笑しい。

今わたしはどんな顔をしているんだろう。おとうさんや仁から変に思われないかな？ …… バカみたいだ。キスしたとかわかるはずもないのに。いや、案外仁はこういうことには敏感だから、勘付かれてしまうかもしれないな。

そんなことを考えている自分が滑稽で仕方がない。

でも。そうだ、仁とは……。

琢磨くんが別れ際に念を押すように言った言葉を思い出した。

『仁さんとちゃんと仲直りしろよ』

……わかってる。いつまでも怒り続けてなんていられないし、無

視し続けるのなんて不可能だ。

仁のあの時の言葉が、その場の勢いで出た言葉だということは本当はわかっていた。冷静になってあの時の状況を思い出してみたら、仁があんな態度になったのだって理解できるし。仁からしてみたら、帰ってきたらいきなり妹が父親に押し倒されていたような状況が目の前にあった訳だから、戸惑って怒って当然だ。思いもしない言葉が出たって仕方がないかもしれない。だから、もうその時のことについてはもういいかなと思っていた。

でも、わたしの苛立ちの原因はそれだけではなかった。

あの時仁の体からした香水の匂い。花のような、柔らかな香り。それを思い出すたびに、妙に心がざわつく気がした。そして、そのことにわたし自身戸惑う。

だって、仁がいつどこで誰と何をしていようと全然構わないのに。仁が女の人と過ごしていたかもしれないからって、全くどうでもいいのに。

なのに、なんだか腹が立つ。そして、腹を立てている自分にまた腹が立つ。

なんなんだろう、このイライラ感は。

でも　ああ、そうか。きつと昨日は一人でずっと希望を見ていたから、ストレスがたまっていたのかもしれない。だから、自分一人に家のことを任せて、外で呑気に女に人と会っていたであろう仁に苛立ってしまったのだ。きつとそうだ。

「なあんだ、そうか……」

ちよつと考えれば単純な事じゃないか。

苛立ちの原因がわかってしまうと、なんかちよつとスッキリした。そしてそのことを考えているうちに、いつの間にか胸のドキドキ

も顔の火照りも治まっていた。

良かった。これでいつも通りの顔をして家に入れる。

家は次の角を曲がって二軒目。もうすぐだ。

なんだか急にお腹も空いてきた。胸がいっぱい食べられないかと思っていたけど、わたしってそこまで繊細じゃなかったんだ。

一人で小さく苦笑しながら角を曲がり。

「！」

わたしは思わず足を止めてしまった。

家の前に人が二人立っていた。

見覚えのある背中には仁だ。その向かいに立っているのは、髪の毛の長い女性。あ！あの人だ。

すぐに名前を思い出した。「小枝子さん」だ。以前、動物園で会った仁の彼女。髪をアップにしていたあの時とちょっと印象が違って見えるけど、確かにあの時の人だ。

仁の声が微かに聞こえる。何を言っているかはわからない。微かに俯き加減の小枝子さん。あまり楽しそうな雰囲気には見えない。

どうしよう。思いつきり近付き難い。だけど、家には帰りた  
いし。でもやっぱり一度引き返す？　だけど、わたしがコソコソする  
必要は……。

迷っていると、小枝子さんが顔を上げた。

小枝子さんの目が微かに見開かれた。わたしに気付いたようだった。

わたしは小さく会釈した。気付かれたのなら仕方がない。挨拶でもしてすぐに家に入ろう……そう思って一歩踏み出そうとした時だった。

小枝子さんが突然仁に抱きついた。仁の首に腕を回し、顔を近付ける。

「おい」

仁が戸惑ったように上げた声は、すぐに遮られた。

キス、してる！

わたしは動けなくなった。

なんで！？ わたしに気付いたんじゃないの？ なんになんでそこでキスなんかするの？

頭が混乱する。どうすればいいのか分からない。見てはいけないものを見ているような気分だ。わたしは茫然と立ち尽くした。

たっぷり十秒は経った頃、ようやく小枝子さんが仁から離れた。そして、あきらかにわたしに目を向けてにっこりと笑った。

その瞬間、さっきのキスはわざとわたしに見せつけたのだとわかった。

カツと頭に血がのぼった気がした。

「おかえりなさい、かずね、ちゃん？」

小枝子さんの言葉に、仁が弾かれたように振り返った。

「カズ……！！」

驚いている仁の顔。わたしはサッと顔を背けた。

なんだか仁の顔がまともに見れなかった。わたしは速足で近付いた。

「ただいまっ……」

仁の傍らをすり抜け、ガシャンと乱暴に門を開ける。でも、なん  
でわたしがこんなに慌てなきゃいけないの？

わたしは玄関のドアを開けようとして踏み止まり、勇気を振り絞  
って二人を振り返った。

「余所でやって。家の前で迷惑だから！」

それだけを言って、わたしは玄関の中へと逃げ込んだ　そう、

逃げ込んだのだ。ひどくいたたまれない気がした。

なんなの、なんなの、あれ？

そして、わたしも。なんでこんなに不愉快になってんの？　全部  
意味が分からない。

「和音？」

リビングからおとうさんが顔を出した。

「おかえり　どうした？」

わたしは慌てて笑顔を作って靴を脱ぐ。

「ただいま。ごめん、なんでもない」

「かじゅ！　おかえりー！」

パタパタと希望が駆けてくる。愛くるしい希望の笑顔も、なぜだ  
か今のわたしは受け入れられなかった。



「えっとー、のんねー」

「ごめん、のん。ちょっと手洗ってくるから」

足に纏わりつく希望を冷たくあしらって、わたしはまっすぐ洗面所へ向かった。

「和音。外に仁いなかったかー？」

おとうさんの呑気な声に「知らない」と答えた。  
ほんとうに、知るもんか、あんな人たち。

訳の分らない苛立ちに支配されながら、わたしはバシャバシャと乱暴に顔を洗う。何度も何度も。

そのうち、何故だか涙が出てきた。

ほんの少し前まで感じていた琢磨くんのぬくもりは、一体どこへ消えてしまったのだろう。

鏡に映った自分の顔をじっと見つめ、唇にそっと触れてみる。

あの時確かに触れた琢磨くんの温かさは、もう感じる事が出来なかった。

寂しい。

わたしはぎゅっと唇を噛み締めた。

あのぬくもりがひどく恋しかった。

（第五話 完）

## 6（後書き）

第五話終了です！ ありがとうございます！ 第六話に続きます。  
こんな作品ですが、感想・評価頂けると嬉しいです^^

肌を切り裂くような冷たい風が吹いて、わたしは思わずマフラーに顔をうずめた。

「うーっ、さむいつ！　ね、のん」

「うんっ、たむいねえ」

手を繋いでいた希望がわたしを見上げてニカッと笑った。鼻の頭が真っ赤だ。

「風邪ひかないようにしてね　よいしょっ！」

希望を抱きあげて自転車の前座席に乗せる。なんだかシートが窮屈そうに見えるのは、もこもこ着膨れしているせいか、それとも希望が大きくなったのか。ついこの間まで赤ちゃんだと思っていたけど、希望ももう三歳半になるのだ。

「さあ、帰るよー」

「はーい！」

保育園からの帰り道。辺りはもう薄暗く、そのせいか寒さも一段と厳しく感じる。

「じんぐーべー、じんぐーべー、ちゅぢゅがーなるー！」

声高らかに歌いだした希望に、つい笑みがこぼれた。

「上手だね、のん。保育園で歌ったの？」

「うん。もうしゅぐねー、くりちゅまちゅなんだってー」

「そうだねー、もうすぐクリスマスだもんね」

楽しげな希望の声にわたしも笑って答えたけれど、内心はちょっと複雑な気持ちになった。

クリスマス。

その日はわたしたち家族にとってとても特別な日だ。

お母さんが死んだ日。

それは一年前のクリスマスのことだった。

「じんぐーべー、じんぐーべー ……」

希望のご機嫌な歌声を聞きながら、あれからもう一年が経とうとしているのかと、しみじみと思った。

「十九日、空けてるよな？」

夕食時、確認するようにおとうさんが言った。

「うん」

「わかってるよ」

わたしと仁の返事が重なる。

十九日はお母さんの一周忌の法要を執り行う日だ。命日は二十五日だけど、その周辺の日時は皆何かと忙しかったりするだろうということで、その前の日曜日にやってしまうことにしたという。親戚

も多く集まってくれるそうだ。ただ「親戚」と言っても、お母さん側の血縁はいないので、おとうさんの方の親族ばかりで、はつきり言ってわたしにとってはあまり馴染みのない人たちばかりだ。

「いろいろ忙しいけど、手伝ってくれよ。その代わりクリスマスもクリスマスイブも好きにしていいいからな」。デートするなり何なりご自由に」

「ハイハイ」

からかうようなおとうさんの言葉もいい加減もう慣れてきて、こういう時わたしは適当にあしらうことにしている。仁も同じで、本気で取り合うことなく小さく鼻で笑っただけだった。

「希望はクリスマスはとうさんと一緒にパーティーしようなあ」

「パーティー？」

希望が何の事？　とでも言うように、きょとんとおとうさんを見返した。

「おお。クリスマスパーティーだぞ。御馳走食べてケーキ食べて、歌も歌って、な」

「じんぐーベー、じんぐーベー？」

「そうそう！　上手いな、希望」

って、おとうさん、褒めている場合じゃないよ。希望、ご飯口に入ったままで歌ってるし。だけど、和やかな雰囲気壊したくなくて、そのまま黙っておくことにした。

「カズ。それとって」

「あ、はい」

言われてサラダの入った器を仁に渡す。その時、なんだか妙にバツチリ仁と目が合ってしまった。

「何？」

「いや、別に。サンキュ」

仁はごく自然に目を逸らし、器を受け取った。

なんだろう？ 何か言いたげに見えたのだけど 気のせいだったのかな。なんか釈然とせず、ついため息をつきそうになり慌ててそれを飲み込んだ。

最近、仁とは前ほど話さなくなった。ひと月ほど前の、ちょっとした喧嘩がきっかけだった。

だけどその後きちんと仲直りはしたし、それを引きずっているわけではない。その後もごく普通に話もするし、冗談を言い合ったりもする。ただ、その回数が減ったのだ。顔合わせる事自体も前より減ったような気がする。こうして夕食を一緒に取るのも、考えてみれば三日ぶりだった。

確実に。そう、少しずつだけど確実に、仁とは距離が離れていつてる。たぶん、それは間違いないと思う。

そのことが寂しい そう感じているのはわたしの方だけなのだろうか。

「ありがと。戻して」

サラダを渡され、わたしは黙って受け取った。

仁はどう思っているのだろうか？ 聞いてみたい気もするけど、改

めて聞くような事でもないと思う。複雑な心境だ。

「じんぐーべー、じんぐーべー、ちゅっぢゅがぁなるー」

希望の歌はまだ続いていた。

「うわ……」

店の中に一歩足を踏み入れるなり、そのあまりの人の多さにわたしたちは思わず顔を見合わせた。

今日は十二月の第二日曜日。おもちゃ屋さんは通路をまっすぐ歩けないくらいの混雑ぶりだ。

クリスマス前なのだから仕方ない。一番おもちゃが売れる時期なんだから。

「こんなに多いとは思わなかったな」

琢磨くんが長いため息をついた。琢磨くんは普段おもちゃ屋さんになんて来ることも少ないだろうし、そりゃ驚くかもしれない。

「すごいでしょ」

「親って大変なんだな」

「うん。子どものプレゼントってけっこう迷うんだよ」

わたしは親ではないけれど、希望のプレゼント決めるのには毎度頭を悩ませる。

だけど、今日は大丈夫だ。

「えっと こっち」

琢磨くんの腕をとって、半分引つ張るような形で人の間を縫い歩いて行く。



店の混雑は予想していたことだ。だから、店の中で迷う必要がないように、買う物はもう既に決めてある。仁との共同出費だけだ。

「あ、ここだ！」

ブロック売り場に辿りつき、私は足を止めた。ここにもたくさん人がいたが、コーナー自体十分なスペースがあつて、ゆっくり品物を手に取って見ることができそうだ。

「うわ、懐かしーな、これ。俺んちにもあつたな」

陳列棚にズラリと並んでいるのは、昔からあるとてもメジャーなブロックだ。

「すごいな。今こんなまで出来るんだ」

立派な機関車ができるブロックのセットを見て、琢磨くんがため息を漏らした。

「いいなあ。オレも子どもに戻りたい」

「あ、ほら。あそこに遊ぶところあるよ。行ってきたら」

売り場の端の方に、ブロックで自由に遊べるスペースが設けられてあった。もちろん子どもたちのプレイスペースで、今も小さな子どもたちが大勢遊んでいる。そこを指差して言うと、琢磨くんは「こら！」とわたしを叩く真似をして苦笑した。

「ったく。で、何買うの？」

「えーつとね……あ、これこれ！」

目当てのものを見つけて、その商品の箱を手にとった。両手で軽く抱えるほどの大きさだ。

「へえ。空港と飛行機……いいな、それ」

わたしが抱えた箱を覗き込んで、琢磨くんが子どもみたいに目を輝かせた。なんか、さっきからすごく楽しそうだ。

「琢磨くん、ブロック好きなの？」

「ブロックって言うか。おもちゃ見るのが何か楽しい」

辺りを見渡して、琢磨くんが笑う。

「あのさ、せつかくだから、ほかのも見ていい？」

「え？ いいけど」

ちょっと意外だ。希望のクリスマスプレゼントを買うのに無理やり付き合わせた感じになって、申し訳ないなと思っていたのだけど、どうやら琢磨くんは琢磨くんですれなりに楽しんでくれているようだ。

「あー、見て。これいいな」

「うん、かわいい！ ねえ、これは？」

「何それ？ お！ おもしろい！」

レジの方に向かいがてら、とりあえず目に付くものを片っ端から手にとって遊んでみる。

赤ちゃん用のおもちゃだったり、女の子用の着せ替え人形だったり、男の子用の車の玩具だったり。とにかく面白そうなものはなん

でも手に取ってみた。

人は多いけど、そんなの気にならないくらい、なんだかすごく楽しい！

「あ」

急に琢磨くんが足を止めた。

「どうしたの？」

「あれって、仁さんじゃない？」

「えっ？」

咄嗟に琢磨くんが目で示した方を見たけど、人が多過ぎてよくわからない。

「どこ　あ！」

人の波の向こうに、見覚えのある髪型の男の人を見つけた。横向いていて顔はよく見えないけれど、間違いなく仁だ。

「今日はバイトじゃ……」

言いかけて、すぐに口を噤んだ。日曜日はいつもアルバイトに出ている仁だけど、ここにいてことはきっと休みだったのだろう。

聞いてなかった。

思わず唇を噛みしめてしまった。以前は休みかどうかなんて全部把握してたのに。なんか複雑な気分だ。

「隣にいるのは彼女かな」

琢磨くん言葉に改めて仁の方を見ると、確かに隣に女の人がい  
た。

だけど、その人はわたしの知っている仁の彼女の「小枝子」さん  
ではなかった。今仁の隣にいるのは全然知らない人だ。だから、そ  
れが「彼女」かどうかなんて当然知る筈もない。

「ね、もうそろそろ出よう」

わたしは琢磨くんの袖をクイツと引っ張った。

「声、かけないの？」

「いいよ、そんなの」

声かける必要なんてないし。

さっきまでの楽しい気分もなんだかあっという間にしぼんでしま  
って、わたしは急ぎ足でレジの方へと向かった。今ここで仁と顔を  
合わせたくなかった。

琢磨くんはそれ以上は何も言わずについて来てくれたけど。

彼の口からもれた小さなため息は、周りの騒音にかき消されるこ  
となく、鮮明にわたしの耳に届いたのだった。

買ったプレゼントは宅配してもらうことにして、わたしたちはおもちゃ屋近くのカフェに入った。

「ごめんね、付き合わせちゃって」

「いや。楽しかったよ。いい気分転換になった」

琢磨くんの言葉は多分嘘ではない。最近のわたしたちとはにかく受験勉強に追われている。別に、がむしゃらに勉強だけをしている訳ではないけれど、たまには勉強なんて忘れて、おもちゃ屋さんではしゃぐのも息抜きにちょうど良かったのではないかと思う。

ただ、思いもかけない人がいて焦ったけれど。

温かいミルクティーの入ったカップを両手で包み込んで、わたしは思わずため息をついた。

仁、バイトが休みだなんて、一言も言ってなかった。だけど、例えば昨日も今朝も、仁とは会話らしい会話をしていないような気がする。聞いていなくても当然なのかもしれない。そもそも、わたしが仁のスケジュールをいちいち把握してなきゃいけないってことはないのだ。

だけど……。

仁の隣にいたあの人が、誰だろう？　新しい彼女かな。小枝子さんとは別れたのだろうか。

「和音、今何考えてる？」

その柔らかな声に、わたしはハツとして顔を上げた。琢磨くんが真っ直ぐにわたしを見ていた。

「仁さんのこと、考えてた？」

「え……」

「図星、かな」

琢磨くんの口調はいつも通り優しく、カップを口に運ぶ仕草もいつもどおりなのだけど。

怒ってる ような気がした。

「……ごめん」

わたしは素直に謝った。「違う」と言うのは嘘をつくことになる。

「仁がまさかあそこにいるなんて思わなかったから……バイト休みだつて聞いてなかったなつて」

「それだけ？」

「え？」

「さっきの和音、まるで逃げるみたいだったね」

逃げる……？

意外な言葉に何も言い返せないでいると、琢磨くんは静かにカップを置いて、ゆっくりとわたしに視線を向けた。

「動揺した？ 仁さんの隣にいる人見て」

「え」

心臓がドキンと音を立てた。

動揺した、と言われたことに動揺した。

「ち、違うよ」

わたしは慌てて首を振った。

「ちょっと気になっただけ。あの人、わたしの知ってる彼女と違う人だったから　だから、前の人とは別れ　」

「ごめん」

わたしの言葉を琢磨くんが強い調子で遮る。そして自嘲するように笑った

「違うんだ、ごめん。別に和音を責めてるんじゃないくて……オレ、駄目だな」

独り言のようにそう呟くと、琢磨くんはそれきり黙り込んでしまった。

わたしはどうすればいいのかわからなくて、わたしから顔を背けるように窓の外を眺めている琢磨くんの横顔をただ見つめた。これまで見たことのないような琢磨くんの険しい表情に戸惑う。

でも、琢磨くんにこんな顔をさせているのは、間違いなくわたしなんだ。

そう思うと、どこまでも気持ちが落ち込んでいく気がした。

「ごめんなさい」　そう言おうと思って、口を開きかけた時、  
「オレね」

琢磨くんが小さな声で話し出した。でも目は窓の外に向けたままだった。

「オレ……自分でも気付いてなかったんだけど、けっこう独占欲が強いみたいだ」

「え？」

「オレの前で和音が別の人の事考えてるのとか、なんかすっぱー嫌」

やっと琢磨くんがわたしの方を見てくれた。

「たえそれが仁さんでも　いや、違うな」

小さく首を振って、琢磨くんは改めて口を開いた。

「仁さんだから、余計嫌だ」

「え……」

「馬鹿みたいだろ？　オレ、未だに仁さんに嫉妬してんの。和音の兄さんという立場にいる仁さんに」

どう答えたらいいかわからず黙りこむことしかできないわたし。  
琢磨くんは小さく笑った。

「ごめんね、こんなで。情けないよな。　呆れた？」

気遣うような優しい声。それはいつもの琢磨くん。  
そのことがホッとするというよりも、なぜだか胸が痛かった。

「呆れたり、しないよ」

わたしはゆつくりと首を振った。

「誰だって自分の前で他の人のこと考えられたら嫌だもん。だから



……ごめんなさい。わたしが悪いよ」

わたしが仁の事を気にしたりしたから。だから琢磨くんの不愉快な思いをさせてしまったのだ。琢磨くんに変な嫉妬させているのはわたしだ。

わたしは顔を上げて、まっすぐに琢磨くんを見つめた。

「仁の事考えてたのは本当。だけど、隣にいた人見て動揺したとかそういうことじゃないの。なんか、今まで知ってて当たり前だったことを知らなかったのがちょっとショックだったから」

琢磨くんは黙ってわたしを見返している。

「……ごめん。言い訳がましいよね。……ごめんなさい」

「和音」

頭を下げようとしたわたしを止めるように、琢磨くんが口を挟んだ。

「聞いてもいい？」

「……？」

「和音にとって、仁さんって何？」

怖いぐらいにまっすぐにわたしの目を見て琢磨くんが言った。

わたしは問われた言葉を心の中で繰り返す。

わたしにとって仁は何か 答えは簡単だ。

「仁はお兄さん」

「じゃあ、もう一つ。和音にとってオレは何？」

少しだけ緊張した顔の琢磨くんは、それでもわたしを真っ直ぐに見ていた。だから、わたしも琢磨くんから目を逸らさなかった。

琢磨くんは真剣だ。わたしも誤魔化したりなんかせず、真剣に答えなければいけない。

わたしは一度深く息を吸って気持ちを整えた。

わたしにとっての琢磨くんは。

「好きな、人」

自分でも驚くぐらいスルリとその言葉が出てきた。

琢磨くんは眩しそうに目を細め「ありがとう」と笑った。それは琢磨くんがようやく見せた、いつもの優しい笑顔だった。

十二月十九日。

お母さんの一周忌の法要には、お母さんと親しかった友人の方たちも出席して下さって、思ってたよりも人が集まってくれた。十五人ぐらいだ。そのうち半分がおとうさんの親戚。その内訳はだいたいこんな感じだ。

おとうさんのお父さんお母さん（つまりおじいちゃんおばあちゃん）、おとうさんのお姉さん御夫婦、妹さん御夫婦、そしてそれぞれのお子様たち　はつきり言って、おじいちゃんとおばあちゃん以外は顔と名前が一致していなかったりする。だって、顔を合わせたことなんてほとんどないのだ。

わたしはとくに人見知りをするタイプではないけれど、決して気安いタイプでもないと思う。

そんなわたしが、お母さんの再婚で突然「親戚」になった「伯父（叔父）」「伯母（叔母）」や「従兄」たちと、急に親しく出来る訳がなかった。

寺での法要が終わった後のお斎は、寺から近い料亭で行われた。最初のうちは静かだったその場の雰囲気も、時間が過ぎて行くにつれ、賑やかになっていく。

周囲がガヤガヤと賑わっている中、わたしはただ黙々と料理に箸を付けていた。

おとうさんはずっとお坊さんの相手をしている。隣には仁が座っ

ていたが反対側の隣の「親戚」の相手をしていた。二人ともわたしのことには構っている場合じゃないようだ。

……なんて、別にかまって欲しい訳ではないけれど。

希望はというと。

少し離れたところに座っているおじいちゃんおばあちゃんの方を見て、わたしは思わず頬を緩めた。

希望は、おばあちゃんの膝の上にちょこんと座って、フルーツを手にニコニコしている。すこぶるご機嫌のようだ。

今朝会った瞬間から、おじいちゃんおばあちゃんは希望にべったりだった。孫たちの中じゃ一番小さいし、可愛くて仕方がないのだろうと思う。希望は、久し振りに会う祖父母のこと、顔を見てもピンとこなかったらしく、最初のうちこそ「誰だろう？」というように見ていたけど、もともと人見知りしない性質だ、すぐに懐いてしまった。

いつもなら希望の世話で何かと忙しかったりするわたしも、きょうばかりはお役御免だ。

おかげで、気が付けばわたしはポツンと一人。

人が集まって賑やかなだけに、この孤独感はいたたまれなかった。極端な話、「仲間はずれ」にされているような気がした。被害妄想だとわかっているけれど。

会食が始まってまだ間もないのに、「早く終わらないかな」とばかり考えてしまう。

そんな自分がたまらなく嫌だった。今日はお母さんのためにみんな集まってくれたのだ。娘のわたしがこんなにふてくされてたんじや申し訳ない。

せめて余計な事を感じなくても済むよう、目の前の料理に集中した。減多に食べることもない豪華な食事。だけど、ちっとも味なん

かわからなかった。

「暗いな」

茶碗蒸しをぱくりと口に入れた時、左側から突然声をかけられた。スプーンを口にいれたまま振り向くと、仁と目が合った。

「何が？」

ごくりと茶碗蒸しを飲み込んで聞くと、仁は小さく笑った。

「カズが。大丈夫？」

「大丈夫って 別に普通に食べてるだけだよ。仁は話はいいの？」

さっきまで仁は隣のおじさんと何やら話しこんでいた。

「下田のおじさん あ、父さんのお姉さんの旦那さんね。トイレだよ。酒飲んでたからなあ。俺もかなり飲まされた」

そう言う仁の顔は、確かに仄かに赤い。酔ったというほどでもなさそうだが。

「少し休憩。ちょっと話し相手になって」

仁の笑顔にわたしは複雑な気持ちになる。

多分、というか絶対に、仁はわたしの孤独感に気付いている。わたしが親戚の中に馴染めていないことがわかってるのだ。

気を使わせてる……そう思うと余計惨めな気がした。だけど、こ

の気遣いにホツとしたのもまた事実だった。

「希望、人気者だな」

仁が希望の方を見て笑った。希望は今はおじいちゃんおばあちゃんに限らず、いろんな大人たちから囲まれている。

「あれだけ愛想いいと可愛がられるよな」

「ほんと。わたしとは大違いね」

そう言った後、自分でため息をついてしまった。なんなの、わたし。すっかり卑屈になっちゃって。

仁は苦笑いを浮かべた。

「あのなあ。カズが愛想振りまいたってしかたないだろ。子どもだから許されるんだよ」

「わかってるよ。ちよつと言ってみただけ」

「あ、また」

指を差されてわたしは首を傾げた。

「また？」

「ため息。さつきからカズそればっかだぜ」

「えっ」

そんなにため息ばかりついていただろうか。わたしは思わず口を手で押さえてしまった。

「ま、無理もないかな。いいさー、時には。ため息ぐらいついたって」

仁はそう笑ってグラスに入ったビールをグイッと飲むと、今度は自分が長いため息について思い出したようにニヤリとした。

「それよりも、カズ。こないだ、トイザ スに行っただろう？ 木村くんと」

「！」

「俺もその時そこいたんだよ。カズ達に気付いたけど、邪魔するのもなんだし、声はかけなかった。のんのプレゼント買い？」

なんだ。あの時仁もわたしたちに気付いていたんだ。

「わたし達も仁に気付いてたよ」

「へー。そうだったのか？」

「あの人じゃなかったね」

「あの人？」

「小枝子さんじゃなかった、一緒にいた人。新しい彼女？」

仁は何度が目を瞬かせて、ようやく「あー」と手を打った。

「たぶん、それカズの勘違い」

思いがけない言葉に目が点になってしまふ。

「勘違い？」

「そ。俺、友達四人で行ったもん、ゼミの忘年会用の買い出しに急に借り出されて。一人女の子いたけど友達の彼女。カズが見たの、その子だろ」

友達の彼女？

なんだか肩すかしを食った気分だ。

「てつきりまた違う彼女が出来たのかと思ってた」

「違う違う。……でも、ついでだから言うけど。小枝子、なんだけどさ」

仁が私を見て少し首を傾げ、どこか複雑そうな表情かおをする。

「俺」

「よっ。お二人さん！」

急に背後から声をかけられ、わたしと仁は同時にビクッと体を震わせた。

「なんだ、ケンちゃんか」

仁が振り向いて息をつく。

「何二人で話しこんでるのさ。俺もちよつと仲間に入れてよ」

そこにいたのは仁と同じ年くらいの眼鏡をかけた男の人だ。人の良さそうな笑顔を浮かべている。誰だっけ……。

「カズ。こいつ従兄の健二。下田の伯母のこの末息子だよ。ちなみに、俺より二つ年上」

「よろしく。和音ちゃんと会つのは二度目かな。と言っても、一度目は去年のおばさんの葬儀の時だから、和音ちゃん、憶えちゃいないだろっね」

「ごめんなさい」

つい謝ってしまうと、健二さんは慌てたように目の前で手を振っ



た。

「ごめんごめん。謝らないですよ。あんな時だから、憶えてなくてもしょうがないから。こっちこそ悪いね」

健二さんはそう言ってポリポリと頭を掻いた。

「で、なんだよケンちゃん」

「じんー。そう冷たくしないでよ。俺も話に入れてって。でもさ、さつきからお前ら後ろから見てたんだけどさ」

健二さんは内緒話をするみたいに、顔をわたしたちの間に寄せて声を小さくして言った。

「恋人同士かと思っただぞ」

わたしと仁は思わず顔を見合わせた。

恋人同士　どこが？

「あほか。昼間っばらから酔っばらってんじゃねーの」

仁が苦笑してビール瓶を手取る。健二さんは笑いながら「酔ってないぞー」と胡坐を組み直した。

「客観的に見ると、お似合いだぜ、お前ら」

「ふざけるなって。よりによってこんな日に」

仁は健二さんにグラスを持たせ、そこにビールを注ぐ。

「それに、和音にはちゃんと彼氏がいるんだよ」

「え、マジ？ 惜しいなー、仁。ねえ、その彼氏、仁よりいい男？」

健二さんが興味深々というようにわたしに詰め寄ってくる。やっぱり、けっこう酔ってるようだ。

参ったな……。

わたしが若干体を逸らしながら笑ってごまかしていると、仁が健二さんの襟首を捕まえて、ぐっと後ろに引いた。

「そのことはもういいから。ケンちゃんの話聞かせろよ。就職どうなった？」

「お？ おお！ それがさー聞いてくれよー」

健二さんの話が就職のことに移った。

仁がわたしを見てニツと笑みを寄越した。仁が意図的に話を逸らしてくれたのは明らかだ。わたしは声は出さず「ありがとう」と口だけ動かした。仁はもう一度微笑んで健二さんに目を戻したのだった。

三時間ぐらいが経ち、会食はようやくお開きになった。わたしにとっては六時間ぐらいに感じられたけれど。

皆が帰っていくのをお見送りしている間、わたしは内心何度もほっと息をついていた。

親戚付き合いも大変だ　と、久し振りにひどく気疲れした一日だった。

そんなふうに思っでごめんね、お母さん。



十二月二十四日。言わずと知れたクリスマスイブ。

学校も今日が終了日で、教室中がどこか落ち着きがない。今日ばかりはみんな「受験生」であることなどすっかり忘れてしまったかのようだ。

「ね、カズ！ 今日はどうすんの？」

ホームルームが終わり、友達的美香がニヤニヤしながら詰め寄ってきた。

「これから木村さんと一緒に過ごすんでしょー。いいなあ、もうっ！ やけちゃうよー！」

勝手に解釈して冷やかす美香に、わたしは苦笑いした。

「別に何にもないよ。わたしは家で楽しくパーティーすんの」

美香は驚いたように目を丸くした。

「えっ？ あーそうかあ。弟くんね……」

「うん」

「あ、じゃあ、木村くんとは明日？」

わたしは小さく笑って首を振った。

「明日も別に」

「えー？　なんで？」

明らかに非難めいた目を向ける美香。悪気はないのだろうけど、ちよつとだけ面倒に感じてしまつて、わたしは早口で答えた。

「明日はお母さんの命日なの。だから家にいたいってゆう、それだけ」

「あつ　ごめん……」

美香が口を押さえた。ついきつい口調になつてしまった　わたしは慌てて美香の肩を叩いた。

「こつちこそごめん。美香、気にしないでね」

ちょうどその時、琢磨くんがこちらに向つてくるのが見えた。

「　じゃあね、美香。メリークリスマス！　良いお年を！！」

「あ……うん！　またね。メリークリスマス！」

まだ少し気まずそうな表情を残しながらも、美香は笑顔で手を振ってくれた。わたしは鞆をとつて琢磨くんの所へ駆け寄つた。

「話、いいの？」

琢磨くんが美香の方を見て首を傾げた。振り返ると、美香はまだわたしを見ている。もう一度手を振ると、美香も笑つてそれに応えてくれた。

「いいよ。帰ろう」

「うん」

そうして二人で一緒に教室を出て、いつもと同じように一緒に帰る。クリスマスイブだからって、何も特別な事はない。だけど、それじゃ駄目なのだろうか。

クリスマスは恋人と過ごす　いつからそれが当たり前のことのようになったのだろう。一緒に過ごさないというだけで逆に驚いたような顔をされるなんて、なんだか変な感じがした。

\*

\*

\*

「今年ももう終わりだねー」

自転車をゆっくり走らせながら、木村くんが長く息を吐いた。白い息がほわりと漂う。

「年明ければすぐセンターか……早いな」

「ホントだね。そう考えると、きっと高校生活なんてあっという間に終わっちゃうね」

あと三ヶ月　登校する日数だけ考えると、本当に数えるぐらいの日にちしかない。自分で言った言葉ながら、急に寂しくなってしまう。

「もっとこのままでもいいけどなあ」

ついそう口走ると、琢磨くんはわたしに目を向け「そうだね」と微笑んだ。きつと琢磨くんも同じ気持ちだったのだろうと思う。

家の近くの公園に着いた。琢磨くんを送ってもらう時にいつも別れる場所だ。

「和音　少しだけ、いい？」

いつもならそのまま別れるのだけど、琢磨くんはそう言って公園の中を指差した。まだ五時を少し回ったぐらいだ。時間はまったく問題ない。それにわたしも琢磨くんはまだ用事があった。

冬場の五時はすでに辺りも薄暗く、この小さな公園で遊んでいる子どもはもういない。今はわたしたちだけだ。

二人で公園の中のベンチに並んで座ると、どちらからともなく笑い出した。

「おしり、冷たいよ」

そのベンチは木製ではなくプラスチックのもので、座ったとたんに冷たさが伝わってきてなんだかおかしかったのだ。

「冷えるからすぐ帰ろう」

琢磨くんは笑いながら、ポケットの中から何かを取り出し、そのままわたしに向けて差し出した。

「はい、これ」

その白い箱には金色のリボンが綺麗にかけられている。

「メリークリスマス。大したものじゃないけど、受け取ってくれる

と嬉しい」

はにかんだように笑う琢磨くん。わたしはドキドキしながらその箱を受け取った。

「嬉しい……ありがとう」

大切に両手で包み込む。そこから琢磨くんの温かさが伝わってくるような気がした。

「開けてみて」

わたしは頷いてリボンを解き、丁寧に包装紙をはがす。包装紙の中は白い箱。その白い箱の中に小さな布張りの化粧箱。そして、その中に入っていたのは。

「うわぁ……かわいい……」

金色のハートのネックレス。シンプルだけど、すごく綺麗で大人っぽいデザインだった。

「ブランド物とはいかなかったけど。和音に似合うかなと思って。良かったら、つけてみて」

「え うん」

マフラーを外すと思わず身震いをするほど寒気が襲って来たけれど、そんなの全然気にならなかった。手がかじかんでしまって、留め具がなかなか止められないしていると、琢磨くんが後ろに回ってそれを止めてくれた。

胸元で揺れるハートを見て、ぐっと胸が一杯になる。



感激しすぎて言葉が出ない。これを琢磨くんはどういう気持ちで選んでくれたのだろう　それを思うと、どうしても涙が出そうだった。

「良かった、似合う。かわいい」

「ありがとう……！　大事にする」

もう一度ギュッと固く握りしめる。

本当に、ずっと大事にする　心の中でそう呟いて、わたしは自分のバッグから赤いリボンのかった緑色の包みを取り出した。

「今度はわたしから。メリークリスマス」

「あ……ありがとう」

琢磨くんは目を丸くして包みを受け取り、しばらくそれをじっと見つめた後、ようやく頬を綻ばせた。

「いや、なんか……メチャクチャ嬉しい。開けてもいい？」

照れくさくてただコクリと頷くと、琢磨くんはガサガサと包みを開け、中身を取り出した。

「手袋！」

嬉しそうに笑ってそれを早速手にはめてみる琢磨くんは、わたしまで嬉しくなった。モスグリーンの手袋、選ぶとき迷ったけれどこれに決めて良かった。

「あったかい。ありがとうね」

うん、と頷いた時、鼻がむずむずつとして、こらえきれずくしゃみが飛び出してしまった。

「あ、マフラー」

わたしが外したままだったマフラーを取って、琢磨くんがフワリと首にかけてくれた。

「風邪ひくよ」

そのままマフラーをくるりと巻いてくれて。

「！」

不意にぎゅつと抱きしめられて、わたしは驚きのあまり硬直してしまった。

「ごめん。十秒だけ」

その声に、わたしは力を抜いた。耳元で琢磨くんが小さく息を吐く。

「本当は……もっと一緒にいたいんだ。オレだって男だし　いろいろ考える」

「え……」

ドキッとして思わずまた身を固くすると、琢磨くんは慌てたように体を離れた。

「ごめんっ！　オレ何言っただろう……今の無し！　忘れて」

琢磨くんは取り繕うように笑いながら自分の鞆を取ると、そのまま公園の出口の方へ足を向けた。

「じゃ、帰ろう！ 本当に風邪ひきそうだ」

そんな琢磨くんの広い背中を見たたん、わたしの鼓動がまた早鐘を打ち出した。

わたしよりもずっと大きな背中。

そうか。琢磨くんは男の人なんだ      そんな当たり前のことが、  
今になってやけに意識された。

玄関のドアを開ける　その前に、わたしは一つ深呼吸をした。  
琢磨さんと公園で別れ、ほんの二、三分の道のりをゆっくり歩いて帰って来たけれど、ずっと琢磨さんのことが頭から離れなかった。  
胸元をギュツと握りしめる。マフラーの下には贈られたばかりのネックレス。琢磨さんの思いが伝わってくるような気がした。

温かい。だけど、どうして。どうしてこんなに不安になるのだろう。

琢磨くんは、いつでも真っ直ぐに思いを伝えてくれる。その度にわたしの胸は「温かさ」と「幸せ」に満たされる。

だけど……わたしは同じ温かさを、幸せを琢磨くんに返しているのだろうか。わたしは与えられているばかりで、何にも返していないではないか？

心に浮かんだ「後ろめたさ」に、思わず唇を噛みしめた。

琢磨くんの言葉が耳に残っていた。

『オレだって男だし　』

そんな当たり前のことに、なんでわたしは今さら　これ以上は考えるのが怖かった。

「どうした？」

「！」

急に声をかけられわたしはビクツと振り向いた。すぐ後ろで仁が首を傾げている。

「びつくりした……お、おかえり」

「ただいま。って、カズそこで何してんの？ 中入んないの？」

「あ、入る入る！ わたしも今帰って来たところ」

わたしは取り繕うように笑って玄関のドアを開けた。こんなところでいつまでも考え込んでたって仕方がない。ちょうど仁が帰ってきてくれてよかった。

「ただいまー！」

仁と声をそろえて言うと、待ち構えていたかのように部屋から小さな影が飛び出してきた。

「おかえりー！ じんー、かじゅー！」

急いたようにわたしと仁の手を取り、ぐいぐいの中に引っ張っていく。

「きてきてー！ きょうねーぱーていーだよー！ けーきもかってきたんだよー」

文字通りきらきら輝いている希望の目に、ホッと和んで力が抜けた。

そうだ。今日は「パーティー」だ。いろいろ考えるのは今は無しにしよう。

「ケーキどんなの？」

「えっとねー、たんたたんがのってんだよ！ おうちとねー、いちごがいっぱあいなの」

身振り手振りで表現しようとする希望。仁がその頭をくしゃくしゃと撫でた。

「へえ。おいしそうだな。サンタさん、ジンがもらっていい？」

「だあめっ！ たんたたん、のんのっ！ おうちもののんだもん」

希望はブーツと頬を膨らませ、上目遣いに仁を睨みつけたのだった。

とりあえず着替えを済ませてから階下へ降りると、テーブルの上にはすでに料理が並んでいた。大きなチキン、サラダ、キッシュにローストビーフ。テーブルの上はもう一杯だ。

「すごい！ これおとうさんが作ったの？」

「もちろん！ と言いたところだけど、ほとんどデパ地下。

盛り付けだけな」

笑いながら頭を掻くおとうさん。でも、盛り付けのセンスもなかなかだと思うよ。

「ほら、カズ。これ！」

仁がポイッと投げてよこしたのは、パーティー定番の三角帽子だ。そうそう。我が家は希望が生まれてからは祝い事の際はこれをかぶるのがお決まりだ。仁はそれを希望にかぶせてやって、自分の頭の上にも乗せた。もちろんわたしも、おとうさんも。傍から見ると、いい大人が何をやってんだか と思うのかもしれない。だけど、

たったこれだけのことで気持ちも明るくなるし、その場がぐんと賑やかになる。演出って大事だ。

それから、仁はリビングのCDを付けた。流れてきたのは洋楽のクリスマスソング。なんだかい感じた。

「それじゃ、始めるか」

おとうさんが冷蔵庫からシャンパンを取り出した。

「希望、歌って。せーの！」

「じんぐーべー、じんぐーべー、ちゅっぢゅがあなるー、きょうはあーたのちーくりちゅまちゅ！ へいつ！」

「ジングルベル」

わたしたちも希望に合わせて歌う。歌詞があやふやだから途中は「フンフンフン」だけど。

「メリークリスマス！」

歌が終わって、おとうさんがシャンパンの栓を開けた。ポンっと小気味いい音が響く。グラスに注がれる淡い透明の液体。シュワッと泡がはじける。

「はい、希望はこれね」

コップにオレンジジュースを注ぐと、すぐに飲もうとする希望。仁がそれを止めた。

「待ったあ。のん、みんなで乾杯してからだぞー」

「あっ！」

希望が慌てて手を引っ込める。その様子がおかしくてつい笑ってしまった。

「和音も少しだけな」

おとうさんはわたしに中が少なめのグラスを渡し、自分のグラスをとって掲げた。

「じゃ。カンパニー」

「カンパニー！」

それぞれのグラスをカチンと軽く合わせる。

メリークリスマス！

その後はプレゼントタイム。まずおとうさんから、次いで仁とわたしから希望へプレゼントを渡す。希望は歓声を上げて跳んだり跳ねたり、もう大興奮だ。おとうさんからは大きな消防車。中にはミニカーが収納できる仕組みになっているらしい。わたしと仁からはこの前琢磨くんと一緒に買いに行った例のブロック。どちらも希望の大好きなものだ。

希望の喜びようだった……！ その満面の笑顔が本当に嬉しい。こっちの方こそプレゼントをもらったような気分だ。

「はい、これ。和音」

「え？」



おとうさんにリボンのつけられた箱を渡され、わたしは目を丸くした。

「クリスマスプレゼント。ほら」

「あ、ありがとう」

まさかわたしまで貰えるとは。まったく予想してなかった……あ。

「ごめん！ わたし用意してないよ」

おとうさんへのプレゼントは全く考えてもいなかった。なんてことだ。

お父さんは苦笑した。

「いいよ、そんなの。小遣いだってそんなにあげてないのに、これは仁ね」

「え、俺も？」

「ついで」

わたしと同じような形の箱を受け取ると、仁は頭を掻いた。

「俺からもないぜ」

「最初から期待してないよ、全然」

この二人、ろくに目を合わせてない。きつとお互いに照れくさかったりするのだろう。この親子ってなんだか……かわいい。言えないけれど。

そんなおとうさんからのプレゼントは　　。

「万年筆……！ あ、名前入ってる！ すごい、高そう」

「悪いけどそんなに高価なものじゃない。でも、持つといて損はないだろうから。和音ももう春から大学生だしね。大人になれば使う機会もあるだろう」

嬉しい。なんだか一歩大人になった気分だ。春から大学生かどうかはまだ確実ではないけど。

仁も同じ万年筆だった。仁は「ありがと」と短く言っただけだったが、おとうさんにはちゃんと気持ちは伝わったようだ。おとうさんも「うん」とだけ答えて嬉しそうに微笑んだ。

「ねー、ごちそうはあ？」

希望が座席に戻ってきてきて目の前の料理を指差した。

「お。そうだな。食べよう食べよう！」

「わあいつ！ いただきまーちゅ！」

そしてわたしたちはそろって食事を始める。

クリスマスイブの晩餐は、いつにも増して笑い声に溢れていた。

夜九時。子どもの寝る時間はとくに過ぎている。

おとうさんが希望を部屋に連れて行ってしまうと、当然、残されたのはわたしと仁の二人になった。

用意した料理はさすがに全部は食べきれなくて、残ったものを小皿にまとめつつ、使った皿を重ねる。洗い物を始めようと席を立つとすると、それを仁が止めた。

「もうちょっと待って。俺まだ飲んでるし」

そう言いながら、空になったグラスにワインを注いでいる。もう何杯目なんだか……。おとうさんと二人で、すでにシャンパンとワイン合わせてボトル三本は空けている。そんなに酔ったようには見えないけれど、飲みすぎじゃないのかな。大丈夫なのだろうか。

わたしは、幸せそうにグラスに口を付ける仁を、呆れ半分で頼杖をついて眺めた。

「お酒ってそんなに美味しい？」

「さあ。実は俺もまだよくわかんね。けど、状況によって味は変わるかな。どんな雰囲気だとか誰と飲んでるかとか。だから、今日のお酒は美味しい」

笑って仁は乾杯するようにグラスを掲げた。わたしは思わず目を瞬かせてしまう。仁のその笑顔がとても優しかったからだ。

「家族そろってパーティーとかいいよなあ」

残った料理をつまみながら仁は続けた。

「この年になってこんなこと言ってるとは思わなかったけどな。子どもの力って偉大だ」

確かにその通りだ。もし希望がいなければ、家族でパーティーとあり得なかっただろう。誰よりも小さな体ながらもその存在感はとても大きい。

「なあ、カズ」

「ん？」

「それ、木村くんから？」

一瞬、何のこと言われたのか分からなかったが、仁の視線をたどってハッと胸元を押さえた。仁が示したのはあのネックレスだ。

「そ、そう」

ネックレスを握り締めたままで頷く。改めて見られるとなんだか恥ずかしかった。

「良かったな。大事にしるよ」

仁はにこりと笑い、またワインを口にした。わたしはホッと息をついた。もっとからかわれるかと思ったけど……良かった。

「だけど、カズも真面目だな。今日ぐらい、もうちょつと遅くても良かったのに。父さんも言ってたろ。デートはご自由につて」

そうなのだ。本当は、今日は少しぐらいなら遅くなくてもい

いとおうさんにも言われていた。なのに、わたしはそうはしなかった。そんなことを考えてもみなかった。希望と　家族と一緒にクリスマスを祝いたかったから。

だけど、それはわたしが琢磨くんより家を選んだということなのだろうか……そんなことが頭をよぎって、むくむくと罪悪感が芽生えた。ふと、琢磨くんの言葉が思い出された。

本当はもう少し一緒にいたいんだ

わたしは小さく首を振った。罪悪感なんか振り払いたかった。

「カズ？　どうした？」

「な、なんでもない。でも、仁こそ今日は帰ってこないんじゃないかって思ってたのに」

慌てて話題を仁の方に向けると、仁はおかしそうに肩を揺らした。

「ひどいな。帰ってきたら悪いような言い方」

「だって、彼女と　」

「彼女なんていないよ」

わたしの言葉を遮った仁に、わたしは驚いて首を傾げた。

「え？　だって小枝子さん……」

「あれ？　言わなかったっけ？　小枝子とはとくに別れてる。あいつとはいろいろあったけど……夏過ぎぐらいかな。もうきっぱり」

夏過ぎ？　でも、わたしが「あれ」を目撃したのは、ほんのひと月ほど前だった。

「キス、してたじゃない」

思わず言ってしまった。仁はピタリと動きを止め、どこか苦笑めいた笑みを浮かべて目を伏せた。

「ああ、あれねー。小枝子の悪戯　　といつかなんといつか」

苦笑はそのままわたしに目を向け、仁はいきなり腕を伸ばして、わたしの額をピンと指で弾いた。

「っ?!!」

「ま、女心ってやつなんだろうな。複雑すぎて俺にはわかんねー」

……わたしもさっぱりわからない。なんでデコピン?　仁、やっぱり酔ってるのだろうか。

額をさすっていると、リビングの方から聞きなれたメロディーが聞こえてきた。わたしの携帯電話の着信音だ。

「出れば?　俺ももうごちそうさまー」

仁がそう言ってワインを飲み干し、席を立った。

着信は琢磨くんからだった。リビングの端の方へ行き通話ボタンを押す。キッチンの方に目をやると、シンクの前に仁が立っているのが見えた。どうやら食器洗いをしてくれるようだ。そんなの後からわたしがやるのに……と思いつつ、電話を耳にあてた。

「もしもし？」

『あ、和音？ 今大丈夫？』

「うん、平気」

チラリと仁の背中に目を向けながら、わたしはそう返事をした。仁には悪いけど、少しだけならいいかな。

『突然だけど、外見て』

「外？ 　ん、ちよつと待つて」

琢磨くんの唐突なその言葉に首を傾げつつ、わたしは庭へと出る窓辺に寄った。

二重になっているカーテンを開ける。冷気がひんやりと入りこんできた。窓の内側は白く曇っていて外はよく見えなかった　　が、曇ったガラスの向こうに、チラチラ動く白い影が見える。

「あ……！」

わたしは寒さも忘れて勢いよく窓を開けた。  
空からフワリフワリと白いものが舞落ちている。

「雪だ……」

『うん、そう。きれいだね』

「うん……」

わたしは去年の今日のことを思い出した。  
お母さんと過ごした最後の夜。

病室の窓からみんなと一緒に外を眺めた。降り始めた雪を見ながら「ホワイトクリスマスになると素敵ね」と言っ、お母さんは笑

っていた。もう声にもならないような切れ切れの声で。  
胸が詰まった。涙が滲んできて視界がぼやける。

『このまま降り続いたら積もりそうだね』

琢磨くんのその穏やかな声に、とうとう涙が流れた。

「……去年も降ったんだよ、雪。でも積もらなかった……ホワイトクリスマスにはならなかったの」

ああ、わたし、何を言っているんだろう。こんなこと琢磨くんに言っても仕方ないのに。

だけど、琢磨くんは「うん」と静かに答えてくれた。他には何も聞かず、何も言わなかった。

少しの間、沈黙が流れる。ややあつて聞こえてきた声は、これまでもよりもずっと優しいものだった。

『和音。オレ、こうして和音と雪が見られて良かったと思ってる。電話、出てくれてありがとう』

温かい言葉、声。琢磨くんの優しさに胸が熱くなる。何か言わなければ……そう思うのに、言葉が出ない。口を開けば嗚咽が漏れそうでできなかった。

琢磨くんはわたしの沈黙を問い質したりはしないまま、やがて、静かな声で言った。

『……じゃあ、もう切るね。和音、風邪ひくなよ』

電話の向こうで琢磨くんの気配が遠ざかる。待つて。



「た、琢磨くん！」

わたしは慌てて呼び掛けた。鼻がつまってほとんど「だぐまぐん」になっていたけれど。

『ん？』

電話の向こうに気配が戻る。わたしは何度か鼻をすすって、ようやくその一言口にした。

「ありがとう」

電話を切った後も、わたしはしばらく窓を開けたまま、降り続く雪を眺めていた。

庭の土の上は、もううつすらと白くなっている。舞落ちてくる雪はその数をどんどん増やしていた。

突然、肩にふわりと柔らかなものがかけられた。驚いて手に触れたそれは、いつもソファアの上に置いている膝かけだった。

「仁……」

仁が隣に立って空を見上げる。ただそうするだけで、仁は何も言わなかった。だから、わたしも何も言わなかった。そのまま二人で並んで、音もなく静かに降り続く雪を眺める。

「ホワイトクリスマスになるよ」

やがて、仁がそう言って微笑んだ。

「かあさんからのクリスマスプレゼントだ」  
「うん」

わたしは頷いてもう一度空を見上げた。

街灯の光を受けた真っ白な雪は、キラキラ輝いて踊っているように見えた。

（第六話 完）

## 7（後書き）

第六話 終了です。お付き合いくださってありがとうございました！  
第七話に続きます。

評価・ご感想など頂けるとすごく嬉しいです！

志望大学の合格発表を五日後に控えた今日　二月十三日、日曜日。

わたしは明日のためにエプロンを付けてキッチンに立っていた。そう。明日はバレンタインデーだ。

これまでのバレンタインデーには、わたしはおとうさんと仁に手作りのものを贈っている。毎年決まってガトーショコラだ。一番最初のバレンタインデーにそれを贈った時、二人ともいたく気に入ったようで、毎年これにしてくれとリクエストされてしまった。それ以降はバレンタインデーにはガトーショコラというのがお決まりになった。

今年は、琢磨くんにもこの自慢のガトーショコラを贈ることにした。これなら作り慣れている分失敗の不安もないし、美味しいと証明もされている。あくまで二人にだけ。きつと琢磨くんはどんなものでも喜んで受け取ってくれると思うのだけど、やっぱり美味しいものを贈りたいというのが女心だ。

それに加え、去年からは希望用に普通の型どりのチョコレートも作るようになった。ちょっぴりビターなガトーショコラは希望の口にはまだ合わない。

その希望は、今日の前にいて、わたしがチョコレートを削るのを、目を輝かせながら眺めている。せっかく日曜日で家にいるのだし、

一緒に作るのも楽しそうかと思って、希望にもエプロンを着けてやった。希望の視線は初めっからチョコレートに釘付け。今にも涎を垂らしそうだ。

「たべてもいいーい？」

「だーめ。出来てからのお楽しみー」

「えーっ！ やだもん！ ちょっとだけいいーい？」

まったく……。

希望のかわいい懇願に負け、わたしは大きめに削り取ったチョコレートの欠片を口に入れてやった。

「おいちー！！」

希望が頬を両手で押さえて満面の笑みを浮かべた。製菓用のチョコレートだから、そんなに感動するほど美味しくはないと思うのだけど、こうして口にするものってきつと特別な味がするのだろうな。素直なその反応にほのぼのしつつ、チョコレートを削り終え、次の作業に取り掛かろうとした時、玄関のチャイムが鳴った。

「あっ、だれかきたよー？」

「んー、そうだね」

ふとリビングの方を見る。おとうさんはソファーに座っている。テレビは付いているがチャイムに何の反応を見せないところを見ると、寝ているのかもしれない。仁は部屋だし、どうやらわたしが出るしかないようだ。

「ハーン」

ドアホンに出たわたしは、モニターに映った人物を見て思わず目を見開いた。わかりにくいけど、この女の人は……。

『こんにちは、あの』

わたしはその人の言葉の全部を聞かずに受話器を置くと、急いで玄関に向かってドアを開けた。

門の前に立っていた女性は、やっぱり見覚えのあるあの人だった。彼女は小さく頭を下げた。

「私、木島といいます。あの……前お会いしたことあると思うけど」

「はい……小枝子さん、ですよ」

わたしは曖昧に笑顔を作って軽く会釈した。この人は仁の彼女だった人だ。何度か顔を合わせたことがある。だけど、ろくに会話を交わしたこともないのに、こういう顔をすればいいのかわからなかった。それに、この人……。

「かじゅー、だあれ？」

後ろからびよこりと希望が顔を出した。小枝子さんをじっと見て、ニコリと笑う。本当に誰にでも愛想がいいんだから。それが長所なのか短所なのかはわからないけど。小枝子さんは希望に小さく微笑みかけて、わたしに目を戻した。

「お休みの日にごめんなさい。仁くん、いるかな？ バイト先に行ったら、今日はお休みだつて聞いて……」

その言葉通り、仁は今日シフトの交代で休みになったらしく、今

も部屋にいる。

わたしは玄関の中に小枝子さんを招き入れると、急いで仁の部屋に向った。

「仁、起きてる？」

何度かノックをしながら声をかける。しばらくして、ガチャリとドアが開いて、ぼさぼさ頭の仁が不機嫌な顔で顔を出した。やっぱりまだ寝ていたようだ。

「……なに？ まだ眠いんだけど」

「もうすぐお昼だよ。ってことより。仁にお客様」

「客？ 誰？」

「小枝子さん」

欠伸交じりに背伸びしていた仁の動きがピタリと止まった。

「小枝子？」

「うん。今下にいる」

「……悪いけど、帰ってもらって。俺、今あいつに用事ないし」

素っ気なく言ってドアを閉めようとする仁に、わたしは慌てて言葉被せた。

「泣いてるみたいだったよ」

そう。小枝子さんは確かに泣いていた。涙こそ出ていなかったけど、泣き腫らした目だったのだ。それはメイクでは隠せないほどはつきりしていた。

「なんかすごく……痛々しかった」

仁はじっと考え込むように目を伏せた後、ため息と共に頷いた。

「……わかった。着替えたら下りるから待っててもらって」

仁は静かにドアを閉めた。

小枝子さんは希望のお喋りに笑顔で付き合っているところだったが、わたしの姿を見ると、すぐに「仁くんは？」と聞いてきた。

「すぐ下りてくると思います」

「そう……よかった」

「おねーたん、なかにはいる？ いっちょにあとば！」

希望が小枝子さんの手をとって引つ張ろうとするのを、わたしはやんわりと止めた。

「のん。お姉さん、遊びに来たんじゃないんだよ。仁のお客様」

「おきゃくたま？」

きょとんと首を傾げる希望に、小枝子さんがくすりと笑みをこぼした。

「可愛いわね。目許が仁くんそっくり」

そう言って目を細める小枝子さん。

この人、たぶんまだ仁の事が好きなんだ      そんなことを思いな



がら、わたしは小枝子さんの顔を見つめた。

色白でとても綺麗な人。だからこそ、余計に泣き腫らしたような目が氣にかかる。こんな顔して、一体仁にどんな用なんだろう？  
だけど、わたしがそれを聞く訳にもいかない。聞く必要もない。

仁はすぐに下りてきた。「顔洗ってくる」と一度そのまま通りすぎようとする仁を

「仁くん！」

ひどく切羽詰まったような声で小枝子さんが呼び止めた。仁は足を止め、わたしは思わず小枝子さんを振り返って、驚いて目を見張った。

小枝子さんの目から、大粒の涙が零れたのだ。

「おい……？」

仁が困ったような顔をして近付き、躊躇いがちに小枝子さんに手を伸ばす。小枝子さんは迷いなくその手をとると、俯いて本格的に泣き始めた。

「どーちたのお？」

希望の声にハツとする。そうだ、希望がいたんだ。というより、わたしももうここにいてはいけない。

わたしはそつと希望を促した。希望も何かを感じたらしく、とくに何を言うでもなく、そのまま室内へと駆けこんで行った。わたしがその後を追う形になる。

後ろから、涙交じりの震えた声が聞こえた。

「妊娠、したみたいなの」

息が止まるかと思うほどの衝撃が体中を走った。

わたしは振り返りたいのを堪え、止まってしまった足を無理矢理動かし、急いでその場を後にした。

妊娠したみたいなの、と聞こえた。確かにそう聞こえた。泣きながら震える声で、小枝子さんが仁に向ってそう言っていた。その言葉の意味は考えるまでもない。「妊娠した」そのままの意味だろう。そして、それを仁に言うことは……そういうことなのかもしれない。

胸の奥からぐぐぐつと吐き気に近い何かがこみあげてくる。言いようのない 嫌悪感。

「かじゅ、ちょこれーと！」

希望の声に、わたしは咄嗟に笑顔を作った。自分でもしらじらしいぐらいの笑顔で、大袈裟なほど明るい声を出す。

「そうだね！ さあて、続きやるよー！」

冷蔵庫から卵を取り出し、ボウルに割り入れていく。

……深く考えたくない。やめよう。本気で気分が悪くなりそうだった。

「あれ？ 今誰か来なかったか？」

おとうさんがこちらに顔を向けてのんびりと声をかけてきた。

「うん。仁にお客様。部屋に通したみたいよ」

わたしはサラリと答えた。平然と……違う、平然を装って。自分

でもわかっていた。わたしは今、本当はとても動揺している。兄の恋人が　元恋人が妊娠した、なんて聞いて、動揺しないわけがない。もし、このことをおとうさんに言ったら……考えてやめた。言える訳がない。わたしが言うべき事でもない。

わたしは目の前の作業にのみ集中することにした。ほんの少しのミスもしないよう、必要以上に心がけるようにする。そうすることで、頭をよぎるいろいろな思いを無理やり追い出すことにした。

顔には人形のように笑みを張りつけ、機械のように手を動かして、わたしはお菓子を作り続けた。

ガトーシヨコラをオープンに入れ、型に入れたチョコレートを冷蔵庫に入れた所で一通りの作業は終わり。

希望は途中で飽きたらしくて、もう既に別の場所で遊んでいる。希望が出来ることはほんの少ししかなかったので、飽きるのも無理はなかった。

わたしは時計を見上げた。

あれからもう一時間近くが経つ。あの人が帰った様子はない。まだ仁の部屋にいるのだろうか。どんな話してるんだろう。やるべき作業が終わったとたん、あの二人のことばかりが気になり始めた。

「馬鹿みたい」

わたしは自嘲して、使った器具を洗い始めた。

本当に馬鹿みたいだ。わたしが気に病むことなんてないのに。たとえ小枝子さんが妊娠してたって、それは仁と小枝子さんの問題だ、わたしには何も関係ない。……関係ない？

「 違う」

手が止まった。

関係ない、なんてことはない。

もしも小枝子さんが妊娠したというのが本当だったとして、それが仁との間のことだったとしたら。

仁はどうするのだろうか？ 責任をとる？ あの人と一緒に子どもを育てていくことになるのだろうか。もしそうなら、仁はここではない別の家庭を持つことになるのだ。

そう。全てが変わる。この家族のあり方が変わってしまう。  
わたしは思わず口許を押さえた。あの吐き気のような嫌悪感がこみあげてくる。

……嫌だ。

階段を下ってくる二人分の足音がした。すぐにリビングのドアが開いて、仁が顔を出した。

「ちょっと駅まで送ってくる」

それだけを言うと仁はすぐに行ってしまった。

パタン、と閉まったドアの音が、やけに乾いて聞こえた。

\*

\*

\*

隣の部屋に人の戻る気配があった。仁が帰って来たのだろう。

少しだけ迷った末、わたしは腰を上げた。わたしが口出しすることじゃないとわかつている。だけど、このままじつと黙っているなんて出来そうにない。意を決して仁の部屋を訪ねた。

「どうぞ」という仁の返事に恐る恐るドアを開ける。ベッドの上に足を投げ出して座っている仁は怖いぐらいに無表情で、話しかけるのが躊躇われるほどだった。

「何？」

わたしに目を向けず、雑誌をぱらぱらとめくっている仁。なんてことない仕草だけど、仁の不機嫌さがひしひしと伝わってくる。だけれどここで怯むわけにはいかない。後ろ手でドアを閉めて、大きく息を吸う。前置きなんて考えていなかった。だからズバリと切り出した。

「あの人、妊娠したの？」

「あー、聞こえてたのか」

仁の反応は驚くほど淡泊なものだった。わたしにチラリとも目を向けようとせず、表情も変えない。そして、それ以上は言葉を継ぐとはしなかった。わたしは唇をかみしめた。わたしのことをまるで無視するかのような仁に、どうすればいいのかわからなくなった。

しばらくの間沈黙が流れる。やがて、仁がパタンと雑誌を閉じた。それを脇に放り、ようやくわたしに目を向けてくれた。

「それで？ カズは何を聞きたいわけ？」

仁の表情に、微かに柔らかさが戻った。

「聞きたいことがあるからここに来たんだろ？」

わたしはゆっくり頷いた。そう、その通りだ。わたしは一度ぐくりと唾を飲み込み口を開いた。

「……小枝子さん、本当に妊娠してるの？」

仁が小さく口許を歪めた。

「生理がずっとこないらしい。気になって検査薬買って試してみたら、陽性だったそうだ」

「え……じゃあ、病院で確かめたわけじゃないんだ……」

少し気が抜けて息をついたわたしに、仁は皮肉気に笑った。

「知ってる？ カズ。最近の検査薬ってすごい性能いらしいぜ。陽性反応にいたってはほぼ間違いないらしい。って小枝子は言ってた」

その言葉がまたズンと重くのしかかった。じゃあ、やっぱり小枝子さんは……。

「明日病院に行くって。それではつきりするんじゃないか」

仁はそう言うと、再び雑誌に手を伸ばした。

わたしはぎゅっと拳を握った。違う。聞きたいのはそれだけじゃない。小枝子さんの妊娠が本当だとして、聞きたいのはその先だ。

「誰の、子ども？」

その言葉を絞り出すと、仁はわたしをじっと見返した。

「さあね」

返事はその一言。わたしはもどかしくなった。

「さあね、って。こうやって仁に伝えに来るってことは」  
「俺との子どもか、って？」

仁がわたしの言葉を遮った。

「カズはそう言いたいわけだな」

鋭くなった仁の視線に思わずぐっと言葉が詰まる。

「違う」とは否定はできない。だけど、そうじゃない。違うのだ、そんなふうに言いたいわけじゃない。だけど、そうなんじゃないかって疑っている自分がいる。泣きながら妊娠を仁に告げに来た小枝子さん。そんな状況を考えたら疑わずにはいられない。だからこそ、わたしは仁に否定して欲しかった。自分は関係ないとはつきりと言っ  
て欲しいだけなのだ。

だけど、次の仁の言葉は、わたしのそんな気持ちをいとも簡単にひねり潰してくれた。

「そうだ、って言っただら？」

仁はわたしを見据えたまま、ゆっくりと言葉を継いだ。



「小枝子のお腹の子どもが俺の子だって言ったら、どうする？」

仁は反応を探るかのようにじっとわたしを見つめている。まるで射抜くような強い眼差し。ドクンドクンと鼓動が激しくなる　息　苦しい。

「で、でも、仁は……」

ぐるぐると回り始めた頭の中で、懸命に言葉を探し出す。

「言ったじゃない、小枝子さんとは別れたって。夏過ぎにきっぱり、  
って……」

「確かにそうだな」

仁が答えた。感情の见えない、平淡な声だった。

「でも、それから度々会ってた。セックスだって、した」

仁のその言葉に顔がカツと熱くなった。

「な、なんで？　別れてたんでしょう？　そんなのおかしいっ！  
「うるさいなあ」

仁がパスンとわたしに何かを投げつけてきた。ベッドの上にあった小さなクッションだ。反射的にそれを受け止めたわたしは、鼻の奥がツーンと痛くなってぐっと奥歯を噛み締めた。

泣いてたまるか。ここで泣くなんて、おかしい。

クッションをきつく抱きしめるわたしに、仁はどこか挑発めいた笑みを向けた。

「カズには関係ないだろう？ 俺が誰と寝てようと。同じように、俺もカズが誰とやってようと関係ないし」

「え？」

「彼氏とやってんだろ？ どうでもいいけど、気をつけるよ？ 避妊だけはしっかり」

わたしは仁に最後まで言わせなかった。クッションを力いっぱい仁に向けて投げつけてやったのだ。クッションは見事に仁の顔に命中した。

仁はそのまま視線を落とし、わたしを見ようとしなかった。

悔しい。なんでこんなふうに言われなきゃいけないんだろう。こらえきれず涙が滲んできた。

悔しい、悔しい、悔しい。

いろいろ言い返したかったが、何も言葉が出なかった。それぐらい、悔しかった。悔しくて泣くなんて、それがまたひどく悔しくて情けなかった。

「……もう出て行けよ」

仁が静かに言った。

言われなくったって！

わたしは黙ってドアを開けて部屋を出た。そのまま自分の部屋に飛び込み、ベッドに体を投げ出し頭から毛布を被った。

今はもう、何も考えたくなかった。

出口の見えない迷路に迷い込んでしまったような気分だった。

どんなに自分には関係ない、放っておけばいいのだと言い聞かせてみても、気が付けばまた同じことを考えている。どう気持ちを切り替えればいいのかわからない。

小枝子さんの妊娠が本当で、それが仁の子どもだったら。

それは恐怖以外のなにものでもなかった。

この家庭はわたしにとっては宝物。その宝物がこの手の中から崩れ落ちていくような感覚に震える。

どうか神様。

わたしからもう家族を奪わないでください。

この家から仁を奪わないで下さい

\*

\*

\*

三年生は自由登校ということもあって、学校に来ない生徒も多いのだけど、この日ばかりは久し振りに教室内が賑わっている。その理由は言うまでもなく、今日がバレンタインデーだからだ。

だけど、わたしがこうして学校に来ているのは、バレンタインデーだから特別に、というわけではない。自由登校とは言っても学校

にはできるだけ来るようにしていた。今のクラスメイトと顔を合わせるのも後少しだと思うと、休むのが惜しかったから。だけど今日に限って言えば、ただ単に家でじっとしていたくなかったからという大きな理由もあった。

家で一人でいたら、また迷路の中に迷い込んでしまうから。

学校があってくれてよかったと心底思う。友達と話して笑っている間は、嫌な事など忘れてしまえるはずだ。

浮ついた雰囲気のある教室。この中でどれぐらいのチョコレートが行き交うのだろうか。もちろん、わたしも一つ持参しているわけだけだ。

わたしはバッグの中をチラリと確かめる。良かった、ラッピング、乱れてない。

「かーず！」

ポンと背中を叩かれて振り向くと、ニヤニヤ笑っている友達の美香がいた。

「どれどれ？ 愛しのダンナさまへのチョコ、見せてみ？」

「おことわり ってゆーか、ダンナさまって何よ」

「そのままの意味ですよー。カズたち有名だよ？ 学校一番のおしどり夫婦って」

美香の言葉にギョツとした。知らないし、そんなこと。

「いつも仲良くてさ、羨ましいよ、ホント」

美香はわたしの前の席の椅子に座ると、こちらを向いて頼杖をつき、何かに気付いたように教室の入口の方を向いた。

「そのダンナさまだけど、ホラ」

促されて見てみると、入口の前に琢磨くんがいて、その向かいには恐らく下級生と思われる女子生徒がいた。

「相変わらずモテモテね、木村くん。三年の教室まで来るなんて大胆　あ、呼び出されちゃったみたいね」

女子生徒について教室を出て行く琢磨くんを見ながら、美香はニヤニヤ笑っている。その笑みをそのままわたしに向けた。

「カズ、いいの？」

「何が？」

「お。余裕！」

わたしは曖昧に笑った。別に、余裕だとかそういうわけじゃない。琢磨くんが誰に告白されようがチョコレートを貰おうが、今さらわたしがそれを気に病んだって仕方がないと思っているだけだ。もともと、琢磨くんはすぐくもてる人なのだから。それに、告白してくる子だって、きっとわたしの存在を知っているはずだ。それを知った上での告白は、すごく勇気のいることだろう。それがわかっているから、琢磨くんだってそれにちゃんと答えてあげようとしているのだと思う。琢磨くんはそういう人だ。

「信じてるんだねえ。それでさー、カズ。ズバリ聞くけど」

美香がズイッと身を乗り出して、急に声を顰めた。

「木村くんとどこまでいってんの？ もう最後までいったよね？」

突拍子もない言葉に一瞬目が点になる。が、すぐにその意を理解してわたしは慌てた。

「な、何言い出すの、急に！」

「だって聞きたいんだもん」

美香は悪びれもせずにつこりと笑う。

「カズたち、付き合い始めてけっこう経つでしょ？ ねえ、どのくらいで許した？」

美香の目がキラキラ輝いている。そこにあるのは単純な興味。悪意は微塵も感じられない。

だけど、わたしの胸の奥からはじわりと嫌悪感が湧きあがってくる。この話の流れは、嫌でも昨日の仁との会話を思い出させた。

小枝子さんの妊娠のこと。そして。

『彼氏とやってんだろ』

仁の言葉。

気分が悪くなった。

「え カズ？」

思わず顔を覆ってしまったわたしに美香が慌てる。わたしは「大丈夫」と言って立ち上がった。

「ごめん、ちょっとトイレに行ってくる」

美香の返事を待たず、急いでその場を離れた。美香には本当に申し訳なかったけれど、こみあげてきた嫌悪感に耐えきれなかった。

トイレに駆け込み、勢いよく水を出して顔を洗う。

凍りついたように冷たい水に、少しでも冷静さを取り戻すことができた。ハンカチで顔を拭き、鏡に映った自分の顔を眺める。

目の下にはうつすらとくま。今にも泣き出しそうな情けない顔。

「もうやだ……」

思わずそう呟いて、長いため息を落とした。

\*

\*

\*

「天気良くて気持ちいいね。ちょっと寒いけど」

琢磨くんがうーんと伸びをする。わたしも頷いて空を見上げた。青い空に雲がふわりと浮かんでいる。まるで絵にかいたような空。

わたしと琢磨くんは、学校が終わった後、街の高台にある展望台へとやってきた。ここは観光の為の展望台というわけではない。高台からの景色を眺めながら休憩できるといった程度の広場だ。そこにはいくつかのベンチが景色を見下ろす形で並んでいるだけで、特別の施設は何もない。平日の昼間ということもあってか、わたしたちが来た時には、一組の親子がいるだけだった。

「ごめんね、急に」

琢磨くんが苦笑する。この展望台に誘ってきたのは琢磨くんだった。その理由は、今わたしと琢磨くんの膝の上にあるお弁当にある。天気もいいし外で食べようということになったのだ。このお弁当は、琢磨くんのお母さんが作ったものだ。

「まったく迷惑だよな。頼みもしないのに」

口ではそう毒づきながらも、琢磨くんは楽しそうに笑っている。琢磨くんのお母さんは看護師さんをしている。一度家におじやました時にお会いしたことがあるが、とてもサバサバとした綺麗なお



母さんだった。その琢磨くんのお母さんが、自分の分のお弁当を作るついでだからと言って、琢磨くんのお弁当を作ったのだという。そして、なぜかわたしの分まで。

「女の子の弁当作ってみたかったとか言って張り切っちゃってさ。うち、俺と弟の男だけだから」

その言葉の通り、わたしに作ってくれたというお弁当は、それはもう素晴らしいものだった。くまの顔をしたおにぎり、お花の形にされたウィンナー、ハート型の卵焼きにピックに刺さったプチトマト。なんか……すごくかわいい。

思わず「うわあ」と声を上げてしまった。琢磨くんはその弁当を覗き込み「げ！」と声を上げた。

「作ってみたかったってこういうことか……」

はあっと大きなため息をついた琢磨くん。

「ごめん。張り切る方向が違うよな、あの人」

「うっん、嬉しいよ。わたし、こんなの初めてだもん」

わたしのお母さんはこんな手の込んだお弁当は作らなかった。けっこうな面倒くさがりだったから。だから、こんなお弁当は初体験だ。

「でもいいのかな。こんなの作ってもらって」

「もちろん。好きで勝手にやってることだから。そうやって喜んでもらえるだけで母さんも本望だろ」

「うん。ありがとう。おばさんに今度ちゃんとお礼言わなきゃ」

「いいよ、気にしない気にしない。さ、食べようー!」

琢磨くんが自分のお弁当の蓋を開ける。ごく普通のおにぎりとおかず。わたしのとスゴイ差だ。思わず顔を見合わせて吹き出してしまった。

久し振りに食べた「お母さん」のお弁当は、とっても優しい味でした。

\*

\*

\*

チョコレートを渡すのにもタイミングというものがある。なかなかそのタイミングを掴めないでいるまま、時間だけが過ぎて行き、ようやくその時がきたのは、そろそろ帰ろうかという話になった頃だった。

「琢磨くん」

わたしは綺麗にラッピングしたあのガトーショコラを琢磨くんに差し出した。

「これ、どうぞ」

「？」

突然過ぎたのだろうか。一瞬面喰らったような顔をした琢磨くんだったが、すぐにその顔には笑みが広がった。

「あー、ありがとう」

「もうたくさんもらってるだろうけど。良かったら食べて下さい」

琢磨くんは苦笑する。

「何言ってるの、誰からも貰ってないよ。和音がいるのに」

そう言って、自分の言葉に照れたように、手の中のそれを裏返してみたりする。

「ねえ、もしかしてこれ手作り？　だったらすごい感動」

「うん。けっこう自信作」

「へえ」

琢磨くんが素直に感心したような声を上げた。

「それは楽しみ。和音って、お菓子も作れるんだ。すごいな、尊敬するよ」

嬉しそうな琢磨くんの笑顔に、わたしの胸がズキンと痛んだ。

……違う。

そんなに喜んでもらえるようなことじゃない。これを作っていた時、わたしの頭の中にあっただのは……。それなのに、自信作だなんてよくも言えたものだ。

自分の言葉に嫌悪した。自分がたまらなく恥知らずな人間に思えてしまった。なんで渡してしまったのだろうとさえ思えてきた。

琢磨くんの手の中にある渡したばかりの包みを見て、取り返したい衝動に駆られる。

その時、突然何かが顔に触れた。一瞬何かわからなかったが、素早く、確実にわたしの唇をとらえたのは琢磨くんの。

思わず固まってしまった。

そんなわたしを見て、離れた琢磨くんは悪戯っぽく舌を出した。

「隙あり」

「び……びつくり……した」

思わず周囲を見回してしまう。さっきまでいた親子はいつの間にかいなくなっていて、代わりに一組の老夫婦がいた。ちょうど反対側のベンチに座っていて、こちらには背を向けているため、わたしたちのことは当然目には入らない。

よかった、見られていない……。

「こ、こんな真っ昼間に外でなんて心臓に悪い……」

「ごめんね。でも、オレにとっては二人つきりで、とかのほうが、よほど心臓に悪い」

「？」

琢磨くんはどこかきまりが悪そうな笑みを見せた。

「理性が負けそう」

「あ……」

そういうことが、と納得してしまい、どう返事したらいいかわからなくなる。だけど、頭の中では「やっぱり」という言葉が浮かんだ。そして、その言葉は意識しないうちに口について出てしまっていた。

「やっぱり      なのかな」

「え？」

恥ずかしそうにそつぽを向いていた琢磨くんにもその言葉は聞こえたらしい。琢磨くんはわたしを見て首を傾げた。

「やっぱりって？」

改めて聞かれても、答えるのには躊躇してしまう。ただどうまくごまかすこともできず、わたしは小さな声で答えた。

「付き合ってればやっぱり当たり前のことなのかな、って……その……キス、以上の事」

言葉にするのは思った以上に勇気がいった。まともに琢磨くんの顔を見ることができず、俯いてしまう。

「あー、そういうこと……」

琢磨くんも返す言葉が見つからないらしく、それきり黙り込んでしまった。

……気まずい。かなり気まずい。

やっぱりこんなこと言うんじゃないかと深く後悔し始めた時、琢磨くんが長い息を吐くのが聞こえた。

「あの、さ。オレ思うんだけど、そういうことに『当たり前』とかってないんじゃないかな」

思わず琢磨くんを振り向いた。目が合うと琢磨くんは小さく笑って、一言一言をかみしめるように、ゆっくりと話す。

「そういうのはみんなそれぞれっていうか……どれぐらい付き合ってたから、とか考えてやるもんじゃないと思うし、どちらか一人がじやなくて、お互いの気持ちがそういうふうにならないと無理だろうし……って、あー、オレ何言ってるんだろ」

琢磨くんが頭をガシガシと掻く。その姿に少しだけ気持ちが解れた。わたしの突拍子もない言葉にちゃんと正面から答えてくれたことが嬉しい。

「ごめんね、変なこと言って」

「いいけど それにしても」

琢磨くんが気持ちを切り替えるように軽く咳払いをして、わたしの顔を訝しげに覗き込んだ。

「急にどうした？ 何かあった？」

いつもの、優しい真っ直ぐな琢磨くんの眼差しに、わたしはどこか肩の力が抜ける気がした。琢磨くんになら、話してもいいかな。その時になって、わたしはこの胸の内を誰かに話したかったのだということに気が付いた。

「昨日、仁の前の彼女が家に来て……」

わたしの口から堰を切ったように言葉が溢れだす。

小枝子さんの妊娠の事、仁に言われた言葉、そして学校で美香に言われたこと、そのことでわたしがどう感じているのかを、全部話した。たぶん、よく考えれば言わなくてもいいようなことまで言ってしまったかもしれない。だけど、琢磨くんは黙って耳を傾けてくれた。

わたしが話を終えたのを見計らったように、この場へ賑やかな声が響いて来た。中学生ぐらいの男女四、五人がふざけ合いながら下の道を歩いているのが見える。たぶん、この展望台に上ってくるのだろつ。

「なるほどね。それであんなこと……納得」

琢磨くんがその集団を目で追いながら口を開いた。

「和音の戸惑いはわかる気がする。お兄さんの元彼女が妊娠したかもしれない、しかもそれはお兄さんの子かも、ってなると、それはびびるよね。そういう関係に敏感になるのもわかる」

共感してもらってどこかホツとしたわたしに、琢磨くんは小さく笑いかけた。

「でも、仁さんの彼女のことだけど、まだそれ確かじゃないんだろ？ 妊娠してることも、それが誰の子どもかとかも」

「そうだけど……」

「だったら、まだそんなに思い悩む事もないんじゃないか。今はもう一度仁さんとちゃんと話をして、事実を確かめるのが先じゃないかな」

「うん……」

それはわかっている。でも、また仁と向かい合うのが怖い気がした。もしそれで小枝子さんのことが自分の責任だということをはっきり言われたら、わたしの不安は現実のものになってしまうのだ。

仁が離れる　そのことが現実になってしまう。

「和音」

視線を落としたわたしに、琢磨くんが静かに言った。

「ちゃんと仁さんと話してよ。こつ言っちゃなんだけど、今はいろいろ考えるのにいい機会だと思う。和音にとっても、仁さんにとっても……たぶんオレにとっても」

「え？」

思わず顔を上げると、琢磨くんはどこか意味ありげに笑って背後を振り向いた。さっきの中学生の集団が上って来たところだった。

「賑やかになったね。帰ろう」

琢磨くんはわたしの返事を待たずに立ち上がった。



\*

\*

\*

自転車を漕ぎながらずっと考えていたのは琢磨くんのあの言葉。

『いろいろ考えるのにいい機会だと思う』

考えることなんて、もうずっとやってる。これ以上ないというくらい考えている。それでもまだ何かを考えないといけないのだろうか。

どこかスッキリとしない気持ちを抱えたまま自転車を走らせているうちに、気が付けばもう自分の家の近くまで来ていた。向かい側から女の人が歩いてきている。自転車を端に寄せようとしてその人の顔に気付き、わたしは慌ててブレーキをかけた。その音に女性がわたしに目を向けた。

「和音ちゃん」

やっぱり小枝子さんだ。

「こんにちは……もしかして家うちに？」

歩いてきた方向からしてそうだろう。小枝子さんはこくりと頷いた。

「仁くん、今日学校に来てないって聞いたから、家にいるのかなって思ったんだけど、やっぱりお留守だった」

小枝子さんの言葉に少なからず驚いた。仁、学校に行っていないんだ。どこ行っただろう。

「携帯も繋がらないし。避けられちゃったみたい。無理ないけど」

自嘲的に微笑む小枝子さん。つい、お腹の方に目がいつてしまった。当然、見た目では何もわからないけれど。小枝子さんはわたしの目線に気付いたのか、小さく声をたてて笑った。

「ああ、聞いたんだ、このこと」

そういつてやさしくお腹を撫でる。その仕草はお母さんが希望を身籠っていた時を思い出させた。

「七週目、なんだって」

わたしはそのまま帰ろうとする小枝子さんを家に誘った。駅までの往復は大変だ。少し休んでいってもらおうと思った。

\*

\*

\*

コーヒーを出そうとして考えた。妊娠中って、コーヒーとか駄目じゃなかったっけ。紅茶も良くなかったはず。あ、そうだ。コー

ヒー派の我が家の人間は滅多に飲まないけれど、以前貰ったハーブティーがあつた。これなら大丈夫だろう。

わたしはティーポットにローズヒップのティーバッグを入れ、小枝子さんの前に用意した。希望用のおやつの中から小さなマドレーヌも拝借して添える。

「ありがとう。いい香り」

「ごめんなさい、淹れ方とか全然わかんなくて」  
「いいのよ、気を使わないで」

小枝子さんはカップにハーブティーを注ぎ、口を付けた。

「うん、美味しい」

そう言ってニコリと笑う小枝子さんは、同性のわたしからみてもキレイだった。会ったびに思うけれど、小枝子さんは本当に美人だ。仁と並んで歩けば、さぞ絵になるだろうな、と勝手にそんな想像をしていると、小枝子さんから「和音ちゃん」と声をかけられた。

「私のこと、仁くんからどういう風に聞いている？」

「……前付き合ってた人だって……でも、別れたって言うてました。夏過ぎに」

頭に浮かんだまま言葉にすると、小枝子さんは満足そうに目を細めた。

「その通りよ。よかった、変な風に誤解されてなくて」  
「変な、誤解？」

「そう。このお腹の中にいるのが仁くんの子、とかっていう誤解」

え?!

「それはどういう……?」

困惑するわたしの顔を見て、小枝子さんが意外そうに目を開いた。

「どういって、そのままの意味よ? え?」

今度は小枝子さんが困惑した顔を浮かべた。

「え、まさかそうだと思ってたの?」  
「だって、仁が……」

思わずそう言つと、小枝子さんが目を大きく瞬かせた。

「仁くんがそう言ったの?」  
「いえ、はつきり言つたわけじゃないけど、そうかもって……」

小枝子さんの反応から、どうやらわたしはしなくてもいい心配をしていたのだと気付いたけれど、それは仁がそう言つたからだ。

「でも仁くん、私とは別れたつて言つたんでしょ?」  
「でも、その後もそういう関係は持つたつて」

さすがにストレートには言えない。小枝子さんは驚いたように目を見開き、やがてクスクスと笑い出した。チラリとわたしを上目づかいにみやる。

「何考えて……馬鹿よね、仁くん」

「　　は？」

「確かにね、そういうことが全く無かったとは言わないけど、それ  
ももう何カ月も前のことよ。そうね、最後にそういうことになった  
のは……十月、だったかな」

小枝子さんの言葉に、啞然とする。小枝子さんは目を丸くするわ  
たしを見て、おかしそくに笑った。

「わかった？　だから、このお腹の子が、仁くんとの子どもだって  
ことは、絶対にないの。絶対にね。仁くんだってもちろんわかって  
るはずよ」

思わず力が抜けた。なんだ、そうなんだ……だけど。

「じゃあ、どうしてこうやって仁に……？」

仁に会いに来る小枝子さんの行動の意味がわからない。

「そうよね、そう思うよね、普通」

小枝子さんはほんの少しの沈黙の後、ゆっくりと話し始めた。

「私、今付き合っている人いないの。でも、相手はちゃんとわかって  
るのよ　　だけど、その人に言えなくて。ちゃんと付き合ってる  
わけじゃないのに、妊娠したなんて言い出せない……　　だけど、一人  
で考えてたらたまらなく不安で。気が付いたら、また仁くん頼って  
た」

小枝子さんは寂しそくに微笑む。

「付き合ってる時もそうだった。私、いつも自分ばかりが仁くんに頼ってた。依存してた、っていうのかな。別れた後も、何事かある度に仁くんを頼った。仁くんは何も言わずにいつでも私を受け入れてくれたから、すごく楽だったのよ」

わたしは小枝子さんが話す言葉を不思議な気分で聞いていた。全然知らない人たちの話を聞いているようだ。小枝子さんは続ける。

「だから、今度も……仁くんの側の居心地の良さに甘えちゃったのね……あまり深く考えないでここに来ちゃった。ごめんなさい」

小さく肩をすくめる小枝子さんにわたしは首を振った。それはわたしに謝ってもらうことじゃない。

それ以上返す言葉も見つからず、わたしは自分に淹れたコーヒを一口飲んだ。同じように、小枝子さんもカップを口に運んだ。

とにかく、小枝子さんの妊娠に仁は関係がなかったんだと、今さらのようにそのことにホツとする。全部、わたしの取り越し苦労だったのだ。

だけど、じゃあなんで仁はあんな思わせぶりなことを言ったのだろう。からかわれたのだろうか……わからない。

「それじゃ、私帰るわね。どうもごちそうさま」

「仁に会わなくてもいいんですか？」

「いいのよ、もう。メールはしたし、電話にも出ないってことは、今度こそ、きっぱり振られちゃったのね」

立ち上がりながら小枝子さんは苦笑する。

「だからもう、仁くんじゃなくて、ちゃんと彼と　この子の父親と話すわ。仁くんからは卒業！」

小枝子さんが悪戯っぽく片目をつぶった。

「でも、せっかく就職も決まっていたのに、それも駄目になっちゃうな。いろんな人に迷惑かけちゃう。大変だわ、これから」  
「就職？」

目が点になってしまった。その反応に小枝子さんが笑う。

「あら、もしかして知らなかった？　わたし、今年で卒業なの。和音ちゃんとは入れ違いになっちゃうね」

じゃあ、小枝子さんって仁より年上だったのか。今さらこんなことで驚くとは。

「いろいろ、ごめんね。仁くんと　仲良くね」

そう言って笑う小枝子さんの顔は晴れやかだった。

\*

\*

\*

「すごい！ いっぱあい！」

テーブルの上に広がる大量のチョコレートを前に、希望がキラキラと目を輝かせる。可愛らしくラッピングされたこれらは、全部おとうさんが貰って帰って来たものだ。教え子からのものらしい。

「大漁だね。去年より増えたんじゃない？」

「いやいや。参るよなあ。こういうの禁止されてんのに」

ネクタイを緩めながら苦笑しているおとうさんだが、まんざらでもなさそうだ。義理チョコでも、生徒からそれだけ人気があるということなのだから、嬉しくない訳がない。

「この中のいくつかは本命だったり　あ、おとうさん。これ、征<sup>せ</sup>爾<sup>いじ</sup>さんへ、だつて」

「え、どれどれ？」

その金色の箱に添えられたメモを見ておとうさんが「ほう」と声を上げた。

「女子中学生にそんなふうに呼ばれるのも悪くないな、うん」

「……やめて、おとうさん。気持ち悪いから、それ」

もちろん冗談だとわかつてはいるけど。おとうさんは「ひどいな」と笑いながら、着替えの為に部屋に戻って行った。



「ねえ、たべてもいい？」

希望がチョコレートに手を伸ばそうとする。わたしは笑って「ハイ」と一つ渡した。それはテーブルの上からではなく、わたしが別のところから取り出したものだ。昨日作った、希望用のチョコレート。可愛らしく袋に入れてリボンで結んだ。

「これはカズからね。ご飯前だから、今は一個だけ食べていいよ。残りは明日ね」

「やったあ！　ありがとうー、かじゅ」

希望はピョンピョン跳ね上がって喜び、早速袋の口を開け、一つをとりだした。

「いたらきまーしゅ！」

パクリと口に入れる。途端、とろける様な笑みを浮かべた。

「んー！　おいひー！ー！」

「ありがとう」

素直な希望の言葉は本当に嬉しい。

「お。いいなあ、希望。和音からか？」

部屋着に着替えたおとうさんが戻ってきた。わたしはおとうさんにも用意したものを「ハイ」と渡した。中身はもちろんガトーショコラだ。

「サンキュー！ やっぱりこれがないとなあ。バレンタインって気がしない」

「何をおっしゃる。こんだけ貰っというて」

「いやいや。娘からののは特別さ。さあて、あとは仁だな。今年はあいつ、どれぐらい持って帰るかな」

毎年、仁は紙袋いっぱいチョコレートを持って帰ってくる。おとうさんも仁もそうだから、おかげでバレンタインデー後の我が家はチョコレートだらけになってしまふのだ。

だけど、今年はどうだろう。小枝子さんの話だと、仁は今日大学には行っていないみたいだった。アルバイトがある日でもないし、もしかしたら今年は……ちようどそう思った時「ただいま」と仁が帰って来た。

「おかえりー」

「おかえりなしゃーい！」

おとうさんが答え、希望が玄関まで走っていく。すぐに希望に手を引かれ仁がリビングに顔を出した。

「ただいま」

「おかえり。あれ、手ぶら？」

おとうさんが意外そうに首を傾げる。仁は「うん」と答え「今年は俺収穫なしだから。あとで分けて」と素っ気なく言ってすぐに部屋を出て行ってしまった。

「なんだ、あいつ。つまらんな」

おとうさんは興醒めと言ったように肩をすくめた。

わたしもおとうさんに気付かれないように小さく息をついた。仁、ちなりともわたしの方を見なかった。まるで喧嘩している時みたい

に。  
昨日のことを思えば喧嘩していると言えなくもないのだけど、それもこれも全部仁が誤解を招くような言い方をしたからだ。おかげでこっちは悩む必要のないことで悩んだのに。それなのにあつちが勝手に怒ってるみたいな態度とって……考えれば考えるほど腹が立つてきた。

「仁！」

階段を駆けあがって、自分の部屋に入ろうとした仁に声をかけた。ドアノブに手をかけたまま仁が振り返る。

「何？」

わたしは答えず、手に持っていたものを仁に投げつけた。

「！？」

仁の構えた手の中に、それはすっぽりと収まった。

「これ……」

「毒入りケーキ」

仁は呆気にとられたように手の中のものとわたしの顔を見比べた後、ふっと表情を緩めた。

「ありがたく貰っとく」

「それで、今日は学校サボってどちらへ？」

「いろいろ　　ってか、なんで知ってんの」

「小枝子さんに聞いた。今日、小枝子さん家に来たんだよ」

わたしは少しだけ仁に近寄った。階下に声が聞こえないように声を落とす。

「全部聞いた。妊娠七週目ってこととか、それが仁との子どもじゃないってこととか」

仁は目を伏せて、ため息をつくように小さく笑った。だけど、それだけで何も言おうとしない。わたしは構わず続けた。

「最初から自分とは関係ないってはっきりわかってたんでしょ？  
なのに、なんでそう言ってくれなかったの？」

仁は開けかけていたドアを閉め、それに寄りかかって腕を組み、どこか自嘲気味の笑みを浮かべた。

「なんでかな。つい、ね」

「つい？」

「もしそう言ったらカズはどんな反応するかなって　　試してみた  
くなっただけ」

「試し……？」

その言葉にムツとした。

「なあによ、それ！　わたし、真剣に考えたんだよ。もし、本当に  
仁の子どもだったらって　　」

「しっ！」

仁が自分の口に人差し指を当てた。声がつい大きくなっていったようだ。わたしは慌てて声を顰めた。

「本当に仁の子どもだったらどうしようって、わたし……本気で具合悪くなるぐらい考えたんだよ」

「うん、ごめん」

仁が苦笑する。

「後から俺もやばいなって思った。暴言吐いたのも謝る」

「暴言　あ」

たぶん、彼氏と云々の言葉を差しているのだろう。わたしはあえてそれには答えず、わざとらしいくらい大きなため息をついた。

「まったくもう。本っ当に迷惑……」

「なあ、カズ」

仁が腕組みを解いて、スツとわたしに向って片手を伸ばした。その手のひらを軽くわたしの頭に乗せる。

「？　何？」

「もし小枝子の妊娠に本当に俺が関係していたとしたら、カズ、どうした？」

「え？」

またそんな冗談、と言おうとしたけど、言えなかった。仁の目があまりに真剣だったから。わたしはキッとその目を見返し、思った

ままを口にした。

「嫌。もう考えたくない」

仁が首を傾げ、どこかからかう様な表情かおを見せた。

「嫌？ どうして？」

「どうしてって」

それは……。

この家が変わるから。仁がここから離れて行くような気がするから。だけど、それを口にするのは憚られた。言ってもわかってもらえない気がした。

黙っていると、仁がわたしの頭をポンポンと軽く二度ほど叩いて笑った。

「悪い。もう聞かない」

仁は部屋のドアを開けた。そのまま部屋に入ろうとするが、すぐにわたしを振り向いた。

「だけどさ、カズ。いずれ、そういう時だってくるだろ」

その意味がわからず首を傾げる。仁はわたしを真っ直ぐに見て言った。

「何年後かはわからないけど、いつか結婚してここを出て行く。それは俺じゃなくてカズの方が早いかもしれないし。この家族も、いつまでもこのままってわけじゃない。変わっていくんだよ」

思わず、息が止まった。

その言葉は、わたしの不安そのものだったからだ。わたしは目を見開いて仁を見つめた。仁はわかっているのだ。わたしが抱えている恐れや不安を。

仁はふつと表情を緩め、わたしから目を逸らした。

「俺だつて一緒だよ。変わるの怖い。でも、もう……そろそろ考えないといけないよな」

「え……」

仁はそのまま部屋の中へと入って行く。ドアが閉まる寸前「チョコ、ありがとな」と言葉をくれたが、返事などする間もなかった。パタンと閉まったドアを、わたしはしばらくの間茫然と見つめていた。

「考えないといけない」といった仁の言葉と、昼間の琢磨くんの「考えるのにいい機会」という言葉が重なる。

わたしは思わず目を閉じた。

少しだけわかった気がする。

考えるということ。それは、「自分の心と向き合う」という事なのかもしれない。

\*

\*

\*

数日後。

わたしと琢磨くんの大学の合格が決まった。

わたしは教育、琢磨くんは経済。学部こそ違い、同じ大学だ。

おめでとう、琢磨くん。おめでとう、わたし。

わたしたちは、春から大学生になる。

（第7話 完）



## 6 (後書き)

第七話 終了です。お読み下さりありがとうございました！  
物語は第八話へ続きます。

感想・批評・評価など頂けると嬉しいです！

新年度が始まり、はや一月が経とうとしていた。日ごとに暖かさは増し、上着ももう必要がない日が多くなった。一年で一番気持ちの良い季節。わたしはこの季節が大好きだ。

「あら！」

わたしの顔を見るなり、保育園の先生は目を丸くして微笑んだ。この富永先生は、希望が保育園に入所して以来ずっとお世話になっている、気心の知れた先生だ。今年も希望のクラスを受け持つてくれることになった。そんな富永先生はわたしのちょっとした変化にもすぐに気付いてくれたようだった。

「イメージチェンジですか。とても似合ってるわ」

わたしは照れ笑いを返した。

今日は講義が終わった後、美容室に行ってきたのだ。先生が言う程イメージチェンジというわけではないが、肩先までの髪にゆるくパーマをかけてみた。慣れてないせいもあるけど似合ってるのかどうかは自分でも疑問なのだけど、他人からの褒め言葉は素直に嬉しい。

「あれエ。かじゅ？」

帰り支度を済ませて奥から駆けてきた希望が、わたしを見てちょっとだけ首を傾げた。

「なんかちがーう」

どうやら希望も気付いてくれたらしい。が、その表情は微妙だ。

「どう？　かわいい？」

「うーん。わかんないや」

希望は素っ気なく言って、靴を出しに行った。

まったく……嘘でもいいから「かわいい」ぐらい言ってくれてもいいのに。三歳児にお世辞を求めるのも無理な話だろうけど。

わたしが肩をすくめると、富永先生がクスクスと笑い声を洩らした。

「のんくん、照れてるのね」

「えー？　そうですか？」

「男の子ってそうなんですよ。お母さんの変化には敏感　のんくんの場合はお姉さんの、ね」

富永先生は変な気の使い方はしない。さり気なく言葉を変えて、柔らかに微笑んだ。

「お姉さんももう大学生なんですよ。制服姿が見られなくなっ  
私も寂しいわ」

「ご希望ならまた着てきますけど」

そんな冗談を交わしているうちに希望が靴を履いてしまったようだ。希望はわたしの服を掴んで「かえるよ！」と引っ張り、

「てんでー、たよーならー！」

と力いっぱい先生に手を振りながら、わたしよりも先に駆けだして行った。保育園では大人しい方だと言われていた希望も、最近

ずいぶん遅くなったように思う。以前はお迎えに行くなりわたしにくっついて離れなかったのが、今ではすっかりこの調子だ。希望はどんどん成長していく。そのことを実感せずにはいられない瞬間だ。

わたしは慌てて先生にお礼をし、走る希望の後を追った。

この春から、わたしは大学生となった。

高校生から大学生へ　　少しだけ大人に近付いたようで、どこかフワフワとした気分。けれども、その浮かれ気分もゴールデンウィーク間近の今となつては、もうすっかり消えてしまい、いつのまにか憂鬱にも似たどこか重苦しい気分にすり替わっていた。

あこがれのキャンパスライフ　　だからといって、わたしの生活にはそんなに劇的な変化はなかった。朝起きて学校に行き、講義が終わって時間をつぶして保育園に迎えに行く。家では希望と戯れ、食事を作り、洗濯、掃除をして……そんな当たり前の生活。今までと何も変わらない。

とはいえ、確実に変わったこともある。

制服がなくなり、毎朝何を着て行こうか悩むようになった。お洒落に今まで以上に気を使うようになった。学校までの距離が遠くなった。友達の顔ぶれが変わった。琢磨くんとは校舎も離れ、仁は同じ学部先輩になった。その他にも、小さな変化を数え上げればきりが無い。だが、それらの変化は気に病むようなことではないはずなのだ。時が経てば慣れていくはずのもの。

だけど、どこか落ち着かない。心がざわつく。地に足が付かないような、そんな感覚に襲われる。最近のわたしは目に見えない不安に駆りたてられている。その不安は、時が経つにつれ慣れて行くどころか、だんだんと大きくなっていくのだ。

だから、だろうか。髪型を変えよう、と思ったのは。  
わたしは、目に見えない不安を目に見える変化で誤魔化そうとしているのかもしれない。

一年の中でわたしの一番好きな季節、春。  
だけど今年は、その春を楽しむ余裕すら、わたしの心にはなかった。

\*

\*

\*

この日も学食の食券売り場には長い行列ができていた。

「カズちゃんは何食べる？」

そう聞いて来たのは大学に入ってから知り合ったユリという名の友達だ。彼女とはこうしてよく昼食を共にする。新しく出来た一番気の合う友達だ。

「今日はね」

わたしがユリに答えようとしたとき、パスンと頭を後ろから叩かれた。

「!？」

驚いて振り返ると、数冊の本とノートを手にした仁がにこやかに立っている。どうやらそれで人の頭を叩いてくれたようだ。

「いったあ……」

頭をさすりながら睨みつけたが、仁は涼しい顔をして笑っている。

「カズ大袈裟　あ、こんにちは」

緊張した面持ちで頭を下げるユリに軽く言って、仁はわたしに目

を戻した。

「B 定食」

「は？」

「俺のおすすめ」

その時、座席の方から「仁！」と声がした。どうやら仁の友達が呼んでいるようだ。仁は「おう！」と手を上げて応え、わたしの頭をもう一度ノートで軽く叩いた。

「じゃあな」

そう言っさつさと友達の方へ歩いて行く仁。わたしは思わずため息を落とした。

「まったく……人の頭を何だと思って」

「はあ。いいなあ」

隣から聞こえてきた吐息交じりの声に、わたしはユリを振り向いた。ユリはどこかうつとりしたような目で仁の去った方を見つめている。仁は数人の友達集団と合流して談笑していた。

「カズちゃん羨ましい。あんな素敵なお兄さんがいて」

「そ、そう、かな？」

わたしは曖昧に笑って返した。ユリは仁に会う度にそんなことを口にする。その度にわたしはどう答えようか困ってしまうのだ。

とても 変な気持ちだった。

仁のことを友達から「素敵」だと言われることが、とても不思議

議な気がした。

そもそも、わたしの友達が仁と顔を合わせることなんてこれまでは無かったことだから。仁とは高校が別だったため、同じ学校に仁がいるということ自体が初めてだ。それが、今では学部も同じで、教室の入れ替わりなどで一日のうちに何度もはち合わせることもあって珍しくもない。

ユリはまだ仁を目で追っている。その目に浮かぶ色は「憧れ」なのか「恋」なのか。ひよっとしたらユリは仁を好きになったのかもしれない。

そう考えて、わたしは一人密かに苦笑する。

そんなこと、わたしが気にしてどうするのだろう。ユリが仁を好きになったって、わたしには関係のないことだ。

それにしても……。

わたしはさりげなく仁のいる方に目を向けた。

仁は目立つ。今だけのことじゃない。いつもそうなのだ。こんなに多くの同じ年頃の人たちが集まっているにも関わらず、仁の姿はすぐに見つけられる。仁の周りには男女問わずいつも人がいて、遠目から見ても賑やかだ。

外の世界の仁の顔。見たことのない仁の顔。

考えてみればわたしは家の中の仁しか知らなかったのだ。当たり前のことなのに、そのことを今さらながら強く感じて、わたしは少なからず困惑していた。

わたしの知らない仁がそこにいる。わたしはそんな仁にどういうふうに接すればいいのかわからない。だから、出来るだけ学校の中では仁と顔を合わせたくなかった。仁に対して戸惑う自分が嫌だった。

目に見えない不安。それがここにある。



「あ……」

仁がちらりとこちらに目を向けた。視線が合う。仁は他の人にはわからないくらいに微かな笑みをわたしに向けると、またすぐに友達の方へ向き直った。

ドクン、と心臓が跳ねた。

予想だになかった自らのその鼓動に、わたし自身が驚いた。なんなのだろう、この感覚は。

「カズちゃん？」

ユリに肩を叩かれ、ハツとした。いつの間にか列は進み、わたしは券売機の前に立っていた。慌てて財布からお札を取り出し、券売機の中に入れてボタンを押した。

あまりにも慌てたせいで、何を押したのかわからなかったが、出てきた券を見て思わず苦笑してしまった。

その食券は、仁のすすめた「B定食」だった。

\*

\*

\*

待ち合わせ場所に着くと、そこに琢磨くんの姿はまだなかった。

時間は五分程過ぎている。別に遅刻というほどの事ではないが、琢磨くんが時間より遅いということが珍しい。そう思っていると、駆け足で近付いてくる彼の姿が見えてきた。

「ごめん！」

わたしの前に着くなり、琢磨くんは両手を合わせた。

「講義が長引いた。待った？」

「うん、全然。走ることないのに」

「いやいや。それよりも」

琢磨くんはわたしに手を伸ばし、軽く髪の毛に触れた。わたしは一瞬ドキツとしてしまうけど、琢磨くんにとってはごく自然な動作だったようだ。すぐに手を離すと、目を細めて微笑んだ。

「パーマかけたんだ」

「うん、昨日。似合う、かな？」

「もちろん。めっちゃくちゃかわいい」

琢磨くんはそう言うてにつこりと笑った。琢磨くんはいつもそうだ。普通だと照れてしまうような言葉も、サラッと口にしてしまう。たぶん無意識なのだろう。わたしは内心苦笑しながらも素直に「ありがとう」と言った。

「でもさ。少しだけ困るかな」

歩き出しながら、琢磨くんがわざとらしくため息をついた。

「これでまた和音のモチ度があがる」

わたしは思わずブツと嘔き出した。わたしのモチ度って。

「余計な心配でしょ、それは」

「いや。けっこう重要。和音知らないでしょう。高校の時も和音狙ってた奴けっこういたの」

「えー？」

それは嘘だろう。残念ながら、男子からそういうアプローチを受けたことはない。

「ホントだよ。だからオレ焦ってたんだよ。誰かに取られないうちに って」

「こらこら。取られるって。わたし物じゃないよ」

軽く背中を叩いて抗議すると、琢磨くんは苦笑した。

「ごめん。でもそんな感じだった。付き合い出してからみんなにオレ達のこと知られてたし、何より同じクラスだったからそんな心配することもなかったんだけどさ。今は……なあ……」

後の言葉はため息となって消えた。それでも、なんとなくではあるが、言いたいことはわかる気がした。

琢磨くんとわたしは学部が違う。琢磨くんの経済学部の校舎と、わたしの教育学部の校舎は同じ大学敷地内に建っているとはいえ、その距離はかなり離れていた。したがって、今のわたしたちにはほとんど接点がないのだ。意識して会う約束でもない限り、構内で顔を合わせるなどほとんどない。共有しているはずの学食でさえこれまで会ったことがない。それに加えて。

わたしはちょうど正面に見える時計台を指差した。

「そんなことより。時間なくなっちゃうよ」

「あ、そうだ。せつかくの貴重な時間が」

そうなのだ。ただでさえ会う時間が減ったうえに、琢磨くんは入学してすぐに本屋でアルバイトを始めた。おかげで二人でいる

時間は本当に限られてしまっていた。こうして、用事がない日は互いの講義が終わって待ち合わせをし、琢磨くんバイトの時間まで散歩したりどこかでゆっくりコーヒーでも飲んだり。その程度が当たり前になっっている。

「そつえば今日」

琢磨くんは何かを思い出したようにわたしを振り向いたが、唐突に言葉を切ると笑って首を振った。

「いや。何でもない。で、今からどうしようか。天気もいいし、何か買って外で飲む？」

わたしは琢磨くんに言いかけた言葉を聞き返そうとしたが、結局やめた。たぶん、琢磨くんはまた「何でもない」と笑っただけだろうから。

その笑顔を想像し、わたしは密かに息をついた。

最近、琢磨くんは何か無理をしているのかもしれない、と思う時がある。

優しい琢磨くんの笑顔の中に、これまではなかった翳りのようなものを感じるようになった。わたしに向ける笑顔が、無理して笑っているように見える瞬間があるのだ。それは気のせいなのだろうか。それでも「気のせい」と笑ってすませることができないほど、わたしの中では大きなモヤモヤとなっていた。

だけど本当は、琢磨くんは何一つ変わっていないのかもしれない。その笑顔に翳りなんてなく、そう感じてしまうわたしの方が変なのかもしれない。

どっちなのだろう。

「和音？ どうした？」

黙り込んでしまったわたしの顔を、琢磨くんが心配そうに覗き込んだ。その優しい眼差しに胸が痛くなる。どうしてなのだろう、不安でたまらなくなる。でも、この不安は琢磨くんには悟られなかった。

わたしは笑って琢磨くんの手をとった。

「何でもないよ。早く行こう」

あたたかい手。この手を繋いでいれば、不安なんてきつとすぐに忘れる。その気持ちに答えるかのように、握り返してきた力がぎゅっと強くなった。

もしかすると、と思う。琢磨くんもわたしと同じように不安なのだろうか。

今年のゴールデンウィークは、特に宿泊の予定は立てなかったが、家族で近場のレジャー施設を遊びまわろうと計画していた。動物園に水族館に、テーマパークにファミリー牧場。ほとんどが希望の喜びそうな場所だ。もちろん、何日かはそれぞれのプライベートな休日もとつてある。

希望は、もう何日も前から、このゴールデンウィークを楽しみにしていた。遠足気分でリュックを用意して、ハンカチ・ティッシュを入れて。おやつまで詰め込もうとしているのはさすがに止めただれど。

それなのに、時に神様は無慈悲な悪戯をする。

連休の二日前、希望は軽い熱を出した。そんなに高熱でもなく、機嫌も悪くなかったから、おとうさんも仁もわたしも、すぐ良くなるだろうと軽く考えていた。この日はわたしが大学を休み、希望の看病にあたったのだが、本当に熱があるのかと疑いたくなるほど希望は元気だった。

だけど、その日の夜。希望の腹部に小さな発疹を見つけた。嫌な予感がした。

その嫌な予感は見事に的中。翌朝には、希望の発疹は全身に広がっていた。この日は仁が休み、希望を病院に連れて行ったわけだが、出された診断は「水痘」。つまり「水ぼうそう」。完治するまで、ほぼ一週間はかかるという。

希望が楽しみにしていた遊びまくりのゴールデンウィークは、はるか遠くに逃げ去ってしまったわけだ。

「まあ、こういうこともあるわな」

希望を寝かしつけ、居間に戻ってきたおとうさんが、ため息をつきながらドカッとソファ―に座りこんだ。濃い諦めの色が滲んだ声で呟く。

「かわいそうだが仕方がない」

「ついてないよな、希望のヤツ。何もこんな時に水ぼうそうやんなくたって」

新聞の記事を目で追いながら素っ気なく言う仁だが、あえて無感情にそうしているのだとわかる。わたしは知っている。ぐずって泣いている希望を見ていた仁は、おとうさんと同じくらい辛そうな目をしていた。

休みを楽しみにしていた希望。それと同じように、おとうさんも仁も楽しみだったはずだ。家族そろって出掛けるのは随分久しぶりのことだったし、予定を立てている時の二人は楽しそうだった。もちろんわたしだってそうだ。みんな、希望の楽しそうな顔を見るのが嬉しかった。

だけど、ここでわたしたちがそれをグズグズ言っても仕方がない。

「さて。どうするかね。予定がまるまる無くなったわけだが。」

おまえたち、適当に遊びに行っていていいぞー」

湿っぽい空気を追い払うかのように、おとうさんが明るく言った。「希望なら父さんが見てるし。休みに家でのおんびりするの悪くない。この際だから希望と一緒にいたららしとくさ」

「じゃあ俺、明日出掛けてくるわ。せっかくバイトも休み取ってるし。サークルの仲間が何かやるつつてたから」

仁が新聞を折りたたんで、「ハイ」とわたしに手渡した。そのついでのように「カズは？」と聞いてくる。

「明日はどうする？」

「うん……」

新聞をしまいながら考える。家族で出掛けるつもりだったから、特に何も考えていなかった。急には何も浮かばない。

「彼誘ってデートでもすれば」

仁が笑いながら立ち上がった。そのまま「おやすみ」と言って居間を出て行く。おとうさんがどこか苦笑めいた笑みを漏らした。

「青春だねえ」

「……なんかおやじくさいよ、おとうさん」

でも本当にどうしよう。家にいてもいいけど、別にやることはない。やっぱり……。

部屋に戻ったわたしは、迷った末携帯電話を手に取った。

仁の言った通りにするようで嫌だったが、結局それしか浮かばなかった。

\*

\*

\*

突然だったにも関わらず、琢磨くんは快く誘いに乗ってくれた。



「ごめんね。何か用事あったんじゃないの？」

会ってからすぐにそう謝ると、琢磨くんは頭を掻きながら苦笑した。

「後でバレて気にされると嫌だから言うけど、今日は友達と川行つてバーベキューの予定だった」

その言葉に、わたしはギョツとする。

「うそ！ だったら無理してわたしに付き合ってくれなくてもよかったのに！」

「いいんだよ。和音の方が大事」

あまりにもサラリと言うので、わたしは言葉を失ってしまった。

琢磨くんは照れた様子もなく笑って続ける。

「オレが行かないからって中止になる訳じゃないし、そいつらとは今日じゃなくてもいつでも遊べる。でも和音とは」

琢磨くんはそこで言葉を切ると、改めてわたしを見て微笑んだ。

「和音ともいつでも遊べるけど、最近はゆっくり会ってなかったから。だからいいんだよ。誘ってくれて嬉しい。さ、行こ」

琢磨くんはわたしの手をとって歩き出した。その仕草はいつになく強引で、わたしはただ戸惑った。

予定になかったデートだったため、行き先もとくに決めていなか

つたわたしたちは、近くの水族館へ行くことにした。でも、わたしたちはゴールデンウィークの水族館を甘く見ていた。その人の多いこと……。結局、見るものもろくに見ず、一回りしただけで出てきてしまった。

「参ったね。魚よりも子どもを見に行つたみたいだ」

出口で顔を見合わせ苦笑した。それぐらい中は子連れで賑わっていたのだ。

そういうわけで、わたしたちは今公園を歩いている。カラオケボックスもスポーツセンターも映画館も、どこも混雑していた。結果いつものようにのんびり公園散歩ということになった。

でも、わたしにとってはそれが一番安心だったりする。琢磨くんとこうしてゆっくり歩くのは好きだった。公園もいつもより人が多かったが、文句を言っても仕方ないことだ。

「あつちはバーベキュー施設があるんだよね。良い匂いがする」

公園の奥から風に乗って香ばしい匂いが流れてくる。きっとそこも多くの人で賑わっているのだろう。

「バーベキューかぁ。ごめんね、本当なら琢磨くんも今頃は  
「和音」

ため息をついたわたしの頭を、琢磨くんがポンと軽く叩いた。

「それは言いつこなし。オレが和音と会いたかつたんだから。バーベキューとかどうでもいいんだよ。和音に気にされると、逆にオレの方が困る」

優しく諭すように琢磨くんが微笑む。

確かに彼の言う通りかもしれない。わたしが気を使うことは、逆に琢磨くんに気を使わせてしまうことになるのだ。

気を取り直して、わたしが琢磨くんに明るく笑いかけた、その時。

「？」

思わず琢磨くんと顔を見合わせ、互いに首を傾げた。どうやら気のせいじゃないようだ。遠くの方からわたしの名前を呼ぶ声が聞こえたような気がしたのだけど。

「誰かな？」

二人で周囲を見回して。

「あ」

わたしと琢磨くんは同時にその人を見つけ、再び顔を見合わせた。遠くの方からこちらに向って手をあげていたのは、仁だった。

\*

\*

\*

「いやいや。仁にこんなかわいい妹君がいたとは」

派手な茶色い髪をした男の人が、ニヤニヤと笑ってわたしを見る。その頭を仁がパチンと叩いた。

「じろじろ見んなよ。彼氏の前」

「あー！ ごめんごめん。だいじょぶ、心配しなくていいよー。オレ、変な下心ないから」

「あつてたまるかよ、馬鹿」

仁は呆れたようにため息をついて、わたしと琢磨くんに向き直った。

「悪いな。せつかくのところ、声かけて」

申し訳なさそうに拝む形に片手を上げた仁に、琢磨くんは笑って「構わないですよ」と頷いた。その言葉にホツとしたように、仁は先ほどから軽口を叩いている茶髪の男の人を指差した。

「こいつ、川崎。同じサークルのヤツ。工学部の三年」

「よろしく。川崎です。えーとカズ、ちゃん？」

川崎さんが小さく首を傾げる。わたしの名前を確認しているのだろう。「和音です」と名乗ると、川崎さんにはにっこりと笑った。

「和音、でカズちゃんね、よろしく。キミは？」

「木村です」

「下は？」

「琢磨」

「おお！ キムタクかぁ。かつこいいな。オレ、本家よりも好みかもー」

川崎さんのその口調には厭味がない。この軽さがきつとこの人の持ち味なのだろう。琢磨くんもその言葉に苦笑はしているものの、気分を害した様子はなかった。

「オレ達さー、あっちのコートで試合やってんの。試合つつても、ほとんど遊びなんだけど。キミたちも来ない？ な、仁？」

「は？ あー、んー」

仁はどうしたものかというように頭を掻いている。まさか川崎さんがそう言い出すとは思わなかったのだろう。琢磨くんが助け船を出すように口を挟んだ。

「試合って？」

「ああ。オレらのサークルって3オン3のバスケットね。今あっちで新歓の親睦試合やってんの」

それで二人とも、Tシャツにハーフパンツというラフな格好をしているわけだ。川崎さんにいたってはヘッドバンドまでしている。言われてみれば二人の髪は汗でペツタリとしていた。

「三十人近く来てるんだけどさ、ほとんどが見学。実際やってんの少数でねー、いまいち盛り上がりつついうか。もちよっと人数欲しいなーとか思ってたわけよ。飛び入り大歓迎！ というわけで行こう。ね！」

川崎さんの柔らかながらもどこか強引な誘いに、わたしと琢磨くんは顔を見合わせた。

「よし！ 一人増えた！ もういつこチームができるぜー。仁、トナメントやるぞ！ マックカード争奪戦！」

まだ承諾したわけでもないのに、川崎さんは一人盛り上がりつつズンズン歩いて行く。仁が大きなため息をついた。

「ほんつと悪い。あいついつもあんな感じでさ」

そう言って、仁はわたしではなく琢磨くんを目を向けた。

「別にいいんだぜ。無理して付き合うことないから。構わず二人で」  
「いいですよ、行きます」

仁の言葉を遮った琢磨くんは、わたしは思わず彼を見上げた。琢磨くんは笑ってわたしを見返した。

「おもしろそう。いい？」  
「い、いいけど……」

わたしは戸惑う。琢磨くんは笑っているが、その目には驚くほど真剣な色が浮かんでいたのだ。「おもしろそう」という言葉には不釣り合いな目だった。

チラリと仁に目をやると、仁も意外そうな顔をしていた。琢磨くんが断ると思っていたのだろう。でもすぐに気を取り直したように笑い、「じゃあ、こっち」と先に歩き出した。

仁がバスケのサークルに入っていることはもちろん知っていた。

仁は高校時代はバスケットボール部だったし、大学入学後はこのサークル活動にも熱心に参加していたことも知っている。だけど、お母さんのことがあってからは、仁はサークルの参加を控えていたようで、家でもそういった話はほとんどしなかった。そういう訳もあり、わたしは仁のサークルのことなどほとんど忘れかけていたのだけだ。

わたしはコートでボールを追う仁を、不思議な気分で見つめていた。

仁。なんて楽しそうなんだろう。

時に真剣な顔で、時に笑顔を見せながらコートを駆ける仁は、家で希望やわたしに見せる顔とは全く違っていた。家で見せる「兄」の顔ではない、どこか無邪気な少年のような顔。よく通る掛け声、軽やかな笑い声。

ここにもわたしの知らなかった仁がいる。その事実、心がザラザラと不快な音をたてる。

わたしは仁のことを知っているようで何も知らないのだと思う。兄妹なのに 本当の兄妹じゃないから？ たった五年しか兄妹をやっていないから？ もし本当の兄妹でずっと一緒に育ってきたのなら、わたしはこんな戸惑いなど感じずに済んだのだろうか。

仁がゴールを決めた。見物人の間から「キヤー」と黄色い歓声があがった。跳び上がって喜んでいる女性もいる。

仁、こんなに人気があるんだ……知らなかった。たぶん、この中

で一番わたしがここにいる仁を知らない。

「ねえ、カズちゃん！」

ポンツと肩を叩かれ、わたしはハツと我に返った。肩を叩いて来たのは隣に座っていた川崎さんだった。

「キムタク、すごくない？」

「え？」

川崎さんが指差したのは、仁の試合の反対側半面のコートの方だった。

わたしは目を丸くした。琢磨くんがコートの中にいる。

この場に連れて来られてすぐ、琢磨くんはチーム編成の為に引張って行かれ、わたしとは離れていたのだけど、まさか今試合に出ているとは思わなかった。

気付かずにいた　そのことに衝撃を受けた。

「すごいよ、彼！　なに、もしかして経験者？」

興奮気味の川崎さん。わたしはショックと罪悪感を必死に隠しながら返事をした。

「琢磨くん、ハンドボール部でした」

「はー、なるほど！　ハンドかぁ。ボール慣れしてるわけだね」

川崎さんは感心したように立て膝に頬杖をついた。

「……上手いなあ。一緒にやりてえ。彼、ホントにうちに入んないかな」



わたしは苦笑した。そればかりは琢磨くんには聞かないとわからない。

川崎さんの言うように、琢磨くんの動きは華麗だった。無駄な動きがない。他の二人とは初めて組むはずなのに、上手く動かしながらリードしているのがわかる。

琢磨くんがボールを持つ。シュートを打つ。かのように見せかけ、ディフェンスの脇をドリブルですり抜け、そのまま軽やかにラッシングシュートを決めた。ため息が漏れるほどの滑らかな動き。絵になるほどのカッコよさだ。ワツと歓声があがる。

それと同時に、試合終了の笛が鳴り、コートの中の二つの試合が同時に止まった。

川崎さんが立ち上がって「お疲れー！ 次のチーム中入ってー」と仕切り始めた。川崎さんはサークルの部長なのだそうだ。

脇で見ていた選手と入れ替わるようにコートの中の選手が出てくる。琢磨くんが肩で汗をぬぐいつつ駆け寄ってきた。

「お疲れさま」

「うん。あー、キツ！」

琢磨くんは笑いながらわたしの隣に腰を下ろす。顔には汗が流れている。突然の参加だったためタオルなんか用意していない。どうしようかと迷っていると、琢磨くんの頭上にフワリと白いタオルが落ちてきた。顔を上げると前に仁が立っている。

「大丈夫、それまだ使ってないから」

「あ……ども」

驚き半分で頭を下げた琢磨くん小さく笑って、仁は自分のタオルを頭にかけてながら離れて行った。琢磨くんは軽く肩をすくめて、

借りたそのタオルに顔をうずめる。

「フウ。しんどかった」

「琢磨くん、すごいね。川崎さんも絶賛してたよ」

「アハハ。そう？ 和音は？」

「ん？」

「見ててくれた？」

立てた膝の上のタオルに頭を乗せたまま、琢磨くんが顔だけわたしに向けた。そのどこか射抜くような視線に一瞬言葉に詰まってしまふ。罪悪感が頭をかすめたが、わたしは慌てて頷いた。

「み、見てたよ、もちろん！ かつこ良かった」

琢磨くんが目を細める。

「そっかー、ありがと。でも、いいよ。無理しなくて」

「え？」

「オレ、知ってる。和音、仁さんの方見てたろ？」

その瞬間、わたしの中の時間が止まったような気がした。一瞬息をするのさえも忘れた。笑い飛ばすことも否定することもできず、わたしは琢磨くんをただ食い入るように見つめる。どういう顔をしていいのかわからなかった。心臓が嫌な音を立てて騒ぎ始める。

「否定しないんだね」

琢磨くんはゆっくりと息を吐いて、再びタオルに顔をうずめた。

「試合中、オレが和音を見る度、和音の目はもう一つのコートの方

ばかり見てた　それ、オレの気のせいじゃないよね」

タオルに押し付けられたぐもった声が、鋭く胸に突き刺さった。違う、と否定できない。琢磨くんの言っていることは嘘ではなかったからだ。

「やっぱ来なきゃよかったな　悔しいよ」

琢磨くんは短くそう言うと、急に勢いよく立ち上がった。

「た、琢磨くん？」

「顔洗ってくる」

わたしの方を見ないまま、琢磨くんは大股で離れて行く。遠ざかっていく足音に、頭が真っ白になった。

追いかけた方がいい。早く、立ち上がって。今なら追い付けるから。

わたしは自分に言い聞かせる。でも、体は言うことを聞いてくれなかった。

足が震えて力が入らない。立てない。動けない。  
とうとう視界から琢磨くんが消えた。見失った　胸を抉られる  
ような痛みが襲う。

どうしよう　傷付けた。

わたしは琢磨くんを傷付けてしまった。

無意識のうちにわたしは胸元に手をやった。手に触れたそれを思わずギュッと握りしめる。

琢磨くんからクリスマスに貰ったネックレス。そのハートの形が

手に冷たく突き刺さる。

この後、琢磨くんはここには戻ってこなかった。

\*

\*

\*

琢磨くんを探してわたしは公園中を歩き回った。だけど彼は見つからない。携帯も繋がらない。もしかするとあのまま帰ってしまったのかもしれない。それでもわたしは探さなきゃいけなかった。

わたしのせいだから。わたしが琢磨くんを傷付けたから。仁を見ていた。その理由をいくら言い訳したって、琢磨くんを傷付けた事実には変わりはない。

わたしは知っていたのに。

これまでも琢磨くんは仁を気にしていた。わたしと仁が本当の兄妹じゃない、ということに気になっていた。わたしはそのことに気付いていた。「嫉妬」　いつか琢磨くん本人の口からその言葉を聞いたことがある。そして、それはわたしが思っていたよりもずっと強いものだったのかもしれない。

なのに、どうしてわたしは……。

夕方になり人が少なくなった公園の並木道でわたしは足を止め、道端の木に寄りかかって息を整えた。

もうどれぐらい歩きまわっただろう。長時間歩くのには向いていないローヒールのパンプスのせいで、足はもうとうに悲鳴を上げていた。両足の踵には恐らく靴ずれが出来ている。そこは体中にしびれが走るほど鋭く痛んでいた。一度立ち止まってしまうと、足を動かすのが怖くて、わたしはその場に蹲った。

どうしてわたしは仁を見ていたりしたのだろう。琢磨くんが仁をどう思っていたか知っていたのに。

どうして琢磨くんだけを見つめていなかったのだろう。

深い後悔が心に渦巻く。

あの時、仁のことなんて気にせずに、放っておけばよかったのだ。そして、笑って否定すれば良かった。「仁なんか見てないよ」と、「琢磨くんが気にすることなんてないよ」と否定すれば良かったのに。

でも、いくらそれを悔やんでも、もう全部が後の祭りだ。

琢磨くんは誤解して、わたしを置いて行ってしまった。

……誤解して？ 何を？

ドクン、と心臓が強烈な鼓動を打ち始めた。こめかみがチリチリと痛んだ。

気持ちが悪い      ありえない。考えたくない。

「和音」

頭上から柔らかな声が降ってきた。その響きにハツとして顔を上げた。

「たく」

わたしは言葉を飲み込んだ。わたしが見上げた先に立っていたのは、探していた彼ではなく、今一番会いたくない人だった。

「……仁」

どこか複雑な表情を浮かべた仁は、スッとわたしに向けて手を差し出した。

「こんなところでしゃがみ込むな。変なヤツに捕まるぞ」

ぶつきらばうだけど、優しげな声。わたしは返事をせず、仁の手をわざと無視するように自力で立ち上がった。踵がキリリと痛んだが、顔に出さないように懸命にこらえた。知られなくなかった。

「大丈夫か？ あいつは見つかつ てはないみたいだな」

聞かなくてもわかることを口にする仁に、苛立ちが募った。

「……仁のせいよ」

気が付けばわたしはそう口にしていた。わたしに同情するような目を向ける仁が、どうしようもなくわたしを苛々させた。

「仁があの時声なんかかけてきたから 気付かないふりしてくれればよかったのに。そしたら、琢磨くんは」

感情が高ぶって声が上ずる。ぐっと胸にこみあげてくる何か。それは悔しさなのか悲しさなのか自分でもわからなかった。

「琢磨くんは……っ、予定あったの、断ってまで付き合ってくれたのに……全部、仁のせいだ……っ」

ぼたぼたと涙が落ちる。こんな目で仁を睨みつけてみても、ただ滑稽なだけだろう。だけど、そうせずにはいられなかった。仁を精いっぱい睨みつけて、この苛立ちをぶつけることしかできない。

わかっている。これはただの八つ当たりだ。琢磨くんが戻ってこなかったのは仁のせいじゃない。わたしのせいなのだ。

仁は何も言わずわたしを見返している。その表情なんて今のわたしには読みとれなかった。ただわたしを見ている　それだけしかわからない。

どうして仁は黙っているのだろう。早くわたしなんか放つてどこかへ行ってくれればいいのに。みつともなく八つ当たりするわたしに呆れて置いて行くといい。そうしてくれた方がわたしも楽なのだなのに、仁はそうしなかった。仁は一度ギョッと唇を引き結ぶと目を伏せてわたしから視線を外した。そして。

「そうだな。たぶん、俺のせいだ」

思いもしなかった言葉を口にした。

「俺のせいだよ。ごめん。俺があいつに」

「違いますよ」

突然、その場に第三者の声が響き、わたしと仁はハッと同時に振り向いた。

琢磨くんが、そこにいた。

「べつに、あなたのせいじゃないですよ」

琢磨くんは静かに言いながら歩み寄ってきて、仁と正面から向かい合った。見上げた琢磨くんの首筋に汗が流れる。息も微かに乱れていた。もしかして、と思う。琢磨くんもわたしを探してくれていたのではないだろうか。だけど、今それを確かめることはできなかった。

「　　自惚れないでください」

わたしは思わずびくつと身を震わせた。これまで聞いたことのな

いような琢磨くんの低い、厳しい声。

仁が不快そうに眉を顰めた。

「カズ置いて行ったくせに、偉そうなことを言っなよ」

「それはこつちの問題でしょう。仁さんが口出すことじゃない。和音はオレの　彼女だから」

それだけを言うと、琢磨くんはわたしの手をとって歩き出した。

踵の痛みに思わず顔が歪む。けどそれを訴えることは躊躇われた。

強引な琢磨くんの手と硬い横顔が怖かった。何も言えず、ただ、手を引かれるままに歩いた。

仁はどんな顔でわたしたちを見ているだろう。

それを確かめるのも怖くて、わたしは後ろを振り返ることもできなかった。



琢磨くんは何も言わない。それでも、すぐにわたしの手を掴む力を弱め、歩くスピードも緩めてくれた。そのまま公園を出ると、琢磨くんはすぐに通りかかったタクシーを止めた。たぶん、わたしが足を気にしていることに気付いていたのだと思う。

タクシーに乗りこんでからも琢磨くんは一言も口をきかなかったし、黙り込む琢磨くんにわたしも何も言えなかった。無言のまま車は進む。

日は沈み、窓の外はだんだんと暗くなってきた。

ほどなく、タクシーは琢磨くんのマンションの前で止まった。車を降りた後、ようやく琢磨くんが口を開いた。

「ごめん」

呟くようにそう言った。去って行くタクシーのエンジン音にかき消されてしまいそんなほど小さな声だった。

「オレ、最低だね」

琢磨くんは自嘲的な笑みを浮かべた。

「置いて行ったり、無理やり引っ張ってきたり。すごい勝手なことしてる」

どう言葉を返したらいいのだろう。確かに今日の琢磨くんの行動は戸惑うことばかりだ。だけど、それは元はわたしが原因だ。わたしに琢磨くんを責めるなんて出来る訳がなかった。俯いたわたしに

琢磨くんは言った。

「そして今からまた最低な事しようとしてる」

「え……？」

顔を上げたわたしの目を、琢磨くんは真っ直ぐに見下ろしてきた。

「和音、今日うちに泊って」

その言葉に、わたしは息をのんだ。琢磨くんの目はどこか懇願しているようにさえ見えた。

「今日はうちに誰もいない。だから、泊っていけよ」

その意味することに気付かないほど馬鹿じゃない。わたしは身動きが取れなくなった。そんなわたしに追い打ちをかけるように、琢磨くんは言葉を被せてきた。

「和音がオレのことを好きなら 来れるだろう？」

淡々とした声だった。琢磨くんはわたしに背を向けて歩き出した。マンション入り口のオートロックを開け、ゆっくりと開いたドアの向こうに足を踏み入れる。一度もわたしの方は振り向かなかった。ドアが閉まり始めた。

このまま別れたら駄目だ。

それしか考えられなかった。わたしは足の痛みも忘れ、走って琢磨くんの背中を追いかけた。

エレベーターの中でも琢磨くんはわたしを見ようとはしなかった。どうしたらいいのだろう。どうしたらちゃんと話せるだろう。こんなに頑なな琢磨くんは初めてで、頭がぐちゃぐちゃと混乱していた。

玄関の前に着き、琢磨くんは無言で鍵を取り出した。

カチャリ、という無機質な音に、急に怖くなった。本当に家の人はいないのだろうか。琢磨くんは本気で……？

琢磨くんがドアを開けた。中は暗かった。誰もいないことの証明だ。琢磨くんが電気を付け、ようやくわたしを振り向いた。

「入って」

ドアを支えわたしを促す。その声に少しだけいつもの琢磨くんの優しさが戻ったように感じた。だけど、わたしは動けなかった。ぎゅっと拳を握りしめて声を振り絞った。

「わたし……泊れないよ」

「どうして？」

怒っているようでも責めているようでもない琢磨くんの声。無感情にさえ思えた。

「俺とは できない？」

「そ、そうじゃない！」

つい声が大きくなって、わたしは慌てて声を顰めた。

「そうじゃなくて、わたし……」

懸命に言葉を探した。泊って、と言う琢磨くんにここまで付いて来たのはわたし自身だ。無理に連れて来られた訳じゃない。覚悟がまるでなかった訳でもない。なのにどうしてここで断ってしまうのか、自分でもわからなかった。だけど、駄目なのだ。体がこれ以上動かない。

「今日は……希望が病気で……だから早く帰ってやらないと……」

なんて馬鹿な言い訳。そう自分でも思ったその時、腕を掴まれ、わたしの体はドアの内側へ引き込まれた。その勢いで体勢を崩し、顔が琢磨くんの胸にぶつかる。後ろでボタンとドアが閉まる音がした。

一瞬、何が起こったのかわからなかった。背中に軽い衝撃を受け、咄嗟にギュツと目を閉じた。目を開けた時、眼前には琢磨くんの顔があつて、わたしは閉じられた玄関のドアに押し付けられているのだと気付いた。

「たく」

わたしの言葉は唐突に遮られた。

わたしの唇を琢磨くんの唇が塞ぐ。痛いほどに強く押しつけられるそれは、いつもの優しいキスとは全く違うものだった。これまで経験したことのない、強引な深い口づけ。わたしはただ逃れることしか頭に浮かばなかった。必死に顔を背けた。だけど、すぐに追いつかれ奪われる。今度は手で顎を支えられ、逃げることはできなかった。

荒々しいキス。苦しい　怖い。

「！」

琢磨くんがビクツと体を震わせ、ようやくわたしから離れた。その下唇の一点が赤く滲み出す。琢磨くんが手の甲でそれを拭うのが、涙でばやけた視界の中に映った。

噛んだんだ、わたし。琢磨くんの唇を噛んでしまったのだ。もうなにがなんだか分からなかった。どうしてこういうことになっているのか。

「なん、で……？」

震える手で口を覆う。厳しい顔をしてわたしを見つめる琢磨くん。彼がわからない。

「家族を言い訳にするなよ」

琢磨くんが押し殺したような低い声で言った。

「希望が病気だとか……そうじゃないだろ」

琢磨くんの顔が苦しげに歪む。その時になってやっと気付いた。

わたしはまた琢磨くんを傷付けたのだ。

琢磨くんはその傷付いた目でわたしを見つめる。

「泊れない理由を弟のせいなんかにしなくてくれ。それを言われるとオレは　和音はずるいよ」

その言葉にガツンと頭を殴られたような気がした。

琢磨くんの言うとおりかもしれない。わたしはずるい。自分でも気付かないうちに、きつとどこかで計算が働いていたのだ。家

族を優先するわたしを、いつも理解してくれた琢磨くん。それを頭のどこかで考えていた。逃げるために希望を利用した。

わたしはズルくて　汚い。

琢磨くんはわたしの顔の横に両手をついて、そのまま頂垂れた。

琢磨くんの柔らかな髪が鼻先をかすめる。

「オレ、もう限界だ。見ないふりも気付かないふりも限界。理解ある彼氏なんてもうできない」

琢磨くんは顔をあげて、わたしの目を正面からとらえた。

「オレは和音が好きだよ。ずっとそばにいたい。ずっとそばにいて欲しい。今だけじゃない、この先もずっと」

激しいまでの想いの込められた言葉。だけど、その言葉の熱さは反対に、琢磨くんの声は低く重く沈んでいた。

「心から、好きだ。オレのそばにいて欲しい」

かすれた声でそう言うと、何かを堪えるように目を伏せる。長いため息をつき、やがて琢磨くんはゆっくりと視線をあげた。

「……だけど、和音はそうじゃない。和音が近くにいてほしいと思う人は、オレじゃないんだ」

琢磨くんはわたしを見つめたまま、体を離れた。そして、まるで泣き笑いのような表情でわたしに語りかける。

「和音。自分でももう気付いているだろ？　和音がそばにいて欲しい」

いと思うのは、誰？」

「え……」

「いつも和音がその目で追いかけているのは、誰？」

まるで幼子に問いかけるような穏やかな声に、止まっていた涙がまた溢れた。

わかった。琢磨くんが何を言いたいのか、誰を差しているのか。

そして、それがたぶん間違いじゃないことにも、わたしは今気付いてしまった。

それでも、それは認めたくないことだった。違う、そうじゃないと自分に言い聞かせるように首を横に振る。

琢磨くんはまた一つ小さなため息をついて、今度は優しい眼差しをわたしに向けてくれた。

「知ってる？ 和音。オレ達、学食で何度か一緒になってるんだよ」

目を丸くしたわたしに、琢磨くんは肩をすくめてみせた。

「オレはすぐに和音に気付いたよ。その度に声をかけようかと思った。でも、できなかった。和音の視線の先には、いつもあの人がいるから」

琢磨くんが笑う。それは寂しげな笑みだった。

「気のせいだと思ったかった。気にし過ぎだと必死に思いこもうとした。だけど、違う、気のせいじゃないんだ。今日それがはつきりとわかった」

言葉が出ないわたしを、琢磨くんはまっすぐに見つめた。

「和音は、オレには気付かないけど、仁さんにはすぐに気付く。つまり　そういうことだよ」

その言葉に、認めたくないという最後の抵抗が力を失った。見たくない自分の気持ちを正面から突き付けられた。

悲しかった。

もう何もかもが痛くて、ただ悲しい。

「乱暴なこととしてごめん……」

琢磨くんの指先がそつとわたしの唇に触れた。しばらくそのままで止まり、ややあつて唐突に手を離し、笑った。それは、今までのが全部嘘のようないつももの明るい笑い顔で、わたしは思わず目を瞬かせた。

「家まで送る。その足じゃ、きついでしょ」

「え……？」

意味が分からずに首を傾げると、琢磨くんは悪戯っぽく片目をつぶった。

「親父の車借りるから。先月免許取ったばかりの若葉マークですが、腕は保障いたします」

そのおどけたような言い方に、わたしはつい笑ってしまった。琢磨くんも同じように笑う。

その一瞬、これまでと何も変わっていないような気がした。でもすぐにそれは錯覚でしかないと気付く。



笑いながら、胸が抉られるほどの喪失感に襲われた。

わたしたちはもう、元には戻れないのだ。

家まで送ってもらう車の中で、わたしたちは何も話さなかった。話すことが見つからなかった。話す必要もなかったのかもしれない。わずか十分　これが最初で最後のわたしたちのドライブだった。

「ありがとう」

車を降りる時、一言そう言ったわたしに、琢磨くんはただ「うん」と微笑んでくれただけだった。

それでもいい。笑ってくれただけでじゅうぶんだ。

ドアを閉めると、すぐに車は動き出した。角を曲がって車が見えなくなり、エンジンの音も聞こえなくなって、ようやくわたしは深いため息をついた。

「さようなら」と言えなかった。もしかしたら、「言えなかった」のではなく「言わなかった」のかもしれない。

\*

\*

\*

玄関のドアを開けようとして、わたしは手を止めた。

この家には仁がいる。たとえ今はまだ帰っていなくても、仁が戻る場所はこの家だ。

仁の顔を思い浮かべると、胸がトクンと小さく跳ねた。もう何度も味わったことのある感覚。でもわたしはこれが何なのか知りたくなかった。

気付きたくなかったのだ。普通の家族でいたかったから。  
普通に「妹」でいたかった。仁は「お兄さん」でよかった。  
それなのにどうしてこんな想いを抱いてしまったのか。嫌悪感が  
募る。

こんな想いなど消えてしまえばいい。  
そうすれば、この先もずっと普通の家族でいられるのだから。

いつまでも外で立っている訳にもいかず、わたしは玄関のドアを  
開けた。

「ただいま……」

小さく声をかけると、いつものようにパタパタと小さな足音が聞  
こえてきて、希望が顔を出した。

「おかえりー、かじゅー！」

希望の顔は、朝見た時よりも赤い発疹が増えていた。増えたので  
はなく、赤味が増したただけなのかもしれないが。

「ただいま、のん。調子はどう？」

「うん、げんきー！」

発疹だらけの顔でにつこりと笑う希望。

昨日の夜は出掛けられないショックで泣いて叫んで大変だった。  
絶対に出掛けるんだと言ってリュックを抱きしめていた。

そんなことを思い出したら、希望の健気なこの笑顔が、どうしよ

うもなく愛しく思えてきた。

「う?。」

靴も脱がないまま膝をつき、ふわりと希望を抱きしめた。やつぱりすこし熱があるのか、希望の体はともあたたかかった。やわらかな髪に鼻先をうずめる。嗅ぎ慣れた希望の匂いにほうつと力が抜けた。

「おかえり　和音?。」

おとうさんの声が聞こえてきた。居間から様子を見に出て来たのだろう。

「どうした和音?　何かあったのか?。」

わたしは顔を上げて笑って首を振った。でもそれは失敗だった。上手く笑えなくて顔が歪む。

「あつ。おとーたん!　かじゅが、なきそう!。」

希望が、わたしの顔を覗きこんで目を丸くしながら慌てる。

「だいじょうぶ?　のんがいいコいいコしたげるねー」

そう言っつて、自分がいつもしてもらうように、小さな手で何度もわたしの頭をなでる。「いいコ、いいコ」と言いながら。

「ありがとう……のん」

傍らでおとうさんがそんなわたしたちを黙って見守っている。その安心感にホツとして、気持ちが緩んだ。いろんな思いが胸に

込み上げてくる。

「今日はずっと家うちにいれば良かった……」

ずっと、この温かな場所に。そうすればこんなことにはならなかったのに。

希望が不思議そうに首を傾げた。じわりと浮かんできた涙を隠すように、わたしはもう一度そんな希望の体を抱きしめた。

「ただいま」

と背後のドアが開いたのはその時だった。  
思わず体が硬くなった。

「じん、かじゆがたいへん！」

「おかえり」を言うのも忘れて、希望が懸命に訴えている。わたしはそのまま顔を希望の体に押し付けた。

今はまだ仁を見たくない。見られたくない。  
隣で靴を脱ぐ気配がする。

「かじゆがないてるのー」

「そっか」

声と共に、わたしの頭にフワリと優しく何かが落ちてきた。

それはよく知った仁の手の感触。

その手はポンポンと二度、わたしの頭を優しく叩いて離れた。  
ただそれだけ。言葉は何もかけてくれなかった。

それなのに、心がどうしようもなく震えた。  
こんなにも強くそれを感じたことはなかった。

わたしはこの人が好きなんだ。

離れて行く仁の足音を聞きながら、わたしは何度もその言葉を噛み締めていた。

（第8話 完）

## 6（後書き）

8話終了です。ありがとうございました！9話へ続きます。

（次ページより番外編になっています。そのまま9話にお進みになる方は、お手数ですが、一旦目次までお戻り下さい。申し訳ございません）

ご意見ご感想、お一言でも頂けると嬉しいです！

## 始まりの瞬間（前書き）

これが「家族」の始まりだった。



## 始まりの瞬間

なんとなく、だけどわかつてはいた。

お母さんは再婚するつもりだろうということが。

わたしがお母さんの異変に気付いたのはもうずいぶん前だった。栄養士をしているお母さんは、今年の春から新しく私立の学校に職場を移した。そしてすぐに、その変化は現れた。

朝が苦手なお母さんが、起きて早々から妙に機嫌がいいし、化粧だって時間をかけてやるし、服だって綺麗な女性らしいものを多く着るようになった。たかが仕事に行くだけで。

それは「好きな人がいるんだろうな」と子どものわたしにもすぐにわかるほどの変化だった。

「恋」をしているお母さんは、本当になんというか……かわいらしかった。

だから、「和音に会って欲しい人がいるの」と言われても、そんなに驚かなかった。

わたしはお母さんの「恋」を応援する、と最初からそう決めていたからだ。

\*

\*

\*

「お正月、みんなで旅行に行くわよ」

ある日の夕食の時、突然そう切り出され、わたしは目をぱちくりさせた。

「旅行？ どこに？」

「温泉とかどう？」

にっこりと笑うお母さん。わたしはハアツとため息をついた。

「どうって聞かれても。どうせもう決めてるんでしょ」

「うん。 征爾<sup>せいじ</sup>さんがね」

わたしは思わず箸を止めた。

征爾さん。それはお母さんの「彼氏」の名前。これまで何度か顔を合わせたことがある。

お母さんより三つ年上の四十三歳で、お母さんの勤める学校で国語の先生をしているそうだ。すごく優しくそうな人だった。いかにも女子生徒に人気がありそうな、素敵なおじさん。

お母さんって面喰いだったんだと改めて思った。

外見だけじゃなく、実際「春山征爾」というその人は、すごく優しい人だった。穏やかなその物腰に、わたしはすぐにその人を好きになれた。この人ならきつとお母さんを大事にしてくれるだろうと思った。十三歳の子どもの見る目なんて、そうそう当てにはならないのだろうけど。

ただ、気になることが一つだけあった。

その征爾先生には、一人息子がいるという。わたしより二つ年上の十五歳。「仁」という名前だけを知っている。

そう。名前だけ。

これまでの顔合わせに、その「仁」という人は、一度も来たこと

がなかった。征爾先生は毎度「ごめんね、受験生でいろいろ難しい時期なんだ」と苦笑いをしていたけれど、わたしとしては、これは苦笑いで済ませて欲しくはない問題だった。

はつきり言つて、征爾先生よりもどんな人だか気になる。

だって、もしお母さんたちが再婚するとしたら、わたしと「仁」という人は兄妹になる訳なのだから、気にならないはずがない。

「……ねえ。その旅行に『仁』は来るの？」

「『仁、くん』」

お母さんは「くん」を強調してわたしを<sup>たしな</sup>窺めると、すぐに満面の笑みを浮かべた。

「そりゃあ来るわよ。三泊四日、お正月に一人でお留守番は可哀想でしょう」

「だけど受験生で難しい時期なんですよ」

あからさまな厭味を込めて言うと、お母さんは苦笑した。

「受験生にも息抜きは必要でしょ。いい機会じゃない。あなたも仁くんと仲良くなる」

「仲良く、ね……」

お母さんはわかっているのかな。

わたしは十三歳。年の近い男の人とそう簡単に「仲良く」なれる年頃じゃないということ。

そもそも、受験を言い訳にして顔合わせに一度も来ないような人と、仲良くしたいとは思わないし。

だけど、そんな思いは口には出さず、胸の奥にしまい込んだ。

\*

\*

\*

出発は大みそか。

お母さんの携帯が鳴ったのは、お昼ちようどの番組が始まった時だった。

「ほら、カズ。お迎えが来たわよ。車、下に長く停まれないから、早く早く！」

お母さんにせっつかれ、わたしはテレビを消して立ち上がった。軽やかに動き回るお母さんとは対照的に、わたしの気は重かった。いまいち気が進まない。それは会ったこともない「仁」という人のせいだ。

どういう人だろう。嫌な奴だったらどうしよう。お母さんの再婚、歓迎できなくなるかもしれない。とかいろいろ考えてしまう。だけど、いつかは会わなければいけないわけで、ここでグズグズしててもしょうがない。

わたしは覚悟を決めて、荷物を手にした。

「こんにちは、和音ちゃん。お正月、ずっと晴れだって。良かったね」

車の脇に立つ征爾先生がのんびりとそんなことを言う。わたしは

「はあ」と曖昧に笑った。天気なんて気にもしなかったけど。

「急がせるようで悪いけど、すぐ乗って。途中で軽くお昼にしよう。夕方には宿に着くようにしたいから」

「ご丁寧の後部座席のドアを開けてくれた征爾先生に「ありがとう」と言って、車の中に入ろうとした、その時。

シートの奥に座っていた人と目があつた。これまで会ったことのない男の人。当たり前だけど、すぐに誰だかわかった。

仁　さん、だ。

彼はわたしに軽く頭を下げると、すぐに前に視線を戻した。素っ気ない。だけど、怒っているようでもなく、その横顔は穏やかだ。征爾先生とよく似ている。

「は、はじめまして。失礼します」

何を言ったらいいのかわからず、とりあえずそう言って車に乗り込んだ。

考えてみたら当然なんだけど、お母さんは助手席だ。後ろはわたしと仁さんの二人。

どうしよう……めちゃくちゃ緊張するのだけど。

運転席に乗り込んだ征爾先生が、わたしたちに向けて声をかけてきた。

「あ。後ろの二人は初めて会ったよな。　　仁、挨拶は「したよ」

え、あれが？

わたしは思わず隣を振り向いた。その勢いに気付いたらしく、仁さんもこちらを向いた。そして、ニコツと笑った。

「今、ね。はじめまして」  
「！」

驚いた。この人、なんていい顔で笑うんだろ、と思った。

「もうちょっとこっち詰めていいよ。ゆっくり座ったら」

確かに、わたしはドアにぴたりくっつくようにして座っていた。  
仁さんとわたしの間には大人が一人が座れるぐらいも空いている。

「う、うん……」

わたしは少しだけ体勢を楽にした。その様子に仁さんが笑う気配がする。だけど、わたしはその顔を見ることができなかった。

なんだか……恥ずかしい。

仁さんは、クラスの男子の誰よりも、クラブの先輩の誰よりも  
かっこよかった。笑った顔は尚更。

「さて、出発するぞ！」

「楽しみねー」

征爾先生とお母さんが明るく声をあげる。

わたしは顔を上げられず、しばらくの間一人で俯いていた。

\*

\*

\*

宿に着いたのは、午後五時頃。ほぼ予定通りの到着だった。

部屋は八畳程度の和室が二つある大きな部屋。この一部屋でみんな一緒に泊るらしいけど……複雑だ。いくら障子で仕切ったとしても、征爾先生と仁さんとも同室で寝るなんて、さすがにちよつと抵抗がある。

だけど、当然異議を唱えることもできず、わたしは部屋の隅にとりあえずの居場所を確保した。

荷物を整理しながら、離れたところに座っている仁さんにチラリと目を向けた。こちらから見える仁さんの横顔は、楽しそうでもないが、別につまらなさそうでもない、ごく自然な表情かお。なんだか不思議な人だと思う。

結局、これまで仁さんとはあまり話していない。仁さんはもともと無口なのかもしれない。わたしとだけではなく、お母さんとも征爾先生ともあまり話していなかったから。車内ではずっと外を見ていたし、昼食の時も黙々と食べていた。ただ時おり、話を聞いて笑って、必要ならば口をきく。そんな感じだ。

大人っぽい、静かな人。これが出会って数時間で持った仁さんの印象だった。

大浴場は露天風呂に繋がっていた。

外は冷え込み、白い雪がちらついている。そのせいか、露天風呂に出ている人はわたしとお母さんの他には誰もいなかった。

「ねえ、どう？ 仲良くできそう？」

お湯をパチャンと肩にかけながら、お母さんがわたしに向けてそう聞いて来た。誰と、なんて聞かなくてもわかるけど、わたしはわ

ざと首をかしげて見せた。

「誰と？」

「仁くとよ。少しは打ち解けたかしら」

……お母さん。車内での様子を見ていたら、そんなこと聞くまでもないだろうに。わたしたちのどこが打ち解けてたように見えた？

「無理だよ。会ったばかりだもん」

「それもそうよねえ」

お母さんは苦笑して、空を仰いで息を吐いた。

「……お母さんね、夢があつたのよ」

「夢？」

いきなりの話の飛躍に、一瞬目が点になってしまった。お母さんは微笑みながら続ける。

「ちっちゃい頃からの夢。結婚したら子どもは二人は欲しい、っていう。ほら、お母さん一人っ子だったから、兄弟がいる人羨ましかったのよ。だから、我が子には絶対に兄弟を作ってやるんだって思ってた」

わたしは黙ってお母さんの顔を見つめた。上気した顔で夢を語るお母さんの顔は、まるで知らない人のように見える。

「お父さんともね、そう相談してたの。年は二歳か三歳ぐらい離すのがちょうどいいかな、とか。だから、カズが二歳になった頃、もう一人　って本気で考えていたのよ。……だけど、お父さんが事



故で死んじゃって、それは永遠に叶わなくなった」

あえて明るくそう言いながら、お母さんはパチャパチャと水面を叩いた。

「まあ、それはそれで、今さら言っても仕方ないし、お母さんももうとくに忘れかけてただけだね。だけど、征爾さんに会ってから……仁くん existence を知った時、その夢を思い出した。もしかしたら、実現できるんじゃないかって」

そう言っ、お母さんはわたしを真っ直ぐに見詰めて微笑んだ。

「カズに兄弟作ってやれるかも、って」

その言葉に、わたしはキュツと唇を引き結んだ。覚悟はしていたし応援していたつもりではいたけれど、お母さんから正面から再婚の意志を付きつけられて、自分でも意外なことに 不愉快になった。

「そんなの、お母さんの勝手な夢じゃん。わたしは……別に兄弟欲しいなんて思っ、ないし、それを押しつけられても迷惑だよ」

そう言っ、ザバツとお湯から立ち上がった。

「わたし、もう出る。先に部屋に戻っ、てるね」

お母さんの返事も聞かずに、わたしは露天風呂を後にした。刺すような冷たい外気が体を襲い、思わず身を震わせる。

……ごめんなさい、お母さん。

そう心の中で謝った。

あんなこと、言うつもりじゃなかったのに、どうしてわたしは…

あまりにひねくれた自分の言葉と態度に、わたしは深い自己嫌悪に陥った。

宿の浴衣はわたしには丈が長すぎて、うまく着こなすことができなかった。念の為に持ってきていたＴシャツとズボンに着替えて浴場を出る。

「くしゅん！」

思いっきりくしゃみが出た。どうやら、少し冷めてしまったようだ。廊下でも十分に暖房は効いているはずなのに、ちょっと寒い気がする。やっぱり、ろくに浸かりもせずに風呂を出たのがよくなかったのだろう。

「ちゃんとあつたまつた？」

突然、後ろから声を掛けられて、わたしはビクッとして振り向いた。

「あ……」

そこにいたのは浴衣姿の仁さんだった。タオルで髪を拭きながら、わたしを見てうつすら笑っている。

「髪の毛、後ろまだ濡れてるし」

そう言って、自分のタオルの端でわたしの髪の毛を挟んで、キュッキュツと水気を拭き取ってくれる。

わたしは驚きのあまり硬直してしまった。男子にこんなふうに髪の毛に触られるのは初めてだ。

「あ、あ……あの……」

「ん？」

きょとんとした顔で仁さんは首を傾げる。わたしの焦りなんて微塵も気付いてもないらしい。

「あ、ありがとう」

なんとかかそう声を絞り出すと、仁さんは「どういたしまして」とニコリと笑う。その笑顔がまた憎らしいくらいの自然さで、慌てふためく自分が馬鹿みたいに思えてきた。

「じ、仁さんも、今あがったの？」

少しだけ勇気を出し、自分からそう話しかけてみた。仁さんは「うん」と頷き、小さく苦笑した。

「あのさ、その『仁、さん』っての、やめてくんない？」

「え？」

「なんか、やだ」

仁さんは小さな子どもみたいな口調でそう言って、先に歩き出した。わたしは慌てて後を追った。

「じゃ、じゃあ、なんて呼べば……」  
「なんとでも」

そう言つて、エレベーターのボタンを押す。わたしはそんな仁さんの横顔を見上げた。そこに浮かぶほんの少しの笑顔に、なんだか心がほんわりとあつたかくなつた。

「じゃあ、仁……くん、とか」

「うん、いいよ、それで。 カズ」  
「！」

仁さん……もとい、仁くんの口からスルリと出てきたその愛称に、わたしは驚いて息をのんだ。そんなわたしに気付き、仁くんが表情を曇らせ、首を傾げる。

「あれ、駄目だった？ そう呼ぶの」

「だ、駄目じゃないけど、なんで……」

「なんでって。 おばさんがそう呼んでるからだけど。 嫌なら普通に名前で呼ぶけど？」

仁くんがそう笑つた時、エレベーターのドアが開いた。とりあえず乗りこみ、前を向く。

「……カズ、でいいです」

エレベーターが動き出してからわたしがそう言つと、仁さんは笑つて「わかった」と頷いた。

\*

\*

\*

「暖房、少し強くしたから、もし暑くなったら言って。上着、ちゃんと着とけよ」

部屋に戻つてすぐ、仁くんはそう言つてテレビを付けた。そして自分はその前にゴロンと横になり、すっかりくつろいってしまった。なんだか……すごくリラックスしているようですが。

征爾先生とお母さんがいる時とはまた違った感じがする、この人「大人っぽい静かな人」の印象から、「ちよつと猫かぶりな、かなりマイペースな人かも？」というイメージに変わってしまった。でもそれは悪い方向に変わった訳じゃなく、どちらかと言えば親しみやすさが増して、これまでよりもかなり好感が持てる。

かといって、急に親しくは出来ないけれど。  
わたしはテーブルの上にあつた新聞を広げて目を通す。他にやることが見つからなかったからだ。

「カズ」

テレビを見ていると思つていた仁くんから声をかけられ、わたしは慌てて顔をあげた。いつの間にか仁くんは体を起こし、わたしを向いて座っている。

「カズ、トランプでもやる？」

「……は？」

「は、じゃなくて。トランプだよ」

仁くんは自分の荷物の所に行き、すぐにそれを手にして戻ってきた。

「どうせ退屈だろうからと思って持ってきてたの、今思い出した」  
「……準備がいいんだね」

思わずそう言つと、仁くんは小さく肩をすくめてみせた。

「これでもいろいろ考えてるんだよ。どうやったら仲良くなれるだろうか、とか」

その思いがけない言葉にわたしは目を見開いた。仲良く　って、わたしと、ということだろうか。

「俺の都合で今まで会えてなかった訳だし、ここでギクシャクしたら、全部俺のせいになるのかな、とかさ」

言いながら、カードを全部裏返しに置いて行く。どうやら、神経衰弱をするつもりのようなのだ。わたしは目の前に広がるカードを見ながら、小さく聞いてみた。

「仁くんは、なんでずっと顔合わせに来なかったの？」

「めんどくさかったから」

即答。呆氣にとられていると、カードを並べる手を一瞬止めて、仁くんはクスツと笑った。

「カズはそう思わなかった？」

正直、そう思ったことは何度もある。だけどそれに頷くことは躊躇われて、わたしは黙っていた。仁くんは再びカードを広げ出す。

「受験勉強でそんな余裕がなかったというのも嘘ではないけど、面倒だというのが本音。だけど、今回の旅行はさすがに断れなかったな。もういよいよ覚悟を決めないと駄目なんだろうなって思った。で、行く以上は楽しまないと損だろ。あっちが連れてくる娘とだって、それなりに仲良くしないとつまらないだろうし」

あっちが連れてくる娘、という言い方が気にはなったが、あえて言い返したりはしなかった。

カードを並び終えた仁くんは「先、やるね」と言っ、カードを一枚、二枚とひっくり返した。ハートの5とスペードの4。また裏返して、わたしに次を促す。

「……なあ。カズはどう思ってたんの？ 親が再婚すること」

わたしは外れた二枚のカードを裏返ししながら、少し曖昧に笑った。

「いいと思ってるよ。 仁くんは？」

「俺は、はつきり言っ、て反対」

その意外な返事に、わたしは思わず仁くんの顔を見つめた。仁くんは表に返すカードを選びながら、薄く笑っていた。

「今さら母親なんて欲しくもないし、妹ができるなんてまっぴらごめん、って思っ、た」

仁くんの言葉にわたしはどう返事をしたらいいのか分からない。仁くんはわたしに構わず、続けた。

「俺の両親、俺が五歳の頃離婚したんだけどさ、その原因が母親の不倫っていうなんとも不愉快な理由。俺が女性不信になるのには十

分だろ。今になって母親が出来るかともか思っても、全く嬉しくもない。妹なんていららない　あ、当たった」

ダイヤのキングがそろって、仁くんが再びカードを選ぶ。わたしはその仁くんの手元に目を戻した。

なんだか心が痛い。「妹なんかいらない」と言われたのが、「わたしなんかいらない」と言われたような気がして、悲しくさえあった。だけど、それを表には出さないようにして、わたしは努めて明るく言った。

「反対ってこと、征爾先生には言ったの？」

「言うも何も。『再婚する』ってのはつきりまだ言われた訳じゃないし。でも、言われたらそう言うつもりだったよ」

「そっか……」

そうなんだ。仁くんはお母さんたちの事反対するのか。

ちょっとだけがっかりだ。わたしは征爾先生が好きだったし、仁くんも……うん。この人のことも、わたしは嫌いじゃないのに。

「　　だけど、もういいや」

仁くんのどこか吹っ切れたような声に、わたしはハッと顔を上げた。仁くんはわたしを見て笑っていた。

「今日の父さんとおばさんの事見てたら、なんだか反対するのさえ馬鹿らしく思えてきた。なんだよ、あの二人。いい年して、子どもたちの前でデレデレしてさ。見ててこっちが恥ずかしいよ、まった  
く」

その言葉に、わたしは思わず嘖き出した。たしかに、お母さんた



ちの仲の良さは、まともに見ちゃいられないほどだ。わたしたちの前で平気で腕は組むし、何度も顔見合わせて微笑み合っているし。たまに、わたしたちのことなんか忘れてるんじゃないかとさえ思ってしまう。

「だから、もういいんだ。反対はしない。どうやら、妹になりそうな奴もいい子みたいだし」

「え……」

「もしカズが、すっげー嫌な女で、自分とは全然合わなそうなヤツだったら、やっぱり再婚反対したと思うよ。はつきり言って、おばさんがどうこうというより、俺にとっては妹になる奴がどういう奴かというのが重要なことだったし」

一瞬、ドキッとした。それはわたしも思っていたことだ。征爾先生よりも、仁くんがどういう人かということの方がずっと気になっていた。

「今日一日、ずっとカズを観察してた」

「観察って……ひどい！」

思わず叩く真似をすると、仁くんは悪戯っぽく笑って身構えた。

「まあまあ。いろんな場面で、カズはどんな対応するのかなとか、注意して見てたってことだよ。で、出た結論が」

その意地悪な間に、つい、ごくりと唾を飲み込んでしまう。仁くんがニツと笑った。

「カズはいい子だ。俺の妹として、合格」

手を伸ばし、まるで犬か猫かにするように、わたしの頭を軽く撫でる。思わず顔が赤くなってしまった。

「な、なに？ その上から視線は！」

赤面をごまかすように睨みつけると、仁くんはまたニヤリと意地の悪い笑みを浮かべた。

「だって俺、おにーさんだもん」

「お、おにーさんじゃない、まだ！」

「でもすぐなるんだよ、カズちゃん？」

そのわざとらしい言い方がなんだか癢。だけど、決して嫌な気持ちじゃない。

「でも、ぜーったいにお兄さんなんて呼ばないからね」

「どうぞご勝手にー」

余裕な笑顔の仁くん。本当にこの人はいいい顔で笑う。その笑顔を見ながら、この人がわたしのお兄さんになればきっと楽しい生活が送れるに違いないと、そんな淡い期待が広がっていった。

\*

\*

\*

神経衰弱の勝負が付く頃、お母さんと征爾先生が戻ってきた。お母さんはわたしの顔を見るなり、不安そうに顔を歪めた。部屋の入口に立ち尽くし、それ以上中に入ってこようとしな。その時、

わたしは思い出した。入浴中、お母さんにひどい言い方したことを。あれはきつと、お母さんにとってはものすごくショックだった言葉に違いない。

「カズ、あのね……」

「お母さん、ごめん」

わたしはお母さんの前に歩いて行き、笑って見せた。「ごめん」という言葉だけでは軽すぎるのかもしれないけど、今はそれ以上のことを伝えたかった。

「お母さんの夢、叶えてよ」

お母さんが目を丸くする。わたしは重ねて言った。

「わたし、歓迎するから。新しいお父さんと、新しいお兄さん」

それはフライング気味の言葉だったかもしれない。だけど、いいんだ。ここにいるみんながもうそれを望んでいるのだから。

「カズ……」

お母さんの目に涙が浮かんだ。

初めてお母さんをこんなふうに泣かせてしまった。それが嬉し涙だったことが、わたしも嬉しい。

「和音ちゃんに先越されちゃったな」

顔を両手で覆ってしまったお母さんの肩を、征爾先生が優しく抱いて微笑んだ。

「本当は明日の朝　年が明けてから仁と和音ちゃんにはちゃんと  
言うつもりだったんだ。だけど　そうか」

征爾先生は少しだけ身を屈ませて、わたしと視線を近くした。

「和音ちゃん。お母さんと、結婚していいかな。僕を和音ちゃんのお父さんにしてくれる？」

「　はい」

わたしはこくりと頷いた。征爾先生が目を細めて笑う。その目が潤んでいることにわたしは気付いて、わたしもなんだか泣きそうになってしまった。

大人の男の人でも、こうやって嬉しくて涙が出るんだ　それは新鮮な驚きだった。

「仁も……」

征爾先生が横に視線を移す。いつの間にか、わたしの隣には仁くんが立っていた。

「いいかな。父さん、この人と結婚したい」  
「いいよ」

仁くんは短く、素っ気なくそう答えた。でも、ちゃんと優しい顔で笑っている。

仁くんがその顔でわたしに目を向け、小さく頷いた。わたしもそれに頷いて応えた。

その場に、お母さんが鼻をすする音だけが響く。わたしは思わずお母さんの浴衣の袖を掴んだ。ピクリとお母さんの体が震えた。

「カズ、ありがとう」

お母さんはそう言って、ふわりとわたしを抱きしめた。久し振りのお母さんの抱擁。それはとても温かく優しくかった。

「お母さん、幸せになってね」

それは自然に口について出た言葉だった。

その次の瞬間、また別の腕がわたしの体を包んだ。思わず顔を上げると、征爾先生と目が合う。腕は征爾先生のもので、お母さんの体ごとわたしを抱きしめてくれていた。これまで経験のない、大きな男の人の腕の中。こんなにも安心できるものなんて知らなかった。

「幸せになろう みんなで」

征爾先生がゆっくりと言った。お母さんが体をずらし、片手をわたしの隣に伸ばした。その手が掴んだのは仁くんの腕で、無理やり引っ張りこんでこの抱擁の塊に仁くんを招き入れた。

「ちょ………！」

明らかに困惑する仁くんの顔が面白い。思わず笑ってしまうと、仁くんに睨まれた。でもその顔がほんのり赤くて、尚更おかしくて笑ってしまった。そんなわたしに、仁くんも諦めたように笑い返してくれた。

幸せの瞬間。

征爾先生の、お母さんの、そして仁くんの温もり。

わたしはこの時のことをきつと一生忘れないだろう。

これがわたしたち家族の、始まりの瞬間だ。

（おわり）

## 始まるの瞬間（後書き）

どうもありがとうございました。

番外編？ 家族の始まりのお話でした。

d e t e r m i n a t i o n (前書き)

琢磨視点のお話です。



## d e t e r m i n a t i o n

「たくちゃん。今年も同じだな。よろしく!」

そう言って背中を突いて来たのは古賀。中学も同じ、高校入学後  
も何故か一年、二年と同じクラス。そして、まさかの三年目。

「あー。どうぞよろしく」

わざと抑揚のない声で答えて前を向くと、古賀はまたしつこく背  
中をつついて来た。

「たくちゃん、もうちょっとおしゃべりしようぜ。せっかくま  
た席近くなんだし」

新学期の始まり、しばらくの間の席は名前順で、毎回オレの後ろ  
はこの古賀だ。オレは聞えよがしのため息をついて、古賀の方を向  
いた。

「だって、今さらお前と話すことなんてないもん」  
「うわっ、ひでえ。つめてえよ、たくちゃん……」

大袈裟に傷付いたような顔を作って見せる古賀にオレは苦笑した。  
なんやかんやで憎めない奴だ。

「琢磨!」

と、そこへ片手を上げて近付いて来た奴がいた。  
「あ、修二」

爽やかな笑顔のそいつは修二。部活仲間だ。この教室にいるということは、どうやら今年は同じクラスなのだろう。

「よろしくー」

修二は古賀に笑って見せて、隣の空いた席に腰掛けた。そして、すぐに身を屈めて、声を顰める。

「なあなあ。このクラス、なかなかいいのそろってると思わね？」  
「いいのって？」

古賀がその話に喰いついた。修二がニヤリと笑う。

「女子だよ。けっこうイケてんの多いじゃん」

「やっぱりその手の話か」

オレが苦笑すると、修二は不満そうに口を尖らせた。

「黙ってても女子が寄ってくるようなモテモテくんには unnecessary 情報かもしれないけど、一般男子には重要な事なんですー。な？」

「おう！」

どうやら修二と古賀は一瞬にして意気投合したようである。オレは修二の皮肉に肩をすくめたのみに留めた。言い返す気も起きない。

「たとえば、ほら、あの集団とかどうよ」

修二がコッソリと指をさす。無視するわけにもいかず、オレもチラリとそちらを向いてみた。窓際で四人ぐらい女子が固まっている。みんな髪の毛が長く、金髪に近いくらいの茶色。たしかに目立つ。

可愛いのかと言われれば、まあ可愛いと言えなくもない……そんな感じだ。

「ちょっとキツそうだけどなあ。それから、あっち」

修二は今度は教卓の前の辺りを示して見せた。女子が二人向かい合って話している。

「あー、今前向いてる方ね。こっち向かねーかな」

修二が手の指を彼女たちに向け妖しげに動かす。一体何の呪いだ……。

「二年の時同じクラスだったんだけど、けっこう可愛いの」

「へえ。あ、チャンス！」

その子に後ろから近づく女子がいた。声をかけられたのだろう、その子が後ろを振り向いた。ちょうどこちらに顔が向く形になる。

一瞬、オレはハツとした。正直、修二の「けっこう可愛い」はそんなに期待していなかった。だが、にこやかに友人と話をするその子は、文句なしに可愛かったのだ。肩までの髪は染めたりはしていないのだろう、自然な栗色で、遠目にもサラサラ感が伝わる。

「お。ポイント高い！」

古賀の声のトーンがあがる。修二がなぜか満足げに笑った。

「だろー。春山和音っていうんだ。目立つタイプじゃないけど、二年ン時も密かに人気あったんだぜ」

春山和音。オレの心にその名前が刻み込まれた。

「でも、彼氏とかいるんだろーなー」

古賀の言葉に修二が首を傾げる。

「いや、そんな話は聞かぬーけど。不思議だよな　あ、そうだ」

修二の顔がにわかに曇った。

「春山さんねー、年末だったかな、親亡くしたって話」

「え？」

急に深刻になった話に、古賀とオレは思わず顔を見合わせた。古賀が一層声を響めて聞いた。

「親って？」

「母親。病気だったって」

「へえ……」

それ以上は何も言えず、オレ達はなんとなくまた春山さんの方に目を向けた。

何か面白い話をしているのだろうか。友人たちと声を立てて笑っている。

その笑顔からオレはなぜか目が離せなかった。

その後、オレは気が付けば春山さんの姿を目で追うようになっていた。

ふとした瞬間、偶然に目が合う、少しだけ笑って彼女は目を逸らす。それだけの事にささやかな喜びを感じる。

馬鹿みたいだと思う。小学生じゃあるまいし。

これまで、「彼女」というものがいたことなら何度かある。でも、自分からは一度もそれを望んだことはなかった。みんな向こうから交際を申し込んでくれた。オレはそれを承諾しただけだ。好きだったから付き合ったのではなく、好きになってもらえたから付き合った。

最低だ。

気持ちのない交際は長くは続かない。結局彼女たちはオレから離れて行く。たぶん、愛想を尽かされたのだろうと思う。そんなことが何度か続いた。

そのうちにオレも疲れてしまった。

好きじゃないなら付き合わないと決め、申し込まれた交際も断ることにした。だけど、その度に罪悪感が芽生える。「ごめん」と謝る度に、心の一部を削り取られていくような気がした。すごく酷いことをしているようで、自分が嫌になる。

もう何もかもが面倒くさくなった。みんなオレの方なんか見なければいいのに。

だから、女子とは必要以上には慣れ合わない 単純にそう決めた。過剰なまでの自己防衛。自意識過剰。

そんなオレが、一人の女子と目が合うだけで、ガキのように喜んでいるんだからお笑いだ。オレは彼女のことが好きなのだろうか。それとも、修二からあんな話を聞いたから、ただ気になっているだけかもしれない。自分でもよくわからなかった。

だけど、と思う。

この気持ちが本物で、もし彼女がこの気持ちに答えてくれたなら、

オレの中で何かが変わるような気がした。

\*

\*

\*

彼女を近所の本屋で見かけた時は驚いた。

迷った末、オレは彼女に話しかけた。まともに話したのはこれが初めてかもしれない。ほんの少しの緊張。それ以上にどこか浮足立つ気持ち。女子と向かい合うのにこんな気持ちになったのは、それこそ小学生の時の初恋以来のような気がする。

彼女は年の離れた弟を、その近所にある保育園まで迎えに行く途中だと言った。彼女にそんな幼い弟がいるのも驚いたが、それ以上に、母親を亡くしたという彼女の不幸が頭をよぎって気になった。春山さんはこの年で、その幼い弟の母親代わりをしているのだろうか……。

春山さんが怪訝そうな顔をしているのに気づき、オレは慌てて謝った。

「ごめん。ついいろいろ考えてて」

「いろいろ？」

春山さんは一層怪訝そうに首を傾げる。

「いや。この後きつとその弟さん迎えに行くのかな、大変そうだな、とかいろいろ」

つい正直に言ってしまった。春山さんは一瞬黙った後、ふわりと笑った。

「そんなに大変でもないよ。学校帰りのついでだし」

そのどこかのんびりとした口調に、オレはホッとした。変な詮索をして気分を害してしまっただんじやないかという不安があったからだ。

その後、ほんの少しの会話を交わし、彼女は時間になったのか読んでいた雑誌を置いた。

「また明日学校でね」

彼女のその言葉に、じわりと温かさが心に広がった。彼女の背中を見送りながら、もっとたくさん話してみたい。そう思った。

そんなオレを後押ししてくれたのは意外な人物だった。それは前期の試験の初日のこと。

「たくちゃん」

そう言いながら古賀が肩を組んできた。

「なんだよ、気持ち悪いな」

「いやいやたくちゃん。オレに何か隠してないかい？」  
「は？」

「あ。春山さん」

そう言っって背後を振り返る古賀につられて、オレもつい勢いよく

振り向いてしまった。その瞬間、ニヤリと笑った古賀と目が合う。  
……しまった。

「ふふん。たくちゃんってば単純」

「……」

オレはフンと無視してやった。古賀は構わずニヤニヤと続ける。

「やっぱりねえ。たくちゃん、最近春山さんによく構っているから、そうなんじゃないかと思ってたんだよ。さっきも喋ってたし。たくちゃん、彼女が好きだろ」

「古賀。いい加減、離れろよ」

オレは冷静にそう言っただけ。古賀の手を無理矢理どけた。苦し紛れの動揺隠し。

だけど、それも多分無駄だろう。こういうことには妙に敏いやつだから。かといって、素直に肯定するのも悔しい気がした。そんなにオレはわかりやすいのだろうか。

「でも、良かったよ」

意外な事に、真面目な顔をして古賀が言った。だんまりを決め込もうとしたオレだが、その古賀の表情について言葉を返した。

「良かったって、何が？」

古賀は、微かに笑みを浮かべた。

「オレね、これでも心配してたんだよ。たくちゃん、いつ頃からか女避けるようになってさ、このまま女嫌いになって、あっちの世



界に行っちゃうんじゃないかとか」

これには怒るよりも苦笑いが浮かんだ。「バーカ」と返すと、古賀もクククと肩を震わせる。

「というのはまあ冗談だけど。でも、なんか寂しいじゃんか。高校生活もあと一年もないって言うのに、誰も好きにならず、避けるばかりで終わるのも。たくちゃんが何でそうなったかは知ってるし、オレは何も言えないけどさ。でも、見てるともどかしいというか、勿体ないというか……。だから、たくちゃんが春山さんを好きになったんだったら良かったな、って思ってるわけ」

オレは思わず古賀の顔をまじまじと見返してしまった。まさかこいつがそんなことを考えているとは思ってもみなかった。正直、感動ものだ。伊達に何年もクラスメイトをしている訳じゃないということか。若干、余計なお世話という気がしないでもないが、気に掛けてもらって悪い気はしなかった。

「なんか……ありがとう」

ここは素直に礼を言う。古賀は照れたように笑った。

「オレは応援するぜ。頑張れよ」

パンツと背中を叩き、古賀は離れて行った。たぶん、古賀もかなり照れ臭かったのだろう。

頬杖をつき、古賀の言葉を繰り返した。

「頑張れ、か……」

それもいいかもしれない。

オレは窓際に目を向けた。彼女がノートを手には友達と話をしていた。問題の確認中なのだろうか、真面目な顔をしている。吹き込む風が彼女の髪を揺らす。顔にかかった髪を面倒そうに耳にかける仕草にドキツとした。こんな感覚、長いこと味わっていない。

彼女のことを知りたいと思う。

そのためならばなんでもできる      そんな気がした。

その日の帰り、オレは彼女と一緒に帰ろうと呼び止めた。帰り道も一緒だし、その申し出も不自然ではないはずだ。

だけど、問題はその後だ。どうしたらその先に進めるか……これはもう、自分から動くしかない。

別れ際、オレは勇気を出して「休みの日に二人で遊びに行こう」と誘った。断られるのは覚悟の上だった。今はまだ試験中だし、あまりにも突然過ぎる。だけど、訪れたチャンスが無駄にはしたくなかった。

彼女は、少しだけ戸惑った様子をみせたものの、その誘いを受けてくれた。こんなに嬉しかったことは久しぶりだ。まったく、自分のあまりのガキっぽさに呆れる。たかがメールアドレスを交換しただけで、何なのだ、この浮かれようは。

だけど、こんな自分も悪くはないと思う。こうなったらとことんまで、自分に正直になってみようと、そう思っていた。

そして、約束の日がやってきた。

オレ達は二人で映画を見た後、公園を散歩した。実にのんびりと

したデートだ。公園を散歩しようと言い出したのは春山さんで、実に彼女らしいと思う。彼女は街中の喧騒よりも、静かな自然の方が似合う、そんな気がした。こっちの勝手な思い込みだろうけれど。

彼女は優しい顔で遊ぶ子どもの様子を眺め、その優しい顔で自分の弟の事を語る。

学校では見ることでできないその穏やかな様子に、なんともいえない気持ちが広がった。近くでこの人を守りたいと、何の脈絡もなくそう思った。それはこれまでに味わったことのない感情。言葉にはできない気持ちだった。

オレは彼女に交際を申し込んだ。知り合って、まだほんの三ヶ月お互いのことをまだよく知りもしないのに。それでも「一緒にいたい」とか「もつと知りたい」という気持ちに嘘はない。そして、少しでもいい、彼女にもオレを知って欲しい、とそう思った。

彼女から返事をもらったのは、その五日後のこと。

彼女はオレの目を真っ直ぐにみつめ、はにかんだように笑って言った。

「よろしくお願いします」

差し出された右手。オレはその手をしっかりと握り返した。嬉しい　馬鹿みたいだが、その言葉しか浮かばなかった。

\*

\*

\*

夕方五時近いというのに、まだ日は高く、強烈な日差しは痛いぐらいだ。

オレが今立っているのは彼女の家の門の前。オレは顔に流れる汗をぬぐい、手にした花を眺めて一つ息をついた。手のひらよりも小さな向日葵。その可愛らしさが彼女に似合う気がして買ってはみたが、やっぱり迷惑ではないだろうか。

今日から夏休みが始まった。とはいえ、補講があるため七月いっぱいには登校しなければいけない。だけど、彼女は今日は欠席だった。昨日から熱を出してしまったのだ。昨日は気丈なふりをしていたが、かなり辛そうだった。

お見舞いに行きたいというメールを送ってみたが、返信はなかった。具合悪くて返信するところではないのかもしれないと思うと、いてもたってもいられなかった。突然行くのは迷惑だと思ったが、こうしてやって来てしまった以上、引き返すのも馬鹿らしい。

オレは意を決してインターホンを押した。誰も出なければ、花だけポストの上に置いて帰ろう。そう考えていると、すぐに玄関のドアが開いた。インターホンからの返事を待っていたオレは、慌てて姿勢を正した。

「はい、どちらさま？」

そう言って顔を出したのは若い男性だった。彼女のお兄さん確か仁という名前だった。だろう。

初めて会うその人に、オレは緊張してしまう。

「こ、こんにちは、オレ」

「あ。もしかして、木村くん？」

オレが名乗る前に、仁さんは人懐こそうな笑顔を浮かべて門の所まで出てきた。

「昨日は妹と弟が世話になったらいいね。ありがとう」

「いいえ、別に……」

「今もカズのお見舞いに来てくれたんだろ？」

その言葉に曖昧に笑うと、仁さんは少しだけ困ったように首を傾げた。

「今カズ寝ててさ。まだしばらく起きないと思うんだけど……」

「そうですか」

じゃあ、会えないだろうな　と、少しだけ落胆したものの、それを表には出さず、オレは持ってきた花と袋を仁さんに差し出した。

「では、これだけ渡して頂けますか？　今日の補講のプリントとこれ」

仁さんは少しだけ目を丸くして花を見ると、優しく笑ってそれを受け取ってくれた。

「ありがとう。渡しておくよ。　あ、良かったら、中で少し涼んで行ったら」

仁さんが門を開けようとするのを、オレは慌てて止めた。

「いえ、いいです！ オレ、すぐ帰りますから」  
「そう？」

仁さんは肩を落とすが、すぐに何かを思いついたらしく、ニッコリと笑った。

「んじゃ、ちょっとここで待ってて」

そう言つて、慌ただしく家の中に入っていく。何だろうと思いつつも、オレは言われたとおりに待つしかない。が、待つまでもなく二、三分で仁さんはすぐに出てきた。

「お待たせ。俺、今から希望のお迎えに行くから、一緒に出るわ。木村くん家どこ？」

希望と言つのは春山さんの弟の名前だ。今から保育園に迎えに行くということだろう。

「希望くんの保育園の先のマンションです」  
「あ、そうなんだ？ 良かった。じゃあそこまで一緒に行こう」

その申し出を断る訳にもいかず、オレ達は並んで自転車を走らせることになった。

「カズ、学校ではどんな感じ？」

走り出してすぐ、仁さんはそう聞いて来た。オレはうーんと頭を悩ませる。どんな感じかと急に聞かれても……。

「元気、ですよ。よく笑うし……友達とも仲いいみたいだし」

なんだか変な答えだ。それでも仁さんは満足したらしく、ふっと表情を緩めた。

「元気、か……なら良かった」

そうか。仁さんは気にしていたのだろう。半年前に母親を亡くした妹が、学校で元気に過ごせているのかを。

妹思いなんだな　そう思っていると、「なあ」と仁さんがまた声をかけてきた。

「木村くんは、カズのどこが好きなの？」

「え！」

オレは思わず体勢を崩しそうになった。慌ててバランスをとり、ホッと息をつく。

それにしても、ずいぶんストレートな質問だ。オレはどう答えようか迷った。迷ったけど。

「全部です」

そう答えた。しばらくの沈黙の後、「全部、か」と呟くような仁さんの返事が聞こえた。

思わず仁さんの顔を窺い見ると、仁さんはそれに気付き、笑い返してきた。

「いいな、そう言い切れるのって。　羨ましいよ」

羨ましい？ どうして？

何か引っかけかりを憶えたが、オレは照れくささもあり、曖昧に笑い返すに留めた。

その後、取りとめのない世間話をしているうちに、希望くんの保育園への分かれ道に着いた。

とりあえず自転車を止め、仁さんに「それじゃあ」と言おうとした。その時だった。

「全部が好き、って言ったよな」

仁さんがそう言った。

急な言葉に一瞬戸惑うが、さっきの話の続きだとすぐにわかり、オレは表情を引き締めた。

「はい」

「じゃあ、カズの全部を受け止めてくれよ」

「え？」

言われた意味が分からない。仁さんはさっきまでの余裕のある表情ではなく、どこか厳しい顔で続けた。

「母さんが死んでから、カズは独りになった。ずっと寂しい思いをしている。たぶん、カズ自身も気付いていないくらい、その孤独感は強いんだと思う。そういう気持ちも全部、責任持って受け止めてくれ。寂しさなんて感じさせないように」

オレは少なからず困惑しながら、仁さんの言葉を繰り返した。

「独りになった……？ 孤独感？」



仁さんは頷いた。

「希望はまだ小さいし、いくら俺や父親がいても、そこに血の繋がりが無い以上、カズはどうしても独りだと感じてしまうんだろう。それはたぶんどうしようもないことなんだと思う。だから」

そこまで言っただけ、ようやく仁さんは何かに気付いたように口を止めた。オレの顔を見て、微かに顔を歪めた。

「まさか、聞いてない、とか」

「聞いてない」というのが何なのか分からない。オレはゆっくり頷いた。仁さんはしまったと言わんばかりに頭を掻いた。

「なんか……悪い。カズからもう聞いてると思ってた」

「何をですか？」

意図せず、語気が強くなってしまった。仁さんは一瞬戸惑ったそばりを見せたものの、意を決したようにオレを見た。

「四年前に親同士が再婚した。俺とカズはそれぞれの連れ子だよ。だから、つまり……」

「春山さんと仁さんは、本当の兄妹じゃない、ってことですか？」

オレは冷静なふりをしてその言葉を継いだ。内心、かなりのショックを受けていた。

こんな重大なこと、聞かされていなかった事もショックだったし、何よりも。

オレは改めて仁さんを見つめた。妹思いの優しいお兄さんだと思ったその人が、彼女のごく近くに「他人」だということがショックだった。

嫉妬。

この時、その感情が生まれた。

その事実は何りを生んだ。

彼女は血の繋がりのない兄のことを「仁」と名前で呼ぶ。ただそれだけのことが気になる。

彼女の元氣のない原因が、血の繋がりのない兄との喧嘩のせいだと知る。それだけで胸がざわつく。

馬鹿か、と思う。

自分の嫉妬深さに嫌気がさす。

だけど、そういう思いも全部、目を背けずに受け入れる。これも全部、彼女を思う気持ちの一部なのだから。

彼女の全部を受け止める。

仁さんのその言葉に対する意地もあった。

いいよ。オレは彼女の全てを受け止めてみせる。

小さな弟を何よりも優先する　そんな彼女を受け入れる。

血の繋がりのない兄がいること　それも全部受け入れる。  
そう決めた。

だから、すぐに気付いた　気付いてしまったのだ。

彼女と彼女の義兄の間に、入りこめない何かがあることに。彼女自身も気付いていない、何か。

それが何か、オレは知りたくはなかった。知るつもりもなかった。

オレはただ信じて待つだけだ。

いつか、彼女の目が、ただオレだけを見つめてくれることを。  
ただそれだけを信じ、待つだけ。

それ以外に、何が出来るというのだろうか。

哀れなピエロのようだ。時に自分を嘲り、笑いたくなる。だが、  
それすら受け入れる。

『全てを受け止める』

オレはその言葉を胸に刻みつけ、今日も彼女の名前を呼ぶのだ。

（おわり）

## d e t e r m i n a t i o n (後書き)

お読み下さりありがとうございました。

愛のかたち 【?秘めたる想い】 (前書き)

仁視点です。

できましたら、9話をお読みになった後にお読みいただくことをお勧めいたします。

## 愛のかたち 【？秘めたる想い】

『和音をよろしくね』

空気の漏れたかすれた声で、その人は儂く笑った。白い布団の中から差し出された手は、ひどく骨ばって、触れただけで折れてしまいそうな気がした。俺はそつとその手を取った。刹那、どこにそんな力があるのかと思うほど、強く握り締められる。指先が手の甲に食い込んだ。

『和音をよろしくね』

もう一度繰り返したその声は、一度目よりも力強く俺に訴えてきた。くぼんだ瞳が、それでも輝きを失わず俺を真っ直ぐに見つめる。

『わかってる。任せて』

俺は頷き、笑って見せた。その瞬間、握られた手の力が緩んだ。

『……安心、だわ』

その人はホッとしたように微笑み、目を閉じる。

『ごめんね……少し眠るわ、ね……』

そのままスーッと寝息を立て始めたその人の手を、俺はそつと布団の中に戻した。握られていた手の甲を見ると、そこにははつきりと爪の痕が残っている。まるで、思いの全てをこの身に刻み込まれ

たような気がした。その痕を反対の手の指で辿り、俺は眠るその人に向って静かに言った。

『大丈夫だよ。和音には俺たちがついてるから』

その言葉が聞こえたかのように、その人の寝顔に僅かな笑みが浮かんだ。

それが、俺がその人と二人っきりで話した最後の会話になってしまった。

その二日後、その人　義母さんは、遠く天国に旅立って行った。

\*

\*

\*

義母の死から一カ月が経ち、俺たち家族も、次第に日常を取り戻しつつあった。少なくとも、表面上は。

義母の死以前からそうしてきたように、その日、俺は大学からの帰り道、二歳の弟・希望<sup>のそむ</sup>を保育園に引き取りに行った。希望は幼い分、母親の死を理解するよりも前に、母親のいない現状に慣れる方が早かった。その笑顔は曇ることなく、いつも元気いっぱいだ。その笑顔に心が痛くなることはあっても、俺は希望のことを実はそんなに心配はしていない。せめて母親がいらないことで寂しさを感じさせないように、精一杯の努力をしていくだけだ。

それよりも今気掛かりなのは……。

家の鍵を開けドアを開けると、希望は靴を脱ぐのも忘れて家の中に入って行こうとする。俺は慌てて希望を引きとめた。

「ちょっと待て、のん。靴、脱ぐの！」  
「あーい。じん、ぬいでー」

希望は甘えて足を俺の方に投げ出して座る。マジックテープで留めるだけの靴は、希望も自分で脱ぐ事ができるが、まだ脱がせると甘えてくることの方が多い。俺はため息をつきつつしゃがみ込んで希望の靴に手を伸ばした。

その時、ふと、脇に揃えて置いてある靴に気付いた。黒のローファ―。和音の通学用の靴だ。和音はもう帰ってきているのだ。家にいる時いつもなら、俺達が帰って来た時「おかえり」と声が返ってくるのだが、今は何の反応もなかった。てっきりまだ帰ってないのかと思っていたが。

靴を脱がせてしまうと、希望は待つてましたと言わんばかりに中に掛け込んで行く。かと思うと、またすぐパタパタと玄関に戻ってきた。

「じんー。かじゅ、ねんね！」  
「え？」

俺は希望に引っ張られるようにしてリビングに入り、すぐにそれに気付いた。リビングの隣の和室。義母の遺骨を置いた祭壇の前に横になっている義妹の姿に。

「カズ……？」  
そつと近付き覗き込んで見る。希望も俺の真似をして和音の顔を覗くと、俺を見て首を傾げた。  
「ねんね、ねえ？」



俺は「しーっ」と口に指を当てると、希望の手を引いてリビングの方に戻った。

「のん、静かにな。今日はこっちで遊んでて」

「あい！」

聞きわけ良く手を上げて希望が答えた。

俺はもう一度和音の方に目を戻した。和音は制服のままだった。どころか、コートすら脱いでもない。だからといって、エアコンもヒーターも入れていない室内、このまま横になっでは間違はなく風邪ひいてしまう。俺は押入れから毛布を出して、そつとその体に掛けてやった。

和音はまったく動かない。よほど深く眠っているのだろう。その寝顔の安らかさに、俺の胸は締め付けられるように痛んだ。

和音は恐らく、この一カ月の間、まともに眠っていないのだ。

俺は知っている。隣の和音の部屋の電気が、毎日夜遅くまで消えないことを。朝方まで点きっぱなしの日があることも知っている。そのことに気付く度、すぐにでも傍に行って抱きしめてやりたいと思った。だけど、それが和音にとって何の意味があるのか？ そんなことをしても、きつと慰めにはならない。俺は和音の部屋の前で立ち止まり、結局そのままそこを離れることしかできなかった。

母親を失った和音の悲しみを、俺が埋めてやることはできない。

何もできない無力な自分が、俺は情けなくもあり悔しかった。

『和音をよろしくね』

義母の最後の言葉が頭の中にこだまする。

だけど 俺はこんなにも無力だ、義母さん。

今、母親の遺骨の前で深く眠っている和音を見ると、それを強く

痛感した。

今和音を眠らせることができるのは、義母だけなのだ。  
だけど、それでも。

手を伸ばしたのは、ほとんど無意識だった。すっかり冷え切った和音の頬は、ひんやりと冷たかった。

「ん……」

触れた俺の指先に気付いたように、和音が小さく身じろぎをした。伏せられた長いまつげが微かに震える。俺は慌てて手を引いた。和音の寝息はまたすぐに落ち着いて。俺はほっと息をつく。

頬に触れるぐらい、許してくれ。自分に対してなのか和音に対してなのか、それとも前にいるであろう義母に対してなのかわからない言い訳を心の中で呟く。

無力な自分。だけど、それでも、俺は和音を守りたいのだ。出来るのならば、一人の男として、この先もずっと。

想っただけなら、自由だろうか。

その答えはどこからも返ってはこない。

俺は静かに和音の傍を離れた。

夕食の支度を終え、希望を呼んだが返事がない。様子を見に行った俺は、思わず笑ってしまった。いつの間にか、希望は和音の毛布の中にもぐりこんで、その隣でスヤスヤと寝息を立てている。だが、それでも、和音が起きた気配はなかった。

俺たちが帰宅してからもう二時間近く経っている。起こした方が

いいのかもしれない。こんなところで、しかも制服のままで長時間眠るのは体にも良くない気がした。だが、ここまでぐっすり眠っている和音を起こすのは気が引ける。

父さんが帰って来たのは、ちょうど俺がそう迷っている時だった。

「驚いたな……和音がこんなところで寝てるとは」

父さんは目を丸くしてそう言った。結局、和音はまだ起こさないまま、俺たちはダイニングに戻った。父さんはネクタイを緩め上着だけ脱ぐと、イスに座りこみ長いため息をついた。

「和音、寝てないんだろうな」

そう言う父さんの目も、元よりも腫れぼったくなっている。あの日以来、ずっとそんな感じだ。

人の悲しみの深さは測れない。他人と比べられるようなものじゃない。だが、この二人の悲しみが、俺が義母を失った痛みとは質が違うことは確かだろう。悲しみにくれる父親を前にしても、俺は何も言えなかった。こんなにも深い悲しみを負った人を慰める言葉など、俺は持ち合わせてはいない。

和音に対してだけじゃない。父さんに対しても俺は無力だ。

「……和音は、無理してるよ」

ぼつりと父さんがこぼした。俺は腰を下ろし、黙ってその言葉に耳を傾ける。

「仁。和音が泣いているのを見たのはいつだ？」

言われて俺は考える。和音の泣き顔を見たのは、義母の葬儀の日

が最後だった。その日以降、和音は俺の前で涙を見せない。

「葬式の時から見えてない、な」

「そうだな……あれから和音はいつも笑っている。希望のこともあるからだろう。落ち込んでいられない　そう思っているのかもしれない。けどな、仁」

身を乗り出し、テーブルの上に手を乗せ、父さんは俺の目をじっと見据えた。

「和音はまだ十七だ。母親を失ってたった一カ月で、笑って過ごして平気なほど強くはないはずだ」

俺はゆっくり頷いた。俺だつてわかっていた。

和音の笑顔が明るければ明るいほど、俺はいつも心が痛かった。無理するなと言いたかった。だが、その言葉すらも言わせてもらえないほど、この一月を、和音は完璧なほど笑顔で過ごしていたのだ。

「ダメな親だな、俺は……。子どもに無理させて……。泣く場所すら、満足に与えられないなんてな」

頭を抱える父さんを、俺は黙って見つめた。アンタだつてもう十分に無理をしているじゃないか。

俺は目を閉じ、一つ大きく深呼吸をした。いつまでも、自分の無力さを嘆いている場合じゃないことはもうわかっていた。

「……和音をよろしく、と……義母さんにそう言われた」

俺の言葉に、父さんは顔を上げた。この話をするのはこれが初めてだ。俺はできるだけゆっくりと話した。

「義母さんが死ぬ二日前だった。俺の手を取って、そう言ったんだよ。『和音をよろしく』って」

「それで……お前は何と答えた？」

「『任せて』」

そう。俺はそう答えた。

義母を安心させるために吐いた嘘じゃない。本当に、心から「任せてくれ」と思ったからそう答えた。その時の揺るぎのない気持ちを思い出し、気持ちがぐつと引き締まる。

「和音は俺が守るよ。義母さんと約束したから　それだけじゃない、俺自身がそうしたいから。あいつが泣ける場所くらい、俺が作ってやるよ」

これは確固たる意志表明だ。言葉に迷いはなかった。

「仁……」

父さんが眩しそうに目を細める。そして、ふと頬を緩めた。

「……義母さんは勘の鋭い人でね」

「は？」

突然の話の飛躍に、俺は思わずぽかんと口を開けてしまった。父さんは目を伏せ、どこか可笑しそうに話し出す。

「しのぶは俺と仁がよく似てるって話してた。好みの女性のタイプも似てるんじゃないの、なんて冗談っぽく言ってたさ。その意味を別に深く考えたことなかったんだけど　なるほど、そういうこと

だったのかと今、わかったよ」

俺にはさっぱり分らない。意味不明な言葉に眉をひそめていると、父さんはにわかに口許を引き締めて、俺の目をまっすぐに捉えた。

「仁。今から聞くことに、ちゃんと答えるよ」

「……ああ？」

戸惑いつつも頷く俺に、父さんはもったいつけるように、ゆっくりと口を開いた。

「和音を守ると言ったな？ それは家族として 兄として妹を守るのか、それとも」

父さんの声が一層静かに低くなった。

「男として、大切な人を守るのか」

その言葉を耳にした瞬間、ありえないほど大きく心臓が音を立てた。ドクドクというその鼓動が、耳にまで響いてくる。

「ちゃんと答えるよ、仁。大事な事だ」

父さんの声に、俺はごくりと唾を飲み込んだ。

もう何年も秘めていた想いを見透かされていた そのことに驚き、焦りを覚える。だが、ここでごまかそうなどという気持ちはもう起きなかった。

俺は心を決めて、言った。

「一人の男として、大切な人を守る」

父さんはじつと俺を見据えている。やがて、視線はそのまま表情だけを緩めた。

「そうか……なるほど」

小さく頷きながら、でもすぐにぎゅっと厳しい顔つきに戻った。

「だが、和音はお前を兄としか思っていないぞ？」

「そんなことわかってる」

俺はちつと舌打ちした。言われるまでもないことだ。

「別に、カズに何かを求めている訳じゃねーよ。兄として、家族として頼ってくれて構わない。あいつが望むような形で、俺は守っていくだけだ」

和音に俺を男として見て欲しいとは思わない。見返りは求めない。家族としてであろうと兄としてであろうと、俺の存在であいつが心の平安を取り戻すことができればそれでいい。

「隠し通すのか？」

訊かれたその言葉に俺は迷わず頷いた。

「隠し通すさ、ずっと。理想の兄貴を演じきって見せるよ」

「それでお前はいいんだな？」

「いいよ。カズが幸せならそれでいい」

俺は立ち上がってテーブルから離れた。父さんはもう何も言っ  
はこなかった。

俺は和室に行き、眠っている和音の横に膝をついた。迷いなくそ  
の細い肩に手を置き、そっと揺する。

「カズ、起きろ」

「……ん……？」

和音の瞼が震え、ゆっくりと開いていく。何度か瞬きを繰り返し、  
ようやく焦点の合った目で俺の視線を捉えた。

「あれ、仁……？」

まだ少し寝ぼけているようだ。小さな子どものようなその反応に、  
俺は思わず笑ってしまった。

「起きろよ。こんなところでいつまでも寝てたら風邪ひくぞ」

「あ………！」

やっと状況が掴めてきたらしい。勢いよく身を起こそうとして、  
隣に寝ている希望に気付いたのか、慌てて動作を緩めながら体を起  
こした。

「わたし、寝てたんだ……」

「ああ。コートも着たまま」

「あ、ホントだ」



自分の恰好を見下ろし、驚いたように目を丸くした。

「よく眠れたか？」

訊いた俺に、和音は何度か目を瞬かせ、頷いて柔らかく微笑んだ。

「夢、見たよ……お母さんの夢」

「……そうか」

和音は微笑みを浮かべたまま、祭壇の上の骨壺を見つめた。そこに涙は見えない。

和音。

いつか、泣ける時がきたら、その時は俺の胸を貸してやる。

それぐらいはさせてもらえるだろうか。

和音の穏やかな横顔を見つめながら、俺は心の中でそう語りかけていた。

（？・秘めたる想い）

愛のかたち      【? 偽装恋愛】      (前書き)

仁視点?です。ちよつと本編とイメージが違つかもしれません…

愛のかたち 【？偽装恋愛】

「私のこと、好き？」

突然、背後からかったその声に、Ｔシャツに腕を通していた俺は目を丸くした。起こさないように気を付けたつもりだったが。

「ごめん、起こした？」

「ううん、起きてた　ねえ。答えてよ」

小枝子は白いシートで胸を隠すようにしてごそごそと半身を起こした。その目は真剣に俺を見上げている。俺は小さく笑って答えた。

「好きだよ」

「嘘ばかり。ちゃんと『好きな女』がいるくせに」

彼女は呆れたような微笑みを浮かべた。

「でも、ありがとう　もう帰るの？」

「うん。明日朝一バイトだし」

シャツを羽織る俺を小枝子が上目遣いで見つめている。

「泊っていけばいいのに」

「へえ？　引きとめるなんて珍しい」

俺はもう一度ベッドの淵に腰を下ろした。

「ねえ、仁くん」

小枝子の、形の綺麗なその目が、俺を真っ直ぐに見つめる。

「別れて。　って言ったら、どうする？」

不思議な事に、俺は少しも驚かなかった。ただその言葉に俺は二度瞬きをして。

「いいよ」

そう答えた。

「いいよ。小枝子がそうしたいなら」

小枝子は表情を変えずその言葉を受け止めた。探り合うように俺達は見つめあう。先に目を逸らしたのは小枝子の方だった。

「そう言うと思ってた」

自嘲気味に笑って、小枝子は俺に背を向けて横になった。白い背中がむき出しになる。

「嘘よ。　もう行って。また連絡ちょうだいね？　待ってるから」

軽い口調だが、こちらを振り返ろうともしない。完全な拒絶の態度だ。俺はそっと彼女の背中にシーツをかけて立ち上がった。

「連絡する……じゃあな」

返事は返ってこなかった。

小枝子と付き合い出したのは、十カ月ほど前。友達に誘われていった合コンに、彼女も来ていた。きっかけはただそれだけ。その日のうちに、俺達は関係を持ち、それからなんとなく付き合いが始まった。

小枝子は別に軽い女ではない。だが、初めて会った俺とそういう関係になったのには、理由があった。

彼女には付き合っていた男がいた。相手は彼女より五歳年上の社会人。だが、合コンの前日、小枝子はその男から別れを切り出されたそう。傷付いて自棄になった小枝子は、行くつもりもなかった合コンに参加、そこで俺と会った。

俺と寝たのは、その好きな男を忘れるため。動機はいたって単純、かつ不純。だけど、俺にはその気持ち痛みほどわかった。俺だって小枝子と同じだ。一つの強い恋情を誤魔化すために、他の女と関係を持つ。

小枝子には、俺は正直に「好きな女」がいるということを告げた。それを知った上でも、関係を続けることを望んだのは小枝子。小枝子には「誰か」が必要だったのだろう。そして、俺はそれを拒まなかった。

お互いが、心を誤魔化すために利用し合っている関係。そのことに罪悪感を感じない。きっかけはどうだっていい。この関係がいつか本物の愛になることだってあるかもしれない。そんな甘い期待もあった。

だけど、たぶん、もう無理なのだろう。

『別れて』

嘘だったとしてもその言葉が小枝子の口から出た。そして、その

ことにショックすら受けなかった俺。      もう答えは出ているんじゃないか？

小枝子は前の男を忘れられず、俺の気持ちに変化はない。  
これ以上の付き合いは無意味なのかもしれない。俺にも小枝子にも。

夜道を歩きながら、俺は長く重いため息をついた。

帰宅後、シャワーを浴びて自室に戻る時、俺は和音の部屋の前で足を止めた。ドアの隙間から光は漏れていない。部屋の電気は消えているようだ。

そのことにホッとして、俺は自分の部屋に戻った。

いつの間にか、和音の部屋の電気を確認するのが習慣のようになってしまった。

義母さんが死んでしまつてしばらくの間、和音の部屋の電気は夜中も消えない日が多かった。それでも半年が過ぎた今は、そういうこともほとんどなくなった。いい加減、俺もこの変な習慣は止めないと      そう思つのに、気付けば彼女の部屋の前で足を止めてしまふ。

つい何日前か前、初めて和音が声を出して泣いたのを聞いた。俺の服を濡らした和音の涙の感触は忘れない。どれだけ耐えていたのかと思うと、どうしようもなく辛かった。そして愛しかった。全力で守っていくと、改めて心に誓った。

俺の気持ちなど、和音はずっと気付いてくれなくてもいい。むしろ気付かないで欲しい。あの時、確かに得た和音の「信頼」を、俺は決して失いたくはなかった。

\*

\*

\*

昼休み、俺は偶然会ったサークル仲間の川崎と一緒に飯を食っていた。

「仁、今度いつ練習来るー？」

「あー、どうすっかなあ」

ここ一月ぐらいサークルの方には一度も顔を出してない。

俺が所属してるのは3オン3のバスケットサークルだ。前は積極的に参加してたが、義母さんの病気があってからはあまり行かなくなった。サークルよりも家のことが優先だ。

「暇見付けて顔出すようにする」

「ああ、そうして。新入部員もまた増えたぜ」

「へえ。上手いのいた？」

「いたいた！ あ、そうだ、去年の大会で」

久し振りに川崎とバスケット談義に花を咲かす。話していると体を動かしたくなってきた。ほんと、今度少しでも顔出すことにしよう。

「ところで、仁さー」

にわかに川崎の口調が変わった。

「小枝子センパイと別れたの？」

「なんで？」

「いや、この前さあ、サークル終わった後みんなで飲みに行ったのよ。その店にな、偶然小枝子センパイがいて　男と二人で。親しげに」

……へえ。

「どんなヤツ？」

「高校が同じだったヒト。センパイと同じ学年。派手な目立つ人で……確か、キタザワ、とか言ったっけ」

川崎は小枝子と同じ高校の出身だった。その関係で小枝子のことを今でも「センパイ」と呼んでいるのだ。それにしても、高校の同級生？　いったいアイツは何をやっているんだか。

「で、別れたの？」

「さあね」

首をすくめた俺を見て、川崎が面白そうにニヤリと笑う。

「なになに？　なんかフクザツな感じ？　シユラバ？」

「バーカ。面白がってんじゃねーよ」

人の恋愛ごとに首を突っ込んでくるのはこいつの悪い癖だ。だから絶対に和音のことは話さない。俺はまだ話足りなそうな川崎を置いて、さっさと席を立った。

\*

\*

\*



この日は久し振りの家族そろっての外出だった。希望が行きたがっていた動物園に朝早くからやってきたわけだが。

昼食後、父さんと希望がお土産を買いにテーブルを離れた瞬間、和音が小さく欠伸を噛み殺したのを俺は見逃さなかった。

その前日まで和音は試験だったのだ。本当なら朝はゆっくり寝て過ごしたかったところじゃないのだろうか。和音は絶対にそういうことを口にはしないが。

「カズ、大丈夫か？」

「ん？」

「なんか疲れた顔してるけど？」

和音は一瞬しまったというような顔をしたが、すぐに取り繕うように笑った。

「でもちゃんと楽しいよ。仁は？」

矛先を俺に向けてくるのは、それ以上言われたくないからだろう。だったらもう変に気遣うのはやめよう。

「俺もちゃんと楽しんでるよ。天気もいいし、そんなに暑くもないし。家族サービスには持って来いの日だな」

「そうだね。のんも楽しそうで良かった」

そうだ。俺たちにとって、結局はそれが一番重要な事なのだ。

家族と過ごす時間は何物にも代えがたい貴重なもの。俺はそれを知っている。ガキの頃は父さんと二人の生活が当たり前で「家族」

という意識は低かった。その分、父さんの再婚後にできた「家族」は、まさに理想そのもの。その温かさに感動すら覚えた。

だけど、義母さんが元気な頃は、照れ臭さもあってみんなで出かけたりするのを躊躇ったりもした。今思えばもつと一緒に出掛けたりすれば良かったと思う。まさに後悔先に立たず、だ。せめて今後はこんな後悔だけはしたくない。希望にもたくさんの温かさを記憶の中に刻み込んでもらいたい。柄にもなくそんなことを思ったりもする。

「たまには動物園つてのも楽しいもの　だ、な……」

呟いている俺の視界に、思いもしない人の姿が飛び込んできた。

小枝子。

小枝子は人の流れの中、一人立ち止ってこちらを見ていた。俺が気付いたことを確信したのか、小枝子がゆっくりとこっちに向って歩いて来た。

「仁くん」

「よお」

俺は無愛想に答える。

はつきり言つて、あまり気分は良くなかった。小枝子とはあの日以来会っていない。連絡をすと言つてしなかった俺にかなり問題があるのは確かだが、今はこの場を邪魔しないで欲しい。そう思つてしまう俺は、ずいぶん薄情な男なのかもしれない。

気を使つたのか、和音が腰を浮かせる。俺はそれをすぐに止めた。

「カズはここにいていいから」  
「でも」

「いいから」

和音が席をはずす必要はどこにもない。

「仁くん、この人誰？」

棘のある小枝子の態度。自ずと俺の口調も刺々しいものになった。

「誰だっていいだろう。小枝子には関係ない」

「関係ないわけじゃない。最近全然連絡してこないと思ったら……こんな女の子と付き合ってたわけ？」

小枝子の声が荒くなった。俺は冷静にそれを見返した。

「だとしたら？」

小枝子はぐつと言葉に詰まった。重い沈黙が流れる。それを破ったのは、和音だった。

「わたし、妹ですよ！」

半分怒ったような口調の和音。それも無理はない。和音にしてみればこの状況はいい迷惑だろう。

「妹……そうなの？ 仁くん」

戸惑う小枝子。ため息をつきつつ頷こうとして、止めた。ふと思ったのだ。小枝子には知る権利があるのかもしれない。俺の「好きな女」が誰かという事。

「そう　　だけど、違う」

俺は慎重に言葉を選んだ。小枝子にはその真意が伝わるように。

「妹だけど、血はつながってないし、付き合うことも結婚すること  
もできる」

「はあっ？」

素っ頓狂な声を上げて立ち上がったのは和音だ。この反応は予想  
出来ていた。「ごめん」と心の中で謝る。和音には今のこの状況は、  
自分がいいように利用されているようにしか思えないはずだ。だ  
けど、だからこそ、いいのだ。和音が俺の気持ちに気付くことはない  
だろうから。

まだ戸惑い気味の小枝子。それでもどこか納得したような表情に  
変わったのは気のせいじゃないと思う。

わかってもらったところで、今度は俺が聞く番だ。

「俺のことより、自分はどうなんだよ。こんなところに誰と来てる  
？」

小枝子が顔を強張らせた。

「わ、私は……」

「キタザワってやつ？　高校の時の同級生とかって」

「なんで」

「知ってるかって？　何、やっぱり俺に知られたらまずいわけ？」

別に嫉妬しているわけじゃない。小枝子とそのキタザワを好きな  
ら別にいい。だけど、そうじゃないとわかっている。そんな短期間

に他のヤツを好きになれるほど、小枝子は器用な女じゃない。そのくせ軽い女のようなことをする　そんな小枝子になぜか無性に苛ついた。

「ち、違う！　キタザワくんは……」

小枝子は可哀想なくらいうろたえる。ちょっときつく言い過ぎたそんな自分にも苛ついた。そもそも、俺に口を出す資格なんてないのに。

「いいよ、もう。　それより、あれそのキタザワくんじゃないのか？　搜してるみたいだけど？」

俺の視線の先では、派手な茶髪の男が辺りをキョロキョロ見回している。あれがキタザワなのだろう。

「早く行ってやれよ。俺たちももう行くから　和音、行くぞ」  
「え！」

立ち上がり、茫然としている和音の手を掴んで強引に引っ張った。今はこれ以上、小枝子と話す必要はなかった。

和音の手を引いて歩きながら、俺は深い自己嫌悪に陥っていた。バカな事をやっている、と思った。

俺も、小枝子も。

自分たちのやっていることの愚かしさに、笑い出したくなるほどだった。

\*

\*

\*

「仁くんの『好きな女』が妹さんだったなんてびっくりしたわ」

一週間後、待ち合わせた喫茶店で、小枝子はそう言って微笑んだ。

「笑えるだろ？」

意図せず自嘲するような言い方になったのを、小枝子は聞き逃さなかったようだ。意外そうに眉を上げた。

「どうして？ 可笑しくないわよ。あのコが本当の妹だったらちよつと　というよりかなり問題あると思うけど。違うんでしょ？」

俺は長いため息をついて、親の再婚のことを話した。今まで小枝子にも教えていなかったのだ。

小枝子は納得したように頷いた後、少しだけ興味深げに身を乗り出してきた。

「いつから好きなの？」

その質問に、俺は苦笑した。

「さあね。忘れた」

そう答えはしたものの、その気持ちを自覚した時のことを、俺ははつきりと覚えていた。

それは家族になって二年目。俺は高二で和音は中三だった。ある日、和音が男と歩いているのを偶然見かけた。二人で手を繋いで、楽しそうに笑顔を交わすのを見た時の衝撃は今でも忘れられない。後で冗談っぽく問い詰めた俺に、和音はあれは「彼氏」なのだと

言った。俺は和音の「彼氏」に嫉妬し、その時初めて気付いたのだ。自分にとって和音がどういう存在なのかを。

たぶん、俺は初めて会ったその時から和音を好きだった。淡い、初恋のような感覚ではあったけれど。それが時が経つごとに、激しい熱を帯びた想いに変わっていくのを、俺は止めることができなかった。

「仁くんは、これからどうする気なの？」

小枝子のその言葉に、俺は肩をすくめた。

「別に。どうする気もないよ。このまま」

「告白する気はないの？」

「ないね」

間髪を入れずに答えた。

「俺はあいつの兄貴で、あいつは妹。その関係が一番いいんだよ」  
「……そうかしら」

小枝子はどこか納得がいかないように呟き、それでもそれ以上は何も言わず紅茶のカップを口に運んだ。

「それで、小枝子の方は、どうなんだよ？」

俺の言葉に、小枝子はゆっくりとカップを置いた。

「この前の彼は、本当に何でもないので。ただ、仁くんが連絡くれなかったから自棄になって」

思いもしなかった返答に、俺は思わず目を瞬かせた。小枝子が面白そうに笑う。

「仁くんがそのつもりなら、私も勝手にやるわ、って気でいたの。たまたまそんな時、キタザワくんに会って、昔好きだったんだーなんて言われて。じゃあ、今度飲みに行く？ デートする？ ってことになって。でも、本当にそれだけよ。本格的に付き合ってた言われたけど、断っちゃった」

「なんで？」

「無理っぽかったから」

「無理？」

思わず聞き返した言葉に、小枝子は大きく頷いた。

「彼に仁くんの変わりは無理」

小枝子の口から出たその言葉に、俺はただ面喰った。小枝子は悪戯っぽく笑うと、まるで焦らすかのようにゆっくりと紅茶を飲み、同じようにゆっくりとカップを置いた。

「ねえ、仁くん。本当はもうずっと連絡してこないつもりだったでしょ？」

その言葉に俺は答えなかった。だけど、それがもう答えになってるだろう。小枝子はそれを汲み取り、少しだけ寂しそうに微笑んだ。

「わかってたのよ。私といっても仁くんは変わらない。私には『好きな女』を忘れさせられない。だけど、もう少しだけチャンスを頂戴？」



「チャンス？」

「うん。仁くんの本気になるチャンス。そして、仁くんを本気にさせるチャンス」

「今さら……」

今まで何カ月も付き合ってきた駄目だったものが、そんなに突然変われるとは思えない。

無意味だ　そう拒否しようとした俺の言葉を遮るように、小枝子が言葉を被せてきた。

「夏が終わるまで、でいいの。それまでに何も変わらなかったら、そしたら、その時はちゃんと別れましょう。ね？」

まるで懇願するような小枝子の目。

また無意味な事を繰り返すのか。それでも、もしかしたら　はあり得るのかもしれない。俺はため息交じりに承諾した。

そんな折、和音が熱を出した。和音が寝込んだのは、一緒に暮らし始めて初めてのことだった。

風邪をひいたのだろが、それ以上に疲れがたまっていたのだろうと思う。母さんの死後、和音はとにかく無理をしている。そのことに和音自身は無自覚だ。だから、体の方が先に悲鳴をあげたのだろ。熱は辛いだろが、ゆっくり休むいい機会だ。

そして、その騒動に紛れて、俺は一つの事実を知ることになった。

和音に彼氏がいること。

ショックは受けなかった。ただ静かにその事実を受け入れた。和音が幸せな恋をしているのなら、それでいい。

この日、仕事を休めない父さんに変わって、俺が和音の看病をすることになった。看病と言っても、たまに様子を見て、ごはんと薬の準備をしてやるぐらいしかできないのだが。

そろそろ昼食の時間という頃、俺は和音の様子を見に部屋に行った。

「う……」

和音の口からは小さく呻き声が漏れていた。額には大粒の汗をかいている。

「カズ？」

そつと声をかける。

「う……やだ……」

苦しげに左右に首を振る和音。ひどくうなされている。

「カ」

「待って……おかあさん」

和音の口から小さく零れた言葉に、俺は呼び掛けるのを止めた。義母さんの夢。

どんな夢なのかは知る由もない。それでも、固く閉じられた目か

ら零れた一筋の涙に、俺の胸はぐっと締め付けられた。

「……夢の中でまで、カズを泣かせるなよ」

その眩きはちゃんと義母に聞こえただろうか。

俺は強めに和音の名を呼んだ。これ以上和音の辛そうな涙は見たくなかった。

「和音」

何度目かの呼びかけで、ようやく和音は目を開けた。

その目が俺を捉え、確かに安堵の色を浮かべるのを見て、俺の胸はまた締め付けられる。

抱きしめたい　ぐっとこみあげてくるその思いを、俺は彼女から目を逸らすことで抑えた。

あえて明るく言葉をかけながら、俺は懸命に気持ちを鎮める。

そんなことももう、ずいぶん慣れてしまっていた。

「　　待つて」

昼食代わりに持ってきたアイス在和音が食べ終え、そのまま部屋を出ようとした時の事。和音からそう呼び止められた。

振り返った俺に、和音はおずおずと遠慮がちに小さな声で言った。

「あの……ごめん、眠るまで、ここにいてもらえないかな……」

思わず息を止めてしまった。

真っ直ぐに向けられた「信頼」が、重く俺にのしかかってくる。  
それでも、俺はこの信頼に応えなければいけない　兄として。  
家族として。

「いいよ」

俺は笑って、和音のベッドの脇にイスを引っ張り出して来て座った。

「しばらくここにいるから。安心して眠れ」

和音はホッとしたように頬を緩め、そっと目を閉じた。すぐに規則正しい寝息を立て始める。

俺はその寝顔を見つめながら、小さく息をついた。

和音は俺のことを信頼してくれている。それは嬉しいことであり、何よりも俺が望んだことだ。

なのに、どうしてだろう　胸の奥が、ひどく苦しかった。

和音を支えたいと願った。

守りたいと思った。

なのに、その為に得た「家族としての信頼」は、どうしようもなく重い。

心の奥底で裏切り続けていることへの罪悪感は、日増しに大きくなっていく。

俺は、この苦しさを、この後ろめたさを、小枝子と会うことで紛らせた。

同じように、小枝子もまた、自分の苦しさを、俺と会うことで紛らせた。

自分の気持ちから目を背けるように、逃げるように、俺たちは紛い物の恋愛ごっこを続ける。

夏の終わりまで。

( ? 偽装恋愛 )

愛のかたち 【?リミッター】 (前書き)

本編・第八話の裏的な…

## 愛のかたち 【？リミッター】

帰宅した俺は、そこに脱ぎ揃えてある家のものではない靴に、思わず動きを止めた。黒い、男物の革靴。

すぐに誰のかはわかった。和音の彼氏のものだろう。

その男とはこれまで何度か顔を合わせたことがある。こうして家に来ていることも珍しくはなく、特段驚くことではないのだが、その男物の靴を見る度に感じる、何かジリジリするような感覚には未だに慣れないでいた。

「おかえりー！」

俺が「ただいま」を言うより前に、転がるようにして希望がリビングから駆け出してきた。

「じん、じんー！ あかねえ、たくまくん、いるんだよー！」

跳び上がって喜びを伝える希望。俺はその頭をぽんぽんと軽く叩いた。

「そっか。良かったな」

笑いながら家に上がる。笑顔作るのなんてのは簡単だ。

「こんにちは。お邪魔してます！」

俺が入るなり、すでに立ち上がっていた制服姿の男が、ぺこりと頭を下げた。長身で人目を惹く整った顔立ち。男の俺から見ても「カッコいい」と認めざるを得ないその男は、木村琢磨。女たちに騒

がれそうな外見（と名前）をしていながら、木村には少しも浮ついたところは見られず、受ける印象に悪いところは見受けられない。

これが和音の彼氏。 上出来だ。

「いらっしやい。わりーな、のんの相手させて」

俺は、制服の上にエプロンをつけた恰好でキッチンに立つ和音を、オーバーに首をすくめながら示した。それを受けて、和音が不満そうに口を挟んできた。

「おかえり。 って、わたしが無理にさせてるみたいな言い方やめて下さい」

「えー、そうじゃねーの？ 木村くんのにん任せて、カズは夕食の支度やってるんだろ」

和音が困ったように眉をハの字に下げた。

「だって。今日わたしが夕食当番なんだもん」

「あ、別にオレはいいんですよ。のんくんと遊ぶの楽しいし」

「たくまくんっ、ぱじゅるー！」

「うん、続きね」

希望が木村の手を掴んで引つ張って行く。希望も木村にはかなり懐いてしまっている。俺が帰ってきたら纏わりついてくるのが常なのに、俺の方には見向きもしない。ちよっと複雑な心境だ。

二人がソファアの影に隠れてしまったのを見て、俺は思わずため息をついた。

「デートが子守りつても可哀想なハナシ」

「わたしだって悪いと思ってるよ」



和音がまな板に向き直りながらポツリと呟きを落とした。包丁を握り締め、ニンジンを切り始める。

「でも、琢磨くんがそれでもいいって言ってくれるから」

サクツ、という小気味のいい音と同時に、俺の心臓がドクンと鳴った。

琢磨くん。

和音が彼をそう呼んだ。最近まで「木村くん」だったのに。そんな些細なことにいちいち反応する自分の心臓が憎らしい。それでも、その呼び方に、この二人の関係がより近付いたのだということを感じて、一瞬にして気が滅入った。

「やっぱり、甘えすぎかな？」

和音が手を止め、不安そうに俺を見上げてきた。俺は思わず目を逸らす。

甘えている。和音が、他の男に。

たぶん、そのことは歓迎すべき事なのだ。和音には、心許せる人間が一人でも多く必要なだろうから。

だが、素直にそれを喜べない。そんな自分の未熟さに呆れる。

「仁？」

和音の怪訝そうな声に、俺はハツとした。つい黙りこんで、乱切りにされていくオレンジ色の物を睨むようにして見ていたようだ。

「あ、いや。そのニンジン、でかくない？」

「え、そうかな？」

和音は切った二ンジンを手に取り、眺める。俺は考えるのをやめて、明るく続けた。

「ところで、今日のご飯、何？」

「肉じゃが。豚肉だけだね」

「旨そうだね」

不意に、声が割り込んできた。木村が少し離れたところからこちらを見ていた。和音が慌てて振り向く。

「あ。ごめんね、琢磨くん。希望のこと任せっぱなしで」

「気にしないで。でもさ」

木村がやんわりと笑った。

「なんか、そうやって二人でキッチンに立ってたら、なんか新婚の夫婦みたいだ」

そう言った木村の目が、確かに俺を見た。その視線に、鋭い何かが含まれているのは気のせいではないだろう。

「それやだな、琢磨くん。そんなに所帯じみてるかな？」

何も気付かない和音が苦笑する。俺はさり気なく和音のそばを離れながら、同じように笑った。

木村の視線を感じる。俺から何を感じ取ろうとしているのかとにかく余計な詮索は止めて欲しかった。

そのまま部屋を出る。まるで、その場から逃げるように。

木村は確かに、俺に対して「何か」を感じているらしい。だが、時おり向けられる鋭いその視線を、俺は気付かないふりして、笑って軽く受け流すしかできなかった。

木村の感じている疑念を、真実だと認めるわけにはいかない。

それでも、木村の存在は俺を挑発する。「負けたくない」という本能のようなものが頭をもたげてくる。最初から勝負にならないとわかっているのに。

和音が幸せならいい。ずっとそう思ってきた。

これから先もそれを願う。

その気持ちに嘘はない。

なのに、和音がこのまま離れていくことに焦燥感を感じる。どこにも行かないよう、繋ぎとめたくなる。

いつかこの気持ちが抑えきれなくなつて、兄の手ではない男の手で、和音に触れてしまうのではないか。そんな危機感が、切に迫ってくる。

それでも、それだけはあつてはならなかった。

和音を裏切るようなことだけはしてはならない。

和音が何よりも恐れていること。それは「家族」を、「家庭」を失うこと。

幼い頃に父親を失い、そしてずっと自分を守ってくれていた母親を失つて。家族を失うことへの恐怖は、和音の魂の深いところに刻み込まれてしまった。トラウマのように。だから、和音にこれ以上の喪失を味わせるわけにはいかないのだ。

和音が大切に思っている「家庭」を、俺が壊すことがあつてはならなかった。

それでも、限界は、ゆつくりと、だが確実に近付いていた。  
一つ一つの、日常の些細なこと。

例えば、一緒にご飯を食べている時、皿を受け取る瞬間にふと指が触れる。狭い廊下ですれ違う時に肩がぶつかる。視線が合う。笑う。そんな当たり前のことが、次第に大きな波となって俺に襲いかかってくるようになった。

想いは抑えようとすればするほど、それに反発するように大きく膨れ上がる。

気を抜けば今にも走り出そうとするその気持ちに、俺は懸命にブレーキをかける。

そんなギリギリの安定状態のまま、時だけが静かに過ぎていった。

\*

\*

\*

春が来て、和音は大学生になった。

俺と同じ大学、同じ学部。和音がここを選んだのは、別に俺が通っていたからではない。そこまで自惚れるつもりはない。ただ、家から通える範囲で一番近い大学だったから、そこにたまたま志望の学部があったから、ということが最大の理由だ。和音にとっては、どんなことも「家」が基準になっているようだ。

理由はどうであれ、俺にとって和音のこの選択は、正直歓迎できないものだった。

和音と顔を合わせる機会が増え、俺は柔らかな苦痛に襲われる。学内で顔を見かける度に弾む気持ちとそれに伴う苦い思いがこみあげる。とても穏やかではられない。

その度に、俺は和音の胸元に光るハートに目を留め、自分を落ち着かせた。

そのハートは木村から和音への贈り物のネックレス。クサイ言い方をするならば、あのネックレスは、いわば二人の「愛の証」だ。あのハートが和音の胸元にある限り、大丈夫だという自信は俺にはあった。

だが、それがなくなったら？  
その時俺はどうするのだろう。

\*

\*

\*

ゴールデンウィークの予定は、希望の水ぼうそうで全て流れた。バイト先から非難の目を向けられながら無理言って貰った休みも、全部無駄になってしまったわけだが、そのことに文句をつける気はない。一番辛いのは希望自身なのだから。

俺は突如空いたスケジュールを、久し振りのサークルの参加で埋めることにした。たまたま、新入生歓迎の親睦会が入っていたのだ。公立の公園の野外コートを押さえていると聞いていた。新年度が始まって、サークルには最初の一度の飲み会にしか参加していない。この親睦会は顔を出すのにいい機会だった。

久し振りの試合の雰囲気、そしてボールの感触は、俺に全てを忘れさせてくれた。体を動かすたび、声を出すたび、これまで溜まっていた何かが吐き出されていくような、そんな感覚が湧きあがる。

爽快だ。

心を焦がすような何かも、胸を締め付けるような何かも、全てが汗と一緒に流れていった。

何試合かを終え、コートの際らで休憩していると、今年から部長になった川崎が寄って来た。

「仁ちゃん、ブランクある割に調子いいんでない？」

「半年ぐらい、ブランクでもなんでもないさ」

川崎が大袈裟に肩をすくめた。

「おー言ってくれるなあ。それにしても、相変わらず、人気モノだね、仁」

川崎がやや離れた所にいる女性の集団を軽く指差した。俺が顔を向けるとにわかには甲高い声上がるのが聞こえる。俺は特にそれに反応するでもなく、彼女たちから視線を外した。はつきり言って、こういうことにはもう慣れてる。いちいち気にするほどの事でもない。

「仁がもっと頻繁に来てくれれば、女子部員ももっと増えるんだろうけどな」

「目的の違う奴が集まったってうるさいだけだろうに」

「いーじゃん、楽しければそれで」

「まあ、そうかもな」

俺は苦笑しつつ、タオルを手にとって立ち上がった。どこへ行くのか聞いてくる川崎に「顔洗い」と短く答えた。

何故かついてきた川崎と無駄話をしつつ、散歩がてらコートから

離れた場所にある水道に行くことにした。

休日の公園は家族連れで賑わっている。ふと、家で休んでいる希望のことを思い出した。少しは熱は下がっただろうか。ぐずって泣いてないだろうか。そんなことを考えている自分が可笑しい。

そして、希望の事を思い出せば、当然のように和音のことも頭に浮かんだ。

結局今日はどうしたのだろう。俺の方が早く家を出てきたため、和音が出掛けたかどうかわからない。それでも、たぶん木村と一緒にいるのだろうと予測していた。「デートすれば」と進言したのは、俺だし。今さらそんなことぐらいで落ち込んだりもしない。

だが、まさか今ここでそれを目撃するとは、全く予想外のことだった。

俺たちの数十メートル先に、和音とその彼氏がいたのだ。思いもしなかった所での目撃に、俺は思わず足を止め、二人を凝視してしまった。そして、そんな俺を川崎が見過ごすわけもなかった。

「どうした、仁？」

「あ、いや。なんでもない」

俺は慌てて二人から目を逸らした。だがもう遅い。川崎の目は興味深そうにキラキラし始めていた。

「なに、あの二人、知り合い？ 元カノとか」

どうやら、俺の視線の先にあった二人のこともしっかり見付けているようだ。しらを切るのも苦しく、俺は諦め半分ため息をついた。

「妹だよ。妹と、その彼氏」

川崎の目がいつぱいに開かれる。

「いもうとー？ 仁にそんなのいたのかよ！ どれ あまり見えないな」

「ほつとけよ。ほら、行くぞ」

「待てよ、仁。妹、呼んで」

川崎の言葉に、俺は「はあ？」と顔を顰めた。冗談じゃない。だが、川崎は引き下がらない。

「いいじゃん、仁の妹、オレ見てみたいもん」

「何だよそれ。見世物じゃねーって」

「いいじゃんいいじゃん。ね、ケチケチすんなよー」

「……ほんつと、しつこいな、おまえ」

俺は大きな息をついた。このままだと、俺が呼ぼうと呼ばざるとに関わらず、川崎は自分で和音のところに行くだろう。「仁の妹ですかー？」とかなんとか言いながら。その光景が目には浮かぶようだった。こうなったら、もう観念するしかなかった。

「ちよつと話すだけだぞ」

「りょーかい！」

憎たらしいまでの川崎の満足げな笑顔。俺はため息ついでに大きく息を吸って、和音の名を呼んだ。

まさか、それが全てを変える始まりになるとは、この時の俺は思いもしなかった。



\*

\*

\*

川崎は、和音というよりも木村に興味を持ったらしかった。といっても、別に川崎にソツチの気がある訳じゃない（たぶん）。バスケが一番に頭にある奴だから、恐らくサークルにスカウトする気であるのだろう。木村は身長が高いくでなく、体格もしっかりしている。そういう目で見れば確かに欲しい人材なのかもしれない。

だが、まさか、この場でこの親睦会に誘うとは思ってもみなかった。そして、和音とデート中である木村が、その誘いに乗ってくるのも予想外だった。

俺は、ウォームアップしている木村に、チラリと目をやった。

どういうつもりで木村がこの場に参加したのかわからない。「面白そうだから」と言ったが、その割に目は笑っていないかった。

穿ち過ぎだろうか？ 今の木村は、初対面の奴らともうまく打ち解け、楽しそうにしている。俺がいろいろ気にする事でもないのかもしれない。

俺は木村のことを頭の外に追いやった。そして、試合を見ているだろう和音のことにも忘れることにした。

とにかく、今は余計な事を考えたくない。全てを忘れて、今はただ純粋な楽しさだけを感じていたかった。

背後に気配を感じ、俺は顔を上げて振り返る。そこには木村が立っていた。

試合を終えて、顔を洗っている時のことだった。

「あ、ごめん。使う?」

その水道は一つしかない。俺が体をどけると、木村は小さく「いいいえ」と首を振った。その表情の硬さに、俺は顔を引き締めた。水を使いに来たのでなければ、俺に用があると思えない。ここには俺以外に誰もいないのだから。

「何?」

俺が促すと、木村は覚悟を決めたような目で口を開いた。

「仁さんは、和音をどう思っているんですか」

唐突なその言葉に、俺は目を見開いた。嫌な予感に胸がざわつく。来るべき時が来た、という気がした。

「いきなり何の話だよ?」

笑い飛ばそうとした俺を、木村の硬い声は許さなかった。

「言葉通りの意味ですよ。仁さんは和音のことをどう思っているんですか?」

静かだが、その口調には確かな苛立ち。怒りのようなものが含まれているように感じられた。

木村は真剣だ。だが、なぜ今それを言い出したのかわからない。俺は木村から視線を逸らすように、持っていたタオルで顔をこしこしと拭いた。

「どうって 妹。大事な妹だと思ってるけど」

「それだけじゃないでしょう？」

間髪を入れずに飛んできたその言葉に、俺はついカチンとなった。顔を上げ、木村をじつと見据える。

「なんだよ、それ。おまえが決めつけるなよ」

木村は怯むそぶりも見せず、黙って俺を見返した。ややあつて、木村が口を開いた。

「和音はずっと仁さんを見てました。俺ではなく、仁さんを」

え？

俺は耳を疑い、目を丸くした。

「それがどういう意味か、仁さんにはわかりますか？」

畳みかけるように問われ、俺はチツと舌打ちした。考えるより前に言葉を挟まれた。いや、むしろそれで良かったのかもしれない。恐らく、これは考えない方がいい。

「……しらねーよ」

俺は木村に背を向けた。拒否の意思表示だ。それでも木村は容赦はしない。

「オレはずっと和音を見てきた。だからわかるんです。和音は」  
「関係ねーよ、そんなこと」

俺は声を荒げて木村を遮った。その先は、決して聞いてはいけないことだと、心のどこかで警鐘が鳴った気がした。

「一体、何が言いたいんだ、おまえは」

苛立ちを隠すのをやめ、正面からそれを木村にぶつける。だが、それでも木村は臆することはなかった。

「仁さんが認めないのなら、オレが和音をもらいます」

そして、静かな声で言った。

「他の男なんか目に入らないくらい……オレだけを見るように、和音の全部をオレが貰う。いいですよ、それで」

まるで宣戦布告のような言葉だった。

「和音の全部を貰う」 俺への明らかな挑発。

それは十分な効果を発揮した。 駄目だ。冷静になれない。

「やれるものならやってみろよ」

心のうちで何かが煮え滾るのを、抑えることができない。投げつけるように、木村に向って言葉を吐き出した。

「おまえにそれができるのならな。でも、忘れるなよ、選ぶのはおまえじゃない 和音だよ」

木村は俺の言葉に息をのみ、ややあつて深い息をつきながら俯いた。

「……ずるいですよね。選ぶのは和音だと言いながら、あなたは和音にその選択肢すら与えてないくせに」

その小さな声は、確かな礫となって俺にぶつかってきた。

「逃げて隠して 兄という絶対的な立場だけは確保して、離れることもしない。ずるいでしょ、それって」

木村の言っていることは、よくわかる。確かに俺はずるいのかも  
しれない。だが。

「どう言われようと、それを变えるつもりはねえよ」  
「だったら、和音はどうなるんですか？」

木村の問いかけに、俺は笑った。簡単な事だ。

「和音だって、変わることを望んじやいない。俺たちは『家族』なんだよ」

「……あなたは、和音が好きなんじゃないんですか？」

初めて、ストレートに聞かれた問い。もうごまかすつもりはなかった。俺ははつきりと頷いた。

「好きだよ。たぶん、おまえが考えているよりもずっと深く」

木村は俺を見定めるかのようにじっと見つめた後、静かに言った。

「オレだって好きですよ。あなたが考えているよりもずっと深く。  
でも、これじゃまるで……」

その後の弦きは俺には聞きとることができなかった。木村は手にしていたタオルを頭から被り、ゆつくりと俺から離れて行った。その背中から俺はすぐに目を逸らした。見送る気も詫びる気もなかった。

俺はもう一度水道の前に立ち、頭から勢いよく水を被った。心に発生した熱を、少しでも冷ましたかった。

\*

\*

\*

その日の夜、俺が帰宅すると、玄関先で希望を抱きしめたまま泣いている和音がいた。

木村と何かがあつたのだとすぐにわかった。

涙の理由はわからない。ただ、俺から顔を背けるように希望の体に顔をうずめる和音は、確かに傷付いているのだとわかった。

傷付けたのは木村なのか？ 何があつた？ そこに俺は関係しているのか？

確かめる術も勇気も俺にはなく、ただ黙ってその頭に手を乗せた。昔から、慰める時にそうしていたように。

これが俺に出来る精一杯のことだった。

そして、その翌日。

和音の胸元からあのハートが消えた。

何かが、カチリと音を立てて外れた気がした。

( 3 リミッター )

愛のかたち 【?リミッター】（後書き）

番外編、今回で終わりです。お付き合いいただきましてありがとうございます。

ご意見感想、一言でも頂けましたら嬉しいです。

（次ページより第九話になっています）



いつからか。

いくら考えてみてもわからない。

その人の声は耳に心地よく、笑顔には癒された。

触れた手の温もりに安心し、そこにいるというだけで安らいだ。

本気で嫌いになるほどの喧嘩もしたし、顔なんか見たくないと思つたことも何度もある。だけどそれは、必ず元に戻れるという絶対的な信頼があつたからだ。

家族だから。

その理由を疑つたことはなかった　はずだった。

なのに、どうしてだろう。

いつからそこに別の感情が入りこんでしまったのだろう。

いくら考えてもその答えは見つからない。

ただ確かなのは、いつの間にかこの気持ち家族に対するそれじやなく、一人の男の人に対する好意に変わっていたということ。

義兄に対する恋心　わたしにとって、それは家族としての信頼を裏切るものでしかなかった。

\*

\*

\*

七月に入っても梅雨明けはまだ遠く、じめじめと蒸し暑い日が続いていて。

居間の端で洗濯物を干しながら、一つため息をつき外を眺める。  
雨はしとしと降り続き、当分止みそうにもない。結局今日も一日、  
このまま部屋干しだ。鬱陶しいことこの上ないが、仕方がない。

「あ……」

わたしは、ふと手にした洗濯物に目を止めた。

仁の白いＴシャツ。肩のあたりが破けている。そのＴシャツはもうかなり古く、今ではすっかり部屋着になっていたものだ。破けているだけではなく、生地も薄くなってきたり、首回りも伸びている。

もういいかげん、捨て時じゃないかな……。

「なーに服見てため息ついてんだよ」

不意に届いて来た声にビクツと振り向くと、飲み物の入ったグラスを手にした仁がダイニングの方からこちらを見ている。

「び、びつくりした……おはよ」

一瞬の動揺を、突然声かけられたからだと言わんばかりに、わたしはわざと大袈裟に驚いて見せる。仁は「おはよ」と答えながら、グラスをテーブルに置いて近付いて来た。

「それ、どうかした？」

「ああ、これ……」

手にしたＴシャツの破れた部分を仁に見えるように示す。

「破けてるよ、ここ」

「あー、そこね、うん」

どうやら仁は気付いていたようだ。

「これ カズ、憶えてるか？」

その言葉にわたしはドキツとした。憶えてるか わたしにそう訊くということは、仁もまた憶えてくれていたということだ。仁はわたしの手からそのＴシャツを取り、広げて見せた。背中と胸元に有名スポーツメーカーのロゴが入ってるだけのシンプルなデザイン。

「これ、一番最初にカズが俺にプレゼントしてくれたヤツだよな。誕生日、だったっけ」

「……うん」

そう。それは、わたしたちが家族になってから初めての仁の誕生日の時、わたしが仁に贈ったものだった。どんなものもいいのだろうと悩んだ当時を思い出し、照れるというよりもむず痒いような感覚が走る。あの頃は純粹に「新しいお兄さん」が何を喜んでくれるのかを懸命に探っていた。

仁はハンガーを取って、Ｔシャツに通しながら微笑んだ。

「けっこう着たからなあ。破けても当然か。ハイ」

渡されたそれを受け取り、部屋干し用の物干しにかけながら、わたしは首を傾げた。

「今度捨てる？」

「いや。捨てない」

即答して、仁は笑った。

「それ貰った時、かなり嬉しかったんだぜ。初めての『妹』からのプレゼント。はつきり言って、感動した」  
「え……」

意外な言葉にただ目を丸くするわたしに、仁は肩をすくめてみせた。

「Ｔシャツとか貰ったのは後にも先にもその時だけだったし。それ以降はハンカチとかスポーツタオルとかにランク落ちしただろ」  
「ラ、ランク落ちって、ひどい！ 無理しなくていいって言ったのは自分でしょ！」

ついムキになってしまったわたしに、仁は笑いながら背を向けた。

「じょーだん。どんなものも有難く大事に使わせてもらってます。……ってことで、そのＴシャツはまだ現役ね。パジャマにでもするから」

そう言っただいニングに戻ると、仁はテーブルの上に置いてあったあんパンの袋を開けて食べ始めた。

わたしは干したそのＴシャツに目を戻した。

大事にしてくれている。その気持ちが嬉しい。でも、同時に重苦しさも感じて、わたしは唇を引き結んだ。

仁が大事にしているのは『妹』からのプレゼントだ。

もし、わたしが妹として以上の気持ちを自分に向けてると気付いたら、仁はどう思うのだろう。

……きつと気持ち悪く思われる。このＴシャツだってすぐに捨ててしまふに違いない。

脳裏に嫌悪の表情を浮かべてわたしを見下ろす仁の顔が浮かんで、わたしは思わず固く目を閉じた。

怖い。

嫌われるのが怖い。この関係を壊すのが怖い。  
知られたくなかった。絶対にこの気持ちは知られたくない 隠  
し通す。

これまで何度も自分に言い聞かせた事を、わたしは再確認するか  
のように心の中で唱える。

「希望は元気に保育園行っただ？」

仁ののんびりとした問いかけに、わたしは一つ深呼吸をして振り  
向いた。自然に見える表情を作る そんなことももう慣れてきて  
しまった。

「うん。いつもと変わらず」  
「そっか」

仁は口の中のものを飲み込むと、改めて口を開いた。

「今日は俺がお迎え行くな。来週からしばらくの間カズ任せになる  
からさ」

「気にしないでいいよ」

わたしは笑って洗濯物を干す作業に戻った。

来週から仁は二週間の教育実習に入る。実習先は大学の付属幼稚  
園。仁は幼稚園と小学校教諭の免許を取得する予定なのだそうだ。

仁の実習期間は、わたしが希望のお迎えを引き受けることになる  
のだが、そんなことは別に苦でも何でもない。

「それはそうと。カズ、ずいぶんゆっくりしてんな。講義は？」

「午後から。二時限目あったんだけど休講になった」

「そうか。俺も昼に顔を出すんだけど。どうせだから一緒に行く？」

さり気ないその言葉に、わたしは思わず動きを止めた。

突然思ってもみなかった言葉を言われて、どう反応すればいいのかがわからなくなる。これまで一緒に行こうとか言われたことはないのに、一体何の気まぐれだろう。

「カズ？」

「あ、うん」

わたしは慌てて取り繕うように笑った。

「ごめん、学校行く前にちょっと寄りたいところあるから」

本当はそんな予定なんてないけれど。だけど、仁はあっさりと納得したようで、「そっか」と言うと、それ以上は何も言っていない。つた。

わたしは仁に背を向けて、ハアと息をついた。

……疲れる。

家で二人でいるのは平気だ。当たり前のことだし。だけど、家の外では別だ。意識してぼろが出そうで、出来るだけ二人になりたくない。学校に一緒に行くとか考えられない。

こんなことにいちいち振りまわされている自分が本当に嫌になる。

……忘れてしまえたらいいのと思う。こんな気持ちは消えてしまったらいい。

気付いていなかった頃に戻りたい。

琢磨くんの隣で笑っていた自分に戻りたい。

優しいその人の顔を思い浮かべ、わたしは気分が悪くなるほどの自己嫌悪に陥った。

何を都合のいいことを考えているのだろう、わたしは。意識していなかったとはいえ、ずっとあの人を裏切り続けていたくせに、またその時に戻りたいとか。

わたしはつい胸元に手をやった。そこに触れるものは何もなく、小さく息をつく。

琢磨くんからもらったネックレスはもう身に着けていない。わたしに着ける資格はないと思ったから。だけど、今は引き出しの奥にしまっているそれを、わたしはどうしたらいいのかわからなかった。

琢磨くん      彼とはもう二カ月以上も顔を合わせていない。

\*

\*

\*

午前の講義が終わった。

今日は久しぶりの晴天。せっかくだからと、友人のユリと構内中庭で昼食をとることにした。二人で並んでベンチに座り、他愛のない話をしながら買ってきたお弁当を食べる。そんなのどかで平和な午後だった。だが、その平和はすぐに破られた。

「春山さん！」

そう声かけて笑顔で近づいて来たのは、高校が同じだった女の子だった。クラスが違ったため名前までは憶えていないが、顔はなんとなく知っている、その程度の知り合い。たぶん、今も学部は違うはずだ。当然言葉を交わしたこともなく、そんな子が親しげに寄ってくることに戸惑いながら、わたしは顔を上げた。

「春山さん、今ちよつといい？」

彼女はわたしが返事するより前に、空いていたわたしの隣に腰を下ろした。ユリが目で「誰？」と問いかけてくる。わたしは小さく首を傾げて応えた。そんなわたしたちにはお構いなしに、その彼女は妙にテンションの高い声で話しかけてくる。

「ごめんね。突然。私、平田っていうんだけど、三年の時隣のクラスだったの憶えてる？」

「うん」

「そう、よかった。って、まあそれはどうでもいいんだけど。ちょ



つと春山さんに聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

平田さんはそう言つて、長い髪を邪魔くさそうに払い除けた。香水でも付けているのだろう、彼女が動くたびに強いフローラル系の香りが漂う。はっきり言つて好みの香りじゃない。当然顔には出さないけれど。

「聞きたいことって？」

「単刀直入に聞くけど、木村さんと別れたって本当？」

その言葉に、わたしは思わず目を丸くした。あまりにも不意打ちだ。平田さんはそんなわたしを見て、わざとらしいくらいに驚いたような声を上げた。

「やつぱり噂は本当なの？ やだ、びっくりー」

わたしはただ戸惑う。なんなんだろう、この人は。

そんな思いが顔に出てしまったのか、平田さんが慌てて口許を押さえた。その仕草すらもわざとらしく見えた。

「ごめんねー、急に。実はね、私の友達に、ずーっと前から木村くんを好きな子がいて」

平田さんは「ずーっと」に力を込めて言った。当てつけのように。

「木村くんが春山さんと付き合いだした時は、もう泣いちゃって大変だったの。それでもずっと諦めきれないみたいで。でも、別れたんだったら、また彼女にもチャンスがあるってことよね？」

どこか挑戦的な目をしてわたしにそう問いかけてくる。

彼女はわたしにどんな答えを期待しているのだろう。何か悔しさのようなものが込み上げてきて、わたしは口を開くことができなかった。

「　　ちよつと、あなた」

それまで黙って成り行きを見守っていたユリが、平田さんに向けてそう声をかけた。

「ずいぶん失礼な人だね。突然やってきて、勝手に言いたいことだけベラベラと。あなたにはデリカシーってものがないの？」

わたしは思わずユリを見つめた。普段はおっとりしている彼女が、こんなに強い口調で人に話すのは初めて聞いた。平田さんが気押されたように慌ただしく立ち上がった。

「ちょ、ちよつと見かけたから、確認させてもらっただけよ。わ、悪かったわよ。ごめんねっ」

ちつとも「ごめん」ではない口調でそう言い捨てると、平田さんは身を翻して速足で離れて行った。

「まったく……なんなのよ、あれ」

自分の事のように腹を立てているユリ。わたしは彼女の肩に軽く手を乗せた。

「ありがとっ、ユリ。助かった。でも、まさかユリがああ言ってくれるなんて……びっくりした」

「だって、聞いているだけでム力つくんだもん、ああいうの。　　力

ズちゃん、大丈夫？」

彼女の優しい気遣いが嬉しい。

「平気だよ。ありがとう」

「うん、ならよかった」

ユリは笑って、それ以上は何も言わず自分のお弁当を口に始めた。

琢磨くんとのこと、全部をユリには話していない。ただ「上手くいったない」というように話しているだけだ。だけど、彼女はそんなことについてしつこく訊いてきたりはしなかった。そんなユリにわたしは甘えている。

わたしは琢磨くんと「別れた」のだろうか。未だにわたしはそう自問し続けている。

わたしの気持ちがある人の方を向いている以上、付き合い続けていくのは不可能だということはわかっていて。だけど、なんだろう。琢磨くんとはどこか中途半端なままの気がして、「別れてしまった」と終わらせてしまうことができないでいた。

未練、だろうか。愚かなことだけど、わたしは琢磨くんに未練を持っているのかもしれない。

「あ、そうだ。話変わるけどさあ」

ユリが明るくそう切り出した。

「仁さん、教育実習頑張ってる？」

出てきた名前にわたしは思わずむせそうになる。わたしの中では琢磨くんと仁のことは同じ線の上にある事だ。気を使ってくれたのだろうけど、残念な事に全然話は変わっていない。だけど、それは

ユリの預かり知らぬことであって、この話の振り方を責めることはできなかった。

「うん。頑張ってるよ」

わたしは内心苦笑しつつも、話に乗った。仁の実習は今日でちょうど二週目に入る。

「毎日疲れて帰ってきてる。体力的なことよりも、精神的にキツイみたいだね」

「そうだよー。そういうの聞くと、なんかこっちも緊張するな。自分もいずれば、だもんねえ。仁さん、幼稚園だっけ」

「ご飯を口にしていたわたしは、それに頷きだけで応えた。ユリはどこか遠い目で空を見上げる。」

「カズちゃんちに小さな弟がいるのは知ってるけど、子どもたちと戯れる仁さんってあまり想像つかないなあ。でもそのギャップがまた素適よね」

うつとりしているユリにわたしは心の中で答えた。

ギャップなんて、ないよ。仁は子どもが好きで、時には希望と同じレベルになって本気で遊んでいることだってある。ユリはそんな姿、知らないんだ。

それは卑しく虚しい優越感。……反吐が出そう。

わたしはそつと箸をおいた。容器の中には唐揚げが一個と卵焼きが残っているが、食べる気が起きなかった。

「あれ、カズちゃん。もう食べないの？」

「うん、お腹いっぱい。ユリ、これいる？」

「もらうー！」

ユリは無邪気に喜んで、残った唐揚げを箸でつまんで、パクリと一口食べた。もぐもぐしながらニツコリ笑うユリに笑顔を返しながらも、わたしの心は暗く沈んでいった。

仁への想いに気付いたあの日から、どんどん嫌な自分ばかりが見えてくる。

このまま自分のことがとことんまで嫌いになっていきそうで、どうしようもなく気が塞いだ。

その日は、夕食を終えた頃に仁が帰ってきた。実習期間にしては遅い帰宅だ。

「疲れた」

仁は一言そう言うと、肩にかけた鞆も下ろさず、倒れ込むようにソファーに座りこんだ。食器を洗っていたわたしは、手を拭きながらそんな仁に近付いた。仁の様子がいつもと違うことに気付いたのだ。

「おかえり……仁？」

「うん。ただいま」

わたしに顔を向けて笑う仁の顔は、いつものような明るさがない。

「どうかしたの？」

「ん……」

仁は曖昧に笑ってわたしから目を逸らした。荷物を下ろしてテレビのリモコンを手に取り、適当にチャンネルを変えていく。その画面に目を向けたままで仁が言った。

「希望たちは、お風呂？」

「うん」

今おとうさんと希望は入浴中だ。仁は「ふうん」と頷くと、バラ

エティーのクイズ番組でチャンネルをとめ、わたしを見上げた。

「ちょっと座らない？」

ポンポンと自分の隣を叩く仁に、わたしは少し迷った末に頷いた。食器洗いの途中だが、このまま仁を放っておけない気がした。それぐらい、仁の様子がおかしい。

仁と並んでソファーに座るのは久し振りだ。微かに走った緊張を隠し、わたしは仁の隣に座った。

「仁、何かあったの？」

そう訊いた次の瞬間、わたしの肩に、仁が頭を乗せるようにもたれかかってきた。一瞬にして強張るわたしの体。

驚きのあまり声も出せないでいるわたしの耳に、仁の呟くような声が届いた。

「ごめん。ちょっとだけ、貸して」

体にかかる仁の重みに、胸が早鐘を打ち始める。その心臓の音が仁に聞こえてしまうような気がして、すぐにでも離れたい衝動に駆られた。けど同時に、仁がわたしの肩を貸してと願うのなら、いくらでも貸してやりたい。そう思った。

「俺、さ……」

仁が半分かすれかかったような小さな声で言葉を落とした。

「実習先の子どもに、怪我させた」

その言葉にわたしは思わず仁の方へ顔を動かした。仁のフワリとした髪が頬をくすぐる。シャンプーの匂いに混じって、かすかに汗の匂いがした。だけど今はそれを意識するところではない。

「怪我？」

「そう。俺のせいで、五歳の子が怪我した」

仁はそう言っ、もう何度目かのため息をつく。わたしは、どういことかと問い質そうとした言葉を、口にする前にぐつと飲み込んだ。仁が自分から話すのを待とう、そう思った。

テレビから賑やかな笑い声が飛び出してくる。白々しいまでのその笑いが、どこか虚しく部屋に広がった。

「……渡り棒ってあるだろ」

やがて、仁がポツリと話しだした。わたしは小さく頷く。渡り棒とは運梯のことだろう。

「あれやりたいって男の子がいてさ。すごく小柄な子で、他の同じ年の子よりも力も弱い。鉄棒に掴まっても、何秒かですぐに力が抜けて落ちてしまう、そんな子だった」

わたしは黙って耳を傾けた。仁はまるで独り言のように続ける。

「その子が、俺に渡り棒を手伝ってって言ってきた。最後まで渡ってみたいから、下で少し支えててね。俺は、その子の体を抱えて、励ましながら手伝った。でも、途中から俺の手にかかる重みが軽くなってきたのに気付いて、もしかしたら一段でも一人で出来るかもしれない、って思ってた。俺、その子から少し手を離れたんだ。そしたら」



仁の言葉が途切れる。だけど、聞かずとも十分に察することができた。仁が手を離れたその子は、恐らく運梯から落ちたのだろう。

「……一瞬のことだった。普通に下りれば、十分足で着地できる高さなんだけど、その子、急に俺が手を離れたことにびっくりしたんだろう、すごく、変な落ち方して……左腕を捻挫した」

わたしは「捻挫」という言葉に少しだけほっとした。骨折とかもつと重症の怪我を負ったのかと思っていたから。だけど、捻挫であろうと怪我をさせたことに変わりはなく、その重症度に関わらず、重大な事だというのはわかる。保育中の怪我は保育者の責任。実習中とはいえ、仁だってその場にいた「保育者」だったのだ。確かにその怪我の責任は仁にある。自分のミスで子どもに怪我を負わせてしまった仁の受けたショックを想像すると、わたしも心が痛かった。

「それで今日、帰りが遅かったんだ……」

「そう。終わってから学校に帰って教授に報告したりしてたから」  
仁がまた長いため息をついた。もうこれで何回目だろう。

「……さすがに参ったな」

それはどこか軽い調子だったが、その声音にははっきりと自嘲の響きが含まれていた。

「俺、はつきり言つて、少し甘く見てたところがある。子どもの扱いには慣れている。そんな思いあがりがあったんだよ。……ダメだな、俺。なんかもう……全部怖くなった。全部投げ出して、逃げてしまいたいな……」

それは、初めて聞く仁の弱音。

まるで怯えた子どものように弱々しい仁の声に、ギョツと胸が締め付けられるような気がした。

わたしは思わず唇を噛んだ。励ましてあげたい　なのに、気の利いた言葉が何一つ浮かんでこない自分が齒痒かった。

こんな時、仁の彼女だったらどういう言葉をかけるのだろうか？  
そんな馬鹿な思いが頭に浮かんだ。だけど、わたしは仁の彼女じゃない。そんなことを考えてもまるで無意味だ。

「……ダメじゃないよ」

気が付けば、わたしはそう口にしていた。そして自分のその声を耳にした瞬間、ふと気が楽になった。

そうだ。わたしはわたし、だ。他の人だったら、とか考える必要はない。気の利いた言葉なんて言わなくてもいいんだと思った。わたしはわたしの言葉を口にしよう。そう思うと、言葉は自然に口から滑り出していた。

「仁はダメじゃないよ。大丈夫、今は怖いと思ってても、仁ならきつと乗り越えられる。わたしはそう思うよ」

仁が微かに身じろぎをする。わたしは続けた。

「逃げたいなら逃げればいいのかもしれないけど……わたしは仁は絶対にそうしないって知ってる。だから、仁は大丈夫。わたしが保証する」

何の脈絡もない、無責任な言葉だと自分でも思う。きつと何の励

ましにも慰めにもなっていない。それでも、これはわたしの本当の思いだった。

仁が呆れたような笑い声を洩らした。

「カズの保証って、何それ。俺、ずいぶん買被られてませんかー？」

どこかおどけた口調の仁に合わせて、わたしも冗談めかして応えた。

「うん。買被ってますよー。だって仁はわたしの、お兄さんでしょ」

そして、間をおかずに言葉を継いだ。

「こんなこと　って言ったらだめかもしれないけど、これぐらいのことで音を上げられたら妹として困るもん。兄には常に強くあつて欲しい。それが妹の願望です」

これは、嘘だ。そんな願望なんてない。常に強くななくてもいい。弱音を吐いてもわたしがいつでも聞いてあげる　そう言いたかった。だけど、言えなかった。懸命に保っている気持ちのバランスが崩れそうで怖かったから。だからわたしは、自分に言い聞かせるように「兄」「妹」という言葉を使った。肩に感じる仁の温もりに、いつもと違うその距離感に勘違いしそうになる自分を制するために。

「　　そっか」

仁がクスツと笑った。

「そっだよな。こんなことで挫けてるわけにはいかないかぁ。兄として」

「そうだよ。だから、仁。わたしが応援するから……がんばって」  
ありきたりな言葉だけれど、後はもうそれしか言葉がなかった。  
その時、風呂場からのブザーがなった。その音に、急に夢から現実  
に引き戻されたような、そんな感覚がした。

「あ……希望が出てくるよ」

わたしは、まだもたれかかったままの仁に、ちょっとだけ肩を動かして離れるように促した。いくら希望にとはいえ、こんなところを見られたくはない。

「そうだな」

仁はそう答え、微かに頭を動かしたものの、離れる気配がない。  
パタパタと近づく足音が聞こえてくる。焦るわたし。

「ちょ、ちょっと、仁。希望が……」

だけど、もう間に合わない。

「ただいまー！」

いつものように元気に居間のドアを開け、バスタオルを被った希望が部屋に駆けこんできた。

希望はわたしたちの前に回り込み、きょとんとした顔で瞬きをした後、満面の笑顔を浮かべて声を上げた。

「あー！ じんとかじゅ、らぶらぶだあー！」

その言葉に、わたしは思わず目を丸くした。まさか希望の口から「らぶらぶ」だとか出てくるとは思わなかった。そんな言葉使う人なんて周りにいないのに。

仁が笑いながら頭を起こし、ようやくわたしから離れた。

「のん。そんな言葉、どこで覚えたんだよ」

苦笑しながら、希望の頭をバスタオルでゴシゴシと拭く。希望がにっこりと笑った。

「ほいくえんでー、ゆうちゃんがゆってたー」

「へえ。でも、のん。『らぶらぶ』って言葉、残念ながらにーちゃんねーちゃんに向って使う言葉じゃないんだなあ」

「えー、そうなのー？」

「そう。俺とカズは、ラブラブじゃなくて、ただの『仲良し』。わかった？」

「えー？ なかよしー？」

そんな二人の会話を聞きながら、わたしは形だけの微笑みを浮かべていた。

仁に念を押された気がした。わたしが妹であるということ。

だけど、それで今さら傷付いたわけじゃない。最初からわかってることだ。仁の中で、わたしは妹でしかあり得ない。わかっている、やっぱりその現実が重かった。その一方で、これでいいのだと甘受している自分もいる。それは諦めとも違う、どこか安堵に近い気持ちだった。

これでいい。この関係がいい。

「カズ」

仁がわたしを振り向いて、穏やかに笑った。  
「ありがとうな。カズのおかげで元気出た」

そう。この言葉が貰えるだけで十分だから。

妹として肩を貸し、仁を家族として支える　それができるだけで幸せだ。この先もずっと、その幸せだけがあればいい。そう思いながら、わたしは笑って頷いた。

ザアザアと音を立てて降り続く雨を前に、わたしは深いため息をついた。

朝の天気予報で、ちゃんと午後から雨が降ると言っていた。それを確認していたにも関わらず、この様だ。家を出た時には晴れていたため、すっかり傘のことなど忘れてしまっていた。

間拔けな自分に呆れてしまう。

傘を持たないわたしは、図書館を出たところで足止めを食っていた。この場に茫然と立ち尽くしてもう二、三分は経っただろうか。

わたしはもう一度ため息をついて、階段の端に腰を下ろし膝の上に頬杖をついた。長く張り出した屋根のおかげで、その階段はまだ雨には濡れていない。とはいえ、女性が直に座っているのはあまり褒められたものじゃない。しかも、入口の前だ。でも、雨のせいか今図書館に出入りする人もほとんどいないし、半ば投げやりにまあいいかと思った。

図書館の中に一度戻ろうかとも思ったが、本格的に降っているこの雨が、時間をおいたところで止むとも思えない。かといって、このままここにこうしている訳にもいかないのもわかつている。図書館の人に言えば、傘ぐらい貸してもらえるかもしれないが、一度下した腰をなかなか上げる気になれなかった。

今日の大学の図書館は、試験前にも関わらず比較的空いていた。土曜日で講義が休みの日だからだろう。わたしは週明け提出期限のレポートの調べ物をするため、昼前からここに来ていた。とりあえずの成果を得て席を立ったのが午後三時前。ついさっきだ。でもま

さか、こんなに雨が降っているとは思いませんでした。

「ついてないなあ……」

そう独りごちた時、背後のドアが開く音がした。中からエアコンの冷気が流れてくる。

誰か出てくる。

わたしはさり気なく顔を壁側に向けた。ここで慌てて立ち上がるのもなんだかバツが悪いし、だからと言って顔を見られるのも嫌だ。

話声はしないから、出てきた人はたぶん一人だ。そのままその人の足音が通りすぎるのを耳を澄まして待つ。

わたしのすぐ近くを通る気配がした。

こんなに広い階段、わざわざこんなに近くを通る必要のないにそう思っ眉を顰めたわたしの耳に、思いもしなかった音が入ってきた。

トンと止まる足音と同時に、バサバサ、ドサツという衣擦れの音明らかに、その人も階段に座ったのだとわかる音だった。しかも、わたしのすぐ隣に。

無視することもできず、わたしはゆっくり振り向いて。

「久しぶり」

その人の優しい声と笑顔に、絶句した。

「雨、けっこうひどいね」

降り続く雨を見て彼が言う。わたしはごくりと唾を飲み込み、ようやく口を開いた。

「琢磨くん……?」



つい尋ねる調子になったのは、まだうまく状況が呑み込めないからだ。それでも隣にいるのは間違いない。彼で、何度瞬きして見てもそれは疑いようのないことだった。

琢磨くんはわたしに目を戻して微笑むと、軽く首を傾げた。

「傘、持っていないの？」

「あ……うん」

まだ半分呆けたような感じで頷いて、わたしは琢磨くんの手元を見た。彼はビニール傘を持っている。琢磨くんがクスツと笑った。

「雨って予報出てたのに。意外にドジだね、和音って」

その言い方があまりに以前と変わりなくて、ギュツと胸が締め付けられた。

ずっと聞きたかったような気がする、この声を。「和音」と呼んでくれるのを待っていたような気がする。

泣き出したくなるほどの懐かしさが込み上げてくる。でもここで泣く資格なんてわたしにはあるはずもなく、ただぐつと両手を握りしめた。

琢磨くんは降り続く雨を見つめる。その表情は穏やかだった。

「二か月ぶりだっけ」

琢磨くんが雨に目を向けたままでポツリと言った。わたしも前方を向き、小さく「うん」と答えた。

それきり会話は続かなかった。雨の音だけが途切れることなくわたしたちを取り囲む。その水音は心地良くもあり、同時に耳触りのような気もした。

何を話したらいいのだろう。

琢磨くんと言わなければいけないことはたくさんある。たくさん過ぎて、どれから話せばいいのかわからない。

「……ずっと和音を見てた」

やがて、琢磨くんが静かな声で話し始めた。唐突なその言葉に、わたしは驚き琢磨くんを目を向けた。

「いつも和音を見てたよ、オレ。自分でも呆れるくらい」

琢磨くんがわたしを見て、微笑んだ。

「今日も和音をすぐに見つけた。二階の左手奥の机の一番端」

目を丸くしたわたしに、琢磨くんが苦笑した。

「あー。勘違いしないで。別に付きまとっている訳じゃないから。本当に偶然。オレもびっくりしたんだ。一瞬帰ろうかと思ったけど、なんか逃げるようで嫌だったから」

「じゃあ……」

「うん。オレも二階の席にいたんだよ。離れたところだったけどね。知らなかったでしょ？」

そう言って微笑む琢磨くん、わたしは複雑な気持ちになった。いつか言われたことを思い出したから。

『和音は、オレには気付かないけど、仁さんにはすぐに気付く』

わたしはまた、琢磨くんに気付くことができなかったのだ。

「今もね、もうとつくに帰ったと思ったのに、こんなところに座りこんでるからびっくりした。正直、中に戻ろうかそのまま通りすぎようか迷った。だけど……ダメだね。オレはまだ和音を無視できない」

わたしは、寂しそうに笑う琢磨くんから目を逸らした。正面から受け止めきれないのは、後ろめたさがあるからだ。

「会わなかった間、ずっと考えてた。仁さんのこと、オレさえ黙っていれば和音はまだオレの隣にいたんじゃないかとか。もう一回あの時に戻れないかな、とか……」

琢磨くんはどこか自嘲的な吐息を洩らした。

「……ごめん。未練がましくて」

小さなその弦きに、わたしは大きく首を振った。謝らないで欲しかった。琢磨くんは何一つ悪くない。

「謝るのはわたしの方、だよ……」

わたしは膝を抱えて顔を伏せた。

一体どういう顔をすればいいのだろう。

笑えるわけもなく、かといって、泣くのはずるい。どんな顔を向ければいいのかわからない。そんなわたしに、琢磨くんは静かに言った。

「和音。もし、自分を責めてるんだったら止めて。オレまで苦しく

なる」

初めて、琢磨くんの声に苦いものが混ざった。わたしは思わず顔を上げた。琢磨くんが首を傾げるようにしてわたしの視線を捕らえる。その顔から笑顔は消えていた。

「オレも、もう謝るのはやめる。だから、和音も自分を責めないでくれ。たぶん、オレたちはどちらが悪いわけでもないんだ。こうなるのが自然だったんだよ。オレが和音を好きになる前から、和音の心の中には仁さんがいて、和音はそれに気付くのに時間がかかった。ただそれだけのことだろ」

そう言って、琢磨くんが再び微笑んだ。

「でも、和音から、ちゃんと聞きたいんだ」  
「ちゃんと？」

聞き返したわたしに、琢磨くんは少しだけ悪戯っぽい笑みを向けた。

「嘘偽りなく正直に言っただけ、いいかな」

その大袈裟な言い方に、わたしはつい身構えてしまう。背筋を伸ばしたわたしを見て、琢磨くんの笑みが少しだけ深くなった。

そして、琢磨くんは一言一言を確かめるように、ゆっくりと言った。

「和音は、仁さんのことが、好きだよな？」

琢磨くんはまっすぐにわたしを見つめる。わたしは思わず視線を

泳がせてしまったが、琢磨くんはその眼差しからは逃げることで  
きず、心を決めた。

「うん」

頷いたわたしに、でも琢磨くんはすぐに首を振り、

「ちゃんと、言葉で聞きたい」

そう釘をさす。わたしは目を閉じて、一つ深呼吸をした。それを  
言葉にして口にしようとするのは初めてで、かなりの勇気と覚悟が  
必要だった。

なかなか言葉の出ないわたしを、琢磨くんはじっと待っている。

そうだ。琢磨くんには聞く権利がある。わたしはちゃんと  
言わなければいけないんだ。

わたしは大きく息を吸い、口を開いた。

「わたしは、仁が好き……です」

直後、眩暈を起こしそうなほどの脱力感に襲われた。たったこれ  
だけの言葉を言うだけにどれだけ気を張っていたのか思い知る。

琢磨くんが微笑んだ。それはとても優しい笑顔だった。

「うん。答えてくれてありがとう」

そう言って、少しの間をおいた後、再び琢磨くんが口を開いた。

「じゃあ、もう一つ。和音は少しでもオレの事」

琢磨くんは唐突に言葉を飲み込むと、わたしと目を合わせて、言

葉の代わりに小さな笑い声をもらした。

「ごめん。やっぱやめとく。あまりに女々しいな、オレ」

自嘲するようにそう言いながら、ゆっくりと立ち上がる。わたしもそれに合わせた。

雨はまだ降っている。雨脚は強くもなっていないが弱まってもない。でも、琢磨くんは傘を持っているから大丈夫だろう。

そう思っていると、不意にわたしの前にそれが突き出された。戸惑うわたしの手に、彼は持っていたビニール傘を無理矢理握らせる。

「た、琢磨くん？」

「使つて。返さなくていいから」

そう言いながら、階段を一段降りる。わたしは慌てて傘を突き返した。

「いいよ！ だって、琢磨くんはどうするの？」

「オレは男だから平気。和音はそういうわけにはいかないでしょ。濡れたら透けるよ、下着」

冗談めかして言いながら、また階段を下りる。今度は止まらず、二段三段と続けて下りた。離れていく距離に、わたしは戸惑う。追いかけて傘を返す、ただそれだけのことができない。琢磨くんの背中がそれを拒否しているように見えた。

十段ほどの階段を全部下り切った琢磨くんが、わたしを振り向いた。そこはもう屋根がない。琢磨くんの体は雨にさらされた。

濡れていく身体を気にするそぶりも見せず、琢磨くんは微笑んだ。

「のんくん……ごめんって伝えて。今度遊ぼうって約束してたのに、もう果たせないから」

言葉に詰まるわたしに、琢磨くんは小さく片手を上げた。

「じゃあね、和音。 さよなら」

そう言うと、琢磨くんは向きを変えて歩き始めた。走るでもなく急ぎ足でもない、雨に濡れていることなどお構いなしのようないつもの歩調だった。

わたしは思わず「待って」と言おうとして言葉を飲み込む。呼び止めてどうするというのがだろう。ここは呼び止めるのではなく「さよなら」と返すべきなのだ。それでも。

「琢磨くん」

わたしの呼び掛けに、琢磨くんが足を止めて振り向いた。そこにさっきまでの笑顔はなかった。それでも、わたしは構わず声を上げた。

「ありがとう」

この言葉は逆に残酷なのかもしれないと思う。それでも、言わずにはいらなかった。わたしには言葉以外にもう返すものがないのだ。

琢磨くんは俯くように目を閉じ、やがてゆっくりと目を開けた。その顔に、あの明るい笑顔が戻っていた。

「和音、一つだけ教えてやる。オレ、これでもけっこうモテるんだ。だから、心配はいらない。和音も……がんばれ」

絶句したわたしに、琢磨くんは目を細めて笑う。

「じゃあ。さよなら、和音」

二度目の「さよなら」は、まるで答えを待つかのように、琢磨くんはわたしの顔を見つめたままだった。わたしは小さく頷いて、口を開いた。

「うん……さよなら」

琢磨くんはその言葉を飲み込むかのようにゆっくり瞬きをする。そのままくると背を向け、今度は一気に駆け出した。すぐにその姿は遠ざかっていく。わたしはただそれを見送ることしかできなかった。

「知ってるよ」

雨の中に溶け込んで行くように小さくなっていく背中に向って、わたしはそう呟いた。

琢磨くんがモテることぐらい、よく知ってる。たくさんの女の子から熱い視線を向けられていたこと、知ってる。バレンタインデーにはたくさんの女の子から告白されていた。それも知ってる。それでも、琢磨くんはずっとわたしのそばにいてくれたのだ。

「……っ」

わたしは堪え切れず、その場に再び座り込んだ。膝を抱えて顔をうずめる。

琢磨くんが最後にわたしに聞こうとして止めたこと。本当はすぐ



にわかった。

『和音は少しでもオレの事』

「好きだったよ」

わたしは声に出して答えた。もう聞いてはもらえないけれど。

「少しじゃなくて、いっぱい……とっても好きでした」

くぐもって聞こえる自分の声に、心の中でその通りだと繰り返す。わたしは確かに琢磨くんが好きだった。「恋していた」そう言ってもいい。

それでも、それ以上に、それ以前にわたしの心の中にはもうあの人の存在があったのだ。

それに気付くことがなければ、今も、いつまでも琢磨くんの隣にいられたのかもしれない。幸せな「恋」をしていられたのかもしれない。

だけど、それはあり得なかった仮定の話。

雨音が、終わりを告げる拍手のようにも聞こえる。

ずっと忘れずにいよう。そう思いながら、わたしは降り続く雨の音を聞き続けた。

夕食の時間。

「やったー！ かれーだあっ！」

希望が食卓に並んだそれを見て、歓声を上げる。

「おとうさん特製カレーだぞー。いっぱい食べろよー」

「うんっ！ いっただっきまーしゅ！」

希望は両手を合わせてそう言うと、嬉しそうにスプーンでカレーを掬い、大きく開けた口に運んだが。

「あちゅっ！」

口にした途端、熱さに慌てふためき、体をぶるつと震わす。予想通りの反応に、思わず笑ってしまった。

「のん。そんなに慌てなくてもカレーは逃げないよー」

おとうさんも可笑しそうに笑う。

「ちゃんとゆっくり食べろよ」

「はい」

今度は、希望も慎重にスプーンを口に運ぶ。ハフハフしながら食べ始めたのを見届けて、わたしも改めて手を合わせた。

「いただきます」

「はい、召し上げ。和音」

おとうさんはわたしと目を合わせると、一瞬何かを言いたげに口を開いたが、それをさりげなく笑みの形に変えた。

「和音もいっぱい食べるよ。おかわりあるからな」  
「うん」

わたしは笑って頷き、スプーンを手取る。おとうさんの作るカレーは、希望に合わせた甘口カレーだけれど、甘い中にもちゃんとスパイスが効いていて、物足りないと思うことはない。「特製カレー」と自賛するだけのことはある。

「うん、おいしい！」  
「だろ？」

ふふんと得意げに鼻を鳴らし、おとうさんは自分も食べ始めた。

「おいひいねえ！」

希望がハフハフさせながら言うと、おとうさんもハフハフさせながら嬉しそうに頷く。そんな和やかな雰囲気の間、我が家の食卓。

だけど、この場に仁はいない。昨日で実習が終わり、今日は仲間内で、お疲れ様の飲み会なのだそうだ。

わたしは、今仁がいらないことにホッとしていた。  
昼間の琢磨くんと別れから、わたしはまだうまく気持ちを切り替えられないでいたからだ。こんな時に仁の顔を見て、いつものように笑える気がしない。

わたしはサラダのトマトをフォークに差しながら、向かい側に座るおとうさんの顔をちらりと盗み見た。

なんとなくではあるけれど、さっきおとうさんが何を言おうとしたのか、わたしにはわかっていた。

『どうしたんだ？』とか『何かあったのか？』とか、そういうことなのだろう。だけど、わたしはそれに気付かないふりをする。おとうさんはおとうさんで、気付かないふりをするわたしに気付かないふりをしてる。そんな感じだ。

帰宅した時、わたしの顔を見て、おとうさんが目を丸くしたのがわかった。たぶん、わたしの目が腫れていたからだ。だけど、その時もおとうさんは何も言わなかった。希望ともろくに関わらず、今食事に呼ばれて下りてくるまで自室に籠りっぱなしだったわたしに、おとうさんは変わらず話しかけてくる。もの言いたげな表情を見せたのはさっきの一瞬だけだった。

心配かけているのかもしれない。だけど、別におとうさんに報告するようなことではないし、結局いつもと同じように過ごすだけだ。琢磨くんのことはもう終わってしまったこととして、それをいつまでも家の中でまで引きずってはいられないと思う。

そうだ。もういい加減に切り替えないと。

とにかく今は目の前の食事を楽しもう。そう思い直してトマトを口に入れた。のだけど。

「あのね、たくまくんがねー」

思い出したように希望がそう話し出して、吹き出しそうになるほど驚いた。

「たくまくんがねー、かれーすきってゆってたよー。おとーさんのかれー、おいしいっていうかなあ」

「へえ。琢磨くんはカレーが好きなのか」

固まってしまったわたしの代わりに、おとうさんが優しく繰り返す。わたしは黙ってカレーを口にした。ここはあえて聞き流しておこう……だが、それは甘かったようだ。

「ねえ、かじゅー。たくまくん、こんどくるー？」

はつきり名指しで訊かれてしまったのは、知らないふりもできない。わたしは口の中ものを飲み込むと、仕方なく笑って返した。

「えーとね、琢磨くんは……んー、しばらく来れない、かな」

しばらくどころではなく、琢磨くんはもうここに来ることはない。でも、言えなかった。希望は不満そうに口を尖らせた。

「えー？ でも、のんとあそぶってゆってたよー」

「希望」

おとうさんがそつと口を挟んできた。

「琢磨くんもいろいろ忙しいんだよ。それより、ほれ。お肉、おっきいのやるぞ」

「わっ、おっきー！ ありがとう！」

希望の注意が一瞬にして皿に移されたお肉に向いた。わたしはとりあえずホッと胸をなでおろした。と同時に、おとうさんのさり気

ないフロアーに、なんだか全てを見通されているような気がして、居心地の悪さも感じる。それでもやっぱりこの気遣いは有難かった。

『のんくんにごめんって伝えて』と言われたけれど……ごめんなさい、琢磨くん。今のわたしにはまだ言えません。

これまで、琢磨くんは何度かうちに来たことがあり、その度に希望とも一緒に遊んでくれた。希望はそんな優しい琢磨くんが大好きだったのだ。

願わくば、希望が「琢磨くん」という友達のことを、このまま静かに忘れていってくださいように　わたしはそう思わずにはいられなかった。

落ち込んでいても悩んでいても、目の前にはやらなければならないことが山ほどある。レポートの提出期限は迫り、もうじきテストも始まる。

だけど、そうやって忙しい方がいい。何かに追われている方が、余計な事を考えずに済むから。

自室に戻ると、わたしは書きかけのレポートの仕上げにとりかえることにした。

「よし、もう少しだ、がんばろ！」

自分にそう気合を入れ、机に資料を広げた。全ての雑念を追い払うかのように、ただひらすらに文字を追う。

最後の一文を打ち終え時計を見たわたしは、思わず「おお」と声を上げた。もう午前一時を回っている。かなり集中していたようだ。

わたしはテキストを保存し、欠伸しながらパソコンをシャットダウンした。後は見直してプリントアウトするだけだ。それはもう明日 いや、もう今日だ の昼間でもいいだろう。

「あ……」

引き出しの中に出したメモをしまおうとして、わたしはふと思い出し、奥からそれを取り出した。手のひらに乗るほどの小さな箱。アクセサリーボックス。この中には、金色のハートのネックレスがしまわれている。

わたしはその箱をそつと両手で包み込んだ。目を閉じ、心の中で  
呟く。

この箱はもう開けない。

そして、机の上の見えるところに、そつとそれを置いた。

もう少しだけ、持っていてもいいだろうか。手元に置いておくこ  
とは許されるだろうか。手放す決心が付くまで、もう少し時間が欲  
しかった。

「未練がましいのはわたしの方だ……」

自嘲しながらわたしは部屋を出た。喉が渴いていて、何か飲んで  
から眠ろうと思ったのだ。

この時間、おとうさんももう寝てしまっていたようで、一階は真  
っ暗だった。エアコンも入っていないため、ムツとした生温い暑さ  
が籠っている。しーんと静まりかえる室内に、外の雨の音がやけに  
大きく響く。昼過ぎから降っている雨は、まだ止んではいなかった。

わたしはキッチンの電気をつけ、冷蔵庫から麦茶を取り出しコッ  
プに注いだ。扇風機をつけ、その正面のイスに座って麦茶を飲む。  
冷たさがスーッと沁み渡り、ほーっと息をついた。

この一杯を飲んだらもう寝よう。そう思った時、玄関の鍵が開く  
音がした。その音にドキツとすると同時に、しまったという思いが  
頭をよぎった。

仁、まだ帰ってきてなかったんだ……！

顔を合わせたくないという思いはまだ変わらない。だけど、ここ  
で慌てて部屋に戻ったとしても、もう無駄だ。階段は玄関の前なの



だ。

諦めるしかない コップをぐっと両手で握った時、「ただいま」と小さく声をかけつつ仁が中に入ってきた。「おかえり」と答えたわたしの顔を見て、仁は意外そうに目を丸くした

「カズか。まだ起きてたの？」

そう一声かけ、再び部屋を出ていく。洗面所にも行っただろう。ややあつて「あちー」と言いながら戻ってきた仁は、わたしの向かいのイスを引き出し、自分の方に扇風機の首を向けた。

「で、カズはこんな時間に何してんの？」

「お茶飲んでただけ。レポート書いてたの」

わたしは答えながらさりげなく立ち上がった。「びしょ濡れで気持ちわりー」とズボンのすそを巻き上げる仁に、流しでコップを洗いながら声をかける。

「仁も飲む？」

「あー、もらっ」

わたしは新しいコップを出し、麦茶を注ぐ。それを渡すと、仁は「サンキュ」と受け取った。そのいつもと変わらないはつきりとした言動に、わたしは首を傾げた。

「あまり酔ってないみたいね。飲んでないの？」

仁は一気に麦茶を飲み干し、大きなため息をついた。

「飲んだけどね、酔うほどには飲めなかったかなあ。なんか悪酔いしそうだし」

「そうなの？」

「うん。みんな実習の不満やら疲れやらのストレスで、愚痴ばっかだったから、あまり気分乗らなかったし。二次会まで行つて終電で帰つて来た」

わたしは「ふうん」と頷いて、空になった仁のコップに麦茶を注ぎ、ボトルを冷蔵庫にしまった。長話をする気はなかった。

「じゃ、おやすみ」

「え？ もう寝るのか？」

その場を離れようとしたわたしを、頬杖をついた仁が不満そうに見上げてきた。

「少しぐらい話し相手になれよ」

その仁の視線は思いのほか強い。断ることもできず、わたしはさも迷惑と言わんばかりにため息をついて座った。

「少しだけだよ。眠いから」

「わかつてるよ」

仁は苦笑しながら、深く背もたれに寄りかかった。

「ああ、疲れた。今日は家でゆっくりしときゃよかったな」

仁の言葉にわたしは首をすくめた。わたしは今日仁がいてくれてなくてよかったと思っていたのだけ。

「ま、何をともあれ、実習も終わったし。気イ楽になったなあ」

仁のそのホツとしたような笑顔に、わたしもつられて微笑んだ。

「ホント、お疲れ様でした」

「うん。後半はカズのおかげで乗り越えられたようなものだけだな」

その言葉に目を丸くすると、仁は小さく笑った。

「カズが俺は大丈夫だって言ってくれたろ？ あれ、かなり力になった。不思議だな……ありがとう」

わたしは慌てて首を振った。こんなふうに改めて言われると、どう答えたらいいのかわからない。とりあえず笑ってごまかすわたしを、仁は穏やかな笑顔を浮かべてまっすぐに見ている。その視線に、わたしは自分の顔が赤くなってくるのを感じ、慌てて目を逸らした。

こんな態度、絶対に変に思われる。でも、まともに仁を見ることができなかった。なんでだろう。こうして向かい合うのは慣れていることなのに、いつものように平静を装えない。深夜だからだろうか。ドキドキと早鐘を打ち出した心臓に、自分でも驚いた。

「あ……もう一杯麦茶飲もう」

間がもたず、わたしは立ち上がった。仁に背を向けて、どうにか落ち着こうと密かに息を整えながら、冷蔵庫を開ける。

「カズ、一つ聞いていいか？」

背中に問いかけられた声に、わたしは振り向かず「何？」と答えた。ゆつくりと麦茶を取り出し、振り向かないままグラスに注ぐ。

「木村くと別れたのか？」

「え……」

グラスから麦茶が溢れる。わたしは手に流れたその冷たい感触にハッと我に返った。慌てて麦茶を置いて、息をつく。なんで急にそんな質問をしてくるんだろう……。

仁はわたしの答えを待っているのか、何も言わない。その沈黙が冗談で聞いた質問じゃないのだということを伝えてくる。わたしが答えない限り、この沈黙は続くのだろう。

「……うん」

わたしは小さく答えた。背後から仁がため息をついたのが聞こえた。

「なんで別れたんだよ」

そのどこか責めるような声に、わたしは唇を噛んだ。

『仁が好きだからだよ』　もしそう答えたら仁はどうするのだろう。笑い飛ばされるかな、気持ち悪いと怒るのかな　そんな自棄気味の想像をしながら、わたしは笑顔を作り、振り向いた。

「仁には関係ないじゃない」

「大あり」

仁がポツリと答える。わたしは思わず目を見開いた。仁はわたしから目を逸らし、小さな声で話し始める。

「カズが木村くんだろうと誰であろうと、誰かの隣で幸せなんだっ  
たら、それで良かった。俺はそれ以上を望まないし、普通に兄貴と  
して歓迎もできる。ずっとそれでやっていけると思ってた。なのに  
……」

仁はわたしを見て、どこか諦めたような、力の抜けた笑みを向けた。

「だんだんそれがキツくなる。こんな時に別れたとか　まったく、  
どうすりゃいいんだよ」

深いため息をつき頭を抱える仁にわたしはただ戸惑う。仁が何を  
言いたいのかがわからない。

おもむろに仁が立ち上がり、わたしの方へと歩み寄ってきた。わ  
たしは思わず後退り、後ろのシンクに寄りかかる形になってしまっ  
た。それ以上は動けず、わたしは近づく仁を見返すしかできない。  
仁は、わたしに手が届きそうな距離で立ち止った。

「カズ　ごめん。俺、もうやめてもいいかな」

仁の顔から笑顔が消えた。真剣な目でわたしを真っ直ぐに見る仁  
から、わたしも目が離せなくなった。

「やめるって……何、を？」

「……兄妹、を」

兄妹を。

わたしは息をのんだ。その意味はどういうことか　うまく考え  
ることができない。それでも、何かが心の琴線に触れた。すごい速  
さで脈打つ鼓動にわたしは思わず胸を押さえた。

仁がわたしの目を捉えたまま、言った。

「俺、カズが好きなんだ」

それは、静かな静かな声だった。

「おまえが……好きだ」

仁はもう一度そう言って、わたしの頬にそつと手を伸ばした。そのしっとりとした指の感触は、わたしを完全に動けなくしてしまう。仁の顔がゆつくりと近づいてくる。わたしはただ茫然とそれを見つめていた。

突然の仁の告白に、そして仁の行動に、どうしたらいいのかまるでわからなかった。何も知らない子どものように、目を見開き、ただ立ち尽くす。

「」

仁の鼻先がわたしに触れる、その瞬間。

仁は動きを止め、そのまま顔を俯かせた。わたしの額に自分の額を当て、ゆつくりと長い息を吐く。

「ごめん、俺……やっぱ酔ってるわ」

かすれた声でそう呟くと、唐突に体を離れた。背を向けもう一度「ごめん」と呟く仁に、わたしは何も言えなかった。声が出せない。混乱して何も考えられなかった。

「ほんとにごめん。でも、言った言葉に嘘はないから。酔ってるからってわけじゃない……だけど」

仁は微かに顔をこちらに向け、自嘲するように小さく笑った。

「やっぱり言うべきじゃなかったな」

そして、独り言のように「シャワー浴びてくる」と呟き、大股で部屋を出て行った。

仁がいなくなったその場所をしばらく見つめていたわたしは、髪を乱す扇風機の風に我に返った。

「う、そ……」

ようやく、頭が動き出した。全てのことを理解し始めたわたしは、全身の力が急激に抜けて、ペタンとその場に座り込んでしまった。今までこらえていたかのように、汗が一気に流れ出す。心臓がドクドクとあり得ない速さで脈打っていた。

「嘘……」

仁がわたしのことを、好きだと言った？ 確かに そう言った。触れそうなほどにまで近付いた仁の口からは、はつきりとお酒の臭いがした。それでも言ったことに嘘はないと言った その言葉にも嘘はないと思う。

だけど、信じられない。どう受け止めていいのかわからない。

嬉しさは少しも湧きあがってこなかった。ただひたすら苦いものが心を渦巻いている。

言うべきじゃなかった そう言った仁の、深い後悔の滲んだ声が耳に残っていた。

だったらどうして言ったりしたのと、わたしは心の中で仁を責める。後悔するのなら言うて欲しくなかった。わたしだって聞きたく

なかった。

言うだけ言って逃げるんだったら、最初から言わなければ良かったのだ。

なのに、どうして仁は。

「ずるい……」

声に出して呟き、膝を抱える。

わたしは一体どうしたらいいのだろう。

激しく窓を叩く雨の音に、わたしは固く目を閉じ、耳をふさいだ。

（第九話 完）



## 6（後書き）

第9話終了です。ありがとうございました！  
第十話に続きます。

ご感想など頂けると嬉しいです！

『ちゃんと兄貴でいてあげられなくてごめん』

わたしに「好き」だと告げたその翌日、仁はそう言って、わたしに背を向けた。

その時から、仁の目がわたしを見ることはない。

わたしもまた、仁を見ることができずにいた。

仁の想いに応える勇気も、自分の想いを伝える勇気もなかった。そのくせに、仁の想いを迷惑だと突き放すこともできない。

弱虫で臆病で　ずるいわたし。

そして、答えを求めず、ただ離れていった仁もまた、わたしに負けないくらい、臆病でずるい人だ。

このままでは駄目だとわかっていのに、身動きが取れない。どうすればいいのかわからなかった。

どこに向えばいいのか、その道すら見えない。

わたしは　わたしたちは、完全に「迷子」になってしまっていた。

そんな状態のまま、もう半月以上が経とうとしている。

\*

\*

\*

「かじゅー！　おたかなたん、いっぱいだよ！」

膝の上まで水に浸かっている希望が、その川面を覗き込みながら声を上げた。

「はやくきてー！」

水際で様子を見ているだけだったわたしは、希望にそう呼ばれてそつと水の中に足を踏み入れた。そのキンとした冷たさに、厳しい日光にさらされた全身の熱が一瞬にして冷まされる。最高に気持ちがいい。

「ちよつと待つてねー」

希望には膝の上まで来る水面も、わたしにはふくらはぎのところぐらいまでしかない。それでも、底にある様々な大きさの石は滑りやすくなっていて、ちよつとした距離を歩くのにも慎重になつてしまふ。尻もちなんかは付きたくない。希望の傍らに立っているおとうさんが「気をつけろよー」と声をかけてくれる。

無事に希望たちのいるところに着いたわたしは、希望の目線に合わせて前かがみになって、同じように川面を覗いた。

「お魚、どこ？」

「ここ！ たーつくさん！ ほら！」

希望が指差したところは、ちょうど陽の光の反射で水中が見にくかった。少しだけ角度を変えて覗いてみる。

「あ！ ホントだ」

そこには、希望の言う通り、ほんの数センチの小さな魚が群れで

泳いでいるのが見えた。何かの稚魚だろう。

「かわいいねー」

「うん！ のん、つかまえるっ！」

魚とりの網とバケツを持って、希望が魚の群れに狙いをつける。だけど、希望が網を水中に入れた途端、その群れはあっという間に散ってしまった。

「あー。にげたった……」

希望ががつくりと肩を落とす。おとうさんが声を立てて笑った。

「残念でしたー。網、もつとそーっと入れないと駄目だよ。そんなんじゃお魚もびっくりして逃げるさ」

その言葉に、希望が不満そうに頬を膨らます。わたしもそんな希望と一緒にたっておとうさんをじろりと見つめた。

「じゃあ、のん。おとうさんにお手本見せてもらおうよ？」

「へ？」

おとうさんが不意を突かれたように目を丸くする。希望は何度か瞬きをした後、につこりと笑って、手にしていた網とバケツをおとうさんに渡した。

「ハイ！ おてほんねー」

「……よし！ よーっく見とくんだぞ」

おとうさんがその気になったように網を手にした。前かがみにな

つて水の中を覗く。それと一緒に頑張って希望もじつと魚を探し始めた。

わたしは微笑ましいその二人を横目に、そっと空を見上げる。射抜くような日差し of 眩しさに思わず手を目の上にかざした。

ジリジリと焦げ付くように熱い陽の光。普段はうんざりしてしまふその猛烈な日差しも、水辺ではその熱さが心地良かった。

八月に入り、大学も夏季休暇に入った。中学校勤めのおとうさんも、出勤は毎日ではなく、時間にゆとりができてのんびりと過ごしている。今日も、こうして希望とわたしを森の中の清流と名高いこの川まで遊びに連れて来てくれた。

豊かな緑に囲まれた自然の空気に、体が喜んでるのがわかる。大きく息を吸い込むとつい頬が緩んだ。きれいな空気ってこんなに美味しい。

「かじゅ、かじゅっ!!」

興奮したような希望の声に、わたしは二人に目を戻した。希望が両手に持ったバケツをわたしに向けた。声と同様、その顔も興奮に満ちていた。

「みてー! つかまえたっ!」

「え、ほんと?」

「ほらっ!」

バケツの中には、小指の先ほどの小さな魚が四、五匹泳いでいた。

「どうだ。お手本、見せたぞー」

おとうさんが誇らしげに胸を逸らす。その子どもっぱい仕草に、わたしは思わず苦笑した。

「ハイハイ、偉い偉い」

「んん？　なんか生意気？」

おとうさんがわざと眉間にしわを寄せて、手についた水をピツとわたしに飛ばしてきた。顔にかかったささやかなその水しぶきは、冷たくて気持ち良かった。でも、わたしもわざとふくれっ面を作つて、水面に手をつけた。

「生意気でごめん　ねっ！」

言いながら、思いつきおとうさんめがけて水をかけた。容赦はしなかった。見事に顔に水がかかって、おとうさんの前髪から水滴が滴り落ちる。一瞬茫然としたおとうさんの顔に、悪戯っ子のような笑みが浮かんだ。

あ、ヤバイ　　と思つた時には遅かった。

「やったな！」

おとうさんがバシヤバシヤと数回続けて水をかけてくる。手加減は全く無しだ。服と髪がびっしょり濡れた。

「うわ、ひつどー！」

もう笑つしかない。こうなったらやり返すのみだ。服のままだけど、今さら濡れるのを渋ってるのも馬鹿らしかった。着替えだつて持ってきてるのだし。

こうして、にわかが始まったおとうさんとわたしの水掛け合い合戦に、見ていた希望もうずうずしてきたらしい。

「のんもやるー！」

手にしたバケツを置いて、水かけに参加してきた。おとうさんが石を連ねて流れをせき止めてあったおかげで、バケツが流れていく心配はない。プカプカと浮いて漂った。

「ほれっ！」

「きゃーっ、つべたーい！」

「のん、おとうさんに、えいってやつちゃえ！」

わたしたちの笑い声が、高い空に響き渡った。

思いつきり遊んだ後、青空の下で食べるお弁当は、特別な味がした。

おかかと昆布を入れただけのおにぎりも、極上のご馳走だ。あつという間に弁当を平らげてしまった。もう少し作ればよかった。希望、おにぎり三個も食べたし。いつもならおかずばかり食べるのに。

ご飯を食べ終えた希望は、敷物から少し離れたところで、石を積み上げて遊び始めていた。その様子を視界に入れるように足を伸ばして座り、わたしは大きく深呼吸をした。

「気持ちいいなー」

「うん。来て良かっただろ？」

おとうさんも同じように希望の方に体を向けて座ると、柔らかに笑った。

「日頃の疲れも全部どこかへ飛んで行く。そんな気がしないか？」  
「うん、する」

本当にその通りだ。こんなにリラックスしたのは久し振りのような気がする。

だけど、次におとうさんが口にした名前に、わたしの体は一瞬で強張ってしまった。

「仁も来れば良かったのにな。バスケになんていつでも顔出せるだろうに」

おとうさんはわたしの様子には気付かないように、穏やかな表情のまま小さなため息をついた。

「最近バイト増やしたっていつて、家にいることも少なくなったなあ。まあ、大学生なんてそんなものだろうがな。　　そういえば、和音も家庭教師始めたんだったな。順調か？」

わたしは話題が仁から逸れたことに内心ホッとしながら、笑って頷いた。

八月から、わたしは週に二度、小学生相手の家庭教師を始めた。教えるのは中学校受験を目指す女の子で、最初こそ気構えたものの、何度か顔を合わせた今では、すっかり仲良しになってしまっていた。どうやら上手く気が合う子だったらしい。

「人に教えるのって面白いね」

「お。和音も教職に目覚めたか？」

「それはまだわかんないけど」



おとうさんは目尻に皺を寄せて苦笑した。

「だよなあ。まあ、今はまだゆっくり考えるといいよ。……しかし仁は意外だったな」

「意外？」

その言葉が「意外」で、わたしは思わず口を挟んでしまった。おとうさんがゆっくり振り返って頷く。

「そう。仁は絶対に教職には就かないだろうなと思っていたよ。小さい頃からいろいろ苦勞かけてるし。逆に俺の苦勞も見ている訳で。あ、そうだ。知ってるか？ あいつ、小学校の卒業文集の将来になりたいものところに、「学校の先生以外」って書いてるんだぞ。失礼な奴だろ？」

わたしが目を丸くすると、おとうさんが可笑しそうに肩を揺らした。

「それがどこで気が変わったんだか。不思議なものだ」

立て膝に頬杖をついて、目を細めるおとうさんの横顔に、わたしの口元は綻んだ。

たぶん、おとうさんは嬉しいのだ。幼稚園にしろ小学校にしろ、自分と同じ「教職」という道を仁が選んだことが。親ってそういうものなのかもしれない。

「……仁はおとうさんの背中を見て育ったんだもんね。苦勞も多かったかもしれないけど、きっと尊敬してるんだと思うよ。憧れてたんじゃないかと思う」

おとうさんが驚いたようにわたしを振り向いた。わたしはもう一度おとうさんに笑いかけた。

「だって、わたしがそうだもの。わたしはお母さんの背中を見て育った。苦勞も多かったし、仕事優先のお母さんが嫌になったこともある。けど、やっぱりお母さんを尊敬する気持ちは強いし、憧れた。うつん。今でも、憧れてる」

「和音……」

おとうさんは一瞬切なげに目を細めたけれど、すぐに優しい笑顔をわたしに向け、何も言わず、大きな手でわたしの頭をくしゃくしゃと撫でた。わたしに「おとうさん」を感じさせてくれるその手は、照れくさくもあるけれど、とても心地いいものだった。

なんとなく視線を合わせて笑って、わたしたちは希望の方に目を戻した。

「希望！ それ以上離れるなよー」

「はいー！」

希望が手を上げて返事をする。それを確認して、おとうさんはまた穏やかに笑った。

「……たぶん、和音は仁の一番の理解者なんだろうな」

ポツリとおとうさんが落とした呟きに、わたしは思わずまたおとうさんを振り返った。それに気付いたはずなのに、おとうさんは希望から目を離さないまま続けた。

「同じように、和音の一番の理解者は仁なのだろう。同じ境遇の二

人だからこそ、解り合えることも多い。お互いをちゃんと思いやつて。そうやって上手くやってこれたんだろうな　　今までは」

わたしは思わず俯いた。おとうさんが何を言おうとしているのか、わかった気がした。おとうさんの静かな声は続く。

「今のおまえたちの状態が普通じゃないことぐらい、とうさんだつて気付いてる。目も合わせない、必要以外に口を利かない　　気付かない方がおかしい。たぶん、希望だつて何か気付いてるさ。口にしないだけで。幼いなりに気を使つてもいる。いたいけだな」

わたしはますます顔を上げることができなかった。おとうさんの言葉が胸に刺さる。わたしたちの状態は、おとうさんと希望をも巻き込んでしまっている。

おとうさんの長い吐息が聞こえた。

「ただの喧嘩じゃないのは雰囲気でわかる。……和音」

そして、おとうさんは十分な間をおいて、こう言った。

「仁に好きだとも言われたか？」

「！」

弾かれたように顔を上げたわたしは、真っ直ぐなおとうさんの眼差しに一瞬怯んだ。冗談を言っている目ではない、怖いほど真剣な眼差し。

体が震えそうになる。衝撃と混乱と、後ろめたさのような気持ちが一気に胸を襲ってきて、急激に動悸が早まった。

「……おとうさ　　」

「おとーたん、かじゅー！」

のんびりとした希望の声に、わたしの言葉は遮られた。おとうさんがわたしから目を逸らす。

「どうしたー、希望？」

「みてみて！ ピカピカでキレイだよー！」

希望が、手にした何かを見せるようにしながら、わたしたちの方へ戻ってきた。興味で目をキラキラさせている。

「ほらっ、みて、これ！」

「あー。瓶のかけらだなあ」

おとうさんが目を細めて笑う。

希望が指につまんでいたのは、淡い水色をした透明の石。割れた瓶が水の流れて削られて丸くなった「ビーチグラス」だった。

「きれー。ほーせきみたい！ ね、これもってかえってもいい？」

「ああ、いいよ」

二人の声が耳の横を通り過ぎて行く。

激しい動悸はいつまでも治まらず、ビーチグラスが落とした半透明の影を、わたしはただじっと見つめていた。

結局、その後おとうさんと二人で話す機会はなかった。

『仁に好きだとも言われたか？』

あれは適当に言っただけなのか、真剣な顔してからかわれただけなのか。ただの勘なのか。それとも、おとうさんは知っている？ 何を？ どこまで？ もしかして、全部知られているのだろうか。仁の気持ちも、わたしの気持ちも。

そう考えると、居ても立ってもいられない。いたたまれない気がした。

だけど、おとうさんに直接それを確かめる勇氣すら、今のわたしにはないのだった。

あれ以来、おとうさんの方から仁とのことについて触れて来ることはなかった。これまでと何も変わらない接し方をしてくる。そんなおとうさんに、わたしも表面では気にかけてない素振りを見せていたけれど。

実は、内心とても気まずい。いつまたあの話をふられるだろうかとヒヤヒヤしていた。

仁とのよそよしさも相変わらずで、いつまでもこのままでは駄目だと、日を追うことに焦りが募る。

今や、家の中がすっかり緊張状態に包まれていた。こんな状態は精神的にもかなり参ってしまう。食欲がないのは、なにも真夏の暑さにやられただけではない。

そんな中で過ごすこと数日。

わたしは、さらに頭を悩ます問題に突き当たってしまった。

次の日からお盆に入る、その夜。わたしは居間でテレビを見ながら、一人ため息をついた。

「どっしょうかな……」

言っても仕方ないのに、もう何度となくその言葉を呟いている。出るのはため息ばかりだ。テレビでは見たかったはずの番組が放送

されているが、ちつとも頭に入ってこなかった。ソファアの上でクッションを抱えて、ポスツと顔をうずめた。

「あー、もうやだ……」

「何がだ？」

その声に驚いて顔を上げると、希望の寝かしつけに行っていたおとうさんが、いつの間にか戻ってきていた。

「な、なんでもない。希望、寝た？」

「ああ。最近は保育園で毎日プール入っているからかな。寝付きが良くて助かる」

おとうさんは笑って、カーペットの上に胡坐をかいて座った。持ってきた缶ビールを開けぐいっとあおると、美味しそうに息をつく。

「はー、うまい！」

そして、独り言のように続けた。

「さて。明日の準備もしないとなあ」

その言葉に、わたしはついまたため息をつきそうになり、ぐつとそれを飲み込んだ。だけど、おとうさんには気付かれたようだ。

「和音、大丈夫か？」

心配そうに首を傾げられて、わたしは慌てて笑顔を作った。

「だ、大丈夫に決まってるでしょ。子どもじゃあるまいし！」  
「そうだよなあ」

おとうさんも笑って、またビールに口をつけた。わたしは笑顔を貼りつけたまま、テレビに目を向ける。ため息をつかないようにするのが精いっぱいだった。

明日、おとうさんは希望を連れて、おじいちゃんとおばあちゃんのある実家まで泊りに行く。宿泊は一泊だけ。翌日の夕方には帰ってくる予定だ。

その計画はずっと前から決まっていたことで、わたしも一緒にどうかと誘われていた。けれど、わたしにとっておとうさんの実家はやっぱり「他人の家」でしかなく、どうしても気兼ねしてしまう。だから、断ることにしたのだ。だけど、今となっては一緒に行くと言えば良かったと思っている。何故かと言えば……。

おとうさんと希望が不在ということは、その間、家にはわたしと仁の二人だけになってしまふからだ。

今の状態で、仁と二人つきりになるのはかなり苦しかった。顔を合わせたくなければ昼間は外出すればいいし、家にいる時は部屋に閉じこもっておけばいい。仁だって、今日のように朝早くから夜遅くまで一日中バイトかもしれないし、ずっと家にいるとは限らない。だけど、例えばほんの少しでも「家に二人だけになる」ことを思うと、どうしようもなく落ち着かなかった。過敏に考え過ぎているとはわかってはいるけれど。

「……はあ」

あ、しまった。我慢できず、うつかりため息を漏らしてしまった。そして、それはすっかりおとうさんの耳にも届いたらしい。わたしを振り向き、苦笑した。



「なんだ、和音。もしかして、希望がないのが寂しいのか？」

「……そんなんじゃないよ」

「じゃあなんだろうな、そのため息の理由は？」

思わせぶりの口調で首を傾げる。その瞬間、にわかにおとうさんの雰囲気が変わったのがわかった。かすかに漂ってくる緊張感。そして、やっぱりそれは気のせいなんかではなかった。

「和音のため息の理由は　　仁、かな」

きた。

ドクンと心臓が跳ねる。同時につい顔が強張ってしまった。そんなわたしに、おとうさんが吐息混じりの笑みをこぼした。

「図星、だな」

わたしはぐくりと唾を飲み込んだ。

ああ、もう間違いない。おとうさんは絶対にわたしと仁の間にある問題を知っているのだ。でも……。

「なんで……？」

おとうさんはただ微笑んで、わざとのようにゆっくりと缶ビールを飲んだ。わたしはおとうさんの喉仏が上下するのを黙って見つめる。おとうさんはこれから何を話すだろう　緊張してそれを待った。

ようやく缶を口から離し、おとうさんは体ごとわたしを向いた。

「この前、結局話しそびれたが……和音。仁に好きだとか、そうい

うことを言われたのか？」

それは質問ではなく確認のような口調だった。

嘘をついてももう無駄なのだろう　わたしは固く目を閉じ、観念して頷いた。そうするしかなかった。

「……そうか」

おとうさんの手の中の缶が、ペコツと音を立てて潰れた。既に空になっていたらしい。その缶を弄びながら、おとうさんが改めてわたしに目を向けた。

「実はな、とうさん、知ってたんだよ、仁の気持ち」

思いもしなかったその告白に、わたしは目を見開いた。おとうさんは続ける。

「ずっと前　しのぶが亡くなったすぐ後だったかな、仁の口から直接聞いた」

「え……？」

頭がにわかに混乱し始める。おとうさんは仁の気持ちを知っていた　それもそんな前から。戸惑うあまり、話し続けるおとうさんの声が、どこか遠くから聞こえてくるようだった。

「だけど、その時仁は、その気持ちはずっと隠すつもりだと言ってたよ。和音さえ幸せならいいのだと。だけど、とうさんは、絶対にそれは無理だと思ってた。気持ちを隠して相手の幸せだけを願うには、おまえたちの距離は近過ぎる。本当に最後まで隠し通すつもりだったのなら、仁は和音から距離を置くべきだったのさ。だけど、

あいつは常に和音を支える『兄貴』であろうとした……」

そこまで話すと、おとうさんは「ビール取ってくる」と言っ  
て、一度立ち上がった。その動きすらも、わたしは目で追うことが  
できない。固まったように体が動かなかった。

仁 わたしの知らなかったところで、仁はずっとわたしのこ  
とを想っていてくれた。わたしを想って、それでも兄でいてくれよう  
としていた。これまでに仁がくれた、「兄として」のたくさんの優  
しさを思い出し、胸がギュツと締め付けられる。無自覚のうちに仁  
に想いを寄せていたわたしとは違って、仁はずっと自覚したうえで  
兄妹を続けていたのだ。それがどんなにきついことか、今のわたし  
は知っている。だからこそ、胸が痛かった。

プシュツという音に、おとうさんがまた元の位置に戻っていて缶  
を開けたのだと気付いた。ゆっくりとおとうさんに目を向けると、  
おとうさんはちょうど一口目を飲んだところだった。おとうさんが  
わたしの視線に気づき、小さく笑みを浮かべた。

「とうさんな、いつかおまえたちがこんな風になるんじゃない  
かってずっと思ってたよ。覚悟していた」

そして、またビールを煽る。いつもよりペースが速いような気が  
するのは、きっと気のせいじゃないだろう。

「和音が木村ちゃんと別れたらしいというのは、とうさんにもなんと  
なくわかった。和音、態度に出過ぎだし。その頃からおまえと仁の  
間に変な緊張感があるのにも気付いた。こう言っちゃなんだが……  
嫌な予感がしたよ」

「……」

「そんな矢先、仁と和音がぱったりと目を合わせなくなった。明らかにお互いを避けている。ああ、とうとう来るべき時が来たかな、って思ったよ。仁の限界がきちまったのかって」

そう言つて、おとうさんは視線を落とし、まるで自嘲するように笑った。

「さっき覚悟してたつて言っただけだな、あれ、嘘だ。全然覚悟なんかできてなかった。こんな時、親としてどうしたらいいのかさっぱりわからない。それでも、かなり混乱してるんだよ」

「……おとうさん……」

「情けないな。これしきのことで混乱なんてな。本人たちはもつと大混乱だろうに」

そして、おとうさんは顔を上げ、まっすぐにわたしを見据えた。

「仁が苦しんでいるのも、和音が悩んでいるのもわかるのに、俺は何もしてやれない。なあ、和音。しのぶならおまえの力になれただろうか」

「え……?」

わたしは驚いた。お母さんなら……?」

戸惑うわたしに、おとうさんは目を細めた。

「悪い。今それを言っても仕方ないのにな」

取り繕うように笑うその顔が、なんだかひどく寂しげに見える。おとうさんにそんな顔をさせてしまっていることが、とても悲しく思えた。

「ごめん、おとうさん……」

俯いて呟いたわたしに、おとうさんは慌てたように声を被せてきた。

「いや、それは違う、和音。おまえが謝ることは何もないんだ。とうさんこそ、悪い。つい弱音吐いちゃった。子どもの恋愛問題ってどうにも難しくてな」

半分茶化すようにそう言ってビールをあおると、気を取り直すように大きく息をついた。

「それで、明日のことだけど。正直、とうさんもおまえたちがこんな時に家を空けるのもどうかと思ったよ。二人だけで残して大丈夫なのかってな。だけど、考えているうちに思った。俺は何を心配してるんだろう、心配するってことは、おまえたちを信頼していないことになるんじゃないかってな。信じているのなら、なにも心配することはない。むしろ、いい機会なんじゃないかって思うことにした」

おとうさんの目が、何かを探るかのようにわたしの目を覗きこんでくる。ややあって、おとうさんが再び静かに口を開いた。

「和音。仁と二人になるのが怖いかな？」

その問いに、心臓がドクンとなった。

『怖い』と考えたことはなかった。だけど今、言われて初めて、気付いた。わたしは恐れているのだ、仁と二人になることを。だけど、頷くことができなかった。結局は、それが答えになってしまっている。

おとうさんは力の抜けた柔らかい笑みをわたしに向けた。

「それも無理はないと思う。だけど、少しだけ、言わせてくれないか。親として、というよりも、ただの男としての意見を」

おとうさんの静かな声は続く。

「好きな人に自分の想いを告げるのは、容易な事じゃない。ましてや、これまでの関係を全部失ってしまうような告白は、どれほどの覚悟が必要なのだろうな。想像するだけで苦しい。だけど、そうせざるを得ないほど、仁は追い詰められていた。それほどに和音が好きなんだよ。決していい加減な気持ちではない」

そして、おとうさんは言った。

「仁を解放してあげてくれ」

その言葉に、わたしはハツとした。おとうさんの顔からは既に笑みは消えて、真剣な「男」の表情<sup>かお</sup>になっていた。

「仁に、何かしらの答えを返してやってくれないか。何も仁の想いに報いてあげると言っているわけじゃない。そんなことは強要しない。和音が仁を兄としてしか見られないのなら、それだけじゃなく、もう兄としても見られないのなら、ちゃんとそう告げてやってくれ。それがあいつを解放することになるんだよ。このままだと、仁はいつまでも苦しいままだ。このままじゃ、あいつは進む事も戻ることもしない。それが一番辛い。そして、たぶん、それは和音も同じだろう？」

わたしは自分の胸元をぐっと握り締めた。おとうさんの言ってい

ることはとてもよくわかる。わかり過ぎて　　苦しい。

「だから、仁のためだけじゃなく、自分のためにも、仁に答えを返してやってくれ。そこからしかおまえたちは次に進めない」

そして、おとうさんは腕を伸ばして、わたしの手を励ますようにぐっと握った。

「和音がどういう答えを出しても、とうさんはそれを尊重する。絶対に責めたりはしないよ。だから、とうさんや希望のことは考えなくてもいい。自分の事だけを考える。何の心配もいらない。　　忘れないでくれ、和音」

怖いくらいまっすぐに、おとうさんの目がわたしの目を覗き込む。その力強さに、わたしは引き込まれるようにおとうさんを見返した。

「これから先、何があっても、どういうことがあっても、仁と和音はとうさんの子どもだ。それだけはずっと変わらない。俺たちはずっと　　家族だから」

その瞬間、わたしの心にわだかまっていたしこりのような何かが一瞬と溶けたような気がした。

『家族だから』

まるで魔法のようなその言葉に、胸の奥がじんと熱くなる。その熱が喉元を過ぎ、鼻に伝わり、目の奥を刺激する。わたしは目を閉じてその熱を確かめる。

温かい。こぼすのはもったいなかった。

十分に落ち着いて目を開け、微笑んでいるおとうさんの視線を捕まえた。そして、笑った。やっと笑う事ができた。

「ありがとう、おとうさん」

おとうさんはわたしの腕をもう一度握り締め、ただ優しい笑みを返してくれた。



相手がどうか、周りがどうか。

それらを全部放りだして、ただ素直に、自分の心に正直に。

単純な　でも、とても難しいこと。

それでも、それがわたしの取るべき道なのだと、そう気付かせてくれたのはおとうさん。

わたしの大好きなお父さん。

何があっても、わたしが「家族」を失うことはないのだと、確かな安心をくれた。

だから、わたしは大丈夫。怖がることなんて何もない。

一言でいい。

「好き」と言おう。

ちゃんと仁に伝えよう。

そう決めた。

\*

\*

\*

「かじゅっ、いつてくるー」

車の窓から顔を覗かせて、希望がニコニコと手を振る。

「いつてらっしゃい。おじいちゃん、おばあちゃんによろしくね」

「うんっ！　おみあげ（お土産）いっぱいかってくるからね！」

希望のその一言に、思わず笑みが零れた。お土産だなんて……遠くの地方に行くわけではないのに。だけど、その幼い気遣いに心がほっこりと温かくなった。

「うん、楽しみにしてるね」

「わかったー！」

希望は満足げに頷くと、嬉しそうに笑った。

「じゃあ、そろそろ出発するぞ」

運転席のお父さんが希望に声かけ、次いで少しだけ身を乗り出すようにしてわたしに目を向けた。

「じゃあ、和音。……行ってくるからな」

言葉はそれだけ。でも、それ以上に何かを語る眼差し。わたしは笑顔でしっかりと応えた。

「うん　　いつてらっしゃい」

その言葉の裏に「わたしは大丈夫」との思いをこめる。それがちゃんと伝わったのだろう。お父さんは深く微笑んで頷き返してくれた。わたしが一步下がると、車が緩やかに動き出す。

「いつてきまーす！」

希望の元気いっぱいの声が届く。  
「いつてらっしゃい！ー！」

声をあげて手を振ると、それに応えて、お父さんが一度軽くラクシオンを鳴らしてくれた。そして、車はスピードを上げ、あっという間に遠ざかって行く。

「行っちゃったな……」

車が見えなくなって、わたしは振り続けていた手を下ろした。こうして見送ってしまうと、無性に寂しい気がする。お父さんも希望も、たった一晩いだけのことなのに。

「変なの」

一人で失笑しながら踵を返した。門に入る前、一度だけ家を見上げる。

今、中にいるのはあの人だけだ。だけど、もう戸惑うことはない。決めたんだから。もう考えるのはお終いにして前に進むのだと。今日を始まりにすると決めたんだ。

時間は午前十時。仁はまだ起きて来ない。昨日もバイトが終わって帰宅したのは十二時近かったようだし、朝はゆっくりするつもりなのだろう。

でも、その方が助かる。

気持ちを伝える　そう決心したものの、いざ顔を合わせてしまつと、きつと、どうしたらいいのかわからなくなると思う。もう少し心の準備をする時間が欲しかった。

……なんて。本当は、いくら時間があつたって、心の準備なんて整わないと思っている。どうすればいいかとかどうするべきかとか、それはもうその時にならないとわからないものかもしれない。

「なんとか……なるかな」

結局はそんなものだ。どこか開き直りに近いものがあるような気がする。

仁に気持ちを伝えて、それですべてがうまくいくなんて都合よく考えている訳じゃない。

仁がわたしに想いを打ち明けてくれたから、もう何週間も過ぎた。あれからろくに目すら会わせず、会話らしい会話もしていない。あの日以来、はつきり言って、わたしは仁のことを避けていた。どういう顔をして向き合えばいいのかわからなかったから、避けるしかなかった。

答えを求めない仁をずるい　そう思おうとしたこともある。だけど、答えを求められないように仁から逃げていたのはわたしの方だったのだ。仁に対して先に壁を作ったのは、わたし。

そんなわたしに、仁が愛想を尽かしてしまってもおかしくな　いと思う。今わたしが想いを伝えても、もう今さらなのかもしれない。

それでも、やっぱり言わなければ何も始まらない気がした。想いが通じても通じなくても、そこからがやっと「始まり」なのだ。

トントントン……と階段を降りる足音が聞こえてきたのは、流し回りを簡単に掃除し終えて、テーブルの自分の席に飲み物を置いて座ろうとした時だった。

仁が来る。

咄嗟に逃げたい衝動に駆られてしまふ。でも、ぐっと堪えて、なんとか腰を落ち着かせた。

バクバクと騒ぎ出した心臓の音がうるさい。　落ち着け、わたし。そう言い聞かせながら一度大きく深呼吸をした。

じっと耳を澄ます。ドアの開く音。そして足音。室内に入ってきた気配。

「　おはよう」

淡々とした声が耳に届く。少しだけよそよそしさを感じさせるその声の方に、わたしはゆっくりと振り向いた。

「お、おはよう」

かつこ悪いことに、声が少し上ずってしまった。でも、いい。上出来だ。顔を見てちゃんと食べたから。

今までは目を逸らしてばかりいたわたしのその変化に、仁も気付いたようだった。少し目を見開いたかと思うと、仁の硬かった表情が確かに緩んだ。

「おはよう」

そして、もう一度そう言ってくれた。わたしも同じように「おはよう」と繰り返す。それに対し、仁が「うん」と頷く。

変な感じ。なんだかおかしくなつて、つい笑ってしまった。

同時に、仁の顔にも笑みが浮かんた。

久し振りに二人で笑った。どこかぎこちないけれど、それでもちやんと笑い合えたことが、単純に嬉しかった。少しだけ、わたしは

ちの間に漂っていた緊張感が緩んだ。

「父さんたち、もう行っただんだ？」

仁が思い出したようにそう聞いて来た。これまでと変わらないよ  
うな、ごく普通のその口調になんだかすごく安心した。

「うん。三十分ぐらい前」

わたしも普通に答えることができた。

「のんがお土産買ってきてくれるって」

冷蔵庫からアイスコーヒーのボトルを取り出していた仁が、軽く  
笑い声をもらした。

「へえ。それは楽しみ」

仁はグラスにアイスコーヒーを注ぐと、こちらを振り向きボトル  
を小さく掲げる。

「いる？」

「あ　大丈夫。まだ入ってるから」

わたしが自分のグラスを示すと、仁は頷いて冷蔵庫にボトルを戻  
した。たったそれだけの小さなやりとりも、本当に久し振りだった。  
でも、その後が続かない。落ちた沈黙を紛らすかのように、わた  
しはゆっくりとグラスを口に運んだ。

……さあ、どうしようか。

コーヒーを飲みながら、わたしはぐるぐると考えを巡らせる。  
どんなふうに話を切り出せばいいだろう。いきなり「好き」だの

何だのとはさすがに言えない。なるべく自然に……そう、とりあえずは普通に話をするところから始めないと。何でもいい、何か話をしよう。

決心して、顔を上げた。

「あの」

「カズ」

見事に声が搗ち合ってしまった。同時に口を嚙み、お互い顔を見合わせる。

「何」

「先に……」

またこれも同時。再び顔を見合わせて無言。  
プツと吹き出したのは仁の方だった。仁は、口許に手をやり可笑しそうに肩を揺らした。

「俺たち、変なところで息が合い過ぎ。　　ごめん、何？」

「えっ？　う、うつん、仁からいいよ」

「そう？」

仁は笑いを収めるように軽く咳払いをすると、少しだけ笑顔を残したまま口を開いた。

「大したことじゃないんだけど　　カズはこれから出掛けたりする？」

「え……うつん？」

「そか。俺、これから出掛けるんだけど、大丈夫かな」

「あー……うつん、別に」

少しだけ気が抜けたけど、それは表には出さず頷いた。仁が出掛けることは予想していたことだ。だけど、次に続いた言葉は完全に予想外だった。

「それで、そのまま友達んちに泊ることにするから。夜もカズ、一人になるけど……」

「泊り？」

「うん。その方がいいと思うから」

仁は目を伏せて一度大きな息をつく、顔を上げてわたしに向き直った。

「ごめんな」

わたしは戸惑いを隠せなかった。

『その方がいい』とはどういうことなのか、『ごめん』が何に對してなのか……もやもやする。

探るように仁の顔を窺った。いつの間にか仁から笑顔は消え、代わりに真剣な眼差しをわたしに向けていた。

「あの時からずっと変な気を使わせて……ごめん」

胸の動悸が早まる。これは「ときめき」とは違う、嫌な感じの動悸だ。

完全に出鼻をくじかれた。仁の方からその話を切り出されるとは考えていなかった。

何か苦いものが胸を渦巻く。

わたしはギョツと唇を引き結んで仁を見返した。仁はそんなわたし



しの視線を黙って受け止める。その表情から仁はこのままあの話を終わりにしようとしている。それがわかった。わたしの気持ちを聞かないまま。恐らくは誤解したまま。

このままだとすれ違ってしまう。ちゃんと言わなきゃ……そう思うのに、うまく言葉が出て来なかった。代わりに、悲しいような、悔しいようなそんな気持ちが込み上げてきた。

「忘れる……ってことかな」

思わずポツリと呟くと、仁は目を伏せた。

「カズがそうしたいなら、それで構わないと思ってる」

もどかしいその答えに、つい口調が強まった。

「仁は、わたしに忘れて欲しいって思ってるんだ？」

「カズは忘れたいと思ってる？」

逆に静かにそう問い返される。仁は今度は視線を少しも逸らさない。試されているような気がして、わたしは唇を噛んだ。

やっぱり仁はずるい。ここに来て、仁は一つも自分の心の内を明かさない。

だけど、それよりもずるいのはやっぱりわたしだ。わたしはこれまで一度だって気持ちを伝えていないのだから。だから、すれ違う。誤解される。想いは口にしないと伝わらないのだ。

「忘れられないよ」

そうだ。ちゃんと言わなければ。

「そんなに簡単に忘れられない。わたし……わたしは」

仁が好きだから。

そう続けようと思ったのに、息が詰まって言葉が出なかった。やっぱり、気持ちを伝えることって容易な事じゃない。羞恥や恐れそれらを取り払って勇気を出すのは簡単ではなかった。

言い淀んでしまったわたしを見て、仁は小さくため息を落とした。

「……だよな」

その暗い呟きに、わたしはハッとした。

「全部忘れてもらって、これまでと同じように、なんて考えが甘すぎるよな」

自嘲的な仁のその言葉に焦る。まずい。仁はまた違う方向に誤解し始めている気がする。

そうじゃなくて　と、わたしが慌てて口を開きかけた時、どこからかピーッピーッと電子音が繰り返し鳴り始めた。

「あ」

仁がズボンのポケットを探り、携帯電話を取り出した。音の発信源はそれだった。どこか困ったようにわたしと携帯電話を見比べる仁に、わたしは頷いて出てもいいよと促した。仁は「悪い」と断って電話を耳元にあてた。

「もしもし　おう、おはよー……」

話しながら離れて行く。その話し口調から、たぶん相手は友達の誰かなのだろうと推測する。

わたしは思わず頭を抱えてため息をついてしまった。なんてタイミングの悪い人。顔の見えないその誰かさんに向かって心の中で毒づいた。

思いっきり勢いをそがれてしまった。一度途切れた話をまた戻すのは、余計なエネルギーがいる気がする。しかも、この手の話はとくに。勢いで突っ走れた方がよかったのにな。などと考えていると、仁がまた戻ってくる気配がして、わたしは顔を上げた。

「ごめん、友達からだった」

仁が小さく肩をすくめた。そして、さらに申し訳なさそうに続ける。

「今さ、車で近くまで来てるらしくて、そのまま拾ってってくれるって言うんだけど……」

仁は最後まで言わなかったが、何が言いたいのかはわかった。要するに、今わたしと話をしている時間はないということだ。

もついいや……。わたしはため息を隠さなかった。

「いいよ。準備してきたら」

つい投げやりな口調になってしまい、しまったと思ったものの、取り繕う気にさえなれない。それぐらい、がっくりと気落ちしてしまった。その落胆を知られなくて、わたしは仁から顔を背けてグラスを口に運んだ。仁からは迷っているような沈黙が伝わってくる。が、やがて、

「ごめん。また今度ゆっくり話そう」

仁はそう言うと、ゆっくりとその場から動いた。応えないわたしに小さくため息をつき、それでもそれ以上声を掛けてくることはなく、仁はそのまま部屋を出て行った。

閉じるドアの音。そして、階段を上る足音を聞いて、わたしは力が抜けたようにテーブルの上に突っ伏してしまった。

「はあ……何なのよ、これ……」

苛立ち、落胆、焦燥、そして、緊張から解かれた安堵　これらが全部入り混じり、心中はかなり複雑。

あれだけ想いを告げると固く決心していたのに、完全に独り相撲に終わってしまった。

しかも、今日はもう仁は帰ってこないという。拍子抜けもいいところだ。

「馬鹿みたい、わたし……」

テーブルに頭を乗せたまま、窓の外を眺めた。

外は憎らしいまでに明るい光に溢れている。やけに元気な蝉の声が、空回りなわたしを笑っているように聞こえた。

#### 4（前書き）

未成年の飲酒描写がありますが、決して未成年の飲酒を推奨しているものではないと思います！ お酒は20歳になってから。

洗濯はとづくに終わった。

お父さんと仁の部屋を除く家中の掃除もした。気合入れて、普段やらないような家具の裏まで掃除した。

お昼ごはんも簡単に済ませて食器も綺麗に片づけたし、冷蔵庫の中の整理もした。

さて、次は何をしようか。

わたしはぐるりと室内を見回した。何かやり残したことはないか、じっくり見て確かめる。

どうしよう……完璧だ。きれいに整理整頓された部屋。今この部屋には塵一つ落ちていない自信がある。

困った。

やることがなくなってしまった。

わたしはソファに倒れ込むように身を投げ出した。ソファがギシギシと音を立てて弾む。こんなこと、普段はほとんどやらない行為だ。だけど、今は誰も見ていないし、気にしない。

そう、誰もいないのだから。

家の中はしーんと静まりかえっている。聞こえてくるのは外で鳴く蝉の声と、たまに家の前の道路を通る車や自転車の音。そして、かすかに響く冷蔵庫の動作音　それだけ。

うちってこんなに静かだったんだと、今になって初めて気付いた気がする。

静けさがなんだか……痛い。

「……暑いな」

張り切って掃除したせいか、けっこうな汗をかいてしまった。Ｔシャツが背中に張り付いて気持ち悪い。カーテンを揺らして風は入っては来るが、湿度をたつぷりと含んだそれはちっとも快適には感じなかった。

「……よし。シャワー浴びよう」

ムクリと体を起こし、自分を奮い立たるようにきびきびと動き始める。部屋に戻り、手早く準備して浴室へ向かった。

熱めのお湯で身体を流しながら、わたしはこの後どう過ごすかを考えた。

本当は、今日のために何日か前に友達を遊びに誘ってみたりもしたのだ。だけど、みんな実家に帰省していたりして、都合が合う友達が見つからなかった。だけど、それを今さら残念がっても仕方がない。

とにかく、今日はわたし一人なのだ。気兼ねなく、好きなだけ好きなように時間を使おう。

そう考えれば、ものすごく幸せな一日だ。希望に合わせる必要もなく、居間でゴロゴロしていても、お父さんや仁の目を気にしないで済む。言ってしまうば、今日のわたしは完全に自由だ。

こうなったら、とことん贅沢をしよう。

まず、シャワーから出たらエアコンを入れよう。そして、快適な室内で好きなことをやって思いっきり自分を甘やかそう。

「ラッキーじゃない、わたし」

笑って落としたはずのその呟きは、激しく流れる水音に紛れて消

えた。

DVDを見て、本を読んで。いつも利用するお店より少し遠いところにあるスーパーまで買い物に行つて。

昼間は「何もしていない時間」がないように過ごした。ものを考える時間を作りたくなかった。

そんなふうにごろごろしているうちに、あつという間に夕食の時間。食べるのはどうせ自分だけだし、手を抜こうと思えばいくらでも抜けたけど、わたしはあえて手のかかるハンバーグを作った。付け合わせのサラダもちゃんと用意した。皿にきちんと盛り付けて、テーブルに置いて。いつもと同じような夕食。ただみんながいないだけ。

「いただきます」

一人で手を合わせ、食べ始める。

「うん、おいしい！」

今日もうまく出来た。きっと希望がいたらご機嫌で食べてくれるだろうな。そんな想像をして頬が緩んだ。だけど、その希望は今日はない。今頃はおばあちゃんの手料理をおいしく頂いているはずだ。周りのみんなを笑顔にしながら。

仁は……仁は今頃何しているだろう？　きっと友達と楽しく過ごしているに違いない。

「……」

わたしは黙々と箸を進めた。わざとらしく自賛するのも虚しくな



ってやめた。

一人で食べる夕食。

考えてみれば、この家に来て初めてのこともしれない。

夜はテレビを見たり雑誌を読んで過ごした。とくにやるべきこともやりたいこともない。なんとなくぼーとしながらテレビを眺め、思い出したように雑誌をめくる。

何もない、空っぽの時間。

それでも確実に時間は過ぎて行く。気が付けば、もうすぐ日付けが変わる時間だ。

そう。一日なんてすぐに終わる。

テレビを消し、立ち上がって自室に戻ろうとして、ふとお母さんの仏壇に目を向けた。今日からお盆のため、朝からずっと灯籠に灯を入れている。そのおかげでその仏壇はいつもより輝いて見える。前にはお供え物の果物などが所狭しと並んでいた。

ああ、そうだ。お母さんがいたんだ。わたし、一人じゃなかったっけ。

「ごめんね、今日あまり構わなかったね」

わたしは仏壇の前に行って手を合わせた。そこに飾ってあるお母さんの写真を手に取り、そっと撫でてみる。

「お盆なのにごめんね　そうだ！」

突然の思いつきに、わたしはいそいそとキッチンへ向かい、冷蔵庫を開けた。

よし。たくさん冷えてる。わたしはその中の二本を取り出した。手にしたのはお父さんと仁がいつも飲んでいる500mlの缶ビールだ。当然わたしはまだ飲んでいい年じゃないけれどちょっとぐらい……。お母さんはビールが好きだったし。

「お母さん、一緒に飲もう！」

写真の前に一本置き、もう一本の缶のプルタブを景気よく開けた。プシュツという音が小気味良い。

「カンパーイ」

置いた缶に軽く当てて、そのまま勢いよく自分の口に運んだ。

「んー！」

何とも言えない苦味が口の中に広がる。ビールに口を付けたのは実は初めてではないけれど、何度口にしてもやっぱりこの味を美味しいとは思えない。

「大人ってよくこんなのを美味しそうに飲むなあ」

缶を眺めながらついため息を漏らしてしまった。わたしがビールを美味しいと感じるのはまだまだ先なのかな。味覚がまだお子様なのかもしれない。

それとも……。

わたしはいつかの仁とのやりとりを思い出した。お酒が美味しいかと聞いたわたしに、仁はたしかこんな答えをくれたのだ。

『雰囲気や飲む相手で味が変わる』

……とすれば、仏壇の前に一人で飲んでいる今は、決してお酒を美味しいと思える状況じゃないのかもしれない。

「お母さんと一緒に」なんて思ってもそれは気持ちの上だけのことで、当然、お母さんがこの場において相手をしてくれるわけじゃない。何を言っても、何をやっても応えてはくれない。

ビールをぐいっと飲む　　やっぱり苦い。なぜだか笑いが込み上げてきた。こんなの飲んで、わたし何やってるんだらう。

「お母さん、今日はみんなお留守なんだよ。寂しいよね」

寂しいよね。

自分でその言葉を口にして、わたしはハツとした。

そうか。わたしは寂しいんだ……気付かなかった。それとも気付かないふりをしていたのかもしれない。

誰もいない家。一人ぼっちの食事　ただそれだけのことを寂しがるなんて、まるで子どもみたいで認めたくなかったから。

「お母さん、わたし弱くなったのかなあ」

お母さんの写真に向って、わたしは苦笑した。

昔、お母さんと二人で生活していた頃は、一人ぼっちで過ごすことなんて当たり前だった。お母さんの仕事の帰りが遅い時は、一人で夕食食べることもしょっちゅうだった。幼い頃はそれを寂しいと感じていたこともあったのかもしれないけれど、慣れてからは平気だった。

今は一人でいることがこんなにも寂しい。いつの間にか、周りに誰かがいることが当たり前になってしまっていた。

寂しいと思うことを弱いというのなら、確かに、わたしは弱くな

ったのだろう。だけど、それは実は幸せなことなのかもしれない。いつもは一人じゃないことの証明だ。

そんなことを考えながらビールを飲み続けた。だんだん味にも慣れてきて、抵抗感はなくなった。気が付けばもう半分以上は飲んでしまっている。ペースが早いのか遅いのか、そんなことはわからない。

「家族、か……」

昔、わたしにはお母さんしかいなかったから「家族」という言葉は特に必要なかった。「家族で出かける」じゃなくても「お母さんと出掛ける」と言えば済む事だったし、どんな時でも「家族が」ではなく「お母さんが」いれば十分だった。十分だったけど、同時に「家族」と言う言葉に憧れてもいた。

長期休み明けなどに、友達から「家族旅行に行った」という話を聞いて、羨ましいと思ったことがある。わたしにとって「家族旅行」は存在しなかった。もちろん、お母さんと旅行はしたことはある。それは確かに「家族旅行」ではあるけれど、それを人に堂々とは言えなかった。たった二人なのに「家族旅行」なんて大袈裟な気がしたからだ。

だけど、今は違う。「家族で」とか「みんなで」という言葉を当たり前のように使える。些細な事だけど、それがとても幸せだ。

「奇跡みたいね」

わたしに家族がいることが。

「あ、空っぽ……」

絶対に飲んでしまえないと思っていたのに、いつの間にやら缶は空になっていた。……どうしよう。なんだか物足りない。

わたしは再びキッチンへ行って冷蔵庫からもう一本ビールを取り出した。ついでに、棚からせんべいを一袋拝借する。ちらりと時計を見れば、日付が変わってもう一時間近く経っている。こんな時間に一人で何やってるんだろうと自分に呆れもするが、それ以上になんとか楽しい。こんなことは普段は滅多に　　というより絶対にできない。一人だからできることだもの。

「へへッ。もう一回カンパーイ！」

二本目からはビールの苦みもすっかり舌に馴染んでしまつて、すっかり「美味しい」と言つてしまひそうだ。せんべいをパリパリ食べながらだと、いっそうビールが進んだ。

「ええと、何の話してたっけ……あ、そうか。家族の話だ」

なんだか本当にお母さんと話をしている気分になつてきた。

「家族がいるっていいね、お母さん」

お母さんがお父さんと出会つて恋をした　それが全ての始まり。そもそも二人が出会わなければ、希望も生まれなかつたし、わたしはお父さんと仁に会うこともなかった。この家族は存在しなかつたのだ。

そして、わたしが仁に恋することもなかった。

本当に奇跡みたいだ。

「お母さん……わたしね、仁が好きなんだ。お母さんは知ってたかな？　まさかね」

だけど、知ってたら何て言つたかな。止しなさいって止めるだろ

うか、それとも、頑張りなさいと励ましてくれるだろうか。

わたしはお母さんの写真を手にとってじっと見つめた。お母さんの笑顔は何も言わない。叱咤も激励もない。ただわたしの言葉を聞いてくれるだけ。

「わたし、仁が好きなの……」

口にすればするだけ、想いが募る。

わたしは仁が好き。もう、どうしようもないくらい好きなのだ。考えただけで息が苦しくなるくらい、好きなのだ。

どうしてもっと早くこの想いを仁に伝えなかったのだろう。どうしてすぐに仁に伝えなかったのだろう。どうして、どうして後悔がすごい勢いで体中を巡った。

「どうしよう、お母さん。わたし、バカだった……」

いつまでもぐじぐじ悩んで、無駄な時間を過ごした。自分だけじゃなくて、仁の時間も無駄にした。

ただ失うことばかりを恐れて、一番大切なものを見ていなかった。何より大切な、仁の心を見ていなかった。

そんなことに今頃気付くなんて、わたしは本当に愚かだ。

「……声が聞きたい」

今朝も会って話をしたのに、もうずっと声を聞いていないような気がするのはどうしてだろう。仁の声が聞きたくてたまらない。

ふと、傍らに置いていた携帯電話に目が向いた。

声が聞きたい。だから電話する。そんな安易な考えが浮かんだ。わたしは携帯を取り、躊躇いなく仁の名前を選ぶ。発信ボタンを

押し。

「！」

わたしはハッと我に返った。慌てて切ボタンを押して、そのまま電源まで落とす。発信ボタンを押したかどうか自分でもよくわからない。ドクドクと心臓が鳴る。衝動的な自分の行動に自分で驚いた。何やってるの、わたし。今ここで電話して、仁と何を話すつもりだったのか。

お酒飲んで、一人で感情的になって、その勢いで電話するなんてあまりにも短絡的すぎる。

「酔ってるのかな……？」

たぶん、そうなのだろう。なんだか視界が不安定な気がする。揺れている、とまではいえないけれど。

手にしている缶にはまだ中身が少し入っている。これ以上は飲まない方がいいと思うけれど、たったそれだけを残すのも意味がないような気がして、わたしは残りを一気に飲み干した。げぶつと息が上がってきて鼻がツーンとする。ぎゅつと目を閉じ刺激を逃がすと、なぜだか笑いが込み上げて来た。

「ホントに何やってるんだか」

缶を捨てに行くのも面倒で、それを端に置いてそのままゴロンとその場に横になった。冷房で冷えた畳の感触が気持ち良かった。

お母さんの写真を眼前に掲げ、わたしは小さく笑いかけた。

「大丈夫。ちゃんとするから……」

そして写真を抱きしめた。目を閉じるとすぐに心地よい睡魔が襲

ってきた。

もう今日はこのまま眠ってしまおう。久し振りにお母さんの傍で寝るのもいい。

「……おやすみ」

それに応える声はないけれど、その静けさが不思議と優しく感じられた。



ぐらぐらする。揺れてる気がするの……どうして？

「おい！」

……？　なんか呼ばれている？

「カズ！　おい、和音！」

ああ、この声は仁だ。何をそんなに怒ったように……え？　仁？  
「！」

一瞬にして目が覚めた。

「じ……仁？」

わたしの目の前にあったのは間違いなく仁その人の顔で、怒ったような表情でわたしを見下ろしていた。驚きと戸惑いのあまり何度も瞬きを繰り返すわたしの前で、仁はあーっと長い息をついた。

「何だよ……良かった、寝てただけか」

そう言いながらわたしから手を離す。揺れたように感じたのは、きつと仁が肩を揺さぶっていたからなんだ。まだ戸惑いを振り払えないまま、わたしは恐る恐る体を起こした。

「仁……な、何？　どう……したの？」

仁がじろりとわたしを横目でにらむ。その本気で怒ったような目に、わたしは思わず身を竦ませた。

「どうしたの、じゃないだろ。着信があったから慌ててかけ直した

ら電源切れてるし、家に電話しても出ねえし。何事かあったのかと思っで心配して帰って来てみれば、ビールの空き缶の前で倒れたように寝てるし。急性アルコール中毒かってすっぱー焦った」

わざと感情を押し殺したように低く言う。だけど、わたしはそんな仁の心中を推し量るよりも前に、言われた言葉自体に混乱していた。

着信？ アルコール……？

「……あ！」

思い出した。わたしはビールを飲んだ拳句、ほとんど衝動的に仁に電話しようとしたのだった。あの時、やっぱり発信ボタンを押してしまっていたのかと、つい頭を抱える。

それにしても、家にまで電話がかかってきていたなんて全然気付かなかった。家の固定電話の着信音は、希望が寝ている時のことを配慮して小さめにしてある。そのせいもあるし、きつとお酒のせいもあるだろう。

そんなことを考えているうちに頭の方もかなりはつきりと覚醒してきた。怒ったような仁の態度も、やっと理解できてきた。

自分の行動がどれだけ仁を心配させたことか。

「ごめん……」

申し訳なさのあまり小さくなって謝ると、仁がまた大きなため息をついた。

「……別に、何事もないならいいんだけど」

ぼつりとしたその呟きに、余計に申し訳なさが募る。

「本当にごめんなさい」

「いいよ、もう」

仁が苦笑気味に小さく微笑んでくれた。その顔が、すぐに皮肉気になる。

「でも、なに、この缶は」

仁は脇にあった空き缶を手にして軽く振った。わたしはややひきつった笑みを返した。

「それは　ちょ、ちよつとだけ、飲んでみたくなって……」

「へえ？　ちよつとだけ、500mlを二本、ね」

その少し意地悪な言い方に、つい言い返したくなる。が、止めた。代わりにもう一度「ごめん」と頭を下げる。仁が呆れたような息をついた。

「おまえ、酒なんてまともに飲んだことないだろう？　急にこんなに飲んで、何かあったらどうするんだよ。しかも一人の時に」

「うん……ごめん」

もう謝るしかない。

「　まあ、俺もカズを一人にしたのが悪かったし、偉そうなことはいえないけど」

少し声のトーンを落として言いながら、仁はわたしの隣に落ちて

いたお母さんの写真を拾った。それを丁寧に仏壇の定位置に戻す。

「お盆なんだよな　ごめん」

その「ごめん」は、たぶんお母さんに向けられたものなのだろう。仁はしばらく仏壇をじっと見つめたまま動かなかった。ややあつてわたしに視線を戻すと、今度は少し気遣わしげに首を傾げた。

「それで、体の方は大丈夫？」

「体？」

「頭痛いとか、具合悪いとか　つまり、酔ってないかってこと」

「ああ……ええと……うん、平気、みたい」

なんとなく頭がボーっとしている気もするけれど、これは中途半端に寝て急に起こされたからのような気がする。特にお酒のせいということではなさそうだった。自信はないけれど。

仁は明らかに安堵の息をついて「無茶すんなよ」と言いながら、目を軽くこすった。その仕草に、今さらながらの疑問が浮かんた。

「あの……今、何時？」

「ん？　二時半」

仁が自分の腕時計を見ながら答えてくれた。その時間にわたしは目を丸くした。

「二時半って、夜中の？　え……じゃあ、仁、どうやって帰って来たの？」

仁は小さく肩をすくめた。

「タクシーで」

「わざわざ？」

驚いてついそう言うと、仁は呆れ顔でわたしに目を向けた。

「仕方ないだろう？ 電車もバスも動いてないし、みんな酒飲んでたから人に車出してもらうわけにもいかないし。とにかく急いで帰ろうと思ってタクシー呼んだ。わざわざとか言うなら、心配させるようなことするな」

その言葉に、ぐつと胸が詰まった。

そうだ。仁はわたしのためにこんな夜中に急いでタクシーで帰ってきてくれたのだ。

こんなわたしを心配して。

「……バカみたい」

わたしが零した呟きに、仁がムツとした顔をした。

「なんだよそれ。バカで悪かったな」

わたしは慌てて首を振る。

「違うよ、仁のことじゃなくて。バカみたって言ったのは、自分のことだよ」

仁が毒気を抜かれたようにわたしを見返した。わたしはそんな仁に、情けないような笑みを返した。

「お酒飲んで、ただ声が聞きたいからって、勢いだけで電話して…

…仁の心配なんて考えもしなかった自分にバカだって言ったの」

仁が困惑したように目を見開く。

「声……俺の？」

わたしはコクリと頷いた。

「仁の声が聞きたかった」

もう一度そう繰り返し、わたしは仁を見つめた。

「ごめんなさい、仁。わたし、仁が好きなの」

なんで今までそれが言えなかったのかが不思議なくらい、自然にその言葉が滑り出てきた。

仁はただ固まったようにわたしを見返していた。わたしはそんな仁の瞳を真っ直ぐに見つめる。仁の瞳は黒よりも茶色に近い。その瞳に仏壇の灯籠の光がうつって、まるで琥珀色に輝いているように見える。こんな時なのに、それがとてもきれいだと思った。

「仁が好き。ずっと前から、好きだった。言えなくて 言わなくて、ごめんなさい」

仁の瞳が戸惑ったように揺れた。ゆっくりと瞬きをして、そこに改めてわたしを映す。そして、仁は言った。

「カズ、酔ってる？」

その言葉に、わたしは一瞬返答に詰まり、次の瞬間、思わず笑っ

てしまった。

正直に告げた自分の想いに「酔ってる？」と聞き返されるなんて、  
だけど、それも無理はないかもしれない。こんな状況に、突然の告白。

クスクス笑いの止まらないわたしに、仁が困ったような顔で首を傾げた。

「おい……やっぱり酔ってるだろう」

わたしは顔に笑みを残したままそれに答えた。

「うん。酔ってるのかもしれない。だけど、言った言葉に嘘はないから。酔ってるからってわけじゃない、よ」

仁が目を丸くする。ちゃんと仁も気付いたんだ。今のわたしの言葉は、わたしに思いを告げてくれたその時に仁が言った言葉だ。  
しばらく探るようにわたしの目を見つめていた仁が、はあーっと長い息をついた。

「マジかよ……」

そう言っただけのわたしの頭の上に右手を伸ばし、くしゃくしゃと撫でつける。そして、すごく優しい微笑みを浮かべた。

「やばい……俺、今すごい嬉しいんだけど。まさか冗談とかじゃないよな」

わたしは苦笑いを返した。

「さすがにこんな冗談は言えない」

「じゃあ、酔った勢い？」

「違う。けど、それじゃ駄目なのかな」

仁がクスツと笑った。

「駄目じゃない。それが本当なのなら、どんなでも構わない」

頭上にあつた仁の手がゆっくりと滑り落ちてきて、わたしの頬を包み込んだ。

「カズ、ありがとう。好きだよ」

その優しい声に胸が高鳴る。わたしは頬に触れた仁の手に、そつと自分の手を重ねた。

「ありがとう、仁。わたしも……好き」

そして、少し笑って続けた。

「ちゃんと妹でいらなくてごめんなさい」

仁は不意を突かれたように目をパチクリとさせ、すぐに可笑しそうに破顔した。

「それはもうお互い様だな。和音」

仁のもう片方の手がわたしの顎に添えられ、親指がわたしの唇をそつと辿った。

「キス、しても……？」

わたしは答えの代わりに少し笑って目を閉じた。



確実に近づく気配。そして、静かに触れる唇。しっとりと温かくて柔らかい。微かにお酒の匂いがする。たぶん、それはわたしも同じ。

とても優しい、緩やかな口づけ。体中に痺れるような甘さが広がる。

仁がゆっくりと唇を離れた。遠ざかるぬくもりに、一抹の寂しさを感じながらわたしは目を開けた。

仁は優しい微笑みを湛えたままで、わたしを見つめてくれていた。その視線に、また胸がドキドキする。この人が好きだと全身が叫んでいる気がした。

仁の手がわたしの体を抱き寄せた。まるで倒れ込むように、わたしは大きな胸の中に包まれる。背中に回された手が、ギュッと固くわたしを抱きしめた。

仁はもう何も言わなかった。わたしも何も言わなかった。ただしっかりとお互いの体を抱きしめていた。

耳に直接響く仁の鼓動が、トクトクと早いリズムを刻んでいるのがわかる。わたしと一緒にだ。思わず笑みがこぼれた。

「なに？」

わたしの気配に気付いた仁が小さく問いかけてくる。その声も触れた体から直接響いてきて、なんだかくすぐったかった。

「うん……仁の心臓の音が……ドキドキしてる」

仁が小さく笑って、体が微かに揺れた。

「そりゃあな。好きな女抱きしめてて、ドキドキしないわけがない」  
その言葉にドキンと大きく心臓が跳ねた。このまま飛び出してしまっんじゃないかと思うくらいだ。

「だから、カズ。もうそろそろ、離れようか」  
「……？」

わたしの肩を軽く押すようにして体を離す仁に戸惑う。仁は困ったように笑った。

「あのな。これ以上くっついていたら、引くに引けないというか、止められないというか 察しろ」

苦笑してわたしの額をツンとつついて押した。なんか意味がわからない。

「まあ、さすがに母さんの前でこれ以上どうこうしようとは思えないけど……あ、なんだったら、部屋に行く？」  
「！」

ようやく仁が何を言ってるのかがわかって、カーッと顔が熱くなった。きつと今わたしの顔は真っ赤に違いない。

仁がそんなわたしを見て、心底可笑しそうに肩を揺らして笑った。

「ごめん、冗談。そんな顔するな」

仁はまるであやすようにわたしの頭をポンポンと叩くと、やあらその場に仰向けに転んだ。

「はあ……なんか夢みたいだな。こんな感じでカズといえるの」  
そして、わたしの方へ顔を動かして目を細めた。

「カズにはいっぱい話したい思いがあった。でも、もういい。こうして一緒にいられるだけで十分って気がする」

「うん」

わたしも仁と同じ思いだった。仁にはもっと伝えなきゃいけないことがあった気がするのに、傍にいただけでもう胸がいっぱいだ。わたしは仁の隣に横になった。人一人が入れるくらいの間を開けて。

仁がわたしの方へ顔を向けて笑う。

「何、一緒に寝る？」

その冗談めいた口調に、わたしは笑い返した。今度はもう赤くはない。

「お母さんの前だから安心だもん　でも念の為、ここからこっちは来ないでね」

畳の境目を指で辿ると、仁が「信用ねえなあ」とため息交じりに洩らした。もちろんお互い本気ではなく、そんなやり取りの後はクスクスと笑いあった。

「和音」

仁の声が少しだけ真剣味を帯びた。ゆっくりとわたしの方に片腕を伸ばす。

「何もしない。それは約束する。ただ、これだけ」

何かを求めるような仁の指先。わたしは手を伸ばして仁のその指先に触れた。仁が少し躊躇いの残るわたしの指をからめとり、痛くない程度の強さでぐつと握ってくれた。

その力強さと温かさに、思わず吐息が漏れた。手を繋いだけで、どうしてこんなに気持ちいが満たされるのだろうか。

仁がわたしを見て微笑んだ。

「おやすみ」

「うん。おやすみ」

そして、二人同時に上を向いて。

「あ」

同時に声を上げた。また二人顔を合わせて「電気……」と声をそろえる。そのタイミングも見事にあって、今朝のことが思い出された。たぶん、仁も同じだったのだろう、「ほんと、息合い過ぎだな」と今朝と同じような事を言って微笑んだ。

「まあ、いいか。電気ついてても」

「うん。大丈夫。眠れる」

その言葉に嘘はなく、周りがどんなに明るくてもすぐに眠れる気がする。もう既に睡魔は襲ってきている。まだ体の中に残っているアルコールのせいだろう。そして、きつと仁がいることの安心感のせい。目を閉じれば、すぐに意識が吸い込まれそうだった。

「カズ……おやすみ」

仁の囁くような声に、わたしは「おやすみ」と答えた。でも、もう目も開けられない。

ただ、固く握られた手の感触だけはいつまでもはっきりと感じて  
いることができた。

翌日、朝目覚めた仁とわたしの間には、ちょっとした緊張感が走っていた。

夜中のことがどこか夢の中の出来事みたいに感じられた。それは仁も同じだったようで、なんだかお互いにぎこちない。少しずつ、お互いを探り合っているような状態だった。そのうちじわじわと、昨夜のことは夢じゃなかったのだと実感し、柔らかな幸福感に包まれた。

わたしは仁と想いを通わせることができたのだ。

だからといって、突然わたしたちの間に何か特別な事が起きるわけではなく、一緒に食事をし、お互いの話をする　そんなゆったりとした時間が流れて行く。

以前と変わらない優しい時間。ただ、確実に心の距離間だけが違う。

夕方、わたしと仁は買い物に出かけた。いつもなら自転車で行くスーパーに、二人並んで歩いて行った。

他愛のない話をしながら、のんびりと、ゆっくりと。

仁と二人きりでそうして外を歩くのは初めてだった。仁とわたしはこれまで「家族」としての付き合いしかしてこなかったから、いつもそこには希望がいて、お父さんがいた。

だけど、これからは違う。

今までできなかったことも、これからは一つずつ積み重ねて行ける。

こうして二人で道を歩く　これもそのうちの一つだ。

スーパーから出るともう日は暮れかけていた。仁は両手に、わたしは片手に買い物袋をぶら下げている。そんなに買う予定はなかったのに、仁が張り切っているいろいろと買い物かごに商品を入れた結果だ。ほとんどが保存食やお菓子の類だ。重いものは特にないが、嵩が大きいものばかりになってしまった。

「買い過ぎたかなあ」

今さらのように仁が苦笑する。わたしは呆れてため息をついた。

「だって、要らないよって言うのも買うんだもん……」

つい主婦的感覚で愚痴ってしまう。そんなわたしに仁がまた苦笑い。

その時、背後からプップーとクラクションを鳴らされた。狭い路地、体を脇によけると、馴染み深い黒のワゴン車がわたしたちのすぐ横に停まった。

その車の運転席の窓から顔をのぞかせたのはお父さんだった。

「よお。買い物帰りか？」

「かじゅ！　じんー！」

後部座席の窓も開いて、希望が顔を出す。

「ただいまー！」

「おかえり、のん。お父さんもおかえり。お疲れ様」

「うん、ただいま」

仁も二人に「おかえり」と声をかけ、反対側のドアの方に回った。荷物を中に乗せているようだ。

「カズもそれ」

それ、とは手にした買い物袋のことだ。わたしも仁の方に回り、荷物を手渡した。

「あれ。乗っていかないのか？」

荷物だけをシートに乗せたわたしたちに、おとうさんが不思議そうに首を傾げる。それに仁が応えた。

「俺たちは歩いて帰るよ。　な、カズ」

「うん」

わたしは頷いた。最初からそのつもりでいた。

おとうさんはわたしと仁の顔を交互に見て、やがて納得したように大きく何度も頷いた。

「なるほど……そういうことか」

そう言って前を向いて運転する姿勢に戻る。

「あれえ？　かじゅとじん、のらないの？」

希望が不満そうに口を尖らせる。宿めようとしたわたしより、おとうさんがそれに応えるのが早かった。

「あのなあ、希望。お父さんと希望は今はおじやま虫なんだよ」



その言葉に興味を持ったように、希望が運転席の方へ身を乗り出した。

「おじゃまむちー？ それ、どんなむちー？」

「おじゃまむしっていうのはな……」

二人のそんな会話に、仁がしびれを切らしたように口を挟んだ。

「んなこといいから。早く動かせよ！」

お父さんが苦笑した。

「はいはい。おじゃま虫は退散しますよー。和音、また後でな」

「うん」

お父さんは軽く手を上げて車を発進させた。ここからだとい、三分もすれば家に着くだろう。

車が行ってしまってからわたしたちも歩き始めた。もう二人ともすっかり身軽だ。

「！」

突然、左手が強く握られた。わたしは驚き仁を見上げた。仁の横顔には微かな笑みが浮かんでいる。だけど、わたしは慌てて繋がれた手を引こうとした。もちろん、それは叶わなかったけれど。

「仁、近所の人に見られたら……」

そう。わたしと仁は、世間の中ではただの兄妹なのだ。そんなわたしたちが手なんて繋いでいたら、どう思われるか。

だけど、仁は慌てることなくわたしを見返して笑った。

「俺は気にならない、そんなこと。俺たちは悪いことをしているわけじゃない。他人がどう思うかなんて関係ない。　　だけど、カズが嫌ならやめる。この手、離す?。」

わたしの眼前に繋いだ手を掲げる。仁の大きな手はわたしの手を包み込むようにしっかりと握ってくれていた。

「離す?。」

もう一度聞かれる。わたしは覚悟を決めて仁の目を見上げた。

「　　離さない」

仁は笑みを深くし、手を下ろした。そしてまた歩き始める。まるで最初からわたしの答えがわかっていたみたいな態度。ちよつとだけなぜか悔しい気がした。

ふと見上げた空が夕焼け色に染まっている。濃いオレンジ色と暗い青のグラデーション。

「あ……きれい……」

思わず足を止めて呟いた。仁も空を見て目を細める。

「きれいだな」

二人でそのまましばらく夕焼けを見つめた。顔を見合わせたのはほとんど同時だった。

仁がふわりと微笑んだ。

「さあ、帰ろうか」

わたしも笑って頷いた。

うん。帰ろう。わたしたちの家に。

大好きなお父さんと可愛い弟が、きっと首を長くして待っている。

（第十話 完）

## 6（後書き）

第10話終了です。ありがとうございました。  
次回最終話。一回の更新で終るかと思います。しばらくお待ちください。

ご感想など頂けましたら嬉しいです！

## 共に歩く未来

夏が終わり、秋は駆け足で過ぎ去った。

そして、気が付けばもうすっかり冬の空気。

その間たったの三カ月。季節が移り行くのは本当に早い。

この三カ月、わたしと仁の関係も少しずつ変わっていった。「家族」「兄妹」としての関係から、「恋人」の関係へ。特別に何か進展があつた、とかそういうことではない。気持ちのあり方が変わったのだと思う。

最初は、家の中で仁とどういうふうに接すればいいだろうかというんな迷いがあつた。だけど、それはすぐに解決した。今まで通り自然にしていればいいのだ。特別な気構えなどはいらない。何もわからない希望はもちろん、お父さんだって今までと特に何も変わらなかった。たまに冗談で「新婚夫婦と同居している気分だ」とか言つて、わたしと仁が目を合わせて笑っただけで、わざとらしい咳払いが介入することはあるけれど。

仁と二人で出掛けることも増えた。二人でいろんなところへ行つて、いろんな経験をしていくのだ。

そうやって少しずつ、二人一緒の、二人だけの思い出を増やしていく。

わたしたちの関係は、お互いの親しい友人にはちゃんと知らせることにした。

わたしはユリに。

ユリは仁のことが好きだったから、このまま友達の縁を切られて

も仕方ないと覚悟を決めて話をした。

だけど、ユリは最初とても驚いたような顔をして、それでも次の瞬間には満面の笑顔で「おめでとう！」と祝福してくれた。ユリは「仁さんのことは確かに好きだけど、それはただの憧れだよ！」と笑った。その言葉がわたしに対する気遣いだったとしても、わたしはそれに甘えるしかなかった。変な遠慮は逆に彼女を傷付けてしまう。わたしは彼女に心からのお礼を述べた。

一方、仁はサークル仲間の川崎さんにわたしとのことを話したらしい。

一度偶然構内で川崎さんと会った時、「あ！ カズちゃん、仁から聞いたよー！」と何でもなしのように軽く声をかけられた。あまりに軽く言われたので最初は何のことか分からなかったくらいだ。後で仁に聞いたらそういうことだとわかって、なんだか可笑しくて笑ってしまった。

嬉しいニュースも聞いた。

小枝子さん　仁の元彼女さんが、十月に女の子を無事出産されたそうだ。

そして、出産と同時に赤ちゃんの父親と入籍したらしい。その辺りの詳しい事情はよく知らない。仁も教えてはくれなかったし、わたしが知る必要はないことだから聞かなかった。

小枝子さんとはもう会うこともないかもしれないけれど、生まれてきた赤ちゃんとは旦那さまと三人で、幸せな家庭を築いていつて欲しいと心からそう思う。

そして、琢磨くん。

あの雨の日図書館で別れてから、琢磨くんとは全く会うことはな

かった。それでも、図書館に行けば彼の姿を目で探してしまうのがわたしの癖のようになっていた。元気でいるのだろうか　それだけが気になっていた。

そんな折、大学構内の中庭のロータリーで、偶然に琢磨くんを見かけた。

それは秋も深まった日の昼下がりのこと。向こうから近付いてくるその姿に、わたしはすいぶん前に気付いた。琢磨くんは友達と話しながらあの穏やかな笑顔を見せている。

ああ、変わっていない……そのことになぜだかとても安心した。琢磨くんはわたしに気付いていなかったけど、それでもよかった。元気な姿が見れた　それでもう十分だ。

でも、コスモスの咲いた植え込みを挟んですれ違う、その一瞬。琢磨くんがわたしに目を向け、小さく微笑んだ。彼もわたしに気付いていてくれたのだ。

琢磨くんは立ち止ることなくすぐに前を向いて行ってしまう、わたしも彼を振り向かなかった。振り向いても琢磨くんはもうわたしを見ないだろうことは分かっていた。わたしたちの行く道は違うのだから。

わたしたちが再び言葉をかわせる日がくるのは、まだ少し先になるだろう。

思い出として語るにはまだあまりにも生々しい。それでも、いつかはまた琢磨くんと笑って話ができる日が来ると信じたい。自分勝手な思いだとわかっていてもそう思わずにはいられなかった。

琢磨くんのもう一つ耳にしたことがある。

琢磨くんは今、川崎さんからサークルに入れと猛烈に勧誘されているらしい。度々、練習などに無理矢理引っ張ってこられているそう。仁はまだその時に居合わせたことはないらしいが、川崎さん

の強引さに呆れて苦笑していた。仁は、琢磨くんがサークルに入っても別に気にはしないという。反対でも賛成でもなく、この件についてはまったく口出す気はないようだ。それも当然のこと。それを決めるのは仁でもわたしでもなく、琢磨くん本人なのだから。

そうして時は過ぎていく。

\*

\*

\*

十二月二十五日　クリスマス。  
今年もこの日がやってきた。

二回目のお母さんの命日。三回忌の法要は、お寺で家族だけで行うことにした。

「じゃあ、父さんは車暖めておくから。最後、戸締りに火の元確認頼んだぞ」

「はいー!」

玄関を出て行くお父さんに答えながら、わたしはコートを手に取った。その脇を希望が駆けて行く。

「こら、のん! 廊下を走ったら滑るよ!」

「だいじょーぶだもん! ねー、かず。くつ、どーれ?」

そう言ってわたしを振り向く希望も、今日はきちんとした格好をしている。襟付きシャツにジャケットを着せただけですごくお兄さんになったように見えるから不思議だ。いや、実際、希望は大きく



なったのだ。いつのまにか言葉もずいぶんはつきりと喋るようになってきたし。

四歳半　希望はもう四歳半だよ、お母さん。

「靴、そこに出してある黒いの　あ、それぞれ。自分で履けるかな？」

「うん！」

滅多に履く機会のない黒い革靴は、お父さんが知り合いの子どもさんから譲り受けたものだ。恐らくあまり履いていないのだろう、新品も同然だった。

「よいしょ……はけたー！」

「お、すごい！」

嬉しそうに足を上げて靴を見せる希望の隣にしゃがみ、仕上げにわたしがマジックテープのベルトをきつく留めた。希望にはこの靴はちょっとだけ大きかったのだ。

「ね、行つてていい？」

わたしが返事をしないうちから希望はもう玄関のドアに手を掛けている。わたしは苦笑しながら頷いた。

「いいよ。お父さん車のところにいるから。ちゃんと声かけて行つてね」

「はいー！」

希望は嬉しそうに笑ってドアを開けて出て行った。すぐに「おとーさん！」という声とお父さんの返事が聞こえた。大丈夫そうだな。さで。わたしも先に出ていようかな　そう思つて中を振り向い

た。仁がまだ中にいる。

「仁ー！ もう行くよー？」

そう声をかけると、すぐに階段を駆け下りてくる足音が聞こえた。

「ちょっと待って！」

慌てたように下りてきた仁も、今日は濃いグレーのスーツ姿だ。わかつてはいたけど、普段見慣れないその姿にやっぱり一瞬ドキッとしてしまった。スーツ姿は男前度が上がる気がする。……と思ったのはおくびにも見せないで、わたしは仁を見上げた。

「なあに？」

「カズ、ちょっと手出して」

わたしの正面に立ってそう言った仁に、わたしはきょんととしてしまった。

「手？」

「そう、右手でいいや」

仁は笑いを含んだ目で頷く。わたしは訳の分からないままに右手を仁の前に出した。

「こうじゃなくて、こうだよ」

手のひらを上に向けていたわたしの手を仁が苦笑しながらくりと裏返す。そのまま仁の左手の上に乗せられる形になってしまった。

「ちょっと、なに……」

何をする気　そう続けようとしたわたしは、次の瞬間言葉を失い目を瞠った。

わたしの薬指に、仁がゆっくりと何かを通していく　それは輝く小さな石のついた指輪だった。

「良かった。サイズぴったりだな」

照れた顔も見せず笑う仁に、わたしはただ口をパクパクさせた。あまりに突然のことにどうしたらいいかわからない。

「な、何これ……？」

「ん？　指輪だけど」

飄々とそう言った後、仁はにっこりと笑った。

「クリスマスプレゼントだよ」

「あ……」

そういえば、昨日わたしからは仁にプレゼントをあげたけど、仁からは何も貰ってなかった。それは別にいいのだけど、まさか今日こんなサプライズがあるとは。

「あ、ありがとう……」

まだ戸惑ってはいたけどじわじわと嬉しさが湧きあがってくる。だんだん頬が緩んでくるわたしに、仁は悪戯っぽい笑みを向けた。

「そっちの指に付けるヤツはもうちょっと待ってけよ。そのうち必ず、な」

「え？」

そっちの指って……あ。

意味が掴めて驚いて顔をあげたわたしに、仁が素早く顔を寄せる。唇に仁の温もり。ゆっくり吸いつくように触れると、軽く音を立てて離れた。まだ目を丸くしているわたしを見て仁が微笑む。

「あーやばい。口紅付いたかな」

そう言いながら靴を履き始めた。冗談めかした口調はきつと照れているからだろう。

「先、行ってるからな。鍵閉めてきて」

口を気にしながらこちらを振り向いた仁に、わたしは頷いて笑った。

「うん。……大丈夫、色付いてないよ」

仁は一度目を丸くして苦笑した。

「サンキュ。じゃお先」

外へ出て行く仁を見送って、わたしは右手を目の前に掲げて見た。今つけてもらったばかりの指輪。細いリングに小さな薄い水色の石。これはたぶんアクアマリンだ。

「きれい……」

呟いてその手をそっと抱きしめ。そこでハッと我に返る。

「あ。行かなきゃだ！」

今は浸っている場合じゃなかった。

\*

\*

\*

寺での法要が始まる前に、お墓に行ってお参りを済ませることにする。お母さんのお墓は寺の裏手にある墓地の奥の方にある。お寺で桶と柄杓を借りて、わたしたちは揃ってお墓へ向かった。

途中、わたしが持っていたお花を希望が持ちたがった。希望にはちよつと大きめの花束だが、両手に抱えさせるようにして持たせればなんとか大丈夫そうだ。

「転んで潰すなよー」

からかう仁に希望がプウツと頬を膨らませた。

「ころばないもんっ」

「ほらほら。ちゃんと前向いて歩け、希望」

呆れたように笑ってお父さんが希望を前に促す。

「そうそう、前向いて歩かないと本当に転ぶぞ。お母さんのお花、ぺしゃんこになるぞー」

「ころばないもん！ おはな、だいじょうぶだもん！」

「そお？ 本当に大丈夫かあ？ 花で前見えてないんじゃないの？」

「みーえーてーるーもんっ！」

からかう仁とムキになって言い返す希望。その後ろでわたしとお

父さんは顔を見合わせて苦笑した。

お墓の周りの掃除をし、墓石をきれいに流して。お花を活け、お供えのお菓子を添えてようやくお参りの準備は出来た。

お父さんが、持ってきたろうそくを立てて火をつける。束にした線香に火をつけると、何本かずつをわたしと仁に分けた。それを線香皿に入れる。希望はおとうさんと一緒だ。

最初にお父さんと希望が並んで手を合わせる。その次にわたし。そして仁が続く。

緩やかに吹く冷たい風だけが静かにわたしたちの横を通り過ぎていく。

静寂の時。静謐なひと時。

皆のお参りが終わって、おとうさんがハアツと空に向って息を吐いた。

「雪でも降りそうな天気だけど、もってくれそうで良かった。日頃の行いが良いからかなあ」

「単なる運だろ」

水を差すような仁の言葉に、おとうさんがため息をつく。

「日頃の行いが良くないと幸運はついてこない　ん？　どうした希望？」

お父さんの言葉に希望を向くと、なんだか足をもじもじとさせて落ち着かない様子だ。すぐにピンと来た。

「のん、おしっこ？」

希望はだまってこくりと頷いた。眉がハの字に下がって情けない顔になっている。

「ちょっと大丈夫？ トイレ着くまで我慢よー」

わたしが希望の手を取ると、それを横からおとうさんが引きとつた。

「抱っこして連れて行った方が早い。せつかくの一張羅を汚したら大変だからな。いくぞー」

言うが早いか、おとうさんは希望を抱き抱えて大股で走って行く。確かに、わたしが連れて行くより早いだろう。

残った仁と二人で「大丈夫かなあ」と顔を見合わせる。希望の着替えはいつも念の為持ってきているし、万一の場合も困ることはないなけれど。せつかくの日に嫌な思いを味わせたくはないものだ。

「なあ、カズ」

不意に、仁がポツリと聞いて来た。

「カズは母さんとどんな話をした？ 今日ここに来て」

「どんな話？」

わたしは視線を宙に向け考える。

どんな話、か。

「別に、特に何も」

そう答えると、仁が意外そうに眉を上げた。思った通りの仁の反応に、笑い顔が浮かんだ。

「わたし、話したいことがある時はいつもお母さんとは話してるか

ら」

「いつも？」

「うん。……ほら、ずっと前に仁が希望に言ったでしょ。お母さんはいつでもみんなのここにいる　って。憶えてるかな？」

自分の胸を軽く叩いてみせると、仁は「あー」と思い出したように頷いた。

「言った、ような気がする」

「言ったんだよ、確かに。その時はいろいろ考えたけど……その通りだと思うことにしたの、わたし。お母さんはいつもそばにいて、わたしたちのこと見守っていてくれるんだって。だから、何か言いたいことがある時は所構わず心の中で話しかけてる。だからこうやってお墓に来たからって、特別に改めて話すことなんてないの。『こんにちは』ぐらいかな」

仁はしばらくわたしの顔を見つめて「そうか」と小さく笑い、お墓に視線を戻した。

「俺はここで今いっぱい話したよ」

わたしは仁の横顔を見上げた。そういえば仁のお参りしている時間には長かった。

「どんな話したの？」

仁の口許が優しい笑みの形に綻んだ。

「『和音を産んでくれてありがとう』」

「え」



意外な言葉に面喰ったわたしを置いて、仁は言葉を続ける。

「『父さんと結婚してくれてありがとう、希望を産んでくれてありがとう、俺の母親になってくれてありがとう』」

そして、わたしを真っ直ぐに見下ろした。

「『俺が和音を幸せにします。一生大事にします。一緒に生きていきます。決して一人にはしません。だから安心して下さい』……そう話した」

仁がわたしの目を覗き込む。その目があまりに優しく、わたしは吸い込まれるようにその瞳を見つめ続けた。

胸の奥から言葉にできないくらい大きな何かが込み上げてくる。溢れてくる。

目頭が熱くなり、すぐに視界が歪んだ。既に冷え切った頬に温かいものが流れた。

「……泣くなよ、こんなことで」

仁が小さく笑い声を零し、わたしの頭を腕で囲むように抱き寄せた。

「愛してる」

頭上から優しく降ってきたその言葉に、わたしは思わず目を見開いた。これまで仁から一度だって聞いたことのない言葉だったから。わたしの体が一瞬固まったのを感じたのだろ、仁が苦笑めいた息を吐いた。

「こんな言葉をまさか自分が言うとは思ってなかった。でも『好き』という言葉じゃ足りない思いもあるんだとやっとわかった気がする。俺は和音を愛してる」

そして頭に優しく口づけされる気配がした。一度止まりかけた涙がまた溢れてくる。

わたしも今わかった気がする。

さっき胸の奥からこみ上げてきた言葉にできないくらい大きな何か それは「愛している」という感情だ。それを伝えたい、と思った。

「わたし……も、仁を……愛してる」

鼻をすすりながら言ったわたしに、仁がクスツと笑う。

「知ってる」

すぐに返ってきたその短い答えに、わたしもつい笑みが漏れた。

「何、その自信……」

「さあ？ 何だろうなあ」

仁はクスクス笑いながらもうそれ以上は何も言わず、そのまましばらくわたしの頭を抱き寄せてくれていた。

「あー！ らぶらぶだあー！」

突然甲高い希望の声が飛び込んできた。びつくりして顔を上げると、希望が走り寄って来ていた。恐らくトイレは間に合ったのだろ

う。晴れ晴れとした顔をしている。

「じんとかず、らぶらぶー！」

わたしたちの脇に立ち、何か特別にいいものでも見つけたような顔をして、くつついているわたしたちを見上げる。

「ちょ、ちょっと、のん」

わたしが慌てて仁から離れようとする、またぐつと肩を抱き寄せられた。仁がニツと笑う。

「そ。ラブラブなんだよー。どうだ、羨ましいだろう？」

「じ、仁！」

抗議の声をあげようとしたわたしの後ろから、また別の声が介入してくる。

「ほーんと、羨ましいよ。見せつけてくれちゃって」

「！ お、お父さん」

お父さんがわざとらしく頭を掻きながらわたしたちの横を通り、お墓の正面にしゃがんで手を合わせた。そして、大袈裟な長いため息をつく。

「しのぶ。どうやら俺がおじいちゃんになる日も近いかもしれん」

「…」

「え！」

わたしと仁は思わず顔を見合わせて、二人同時に吹き出した。突

然何てことを言い出すんだか。

もちろんお父さんも軽い冗談で言った言葉だったのだろうけど、その言葉に敏感な反応を見せたのは希望だった。

「えっ！　なんでー？　おとうさん、おじいちゃんになっちゃうのー？　やだよ。おとうさんはおとうさんがいいー！」

本当に今にも泣き出しそうにおろおろしている。お父さんが慌てて取り繕った。

「ち、違う違う！　大丈夫、父さんはずっと希望の父さんのままだから。急におじいちゃんになったりはしないから、な」

「ホント？」

「ホントホント！」

「よかった！」

希望の笑顔が戻って、おとうさんがやれやれと立ち上がった。わたしたちの方を向き、眉をひそめる。

「おまえたちのせいだぞー」

「何だよ」

仁が苦笑する。わたしも声を立てて笑った。

「さて。もうそろそろ時間だな」

しばらくゆつくりしていたわたしたちだが、お父さんが時計を見てそう言った。手早く片付けて寺に戻る準備をする。

帰り際、もう一度みんな揃ってお墓に向って手を合わせた。

「また来るよ」

お父さんの言葉を合図にわたしたちは歩き出す。

数歩歩いた後、ふとわたしはお墓を振り返った。フワリと髪を撫でた風が、何故かわたしをそうさせた。

お母さん……見送ってくれているの？

そんな感傷に囚われて足を止める。だけど、すぐに笑って首を振った。

見送る必要なんてないよ、お母さん。これからもみんなと一緒に歩いて行くのだから。そこにはお母さんもいるのだから。

「カズ？」

足を止めたわたしに気付いて、仁が引き返してきた。おとうさんと希望は先を歩いている。

「どうした？」

「ううん、何でもない」

笑って首を振ったわたしに、仁は何も聞かないでいてくれた。

仁は微笑むと、わたしに向って手を差し出した。迷いのない大きな手。わたしもためらうことなくその手を取った。仁の手はすっかり冷えて冷たく、それでもやっぱり温かった。

「かずー！　じんー！　まだあ？」

道の先で、こちらに向って無邪気に手を振る希望がいる。どこか呆れた顔で、それでも優しくわたしたちを見守っているお父さんが

いる。

心の中には、大好きな母がいて、  
隣を見れば、わたしの全てを優しく包んでくれる微笑みがある。  
わたしはこの人と共に歩いて行く。  
この人たちと共に生きていく。

愛する家族と共に生きていく。

（おわり）

） L o v i n g   h o m e   （

## 共に歩く未来（後書き）

お読みくださった皆様に心から感謝いたします。  
ありがとうございました。

ご意見感想、もしよろしければお願いいたします。

s o m e d a y (前書き)

後日談その？です。  
ある春の一日。



## s o m e d a y

三月も半ばに入り、気温も次第に落ち着いて冷え込みもさほどではなくなってきたため、それまで出しっぱなしだった冬物の洋服を片付けることにした。衣替えと言うほど大掛かりなものでもなく、厚手の服をしまうだけの簡単な作業だ。

ざっと自分の分の片づけを終え、クリーニングに出すコート類を抱えて階下へ降りる。次は希望の分。

「ねえ、かずー、公園に行きたーい!」

わたしの姿を見るなり、一人でミニカー遊びをしていた希望が甘えた口調で寄って来た。

「おとーさん、遊んでくれないんだもん」

その言葉に、おとうさんが「悪い悪い」と頭を掻いた。

「お父さんなー、これ明日までに終わらないと駄目なんだよ。もうちょっと待ってな」

お父さんの前のテーブルの上には、何かの書類がたんまりと広がっている。年度末は忙しいのだ。休日もゆっくり休んでいられないらしい。

「つまんなーい。かずー。公園ー!」

ぐずる希望に、わたしは大袈裟に困った顔をして首をかしげて見

せた。

「カズももうちょっとお片付け。のんの洋服の整理が終わったら連れてってあげるよ。その代わり、のんも手伝って」

「うん、いいよっ!」

公園に行けることが嬉しかったのか、希望は張り切って自分の洋服箆笥の前に座りこんだ。

「どうするのー?」

「じゃあね、セーターとかトレーナー出しちゃって。えっと……こういうやつね」

一枚トレーナーを出して見せると、希望はすぐに理解したらしく「わかった!」とタンスの中を覗き込む。そしてちゃんとトレーナーを出して傍らに置いた。さすがにもうすぐ5歳になるだけはある形だけじゃなく、ちゃんと大人の「手伝い」ができるようになってきたんだ。

「あ。そういえば、これもう短くなってたっけ?」

ふと思いついて、希望が出したトレーナーを広げて見る。何度も着てくたくたになった、希望のお気に入りの黄色いトレーナー、たしか袖口がかなり短くなっていた。

「あ、これもだ」

もう一枚……さらにもう一枚。そういえば、今着ている長袖のTシャツも既に七分袖に近いぐらいになってしまっている。

希望、また大きくなったんだ。

「そつだよね……当たり前か」

子どもはどんどん大きくなる。わかっていただけ、最近の希望の成長は著しい気がする。

わたしは希望の黄色いトレーナーを見つめて、小さくため息をついた。

これは希望がまだうんと小さい頃、お母さんが買ってきた服だ。すぐに大きくなるからと大きめの服を買って、袖を折って着せていた。だけど、この服を着て元気に遊ぶ希望はもう見ることはできないのだ。この服に限らず、来期には着れないだろう洋服がたくさんあって、その一つ一つを手にとってはなんだか切なくなってしまうた。

希望の成長は嬉しいし喜ばしいことだと思う。だけど、少しだけ寂しいと思っている身勝手なわたしがいるのも事実だ。

「どうした、和音」

「お父さん」

いつの間にかお父さんが後ろに立っている。コーヒークップを手にしていることから、ちょっと休憩でも入れたところなのだろう。

「お父さん。のんの洋服、また小さくなってる。買った方がいいかも」

「うんっ、買って買って！ お出かけ行こう！」

希望がわたしの言葉に便乗して、ここぞとばかりお父さんにせが

む。

「そうか、服かぁ。そうだな」

お父さんは一口カップに口を付けると、うーんと頭を捻った。

「いつ買いに行けるかなぁ。当分休みは埋まりそうだしな」

わたしは苦笑した。

「大変だね、先生も。わたしが買いに行ってもいいけど……なんだ  
ったら通販でまとめて頼むとかする？」

「うーん。じゃあそうしてもらおうかな」

「えー！ お出かけがいいっ！」

希望がブーッと頬を膨らます。それを宥めようとした時、「おは  
よー」と仁がのっそり姿を見せた。髪はぐしゃぐしゃ、目は半分開  
いていない思いつきり寝起きの顔だ。昨日は飲み会だったらしく、  
帰宅も深夜だった。今日のアルバイトはあらかじめ休みをもらって  
いたらしい。

「あ、じんー！」

希望が真っ先に反応し、仁の足元に駆け寄った。

「じん、およーふく！ 買いにいこっ！」

「……は？」

仁がきょとんと首を傾げる。起きたての頭では全く話に付いてい  
けないようだ。助けを求めるように視線を投げかけられ、わたしは

肩をすくめて説明した。

「あー、服ね」

仁は大きな欠伸をしながら納得すると、希望の頭にポンと手を乗せて微笑んだ。

「じゃあ今から買いに行くか。俺これから別に予定ないし」

「ほんとっ？ やったー！」

希望が飛び上がって喜ぶ。手伝いも忘れて、そこらじゅうを走り回りだす。洋服を買ってもらえることがどうこうというよりも、出掛けられることがよほど嬉しかったのだらう。

お父さんが気を使うように仁を窺う。

「悪いな、仁。助かる」

「別にー。車借りてもいい？」

「いいけど、大丈夫か、二日酔いじゃないな？」

「大丈夫だよ カズ」

「ん？」

服を畳んでいた手を止め振り返ると、仁がニコリと笑った。

「カズも一緒に行くだろ？」

わたしは一瞬考える素振りをし、渋々といったように「いいよ」と頷いた。当たり前のように言われるのがちよつと悔しい気がして誘われて嬉しい気もするけど、希望みたいに素直な反応ができない。だけど、そんな精一杯の強がりな態度も仁はお見通しのようで、軽く小さく微笑まれてしまった。

髪の毛ばさばさのくせに、半分寝ぼけたような顔をしているくせに、その顔は憎らしいくらいカッコよく見えてしまうからどうしようもない。

こんな時、仁には敵わないな、とか思ってしまうのだ。

\*

\*

\*

仁と二人で出掛けた　つまりデートしたのは二週間前が最後だったと思う。この二週間は何かと忙しく、お互いに時間がうまく調整できなかったのだ。わたしたちの場合、毎日家で顔を合わせているため、改めてデートなんて必要ないのかもしれないが、やっぱりこうして一緒に出掛けるとなると、自然と心が浮き浮きしてくる。もっとも、今日は希望も一緒なのだけど。

行き先は、車で三十分程走ったところにある大きな子ども用品の大型店舗だ。洋服からおもちゃに生活用品まで、何でも取り揃えている。価格も良心的なため、希望のものを買う時はたいていこの店を利用している。

土曜日のためか、着いた時駐車場は満車状態だった。それでもタイミングが良かったのか、十分も待たないうちに空きが出てうまく停めることができた。

駐車場が満車ということは当然店の中も店の中も大盛況。それでも広い店舗内、買い物に困るほどの混雑ぶりではないから大丈夫だ。

「あっちに行くー！」

店に入るなり、希望はおもちゃ売り場の方へ駆け出そうとする。  
一瞬早く仁が希望の上着の首元を掴んだ。

「ちょーっと待て。今日は何買いに来たんだっけ？」

「あつ……」

希望がハッと気付いたような顔をする。仁は満足げに頷いて見せた。

「よし。じゃあ、まずは目的のものを買いに行こうな」

そして、少しだけ意気消沈してしまった希望の頭を、励ますようにポンポンと軽く叩いた。

「おもちゃ売り場はその後。一個ぐらいなら何か買ってやるよ……カズが」

「ほんと？」

「えっ？」

仁を振り返ったわたしの視線は、澄ました微笑みに軽くいなされてしまった。希望は買ってもらえるという言葉だけに喜んでいる。そんな様子に、駄目だと否定するのも大人げない気がする。

しかたがない。ここは譲って、今度思いつきり仁に奢ってもらうことにしよう。

そう固く心に誓って、わたしはニツコリと笑って頷いた。

子ども服は見ていて飽きない。服が小さいというだけでどうしてこんなにもかわいいと思えてしまうんだろう、不思議だ。

「とりあえずは長袖のＴシャツだね」

わたしと仁は目に着く商品を手にとって、次々と希望の体に合わせて見る。

「これは？」

「これもいいんじゃない？」

どんどん決まっていく。仁の決断の速さは見事である。すぐに五着ぐらい決まった。わたし一人だところはいいかもしれない。ズボンも何着か購入を決め、考えていたよりも早く服選びは終わった。本人にこだわりがない分楽だ。

「じゃあ、次おもちゃ！」

希望の楽しみは服よりも断然おもちゃだ。その子どもらしさにとこかホッとしてしまう。

「こら、のん。走るなよ」

駆け出そうとした希望を注意する仁も、なんだかとても楽しそうだった。

おもちゃ売り場は大勢の子どもたちで賑わっていた。希望も遠慮なくその中に入って行き、目当ての玩具で遊び出す。電動の電車のおもちゃだ。

「これすごいねー、ほしいなあ」

「そーいうのは無理だからね」



念のために最初から釘を刺しておく。希望はがっかりした顔をしながらも「うん」と頷いた。大きなおもちゃは誕生日かクリスマスの時だけ、と常々お父さんから言われていて、それは希望もよくわかってるようだ。

希望が電車で遊んでいると、隣に二歳に満たないぐらいの男の子がやってきて、希望が持っていた電車をむんずと掴んだ。反射的に取られまいと希望がぐつと力を入れる。慌てたようにその子のお祖母ちゃんらしき人が口を挟んだ。

「あ、こら、たつくん！　だめよー。それおにいちゃんが遊んでたんでしょう？」

だけど「たつくん」はまるで聞かない。希望が諦めたように電車を手離すと、当たり前のようにそれで遊び出した。

「こらっ、もう……ごめんね。ありがとうねえ」

お祖母ちゃんが申し訳なさそうに希望の頭をなでる。そしてわたしと仁の方を振り向いて「どうもすみません」と頭を下げた。

「いえいえ、大丈夫ですよ　希望、偉かったな」

仁が希望の顔を覗き込んで褒めてやると、希望は照れくさそうな顔をして他の電車を手に取った。

「のん、こつちでいいもん」  
「うん、さすがだね」

わたしも希望の頭をなでてやると、ますます希望は得意満面の顔になった。その様子を見ていたお祖母ちゃんが穏やかに笑う。

「いい子ですねえ」

そう言われると悪い気はしない。仁もわたしも「いえ、まあ」と照れ笑いを返した。お祖母ちゃんが再び希望の顔を覗き込んだ。

「優しいパパとママだねえ。いいねえ」

わたしと仁は思わず顔を見合わせた。希望は遊んでいた手を止めてお祖母ちゃんの顔をきょとんと見つめ返す。

「パパとママ？」

お祖母ちゃんはニコニコと笑っている。希望は一度わたしたちを振り返って、再びお祖母ちゃんの顔を見返した。

「パパとママじゃな」

「あつ。たつくん！ ママ来たよー」

希望の言葉の途中で、お祖母ちゃんがたつくんを抱き抱えて立ち上がった。待ってた人が来たのだろう。もう一度わたしたちに向ってお辞儀をすると、その場を足早に立ち去ってしまった。

「パパとママじゃないのにな……」

希望がポツリと呟いた。仁が苦笑しながら希望の目線に合わせてしゃがみ込む。

「いいんだよ、別に。間違えられても困ることじゃないから」  
「そうなの？」

希望は釈然としないといったように首を傾げた。小さなことだけど、希望には間違いをそのままにしておくのは気持ち悪い事なのかもしれない。

それにしても、わたしと仁がパパとママなんて。

なんだかむず痒い感じがした。

わたし一人で希望を連れている時に「若いお母さんですね」と言われたことはあるけれど、その時はこんなにくすぐったくなるような感覚はなかった。

「俺たちパパとママだと」

立ち上がった仁がからかうようにボソリと呟いた。その顔がやっぱり照れ臭そうな笑顔で、仁もわたしと同じような感覚なのかなと、またむずむずとしてしまった。

「わたしまだこんなに若いになあ。いくつで産んだって思われているだろ」

照れ隠しのように冗談っぽく言うと、仁はただおかしそくに笑っていた。

\*

\*

\*

買い物済ませた後、店の近くのファミレスに寄った。希望は大

好きなチョコレートパフェ、わたしはチーズケーキとコーヒーのセツト、仁はコーヒーを頼んだ。

そしてようやく帰路につく。帰り道は行きよりも渋滞していて、時間が少しかかりそうだった。家に着く頃には日も暮れてしまっているだろう。

予想していた通り、車が動き出すなり希望はすぐに眠ってしまった。

「あれだけはしゃげば無理もないよな」

仁がバックミラーを覗いて苦笑いする。希望のチャイルドシートの隣に座っているわたしは、助手席と運転席の間から顔を出すようにして仁に話しかけた。

「楽しんでたね、のん。でも、今度は買い物とかじゃなくて、もつと遊べるところに連れてってあげたいよね」

「そうだな」

「春休みに入ったらお父さんも少し落ち着くのかな」

「どうだろうな。新年度の準備とかあるかも」

「あー、そっかあ」

本当にこの時期の先生は忙しそうだ。

右折するために仁が周囲に注意を向ける。一旦会話が途切れ、わたしはシートに深く座り直した。

「カズ」

車が直線道路に入り、仁がまた話しかけてきた。

「何？」

再び前のシートの間に体を寄せる。そうした方が話しやすいからだ。

「今日楽しかったよ、俺」

仁のそんな言葉に目が点になってしまった。

「どうしたの、突然？」

「いや、深い意味はないけど。純粹な感想」

仁が思い出したようにクスクスと笑った。

「俺たちつて、傍から見れば親子に見えるんだな」

「あ。あのお祖母ちゃん？」

あの「たつくん」のお祖母ちゃんを思い出し、わたしもつい笑ってしまった。

「そう思われても無理ないのかも」

「父さんが一緒の時はともかく、俺たちだけでいたら兄弟きょうだいってわかる方が珍しいかもしれないな」

「かなあ」

客観的に見てそうなんだろうと思う。希望とは年が離れているし、十代並みに外見が若い親御さんなんて世間にはいくらでもいるし。

「俺、思わず想像してしまった」

「何を？」

「俺と……」

それきり仁の言葉が途切れて、わたしは首を傾げた。

「仁？」

何がおかしいのか、小さく笑う仁。

「いや、いい。絶対に引かれるし」

自嘲するようなその言葉がよけい気になってしまっ。

「引かれるって何で？ 言いかけて止められる方が気持ち悪いんだけど」

「うーん、でもなあ」

仁はさらに苦笑して渋る。ますます気になってきた。

「ねえってば」

「……引くなよ？」

「……努力はする」

そう返すと、仁は笑って一つため息をつき、覚悟を決めたように口を開いた。

「俺とカズに子どもができたらって想像をした、って言いかけた」

え。

引く、というより固まってしまった。言葉を返し忘れたわたしに、仁がハアッと息をつく。

「ほら。やっぱり引いた」

「い、いや……引いたというか……び、びっくり？」

まさか仁がそんな想像をしていたなんて思いもしなくて。仁はちらりとわたしを振り返って、苦笑しながら視線を前に戻した。

「俺の勝手な想像だよ、気にするな」

それはそうだけど、言われてしまうとわたしもつい考えてしまう。仁とわたしの子ども。

だけど、今のわたしたちにはあまりにも現実味がなさ過ぎて、その想像はうまく形にならなかった。仁はちゃんと想像できたのだろうか。

「だけどな、カズ」

仁が再び話し出した。

「俺の勝手な想像ではあるけど、いつかはそれが現実になればいいとは思ってるよ、本気で」

口調は軽いけど軽くはないその言葉に、わたしはまた言葉を返せなかった。

仁が本気でわたしとの将来を考えてくれている。胸が一杯になる。

仁はしっかり前を向いたまま、一言一言をかみしめるように続けた。

「もちろん、今すぐどうこうってことじゃないけど。この先ちゃんと職に就いて収入も得て、きちんとした形で責任が取れるようになる

つたらの話。だから、まだ四、五年　もしかしてもっと先になるかもしれない」

信号が赤になって車の流れが止まる。仁がわたしを振り返り、まっすぐに目を合わせた。

「だけど、どれだけ先になっても、いつかは必ずカズと一緒に温かい家庭を築きたい　そう思ってる」

仁はそう言うのと、シートの肩口に置いていたわたしの手を軽く叩いて前に向き直った。

わたしは思わず仁の触れた右手を左手で握り締めた。  
温かい　仁の言葉は、どうしていつもわたしの心をこんなに温かくしてくれるのだろう。

「あ、ありがと……なんか……プ、ロポーズみたいね」

ドキドキしながらどうにか言葉を返すと、仁が声を上げて笑った。

「そうかな」

「うん。仁、気が早いよ」

「そうかもな。でも、ちゃんとしたプロポーズはまだ先に取っとくことにするから」

「　ぷろぽーずってー?」

不意にのんびりとした希望の声がして、わたしも仁もビクツとしてしまった。

「の、のん!　起きたの」



見れば希望がボーっとした顔でゆっくり瞬きをしている。一体いつから起きていたのだろう……。

希望はまだぼやんとした顔でわたしを見返した。

「ねえ、ぶろぼーずってなあに？」

まだ夢うつつながらも、その言葉にはしっかり興味を持ってしまったようだ。困ったな、とわたしが口ごもっていると、仁が笑いながら答えた。

「結婚の申し込み！」

「けっこん？」

そう繰り返した希望の目が、だんだんパツチリと見開かれていく。どうやら「結婚」という言葉は知っているらしい。

「けっこん！　じんとかず、けっこんしたの？」

満面の笑顔で声を上げる。この反応には思わず笑ってしまった。ムキになる事でもないけど、一応否定だけはしておくことにする。

「してないしてない」

「まだね」

わたしの言葉に仁が笑いながら付け足した。だけど、どちらの言葉も希望にはあまり意味がなかったようだ。

「わーい、けっこんー！！」

嬉しそうにそう繰り返している。まったく、希望もわかっている

ようでわかっていない。子どもだから仕方ないけど。

「……………まあいいけどね」

苦笑交じりに呟くと、仁も声を立てて笑った。

車がいつもの馴染みの道に入った。もうすぐで家に着く。

きつと「ぶろぽーず」の話は希望からお父さんの耳に入るだろう。さて、どんなふうにかかわれるかな……そう考えて、ついため息が出た。

それでも、わたしの顔から緩やかな笑みが消えることはなかった。

わたしは今、ゆっくりと幸せを噛み締めている。

(someday)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1683s/>

---

Loving home

2011年10月8日08時17分発行